

# 日本近代文学

## 第18集

日本近代文学会 編集

<b>&lt;特集&gt; 転換期の文学—明治三十年前後—</b>	
視友社—広津柳浪を中心に—	塚越 和夫 1
『国民之友』終焉前後	野山 嘉正 15
「文学界」の機構と変容 —天知・朧木を視座とする序章—	関 良一 27
井上巽軒と高山樗牛	前田 愛 35
明治三十年の日本主義—その本質と背景—	高田 瑞穂 47
木下尚江の文学的出発	山田 貞光 58
<b>視座</b> うたかたの記 歴史ばやり，東洋ばやり	佐々木雅発 71
	瀬沼 茂樹 73
<b>&lt;追悼文&gt;</b> 湯地孝氏を憶う 浅見さん	吉田 精一 76
漱石『坑夫』試論—坑道と梯子—	保昌 正夫 78
小杉天外とゾラ	佐々木 充 80
「乱菊物語」の典拠	森 英一 95
真山青果と三好十郎の接点 —「斬られの仙太」発想の源流—	三瓶 達司 105
井上 靖—その運命観の原点—	大西 貢 119
	三枝 康高 131
<b>展望</b> 作品形成の虚実皮膜 —近代文学学界の動向(一九七二年後期)—	長谷川 泉 143
近代文学研究論文目録(一九七二年後期)—付—一九七二年前期拾遺—	
石割透・大塚博・黒木章・千葉俊二・中島国彦・原邦良編	148
<b>書評</b> 布野栄一著『本庄陸男の研究』	小笠原 克 186
藤岡武雄著『評伝斎藤茂吉』 —茂吉における父なるもの—	米田 利昭 191
三好行雄著『日本文学の近代と反近代』	相馬 庸郎 196
前田 愛著『幕末・維新期の文学』	小池 正胤 200
<b>紹介</b> 森安理文編『無頼文学研究』	207
小嶋孝三郎著『現代文学とオノマトペ』	208
瀬沼茂樹 編『有島武郎研究』	209
本多秋五	
荒 正人 編著『谷崎潤一郎研究』	209

日本近代文学会会則

第一条 この会は日本近代文学会と称する。

第二条 この会は本部を東京都におく。また、別則により支部を設けることができる。

第三条 この会は日本近代文学の研究者相互の連絡を密にし、その調査研究の便宜をはかり、あわせて将来の日本文学の振興に資することを目的とする。

第四条 この会は前条の目的を達成するために左の事業を行なう

一、研究発表会、講演会、展覧会などの開催。

二、機関誌、会報、パンフレットなどの刊行。

三、会員の研究発表の斡旋。

四、海外における日本文学研究者との連絡。

五、その他、理事会において特に必要と認めたる事項。

第五条 会員 一、この会は広く日本近代文学の研究者、および

研究に助力する者をもって組織する。会員は附則に定める会費を負担するものとする。

二、この会には維持会員を設ける。維持会員の権限、および会費については、附則に別途定める。

よび会費については、附則に別途定める。

第六条

役員 一、この会に左の役員をおく。

代表理事 一名 理事 若干名

常任理事 若干名 監事 若干名

評議員 若干名

二、代表理事はこの会を代表し会務を総攬する。常任理事は、代表理事を常時補佐し、代表理事に事故がある

とき、または代表理事が欠けたときは、あらかじめ定められた順序でこれを代理し、またその職務をおこな

う。理事はこの会運営の責に任ずる。監事はこの会の

財務を監査する。評議員はこの会の重要事項を審議する。

三、評議員は総会における会員の互選により、理事、監事は評議員の互選により、代表理事および常任理事は理事の互選により選出する。

四、役員は任期は二年とする。ただし、再選を妨げない。

第七条 理事会の推薦により総会の議を経て、名誉会長、名誉会員をおくことができる。

第八条 会務を遂行するために理事会のもとに事務局をおく。事務局に運営委員、編集委員若干名をおく。事務局の各委員は理事会がこれを委嘱する。その任期は第六条第四項の規定を準用する。

第九条 会員の入会は会員二名以上の推薦と理事会の承認を要する。

第十条 会員が定められた義務を果たさないうとき、またはこの会の目的にふさわしくない行為のあったときは、評議員の議決によって除名する。

第十一条 この会は毎年一回通常総会を開催する。臨時総会は理事会が必要と認めるとき、あるいは会員の五分の一以上から会議と目的とする事項を示して要求があったとき、これを開催する。

第十二条 この会の経費は会費その他をもってあてる。

第十三条 この会の会計年度は毎年四月一日にはじまり、翌年三月三十一日におわる。

第十四条 会則の変更は総会の議決を経なければならない。

## 硯友社

—— 広津柳浪を中心に ——

塚 越 和 夫

1

日清戦争後に生じた社会の矛盾拡大が深刻小説・観念小説流行の原因だとは、大方の文学史の指摘するところである。道義や真情が金銭の前に蹂躪されてしまう眉山の『大さかづき』、官吏と政商の結託を暴いた『書記官』、職務が人間性を剝奪することに抗議した鏡花の『夜行巡査』、家族主義が恋愛を罪悪と化してしまう『外科室』、柳浪描くところの封建的な家長制の生んだ悲劇『黒蜩蛭』、放置された精神薄弱児の性の問題を提出している『亀さん』、歴史的事件の影響で貧窮のどん底に陥った母子家庭の悲劇を取り上げた曙山の『蝗うり』、部落民問題に触れた風葉の『寝白粉』、秋声の『藪柑子』——ざっと見渡しただけでも、以上のような作品群がすぐに浮んでくる。だから、日本資本主義発達史の中で、深刻小説・

観念小説流行という文学現象をとらえようとするならば、これ以外の説明の仕方があろうとは思えない。けれども、一つ一つの作品を点検し、個々の作家の発展を中心に考察すると、時代・社会の動向と文学上の現象とが因果関係として巨視的に結合されたこの種の見取図には、疑問点が生じてくるものなのである。そこには、さまざまな個性から共通な因子を引き出さなければならぬ文学史の叙述に背負わされた宿命が存在している。共通でない部分がどうしても洩れてしまうことは避けられない。時には、共通項の強調のため、作品の主題が歪曲されることすらある。前掲諸作品の主題の要約は、その悪しき例である。日清戦争後の社会現象に合致させるための作為のあとが見える。私がそう

したのである。むろん、それは一部分で、たいていは、いわゆる文学史の客観的な記述に従っている。そこで、これらの作品をもう一度読みなおしてみると、そこにはおのずから前記の要約とは異った姿が浮んでくる。

たとえば、主人公梅吉がアメリカへ出稼ぎに行き、わずか三年で三万ドルも溜め込んで帰国するが、父はすでに死に、恋人のお千代は他家に嫁していた、お千代の不貞をなじつて、かえって半殺しの目に会った梅吉はお千代を殺そうとするが果せない、お千代は梅吉の真情に触れて自殺、梅吉はアルコール中毒にかかって窮死するという『大さかづき』のいったいどこが日清戦争後の社会の矛盾と密接にかかわりあうのか。この作品を何らの先入観なしに読むならば、結局、孝子の立身出世譚とおきまりの男女のもつれ話とが組み合わされた物語であることは一目瞭然である。「やいお千代、此処で恨を齧すんだ。付覗つてるとも知らねえで、うっかり遠くへ出やアがつた帰ら道、捕捉めえたが百年めだ。改めて言ふにやア当らねえ。己が胸に覚えがあるだらう。よくも心變りをしやアがつたな。己ッ、己ッ、己ッ。」「やい。こころ一時が此世の別れだ。覚悟をしやアがれ」といったような歌舞伎芝居の科白めいた会話を引用すれば、この作品全体の雰囲気は、おおよそ察しがついてしまうのである。この時代の彼の作品としては最も社会性の濃い『書記官』にしても、政・財界の裏面を暴いた部分は、要するに綱雄（この人物には当時の眉山の面影がうかがわれる）と光代の悲恋を効果あらしめるための手段のようにさえ思われるのである。社会の裏面暴露にしたとこ

ろで、すでに桜痴の『もしや草紙』、『世陰陽大和錦』その他に先蹤もあることだし、格別斬新な試みともいえず、前代の政治小説の類をどれだけ凌駕しえたのか、まったく疑問ではないか。たとえば桜痴の作品は、小説としてはずい分ルーズなものだったが、政・財界の実状にくわしいかれの豊富な体験をふまえているため、その方面の事情に暗く、もっぱら頭の中でつち上げられたのであろう若い眉山の『書記官』などの足許にも及ばない充実した内容を時事性という面では有していたといえるであろう。慈善家実は盗賊という『うらおもて』など、たとえそこにどれほど眉山の対社会的憤りがこめられていようと、この草双紙の設定のゆえに、彼の憤りはまったく生きてこないものである。さすがに当時の批評家も『うらおもて』を「拙作」と評したのであった。「観念」に作品の実質がついて行けないところに観念小説の弱点が存在していたのだけれども、一方、「観念」そのものの幼さに限界を認めなければなるまい。硯友社の作家の中では、のちに社会問題に深い関心を示した眉山の作品がこの状態であった。

だからロマンチズムの旗手であった鏡花の作品に、時代とのかかわりがいっそう希薄になるのは当然のことである。たしかに『夜行巡查』の主題は上述のとおりなのだが——法律万能の明治時代への風刺と考えてもよい——しかし、そんな概念的テーマがどれだけ読者の共感を獲得できるのだろうか。どだい、この小説の結末は実に不思議なので、巡查が惻隱の情にかられて堀に飛び込んだのならとにかく、「冷かに」「職掌」柄人命救助のためにそうしたのは、ま

まったく辻褃が合わないのである。泳ぎを知らない彼に老人を助けられるはずはないのだから、水に飛び込んだところで職務が遂行できないのは「冷か」な彼には当然わかつていたことなのだ。こんな無理を犯してまで設定されたテーマより、われわれが心をひかれるのは、巡査の恋人お香の屈折した心境である。「嘗て弟に己が恋人を奪はれたるを終世の恨みとなし、姪なるお香の恋を妨げて其恨みを報いんとする」(『青年文』28・5)ことは、たしかに『青年文』の記者の説くごとく、在来の日本文学には登場しなかったのである。

その前提には恋愛至上主義が存在しているわけだが、しかし、それがいかに独自の人間像であれ、日清戦争後の社会の矛盾とは、直接的にはまったくかわらないのだ。さらに、八田巡査に対する批判にしても、この作品の意図を説明した結末の「……あゝ果して仁なりや……」云々の部分より、冒頭の「職人体の<sup>わがも</sup>威勢のよい啖呵の方に鏡花の本領はあったのだと思われる。この世ならぬ恋に殉じる『外科室』の時代性の希薄さは説くまでもあるまい。

柳浪の作品については、のちに触れることになるので、ここでは省略する。やがて社会裏面の暴露小説の方向に進み、結局は大正末期の大衆文壇に復活して、その作品が『大衆文学全集』に収録されたため、『落花の舞』などの作者としてわれわれの記憶に残っている曙山の『蝗うり』にしても、発表当時注目されたほどの内容はあるしておらず、その貧窮生活の描き方にしても、たとえば黙阿弥の散切物『水天宮利生深川』などの世界とどれほどの差も認められないのである。こうして眺めてみると、二十九年になって発表された

『寝白粉』や『藪柑子』は、深刻小説流行の風潮に悪のりした作品に過ぎないのである。たとえ部落問題を扱ったにせよ、たとえば風葉の関心はその社会性よりも兄妹相姦という破倫な関係の方により強く向けられていたはずなのである。

当代批評家たちの高調した主張と、これらの作品群とを別箇に読んでみると、その落差の激しさに驚かざるをえない。実作者たちの未熟さが批評家の要求に応じきれなかったなどという技術的な問題ではなく、根本的な世界観・人間観の差がそこには存在していたようである。日清戦後の文壇、ことに深刻小説等に関しては、批評先導型ともいえる時代だったから、評論と小説との差には一応注目しながらも、文学史の記述が前者にひきずられがちだったところに、時代の動向と作品の内容とを性急に結びつける傾向が生じたのかもしれぬ。むしろ、そこには、これらの作品群の弱さが原因してものである。すなわち、深刻小説・観念小説の類の大部分は、常に巨視的な文学史的展望の中でしか省みられず、作品それ自体として考察されることが少なかったのだ。これらの作品のほとんどが独立した作品論の対象となるほどの魅力を持ち合わせていないためである。

しかしまた、文学史の側にもかなり荒っぽいまとめ方がなかったとはいえない。たとえば、これらの作品群を日清戦争後の戦後文学と規定することにその荒っぽさが認められるのである。一月に講和使節が来日し、戦争終結への道は開かれていたが、とにかく二十八年四月の講和条約調印以前に発表された『大さかづき』(28・1)『書

『記官』(28・2)、『麥目伝』(28・2・3)などがどうして戦後文学であり、戦後の社会の矛盾拡大が原因で制作されたのか、素朴な読者には納得がいかないところである。『夜行巡査』(28・4)、『蝗うり』(同)、『黒蜩蛭』(28・5)、『奔馬』(同)にしても、あまりに講和条約調印の期日に接近しすぎている。各作家が時代の動向を先取りしたのだとも考えられない。

これらの作品は、結末に破局を迎える点で、たしかにその悲劇性に共通点が見られるのだが、しかし、作家個人の歴史に眼をすえれば、それぞれがこの種の作品を書くに至る内的必然性をはらんだ境遇に置かれていたことに気づかされるであろう。ごく簡単に年譜的な事柄に触れておくなら、眉山の場合は、十九歳の時、母が死去、その後、父が眉山と同年令で料亭の女中だったりようを家に入れ、明治二十六年には義弟が生まれてりようを正式に入籍し、そのため父との不和が深まって、ついに家を出るといふ事件があった。『文学界』同人に近づいたのもこの頃のことである。また明治二十四年頃から二十七年頃までの鏡花の窮迫ぶりはよく知られており、明治二十七年、父の死に際して帰郷した時、困窮の余、自殺しようとして考えたことは、彼自ら記しているところである。いずれも二十八年以前にいわゆる観念小説を書くべき個人的な必然性を蓄積していたのだ。日清戦争中に中央新聞に入社、軍事小説を書きとばしていた水蔭は、深刻小説・観念小説の流行に刺激されて『女房殺し』を書いた。しかし、翌年、かれが告白体の『泥水清水』を書くことができたのは、当時、放蕩にふけて生活が乱れ、母親と衝突したとい

う苦悩の裏づけがあったからだ。そこで、ここでは深刻小説のチャンピオンの一人柳浪を中心に、もう少ししていねいにその足跡を辿り、彼がどのように時代にとかかわったのか、あるいはかかわらなかつたのかを考えてみたい。

## 一

柳浪の作品が、明治二十八年以降、あのように暗くなつたのではなく、それ以前からすでに同傾向のものであったことは、つとに魯庵が当代において指摘しているところである。かれは「小説界の新潮流」(28・9)において、鏡花の『夜行巡査』に「露国小説の面影あり」とする評を非としたついでに、「陰惨の気多きが為に斯く云はゞ柳浪子は既に三四年前より露国小説を学びし者なりといふを得べし。」と記した。すなわち、柳浪の小説が三四年前から「陰惨の気多き」ことを証明してみせたのである。柳浪に悲惨なものへの嗜好が早くからあり、またそれが彼の本質に根ざしたものだとの指摘はしばしば繰返されているが、魯庵の発言は、単に同時代評としての価値だけではなく、作品自体に即した言い廻しであるために、特に興味をひかれるのである。哀れな女の運命とその女に対する主人公の思慕の情を描くのが当初の目的だったのだから、結局、主人公に自己の心情をのめりこませて行ったあげく、善き意志を持ちながら失敗・墮落を繰返す男の姿を描いてしまった『おち椿』(28・7・16)・24、時代小説ではあるが、栄華をきわめた奉行とその息子三五郎が没落し、身をもちくずした三五郎が夜鷹を妻にしたあげく、

中風にかかつて子供に乞食や盗みをさせるに至る『瘦風』(23・8・26)9・3)、金貨に苦しめられた貧農の妻がついに金貨を殺すという貧困の悲劇を扱った『小舟嵐』(23・11・2・24・10・18)、遊女に迷って身をもちくずした主人公の狂死に至る過程を描いた『おのが罪』(24・5・14・7・17)、詐欺師が次々と人をだまして金を捲き上げ遊蕩にふけるが、彼にだまされて肉體關係を結び、財産を奪われた陸軍中佐の未亡人が、ある日、彼とけんかをして、二人とも部屋中を血の海にして死んでしまう『紫斑々』(24・11・15・25・4・3)と実際に作品にあたってみるならば、単に『殘菊』(22・10)に柳浪の悲惨への萌芽が見られるのみならず、その後、彼がその種の作品を絶えず書き続けてきたことがはっきりしており、魯庵の指摘の正しさを裏付けているのである。

彼がなぜそのような小説を書いたのかということに関しては、概略、次のような説明が可能である。士族の意識を持ちながら、組織の中で生きて行く生活人としての能力が欠除していたため、出世コースに乗ることを放棄し、放蕩にふけりがちであった柳浪は、貧窮のどん底に陥り、自ら招いた挫折に烈しい屈辱感を抱いた時点で、生活のために『女子参政蟻中樓』を書き、作家として出発した。その彼が『おち椿』に自己の暗い青春を定着させ、陰惨な小説を書き続けつつ、愛欲↓墮落↓破滅という人間觀を完成して行くとともに、作品から自己の姿を消すという技法的な努力を続けることによって題材の範圍を拡げ、救いのない仮構の世界を再構築するに至ったのである。<sup>4)</sup>

ところで、前掲諸作品の後に発表されたいわゆる「世話物」に関しては、ややくわしく内容に触れてみたい。まず都新聞入社後の第一作『家と児』を取り上げてみよう。二十五年十月一日から二十四日まで、六十八回にわたって連載された作品で、二回までは「ぬくめ鳥」という題であったが、第三回から「家と児」に改題された。その際、「本篇の外題『ぬくめ鳥』ハ後に氣付バ筋と相違する所ありて不相応ず 過つて改たむるハ早い中が能いと乃ち本日より『家と児』と云ふ極めて單純なる題に改めたれば其の積りにて御愛読を乞ふ」という「あいさつ」が掲げられた。この改題には興味をひかれる点がある。親鳥がひなを羽の下に抱いて暖ためる意の「ぬくめ鳥」では、恐らく親子の情愛を描く予定だったのであるが、結局そのような物語を書けず、次に記すような内容のものになってしまった点である。

お亀は、わが子お秋に早くから遊芸を仕込んで芸妓にし、しきりに旦那をとれと勧める。はじめは拒否していたお秋も客の元老書記官鈴木才之助の実意に惚れ込んで身受けされ、夫婦になる。母のお亀は鈴木のはからいで小間物店を出してもらい、相應に繁昌する。にもかかわらず、お亀は小辰という芸妓の父親勘兵衛と關係を結び、男にせびられるままに度々お秋に無心する。あげく母子喧嘩がはじまり、お亀は親子の縁を切る脅すが、おどしにすぎないと推測したお秋は夫とも相談の上、一向にかまわない旨返事をする。お秋には、お春・お道という二女ができる。お亀は勘兵衛の家に住むが、やがて小辰と

の仲が陰悪となり、そこを飛び出してお秋のもとを訪れる。間もなく夫才之助に死なれたお秋は生活に窮し、茨城県下牛久で料理屋の女中になる。そこで実意あり気な客に身を委せかけるが、亡夫の幻が現れ、彼女は失神する。その後は常に亡夫の怒った顔が見えるような気がし、またお亀からの送金の催促に悩まされて、まるで病人のようになってしまふ。そのうちに娘が大病だとの知らせに帰宅してみると、すでにお春は死亡。一方、お亀は勘兵衛とよりを戻すが、勘兵衛はお道の後見人となつて鈴木之邸を乗取ろうとたくらむ。お秋は家と兄との始末に悩み、次第に頭がおかしくなる。或日、お亀の与えた菓子でお春が腹痛を起して以来、お秋は周囲の人々を敵視し、ついにはまったく発狂してしまふ。勘兵衛に死なれたお亀は改心し、お秋の狂った姿に涙を流す。お秋は監視の眼を盗み、井戸に身を投げて死ぬ。お道は鈴木才之助の兄坂上にひきとられ、成長の後には婿を迎え、豊かに暮す。お亀は悪の報いで乞食の境遇に落ちてしまふ。

この小説は、冒頭に「……此酷寒こくわんをも厭はず、母と其兄らしく見ゆる二人の女の、凍つきし小石に躓きつゝ来りぬ。」とあり、お秋が毒が入っていると疑つて、自分の買った菓子以外にはお道に何も与えない描写からはじまっている。気が狂いかけてもわが子に対する情愛だけは忘れず、お道を守ろうとするお秋の姿が「ぬくめ鳥」なのであり、当初はそんな母性愛を中心に描くつもりだったのだろが、結局、以上のような荒筋の物語になつてしまつたところに、

柳浪の人生観がうかがえるであろう。これは「一点の悪意なきにもかかわらず、さまざま運命に奔弄され、幸不幸を繰返したあけく、ついには発狂して自殺に至る哀れな女の一生を描いた作品である。しかし、お秋一代の物語にとどまらず、その子の成長後の状況にまで筆が及んでおり、個人の方ではどうにもならない輪廻の世界をそこにかがわせもするのである。けれども、ここでこの作品を取り上げたのは、有為転変の人の世をとらえ得た功績を称えるためではなく、あくまで柳浪の作品に早くから陰惨の気が存在したことを証明し、また柳浪にまつわる定説を再吟味するためである。

まず『家と児』は、『残菊』、『小舟嵐』、『紫斑々』と受け継がれてきた「女の悲劇」であり、やがて『黒蜩蛭』以降へと発展して行く可能性を秘めた作品だと見ることが出来る。次に、ここには『おのが罪』で完成された「愛欲による人間の墮落から破滅へ」という図式が使われているのだが、それが副主人公である母親のお亀に適用され、さらに娘のお秋を破滅に捲き込む遠因になる点で構成上の複雑化が認められる。その点と、中年を過ぎた人間の愛欲のいやらしさがほり下げられている点とで、やはり『黒蜩蛭』と同一の主題を追求し、類似の構成を有する作品であることがわかる。それは、いずれ『雨』にまで受け継がれて行くのであった。『家と児』のお亀は、はるかに『雨』のお重をさし招いている存在なのである。むしろん『家と児』は、『雨』のように突き放した写真に徹してはおらず、改心したお亀が乞食に墮ちる場面を「……この身の慾に迷ひし悪業の報ひ来て、斯く悲しき眼は見せらるるなり。安々と世にあら

んこと如何にしても罪深しと、思ふ念の積りてハ、中々に思返し難く、或夜の闇に紛れてお亀は何処ともなく立去けり。……四五年後の人の物語に、お亀は破れ衣に履物もなく、寺の門に休み、人の戸に立つを見しが、悪の報ひは怖ろしと云ふを聞きぬ。」と記していることからもわかるように、そこには勸懲主義や因果応報の理が色濃く流れているのである。これを新聞の連載物であるがゆえに通俗的に妥協したのだととらえることは正しくあるまい。彼の作品の登場人物中、悪役にはあくどい誇張が目立つのだが、そのように人物を描くことと勸懲主義や因果応報の理とは、けつして無縁ではありえず、むしろ柳浪の思想の根本には、その種の古めかしい考え方が潜んでいたのだと考えるべきなのである。また、お秋が母親の犠牲になつている点に、家族制度の悲劇を見ることも正しい作品の受け止め方とはいへまい。「世にお秋程果敢なき者あらんや……今日狂人となりし迄の彼の境遇は如何なりしぞ、理義に晦き母を持ちたりしのみ、其身は殆んど一点の悪意なかりしなり。」という部分に注目しなければならぬ。お秋が不幸になつたのは、封建的な家族制度のためではなく、お亀が「理義に晦き母」だったからで、つまり「家」という制度が生んだ悲劇などではなく、「理義に晦き」人間ゆえに生じた悲劇なのだ。かつて徳田秋江は、「柳浪氏は好んで人間の劣情弱点を描破しながら、それを社会の中上流に発見せずして下流に発見した……柳浪氏は教化と道徳とが上流には大抵行はれてゐるものと、まあ信じたものらしい形跡がある。」と指摘したが、お亀は「教化と道徳」とが行われていない「下流」の出身だから「理

義に晦」く、わが子を破滅に追いやるのである。「家の面目」ということが如何なる時でも心から放れないと自ら記す柳浪は、『おち樁』の主人公を更生させ、昔どおりの「家持ち」にしてやつたし、『おのが罪』では主人公の一子道太郎に西山の家督をつがせることを忘れない。『家と児』も「家と児とは救ひ得たり。亡人の霊は今も尚ほ家と児と共に在りて、玉柏の水底深く花咲く春は来にけり。」と結ばれる。「児」が救われただけでなく、同時に「家」が救われたことが、彼にとつては実に重大なことだったのである。この作品の題名が「ぬくめ鳥」から「家と児」に変更されたことは、柳浪の思想を考えるうえでは、きわめて象徴的なできごとだったといえよう。「家」は、柳浪にとつて絶対的な価値を有していたのである。とするなら、例の『黒蜩翼』も封建的な家父長制の悲劇を描いたものなどではなく、「道徳と教化」の行われぬ下層社会出身の「理義に暗き」吉五郎個人の愛欲がひきおこした悲劇だったのである。柳浪にとつて、「家」は批判を許さない畏敬すべき絶対者であった。家父長制は正義そのものであった。当然、父親や母親は理義に明るい正義の人であらねばならなかつた。しかるに、下層社会においては、非道な親が実在する。この理念と現実との矛盾に、彼は深い絶望を感じたに違いないのだ。お亀は乞食に墮ち、吉五郎は毒殺され、お重は息子夫婦に捨てられる——このように家族制度の尊厳をふみにじるようなことが行われている「下流」ほど、柳浪にとつて救いのない世界はなかつたのである。柳浪自身、青春時代に出世コースを放棄し（それは明治前半の時代の動向に対する消極的な反逆

には違いなかった、放蕩にふけて貧窮のどん底に陥り、「家の面目」をつぶしているのだ。そのため、本来無縁なはずの救いのない世界が自己の存在と重なり合い、彼の世界観は加速度的に暗うつなものになっていったのである。『家と児』以後に発表された『畜生塚』(25・12・25・26・5・5)『摺上川』(26・6・10・26・9・26)等の時代物については、本稿の目的からいって触れる必要はない。次に取り上げるべきなのは、『いとし児』である。

『いとし児』は二十七年六月、『文学世界』の第十二巻として刊行された短編である。この作品のストーリーは、「のんだくれの亭主を持った女房がついにたまりかねて家を出、親分のところへ行ってしまう。子供を残された亭主は翌日親分のもとを訪れ、夫婦は和解し、亭主は禁酒を誓う」という単純なものである。題名からも推察されるように、そういう筋が子供への愛情とからみ合わされながら展開して行くのである。あまりできのよい小説ではないが、亭主は車夫であり、女房は遊廓の洗濯物の内職をしている極貧の生活を、「東京深川の洲寄すまきなる遊廓と川一流を隔てた平井新田を舞台に描いている点が注目されるのである。日清戦争開始以前に、すでにこのような作品を発表していることを、われわれは見逃してはなるまい。貧困の問題は、柳浪にとって戦後の問題ではなかったのである。それは、永遠に解決されることのない宿命的なものとしてとらえられていたのではないか。なお、この作品では、長々しい物語的説明がいつさい省略されている。情景の描写と親子三人の会話だけで全体が成立している点に技法上の進展を見るべきであろう。

## 二

このように柳浪の文学的活躍を眺めてみると、深刻小説出現の原因を日清戦後の社会の矛盾拡大に求めることにはかなり無理があることは明らかであろう。題材面でもすでに悲惨なものが充分取上げられていたし、作家としての視点も確立されていたのだ。要するに当代の批評家たちが戦後にこの文学現象に気づき、時代の思潮としてクローズ・アップしたという面が強いのである。だから、同じく、読者の側が「材を女学生、小間使などに採った飯事的恋愛小説の単調に飽きはてたこと」に原因を求めた当代批評家の見解にもミスがあったことを認めざるをえない。『我楽多文庫』その他の硯友社系諸雑誌に発表された作品には、たしかに書生の手なぐさみ程度の「飯事的恋愛小説」も多かったが、柳浪らのその後の作品の系列を無視してはならない。読者はむしろ悲惨なものに慣らされていたのである。紅葉の作品にしても、いわゆる「硯友社的」というまとめ方で簡単に否定してしまうことには疑問があるのだ。むしろ戯作的要素が認められはするだろうが、『三人妻』や『二人女房』等については、在来の評価を再検討する時期にきてはいないだろうか。これらの作品には、文学青年の観念的オモチャではなく、十分おとなの読物として通用する面が含まれていそうなのだ。

さて柳浪は二十八年以降の活躍期を迎えるわけだが、それが技法面での新しさを除けば、前代からひき続いたものに過ぎないことはもはや明らかであろう。二十年以上にわたる彼の文学的活動の期間

に制作された小説は膨大な量に上る。しかるに柳浪の深刻小説として常に取り上げられるのは『変目伝』『黒蜩蛭』『亀さん』の三作である。たしかに彼の作品は暗かった。けれども心身の畸型者が登場する作品は、ほんのわずかに過ぎない。にもかかわらずそれらが彼の代表作扱いをされるところに彼の文学的生涯の不幸があった。上記三作のうちで、特に人物の造型に誇張が目立ち、見劣りのする『黒蜩蛭』が主に問題にされるに至って、彼の不幸はきわまったといえよう。なぜそうなったのかというと、『黒蜩蛭』が小説の社会的効用を説く場合に恰好の作品であると見なされたためである。この作品が取り上げられることによって、柳浪の社会性の限界が云々されたのだが、そういう追求は恐らく無意味なので、『黒蜩蛭』は姑の嫁いびりを変形し、そこにあくどい隈取りを施した作品にすぎないのである。しかもこのような人間関係のトラブルは、とうてい克服しえぬ「業」としてとらえられていたと思われるのだ。とするなら新聞の三面記事を素材に犯罪小説の形式で描かれた『変目伝』に社会性を求めることはとうてい無理であろう。実直な洋酒屋の主人が恋のために金につまんで殺人強盗の罪を犯すというこの物語は、柳浪の破滅的な人間観から生み出されたもので、このようなでき事は、彼にとっては時空を越えた永遠の悲劇だったのだ。「家」が柳浪には絶対不変のワクであったように、虞犯性も万人共通のものだったのであろう。

ところで、精神薄弱者の性は、たしかに大きな社会問題には違いない。野放しにされれば犯罪に直結する恐れが十分あるとともに、

彼らが人並みの能力を持ち合せないがゆえに、人間存在の根源に迫る性を享受できない理由はどこにもない。性は健康な人間の独占すべきものではないのだ。しかし『亀さん』にそのような問題提起を求めることは、『黒蜩蛭』に家族制度の悲劇を求めると同様、誤りであろう。この作品は、柳浪の語るところによれば、実際の見聞をほとんどそのまま小説化したものである。<sup>(9)</sup>「提灯屋の女房」を「蟒蛇のお辰」に仕立てた点が創作なのだが、そのため、これは「毒婦物」の一種になってしまった。けれども、それなりによくできた作品ではあったので、嶺雲が「性格の自然なる、筆致の円熟なる、観察の周到なる」云々と評したのも、あながち過褒とはいえないのである。一方、高瀬文淵はその『現代文学』<sup>(10)</sup> 29・11で「当世の文学」を「一種の魔文学」と規定し、「地獄の消息を人に伝ふるに適せるものは広津柳浪の一派」だとして、次のように記した。

これを疑ふ者あらば、先づ柳浪の觀念が如何に地獄の觀相と相類するの近きを思へ。『沸騰波を騰あがせて、炎爐焰を起し、鉄城屋掩ひ銅柱夜燃ゆ、斯くの如きの中にありて、獄卒罪人の皮を剥いで、足より逐次項に至り、即ち其皮を以て罪人の身を纏ふて火車の上に措く、熱地に輪碾して周囲往返す、其身体碎爛し、其皮肉は墮落し尽くし、万毒並び至れども尚故らに、死せざらしむ』とは、正に是れ柳浪得意の慘劇にして、吾人は蔵經の一部を繙き、これを讀む毎に未だ曾て彼れが作る『亀さん』の結尾を思はざる能はず。

『亀さん』の「結尾」はお辰の孤屋が炎上し、彼女が「焦熱地獄

の苦痛」にもがく場面だから、文淵が仏説の地獄のシーンからそれを連想したのは当然といえは当然だが、その結合の仕方にはやや安易な感もなくはない。しかし、柳浪の作品に地獄を見たこと自体は正鶴を得ているのである。柳浪の描いた人間は永遠に救われず、「彼等が罪障の重大なる、到底実を擺脫して其極悟を通るゝ能はず、悪業暫くも息むことなくして、無量劫を経て展転苦惱し、浮沈叫喚一刻も殆ど止むことなきが如し。」(上掲書)という状態に、たしかに置かれていたのであった。だからまた、嶺雲が「亀さん」の「結尾」について前述の称揚のあとで「此作の末段の毒婦お辰が、此亀さんの癡呆を利とし、之を使嫉して家を焼かしめ、却て其火に焚死するの、余りにわざとめき、因果づくめに出来上」(圈点引用者)っていることを惜んだのは十分首肯できる点があつたのである。家業をかえりみず破産し、強盗殺人の罪を犯した変目伝がとらえられて死刑になること、極悪非道の吉五郎がお都賀に毒殺されること、お辰が焼死すること——これらはすべて「因果づくめ」なのであって、その因果応報の理の背後には、むしろ勸懲主義が潜んでいると考えてよい。しかし、悪人は破滅するが、善人が必ずしも救われなところ、柳浪の物語の特色が認められるので、つまり、彼には地獄だけが実在し、極楽は存在しないのであつた。

さて、このような柳浪の作品にまつたく戦後の世相とのかかわりを否定してしまうこともまた誤りであろう。よく知られているように『七騎落』(30・9)は日清戦争後日譚であり、戦争の犠牲者の姿を描いたものには違いない。その他、「牛込横寺町の大工富五郎征清

軍に従ひたる留守、その訃音の訛伝せしため、妻お新宮五郎の癡なる兄又吉に誘はれて身を委せ、凱旋の報に接して入水す」という「あにき」(30・5)や、熊倉正治は友人の陸軍中尉藤堂新吾の妹お玉と縁談がととのいながら百姓の娘お辰に心を奪われるが、お辰の死に失望して発狂する、正治がお辰に迷つたのは戦争中、新吾と何か衝突があつたのが原因らしいという『おもかげ橋』(33・2)なども戦争被害者の物語の一種といえるであろう。『非国民』でキリスト教徒の世界主義と国家主義との対立を描き、後者に味方する柳浪なのだから、たてまえては日清戦争を肯定しているのだが、にもかかわらずこれらの作品を書いてしまうところに彼のペシミズムがある。日清戦争は柳浪にとって『非国民』の箱崎が説くように「義戦を名として人の國を掠奪する」ものではなく、「義戦」そのものであつたが、正しきものでさえ人に災害をもたらすことを彼は見つめていたのであつた。そこに柳浪のリアリスティックな眼があつたといえよう。とするなら、次のような一文も彼の時代把握の一端を示しているといえるので、少々長くなるが資料として紹介しておきたい。

朝鮮に事ありしより、延て日清の大戦を若起し、怖るべき影響は四民を困厄の中に投ずへしと氣遣はざる物はあらざりに、下民は之が為め却つて其業を詰め得、婦人等の内職は多きを加へて、此戦争が何日までも続けよかしと祈るさへあり。されば、お鈴も人の勸むるに任せて、天狗煙草の紙巻を始めつ。常吉にも相場ごとなどに危き世渡を為すより、今が金儲け時な

り。戰場と云へば、彈丸が直ぐにも中るものゝ様に思ふは誤想。少し危ない位な事はあれども、其も此方の心得次第なり。彼地へ渡りさへすれば、毎日遊んで居ても沓円五十錢は御の字つきにて、先方から握らせて呉れる。何と行く気はないかと勧めし者あり。毎日沓円五十錢と云ふに、行きたきは山々なれども、左手考へて見ると、第一お鈴に別れねばならぬ。此が常吉は死ぬ程厭なり。お鈴も亦常吉に別るゝは心細くて、其様処へは行かぬ様にと云ふにぞ、人夫沙汰には耳に蓋を為て応ぜざりき。

されど、お鈴が一人の稼にては、二人の口を過し兼ねれば、何がな好い商売はと、心を苦しめける中、砲兵工廠の職工の募集に応じて見よと勧むる者あり。職工と云ふ名が厭なれども、其様な事を云つて居る時にあらずと、検査を受けゝるに幸ひに採用されたり。工銀は日給二十錢なれども、工事の請負の都合に依りては、其が一倍にもなり二倍にもなり、半月に多くて拾円、少くても六七円の稼にはなれば、お鈴の分を合せて、口を糊するばかりは左まで困難からずなりたり。斯うなれば、二人が間に争論の起る事も少く、末広町より転居し頃の様にはなかりき。……

正月が来て、春らしい思をもせず、四月と過も五月六月となりては、戦争は既に終り、砲兵工廠の工事は稍閑になり、受負仕事少く、定額の工銀より余得なければ、常吉が生活は困難の上に困難を加へたれど、米屋町は尚ほ思切難し。

『女馬士』(31.2)の一節で、この小説は、野州烏山の呉服屋の主

人常吉が女馬士のお鈴に迷つたため、常吉の妻お霜はお鈴を妾として家に入れるが、お鈴の父勸兵衛の非道にたまりかねた常吉の父が財産を二分し、お霜や番頭をつれて新福島屋を作る、あとに残された常吉は商売が思わしくなくなつたので、お鈴と上京するという荒筋だが、引用の部分は、上京後の二人の生活を描いた一節である。のち常吉は同僚の三蔵とお鈴の仲を疑い、刃傷沙汰に及びかけるが、折よく上京した父と妻にとめられ、烏山に帰る、お鈴は売春婦に落ちるといふ結末がつけ加わる。

さて、引用文には、日清戦争中と戦後の「下民」の生活が簡潔にまとめられており、この程度に時代の様相をつかむ力は柳浪に十分あつたことがうかがわれるのである。けれども、そのような時代認識が作品に生かされなかつたことは、前記梗概からもある程度推察できるであろう。また新聞連載を中絶するにあたって、柳浪は「団円の勘違ひ」と題し、弁解しているのだが、それによると、作品の意図がいっそう明らかになるのである。彼はこの世のことはすべて勘違ひから成立しているといひ、この作品も人事の勘違ひを描くのが目的だつたとしてストーリーを追ひ、それを説明しているのだ。(15)つまり、この作品は、相変らず主人公の愛欲による墮落という図式的人間観の応用であるとともに、部分的には写実的方法が採用されてはいても、全体としてはこの世の万事を「勘違ひ」ととらえるようなありふれた通俗的な人生観で統一し、物語的に構成しているのである。ここに柳浪の限界や古さを指摘することは容易である。

しかし、同作品の常吉の描き方には注目しておく必要があるのだ。妻がありながら女馬士に心を奪われた常吉は、それが思わぬ結果を招き、おのれの家に災厄がふりかかってくるまで何一つ処置をつけることができない。「乃公はア何と為しべいか。何もかも汝に委せた乃公でねえけ。好え智慧だつて乃公はア如何為しべい事もなんねえ。乃公よりも汝、好え智慧あるべい筈だ」とすべてを他人委せにしてしまうのだ。野呂常と綿名をつけられるような男ではあるが、一応、福島屋をきり廻っていた呉服店の主人なので、日常の次元の判断に事欠く欠陥人間ではないのである。しかし、逆境に遭遇した場合、それを切り抜けるために主体的な行動を起すようなことは彼にはとうていできない。

ところで、この種の人物は、柳浪の他の作品にもしばしば登場しているのだ。『変目伝』の伝吉は、一人前のおとなならずぐにわかってしまう程度の定二郎の嘘を見抜けず、彼の言いなりに金を出し、遊ばせてやつてずるずると家産を蕩尽してしまう。『黒蜩蛭』の与太郎は常軌を逸した吉五郎の無理難題にまったく抵抗できない。与太郎にヒントを合わせれば、『黒蜩蛭』は彼の主体性のなさが生んだ悲劇なのである。お都賀は吉五郎を殺すという行動を起したのに、与太郎は何一つしていないではないか。『今戸心中』の善吉は、放蕩のおもしろさに酔ったのではなく、ふり抜いた女郎に破産するまでぐずぐずと通いつめる男だった。重吉や清二郎がもう少し意志的、理性的人物だったら『河内屋』の悲劇は起らなかったのである。『骨ぬすみ』の鶴吉は、許嫁との仲をさかれ、いやいや養子になった自

分の境遇にただ溜息をついているだけだし、『重づま』の甚兵衛に至ると、いかに愛しているとはいへ、度重なる女房の浮気に対して何一つ手を打てず、お妻が自分のもとに帰ってくるのを待っているばかりなのだ。これらの人物を、たとえば眉山や鏡花の作品の登場人物と比較してみれば、その特色がいつそう明らかになるであろう。『大さかづき』の梅吉は、父親や恋人のためにアメリカくんんだりまで出かけて身を粉にして働き、金を溜めるようなパイオニア・スピリットを有した男だった。お千代に裏切られたと知るや、彼女を殺そうとまでするのである。『うらおもて』の波多野十郎はこの世の真相を見抜くと、たちまち盗賊に変身する。ともかく行動したのである。

『夜行巡査』の八田は職務のためには堀へ飛び込んだし、『外科室』の貴船夫人と高峰は恋を貫くのだ。その結末の悲惨さという点では柳浪と共通している眉山・鏡花の作中人物の何と行動的なことである。

柳浪描くところの人間は、本来善良ではあるが、薄志弱行、決断力に欠け、ぐずぐずした陰気臭い存在で、何とも魅力に乏しいのである。柳浪は一種の極限状況を設定し、主人公を破滅に導くだけでなく、一方、このような人物を造型している点を見逃してはならない。彼らはずるずると環境に押し流されて行くだけで、決して戦おうとはしないのだ。柳浪の作品には通俗的趣向が目立ったため、せつかく社会的な広がりのある題材を取り上げながら、それを十分生かしきれない場合が多かった。いかにも古めかしい感じの小説になつてしまったのである。しかし、以上のような人物を主人公もし

くは副主人公に設定しえたことには、新しい視点を認めてよいのである。彼らは社会から疎外されざるをえない性格を宿命的におのれの中に蔵していた。能力ある、意志的、行動的人物が極端に要求されたであろう明治中期に、このようにぐうたらな反明治的人間を、しかも庶民の中に次々と描き続けた点に、柳浪の時代とのかかわり方の一つがあつたのだと思われる。

× × ×

柳浪の小説は合理的進歩主義に対する一つの警告であつた。したがつて彼の深刻小説がいわゆる社会小説へと正当に進化、もしくは継承されるには、単に新奇な題材・観念と小説作成の技術との乖離を克服すればすむものではなかつた。また、貧民救済というような上から見下した発想を取入れたり、感傷的かつ安易なヒューマニズムを注入しさえすればよいというものでもなかつた。柳浪の救いのない絶望の人間観を根源的に受け止め、より深いところで克服するための格闘が必要だつたのである。

注

(1) 田岡嶺雲『青年文』(28・9)。また岡外は『めざまし草』五の「三人元語」で「肩山が作中に最出来損ねたるもの」と評した。

(2) 緑雨は「金剛杵」(『めざまし草』一)で現代批評家を批判し「所謂青年作家に告ぐ君等唯真直に歩め渠等のオダテに乗る勿れ渠等は面白づくに評をなす者なり忠実なる者にあらず吹けば飛ぶ如き君等が作をも沈痛の深刻のといふを見れば渠等が唱ふる雄大も狂傲も知れたものなり」云々と冷かしてゐる。新進批評家よりも緑雨の方に作品の実体を見抜く技量は備わつていたようである。

(3) 本間久雄『明治文学史』下、吉田精一「自然主義の研究」上など。  
(4) 拙稿『広津柳浪論』(『日本文学』昭42・12)「変目伝」の成立」(『日本文学』昭43・8)参照。

(5) 「小杉天外氏」(『中央公論』明41・7)。

(6) 『文学界』第六巻、緑雨の『かくれんぼ』(明24・7・5)の裏表紙広告目次には「第七 浪作 柳 いとし尻」とある。この作品の構想がすでに明治二四年頃からあつたことが推察できるのである。

(7) 後藤宙外「小説界の前途」(『早稲田文学』明29・5)。

(8) たゞは紅葉の「風流京人形」、美妙の「情詩人」、柳浪の「二たおもて」等を見よ。

(9) 『新著月刊』(明30・4)。

(10) 『第二嶺雲摺』中の「柳浪」。

(11) 『めざまし草』(明30・5)中の評語。

(12) 同作品中に正治が発狂して戦争の場を口走る部分に続いて「お玉は日清の役の時、兄と正治と同大隊の内に在つた事を知つて居る。共に太平山の劇戦に臨んだ事を知つて居る。で、二人の間に此時から、或る間城が築かれたのではあるまいかと、今の正治の語に依つて思浮めたのである。」とあり、また結末にも「正治と新吾との間には、日清の役太平山の劇戦の折或る衝突があつたのであらうが、二人とも固く秘めて居たので、他に知る者は無かつた。正治がお玉と意気投じて一旦縁を結ばうとしながら、一賤女の美に迷ふたのも、或は二人の衝突の原因したのかも知れない。お玉は其さへも充分には知らなかつたのである。」とある。この物語の悲劇の原因を戦争中のでき事に求めようとしながら、結局、具体的にほり下げていないため、それはいつこゝに生かされていないのである。

(13) 作品の構成自体からそれは十分読み取れるが、『めざまし草』(明30・2)の「非国民」評を見ればその点はいつそう明確になる。すなわち「天保老人」は「老人が作者に久しぶりであつたとき、老人は作者がこの頃しきりに男女恋愛の事のみをかぐがちと勧懲主義でもかいてはどうかだなどいふところが、作者いづれ近日出するが少しその方であるから見てくれ給へ」といひましたから、まづこがれてよみました。なるほど国家主義を十分に主張せられたと見えました。しかし何かある記者にあて、それをしつたとやらきましましたか、それがちと感心しませぬ。」と発言する。この作品が国家主義を勧め世界主義を懲らしめるために書かれたことは明らかである。ただし、それに続いて思軒はこの作品が出来であると批判し、「作の主眼に耶蘇教

と我邦国教との扞格矛盾を写したもので、若しそれとすれば、耶教と国教との異処を写す処が、まだ入籍入微とゆかない。トルストイの世界主義を駁する一段も、まだ背景に中りたといふ処にゆかない」としている。すでに当代においてこの小説の欠陥が正しく指摘されていたのである。だから、国家主義はナンセンスだという先入観のある今日のわれわれが、議論の部分に焦点をあててこの作品を読むと、柳浪が世界主義を駁しているのではないかとの錯覚に陥ってしまうほどののである。柳浪は結局世界主義者の箱崎を駁めるために、恋人の花子に棄てさせたり、教会を追わせたりした。箱崎に「片足は黄、片足は藤紫の、何れも色の褪せた靴足袋」をはかせるような小細工まで弄している。だから宮崎湖処子をモデルにした点について、思軒が「批評眼以外の処に於いて箱崎を刺りて居る」ことを責めたのも正当な非難だったのである。柳浪には、親友社風この種の悪癖があり、『昇降湯』でも与謝野晶子をモデルにしたことはよく知られている。その他『浅瀬の波』のような作品でも「遅えねえ、冷熱の演劇ちやアねえが、野郎の寒晒も有難くねえ奴さ」と記して、『江湖文学』(明治29・11)で「拙いも拙つた提灯持には紅葉山人悦喜の鼻をおやかすなるべし」と冷やかされる始末だった。柳浪の作品について廻つたこのような一種の戯作趣味を見落してはならないだろう。ちなみに二七年六月七月『既死新聞』に連載された紅葉の『冷熱』は二九年四月、春陽堂から刊行され、同年九月、藤沢浅二郎脚色で「嘘実心冷熱」として川上座で初演されている。

(14) 明治二八年八月八日、九月二日『中央新聞』に連載された「勘ちがひ」が改題された『女馬士』として出版されたのである。「水沢草紙」が『五枚姿絵』として刊行されたと同様である。したがって年譜、著作目録の類では、その旨断わらないと無用の混乱を招く恐れがある。

(15) 『春陽文庫』の『女馬士』の方では省略されているので、梗概を補足する意味で、

原文を抄記すると、左のとおりである。

人事の多く、その結果何者か能く勘違ひの終らであるべき。違意にも勘違ひあり、失意にも勘違ひあり、さても氣付ざりし事も、詮じ来れば勘違ひならざるもの幾許かあらん。本篇回を盤ぬる既に卅六、今や大なる勘違ひは、余をして是非なくも此に大要を摘んで、団円の勘違ひを告げざるを得ざるに至らしめぬ。……常吉がお鈴を見初て情を通ぜしも、彼の辨々の如き勘兵衛あるを知らず、鳥山近在の夕には借老の契を結びて、朝には路傍の人となり、離合常なき情事を見慣て、さしも勘兵衛に窘められんとは思はざりき、此れ抑もの勘違ひなり。一時の甘言に欺むかれ、常吉が妻なしと云へるを実情とし、己妻とならんと計りて、常吉に身を委せしお鈴も、勘違ひを為せるにあらずや。夫の病氣を憂ひて、其が全快の便ともなれかし、家にも波風立たせしと、男与左衛門を説き、親類一同の隣を却け、お鈴を家に迎へて常吉が妾となせしお鈴も、甚く勘違ひを為せるにて、家を分ちて、常吉が死迫の時来り、彼が真心悔悟の笑見はるゝに到らば、お鈴の手を切らせて、一家団樂の昔に返へさんとの与左衛門が遠慮深謀も常吉お鈴が鳥山に奔るに至りて、全く勘違ひとなり了りぬ。彼の勘兵衛が飽く事を知らざる慈心よりわれ福島屋の隠居となりて、榮華を願はんとして志望も、半成らんとして、而も勘違ひとなり去りたり。……お鈴がお鈴を學びて、裏店の嬖化せるは其身の勘違ひなるのみならず、後來常吉が大々的勘違ひを為すの動機たり。余が全力を拵げて描かんとせるも此後に在りき。されども、勘違ひも亦勘違ひの感なき能はざるべし。

その後三七回以後の復案が記されている。『女馬士』の方は四二回まであり、「復案」どおりの内容である。

## 『国民之友』終焉前後

野 山 嘉 正

### 1

日清戦争終結も間近い頃、ラフカディオ・ハーンが『国民之友』に寄せた文章に「東亜之未来」(26号 明28・3・3)がある。世界の大勢が西洋文明によって左右されるだろうという前提に立って東洋の命運を予測したこのエッセイは、日本人について、西洋文明受容を可能とした「智力」に驚嘆の意を表わす一方、精神面での西欧化に危惧を表明している。日本人が「質素、剛直、正直ニシテ自然ナル生活ノ風」を放棄してしまうかもしれないという予感、利己主義と機械文明の悪弊から逃がれ、コスモポリタンとして極東の島にやって来たハーンにとって最大の脅威でもあっただろう。それゆえ、日本文化が純粋性を保つことへの願望が、ハーンの執着となる。「西洋音楽、西洋美術、西洋文学などの研究方面では、いたずらに時間をみを費して、しかもなんら得るところはなかったように見うけられ

る。」(『心』明29 平井呈一訳 岩波文庫)しかし、日本文化と西洋文化との葛藤は不可避だったのであり、そもそも当の『国民之友』が明治廿年の創刊以来「泰西内部ノ文明」の把握を目指していたのであった。

ハーンの西洋文化受容不能という判断は、しかしながら、ことを日清戦争後の『国民之友』に限れば、存外本質を見抜いていたように思える。「泰西内部ノ文明」の実体が形骸化しはじめるからである。日清戦争に際して民友社が総力を挙げて「大日本」の膨脹を説いたことはよく知られているが、それは民友社がこの時点で日本主義へ旋回し切ったことを意味するものではない。粗笨な発想ではあるが「世界の日本乎、亞細亜の日本乎」という問を立て、「世界の日本」を直指すべきことを説いてはいたのである。(『国民之友』(以下『友』と略称)25号 明28・4・13)ただ、この「世界の日本」が「膨脹的大日本を世界の舞台に飛揚せしめ」たところに生れるものとしている点が胡散臭い。(『友』24号 明28・1・13)それは、一方に脱アジア

即ち西洋に対する劣等感の克服、他方でアジアにおける優者意識の確立という二つの契機を曖昧に結びつけるところから出て来る考えである。ところで、この二つの契機の自覚的な接合こそ明治憲法体制成立のポイントであり、日清戦争はその大がかりな自己表現に他ならなかったから、民友社の明治政府への接近も宜なるかなの感が強いが、それは西洋近代とナショナルリズムが矛盾なく並立するという幻想をふりまく役割を引き受けたことを意味するのである。内村鑑三までが「義戦」と呼び(友友 24号 明27.9.3)「朝鮮の独立」「支那を懲戒」「文化を東洋に施き、永く其平和を計る」の三項を戦争目的として首肯したのは、その幻想のゆえである。(友友 27号 明27.10.3)

明治政府への接近は「平民主義」の骨抜きであり、政治主義の強調である。政治主義は、『国民之友』がかつて実現を目論んでいたかに見える政治一元論からの解放、即ち「政治・経済・社会・文学」などの諸価値の自律を否定する。「文学」はとりわけて自律の様相を明らかにし、文学概念には混乱が生じていたから、政治主義への反転は一見統一への動きであるが、実はそうした様相への抑圧として機能する。この変貌の根源にあるのが「泰西内部ノ文明」の形骸化である。

戦勝の酔いの中にあつて、この形骸化を見抜けなかったことが、民友社の致命傷であつた。しかし、戦後の弛緩にもかゝらず、『国民之友』は少なくとも一人は鋭い光芒を放つ論客を持つことができた。それが、『義戦』論を自己批判した内村鑑三である。

## 2

内村鑑三が日清戦争を「義戦」と呼んだことには、二十年代のキリスト教界の状況がからんでいる。第一高等中学校の不敬事件に端を発したキリスト教攻撃は、日清戦争の怒号と叫喚の中に忘れられていき、キリスト教界も自己の社会的位置を確認する絶好機と判断して戦争を義としたのであつた。それゆえ、「義戦」論についての自己批判は、そうした社会的趨勢から身を離し、それと対決するという内容を含まなければならない。明治キリスト者は儒教精神を条にしてキリスト教を受容し、両者の癒着を自覚することによって自らの存在の社会的意義を確信するに至るのが常であつたから、そこから脱け出るためには、その自覚そのものに内的掘進の道を開いていかねばならない。内村は、不敬事件以後教育界を転々とし、或る時は一知己の援助でかつがつ生活の資を得るという生き方の中で、そうした自己否定の道に入り得たものと考えられる。自己内部を掘り進めていつてやがて突き抜けて出た地点が、思いもかけぬほど遠く高いところであつた、というような思索の径路がそこにあつたであろう。あらゆるものを透徹して見ることができる地点に立つた内村は、自己を「八方美人」に对立する意味での「八方醜婦生」<sup>(1)</sup>として規定する。それは、あくまでも遠く高く見通すことを我がものとしながら、存在態としては俯瞰的に見るのではなく、全てを敵にまわして戦う方法を択取した意味である。この方法が即ち内村の「文学」の方法である。

日清戦争後幾ばくもなくして執筆した「何故に大文学は出ざる乎」(『友』256号 明28・7・13)の中で、内村は「思惟の創作」が「文学」であると大胆に規定する。「思惟」とは具体的には「世界的精神」を指す。「世界的精神」のないところに「世界的文学」の生れるはずがない。戦後における「大文学」の欠如は「世界的精神」を文学者が持っていないからである。「愛国心の養成」「和文暗誦」からは何も生れぬ。当今の文学は「三十銭文学」であり、或る人の評した如く「青年文学とか称する懶惰書生の寝言」に過ぎず、今や「反故紙製造」に汲々たる有様である。と舌鋒鋭く内村は説く。これらの罵言は焦立たしさを直接言い表わしたのであるが、考えて見れば、内村の想い描く「大文学」はダンテの如きものであり、「大文学の地質吾(『日本』)にあり。」とは言うものの、和歌を二首挙げてワーズワース、ゲーテ、バーンズに比定するのは、何としても性急な参照である。内村の眼中には現下の文学状況を小器用に解析する目論見は全くなく、それゆえに高々と理想を掲げるわけだが、この高みに達する方法としては「天の靈」を「心霊」が感得し、「文学」が「真面目なる職業」「勇者の職業」であることを自覚することが挙げられているだけであるから、実効のある批評というにはほど遠く、内村の批評が空転する印象は否めない。自己表現に急だからである。

「如何にして大文学を得ん乎」(『友』256号 明28・10・12、10・19)は、その自己を更に露わに示している。「大文学」を得る方法は「吾人を精神の器となすに在り」、そのためには「世界文学の攻究」即ち

聖書、ホーマー、ダンテ、シエークスピア、ファウストの研究が必須である、とするのは前文と軌を一にする。しかし、「思惟を養ふの術」を「根本的修文術」(傍点引用者)と言う時、内村は知るか知らずか——たぶん無意識の中に——当代の隠れた問題をかすめたのである。言っている趣旨は、「修文術」が結局は「品性の修養」なる一種の心的態度——「至誠」という語も用いている——に解消する意である。隠れた問題とは、「美文」は「教化の具」としては役に立つが、そうでない場合「修辞」は「詐偽の術」に過ぎない」と断ずる時、極論すれば、ことばは無効であるという結論に導かれはしないか、という疑問に関わる。事実、「気魄」の所産が「大文学」であり、「清浄潔白天地に恥ぢざる心」から「神来の思想」「インスピレーション」が湧出することを強調しているのは、その疑問に答を与えるように思える。何を措いても、そして最終的にも修養が大事なのであって、ことばは単なる材質に過ぎないと考えているのであろう。それゆえ「非倫非徳無主義無節操の文学者」は一かばらげにして断罪される。

これを内村の倫理的文学観として片付けるのは容易な業だが、ここに潜む問題を流してしまうのは賢明ではあるまい。なるほど修養の強調は民友社々主徳富蘇峰と口裏を合わせる如くであって、それ自体は新味のない表現である。その意味では内村文は『国民之友』の論調をそのまま鵜呑みにしているようにも見えるし、「大文学」も「世界的精神」も「世界文学の攻究」も数年来『国民之友』が持ち続けた路線と何一つ抵触しない。それどころか、社説は同趣旨の

論説を、戦後の人心の弛みに対する警告の一環として文学者に向けて発し続けていた。しかしながら、内村が異なるのは、キリスト者の立場は今措くとして、『国民之友』が問わず語りに洩らさずにはいなかった戦勝の歓喜、言わば勝つて兜の緒を締めよ式の言い方の下に透けて見える傲りと絶ち切れているという一点である。ここに力点をかけて考えると様相は一変する。内村のことは、『国民之友』誌上であつて、『国民之友』そのものを切りつけて存在してゐる。ことばそのものの意味は『国民之友』の論調と殆ど変らない、しかし、『国民之友』と鋭く対決している、という事態は、内村の方法が別種のことばを要求していることを物語るものに他ならない。これは、ある意味において、既に鬼籍に入ってしまった透谷に非常に近く内村が立っていたことを示唆する。ただし内村には透谷の絶望は無縁であつた。神が信じられたからである。信仰が「八方醜婦生」を確信に充ちた姿勢にするのである。

明治二十九年『国民之友』夏期附録として掲載された論文「時勢の觀察」(編号 明29・8・15)は、全身を露わにして怒りをぶちまけてゐる。冒頭に引用されたラテン語の章句「*facti indignatis verum*」(2)、「義憤は韻文を助く」が示すように、このエッセイは「觀察」というよりは、それ自身が内村の「韻文」であり「文学」であるという自己主張を籠めているように見える。全体は八項目に分れてゐるが、今その一つ一つに検討を加えている余裕はない。ただ指摘しておかなければならないのは「其三 自賛的国民」の中で「過る二年

間戦捷会を以て酔倒れし日本人」を批判し「国自慢を止めよ」と言っているのは、『国民之友』までを祖上に乗せているであらうということである。「其六 東洋の青年国」では、「思想界」が青年「金錢界」が老人という「二種類の階層」があると述べた後に次のように言う。

理想を唱へ、革新を絶叫するのは彼(「青年」)が青年界を脱して老人界に受け納れられんとするの冀望に出るが如し。

青年への肩入れは「天保ノ老人」と「明治ノ青年」とを対置した蘇峰らの表看板であつたし、日清戦争後にもその方向を堅持しつつ、断続的に青年の現況に対する批判を放つていた。しかし、右の内村文は、他でもない『国民之友』が或いは蘇峰が数年来「理想」を唱え続けて来たねらいが奈辺にあつたかを、あつさり明るみに出してしまったということなのであるまいか。日清戦争における幻滅と自己への悔悟とを籠めて、内村は「理想」「革新」なることばが実体的価値を喪失してしまつてゐることを鋭く言い当てたのである。『国民之友』の論調は概して青年の無氣力を指摘するにとどまり、大日本膨脹論が唯一最大の指標であつたから、国策との一致は、おおよそ明らかであつた。「其八 小なる日本」にいたれば内村の『国民之友』からの背離は決定的なように見える。面積・銘柄・政治家・美術・詩歌・倫理・宗教などの全てについて日本の劣性を指摘するとき、内村の立脚点は「国」を超えて「国」を打つ「天理」に近いところにあるように思われるが、それを「八方醜婦生」という自己顕示の形において示さなければならなかつたところに、脱日

本を為し得ぬ——或いは為してはならぬとする——内村の苦衷が潜んでいたことを見逃してはならない。それが同様に日本人の小ささを指摘しながらそこに愛着を籠めたハーンとの違いである。

(12)

こうして、大日本の膨脹と世界主義とを安易に連動させた民友社との違いが明確になる。ただ、内村のこの日本批判言い換えれば「世界的精神」の強調が、彼の想い描く「大文学」の実現にどうつながるのかという点になると、その指摘の鋭さにもかかわらず——或いは、鋭さゆえに——内村の拓いた道は決して平坦なものではなかった。さらに言えば、内村の言う「品性の修養」を押しつめていけば、その最高の表現は、おそらく折りのことばだけになってしまうであろう。しかし、今は内村の存在自体が『国民之友』の本質を内側から照らし出したことを確認するだけにとどめておかねばならない。

### 3

『国民之友』が明治二十年代に残した功績は決して小さいものではない。「雑誌界の巨人」という自賛もあながら誇張とは言えないだろう。<sup>(3)</sup>しかし日清戦争後その改良の本質がしだいに露呈し始め、かつての新鮮な批評精神が色褪せて来る。もちろん、この時点でもなおかつ以前と同様に優れたエッセイや文学作品が誌面を飾ったことをことさら無視して言うわけではない。ジャーナリストティックな態度が急激に落ちたわけではないが、蘇峰を頭に戴く民友社の方向

転換が誌面に微妙な罅割れを生み出し始めたことは否定できない事実となって現われて来るのである。それを象徴的に示したのが蘇峰の世界周遊であった。

内村鑑三の「時勢の觀察」が発表された頃、蘇峰は深井英五を伴なってベルリンに滞在していた。既に英・仏・蘭各国の訪問を終えた後である。この旅行の意義は出発前に蘇峰自身が明らかにしている。「今や天下泰平……上には泰平の宰相あり、下には従順なる議會あり。欲楽極りて哀情未だ多からず。」<sup>(4)</sup>と言い、日清戦争が「国民的生活より超躍して、世界的生活に入るの大機」であったと回顧しつつ、自らの休養と併せて「世界的生活」に入る為に見聞を広める目的であることを述べている。<sup>(5)</sup>『国民新聞』(以下「新新聞」)「<sup>(4)</sup>歐遊記 明29・4・14」ここには何やらお手盛りの御褒美といったニュアンスがつきまとう。ヨーロッパへの航海途上「我等は今殆んど無念無想の域に生活致し候」と書いているのは解放感安堵感の率直な現われである。<sup>(6)</sup>『新新聞』(明29・9・15)『国民新聞』は「蘇峰巡遊稿」などと銘打って、各地からの通信を殆ど連日の如くに第一面に掲載したが、それらの文章は、どこか赤毛布漫遊記めいた印象を与える。一等国に列せられた日本を背負って立つ意気込みの蘇峰には、誇らかな自持の念があったが、「今や戦争の恩恵は、一個の世界漫遊の旅客に迄光被」し、「日本字」で和歌や漢詩を書き与えたと得々として居るのはお愛嬌としても<sup>(7)</sup>『新新聞』(明29・10・15)、トルストイに面会した際に翁の世界市民の立場には同じ得ず、日本国民の立脚地を堂々と述べたなどという類は、やはりいささか身の程知らずであろう。<sup>(8)</sup>弛みがおのずと現われてしまつて

いるのである。

こうした瑣事は一見文学と何の關係もないように見える。しかし、この「漫遊」ほど蘇峰の「文学」の正体を明らかにしたものはないのである。蘇峰は当時依然として「経世的文学者」の呼び名を与えられていた。(生『文学の嗜好と処世』則広)ただし、それは高田半峯、内村鑑三、などと並ぶ意味での「文学者」であつて、言わば硬文学の生き残りである。それは他方で専門家としての小説家・新体詩人・批評家の群がようやく勢力として固まつて来たことを示すわけだが、それにもかかわらず、文学の墮落を嘆き、国民の思想に仕え民心を向上させるための文学の出現を要望していたのが『国民之友』や『国民新聞』の文学批評だったのである。たとえば、文学者は思想界の情勢に暗くて修養が足りず、理想・現実、主観・客観などの「専門科の術語」を振り舞わしているだけだ、といった批評は、国民教育の一翼としての地位を文学に担わせるといふ方向において、しばしば社説に取り上げられていた(『文学と民心』<sup>266</sup>号、<sup>269</sup>号、<sup>291</sup>号、<sup>5</sup>、<sup>14</sup>)。民友社の文学批評の基本は、終始一貫して国民教化の具としての質の向上というところにあり、日清戦争後はその具体的な目標が「世界の日本」に置かれたのである。そこで蘇峰の世界漫遊がこの文学観の一つの実践とも見えて来る。漫遊行中の蘇峰は描かるべき「文学」の主人公と考えられなくもないのである。いかにも突飛な想像のようだが、蘇峰を仮に政治小説中の一人物として想定することは決して不可能ではない。小説界の不健全を論難する民友社が脳裏に抱いていた小説の理想像は敏感に察知されていた。「余等は諸君〔蘇峰

を旗頭とする民友社の諸君〕の才藻を知ると雖も、乞らくば、当年浮城物語の残夢を故にくりかへさざらんことを」(『暮葉』花竹堂『毎日』<sup>新刊</sup>明28・12・10)この軽い揶揄に蘇峰の漫遊行を重ねて見れば事態はおのずと明らかであろう。

蘇峰の外遊は又、民友社の論陣が要石を失なつた如き印象を与えたようである。次に引用するのは八面楼主人に宛てた小栗風葉の文章である。

余は主人〔八面楼〕の如き公平を失せる者に向つて、多く歎々するの愚を再び為さるべし、但言を寄す、蘇峰先生よ、何ぞ速に帰りたまはざる、先生の留守宅は荒れて、頭の黒い鼠の空しく跋扈跳梁するを看るのみ。噫、民友社！(『批評眼の敵にらみ』『読苑新聞』明29・12・17)

1812.)

これは自作『失恋詩人』に対して批評を加えた八面楼への反論である。論争の内容は取り立てて言うほどのものではない。ただ八面楼が、風葉が指摘したように「人身攻撃」に近いことは吐き、或いは作中で嘲弄された批評家を批評家全般についてのものと解したのは勇み足であつた。八面楼は風葉こそ後立てに紅葉が控えているではないかとやり返しているが、公平に見て文章の品性は風葉の方が数等優っている。風葉の言を俟つまでもなく八面楼主人即ち宮崎湖処子は蘇峰お気に入り批評家であつた。『帰省』前、未だ『帰省』なし」とは蘇峰の評価であるが、『新』明28・12・21、『国民之友』末期にあつては後述する角田浩々歌客と並んで民友社を代表する批評家であり、『抒情詩』(明30)の詩人であり、小説家でもある。<sup>6)</sup>

「民新聞」は明治廿九年文壇を回顧して言う。

新作家旧作家の目を立て、想あり想なしとの詮議盛になりしは、宮崎八面楼、田岡嶺雲等を中心としたる批評界の大勢にして、(『新明30・1・3』)

「想」の有無による批評基準を八面楼が確立していたかに思える要約であるが、その「想」の実体が問題である。民友社の考えによると道鴨論争以来の審美論は「文学を萎靡収縮せしめたる」ものとして非難的になりこそすれ、称揚されるはずのないものなのであるから、八面楼の「想」も審美論の範囲には含まれないものと解すべきである。八面楼は硯友社の欠陥を「排想主義」にあるとし、それは「作家の自殺」であると断じて紅葉を攻撃しているが(『友』27号 明29・1・4)、肝腎の「想」そのものについては、文章に対する意味での内容という程度に理解しているようである。「想」は作家の持つべき倫理——或いは理想——とほぼ同じである。作品内容を光明と暗黒に分ち、光明に満ちたものを待望する、といった批評のやり方に、「想」の実体が現われている。(『友』27号 明29・1・11)そして一方では、創作技術の巧拙を「想」とは一応別にして判定するのが八面楼の批評である。それゆえ、基準は二つあり、しかもそれが必ずしもうまく結びついていないのである。たとえば、新作家の列に加えられた広津柳浪の『今戸心中』は、女主人公吉里の「同情と恋愛」が「最難題」であるけれども最良のものとされる。(『友』30号 明29・8・15)或いは又、小杉天外の『寝白粉』が部落問題を扱ったことを「人間の声たる文学」のためには取るべき点と言い、「此種の文学

は拙劣の作だも猶ほ之を歓迎すべきの価値あり」とする類である。

(『友』31号 明29・9・26) 従って樋口一葉の『たけくらべ』を絶賛する際にも「同情の深切」「観察の周連」の二点が並立する。(『友』27号 明29・4・18) 言ってしまうと、これら新作家への共感は、技術的な細評の面で職業作家に対する発言の場を確立し、他方民友社を背にした倫理を維持するという使い分けの上に成立しているのである。こうした技法と倫理道德との併存が実作者からは及び腰な批評に見えたであろうことは想像に難くない。『国民の友』社説の一般論ならば、まだしも、蘇峰学校の優等生が何を囁入れるかというような軽侮の念が、特に硯友社系の作家にはあつたであろう。そうした軽侮或いは不信と八面楼の自信とは相拮抗していると考えてよいだろうが、ともかく新作家の抬頭は明白な事実であつたから、八面楼の立場は次第に中途半端なものに見えて来る。少なくとも主導的な文学理念としては蘇峰愛山の発想の延長線上にあるものに依拠する以外になつたから、時として直観的に鋭く作品の優劣を見抜いたとしても、それが方法にまで高まつて行くことはないし、又、内村のように内側から文学理念を生み出すこともできなかったのである。それゆえ、八面楼の批評は時として蘇峰の威におのずとよりかかって勇み足をしてしまい、たとえば風葉に見透かされることになる。時評家としてのセンスは決して劣つてはいないが、それ以上に超えて出ることにはなかつたのである。

しかし、八面楼が立ち会つた状況は、「想」の把握の問題が最早曖昧になつた時点であつた。道鴨論争の意味は、時代の底深く――

或いは、宙空に浮き上がって、と言うべきか——見失なわれつつあった。それゆえ、八面楼が蘇峰の尖兵として活躍したことは、かつて蘇峰などがこの論争に無理解であり悪罵を放ったことの矮小な帰結であったと言えなくもない。しかし、そのことを言うためには、『国民之友』を代表する形で批評の筆を揮った内田魯庵に言及しなければならぬ。

## 4

八面楼主人の中間的な位置は、蘇峰の「非文学者の文学談」ということばでほぼ説明できる。小栗風葉の真的もそこにあつたわけであるが、この小ぜり合いのほぼ一年前に、八面楼自身が「非文学」への肩入れを表明していた。

嗚呼文界の濁れるや久し。……愛山兄毎々余に説くに其非文学を以てす初め寧ろ不快に感ぜしかども今にして其の知言に服す。余願くは兄に従つて遊ばん。(『新』明28・12・17)

この「感得」のきっかけは、内田魯庵が『国民之友』に執筆した「読詩饒舌」(遊号 明28・11・2)である。魯庵のエッセイは言文一致の新体詩を提唱するなど創見に溢れたものだが、その中で日本東洋にワーズワースはいないと言い、ワーズワースの信奉者に仕立てた湖処子をひっかけたのが癪にさわつたのである。湖処子の反論は激昂した体であつて、「余が真個にラルヅラルスたらんことを恐れて」などと言ひ、その天狗ぶりも相当のものだが(『新』明28・11・7)、「読詩饒舌」の核心には全く触れない罵詈の連続であつて、品性おのず

と現わるの感は否めない。右の引用は、魯庵が書いた「解嘲」(『毎日新聞』明28・12・16)に対する再反論である。「解嘲」は意を尽したものであつて、「正当防衛」のために筆を執ると言い、為にするが如き湖処子の態度を「癡婆子の口吻」と詰りながら、「転た数点の涙を濺がざるを得ず」とたしなめている。魯庵は『国民之友』の主要な寄稿家であり、盟友に近い存在であつたから、湖処子の魯庵攻撃はスキャンダルめいた話題を江湖にふりまいたのである。しかし、もちろん、問題はそのレヴェルでとどまるものではなかつた。

魯庵が日清戦争直後に書いた文章に「智ある國民をして機運に乗せしめよ」がある。(『友』<sup>1325</sup><sub>251</sub>号<sup>4</sup>・4・23<sup>明28</sup>) 戦勝によって確立した「ナショナル、プライド」「國民の元氣」を文芸に振り向け「一等國」にふさわしい作品を作り出すべきだという趣旨は、そのまま民友社の声である。しかし、そこへすつぽりはまり込むには余りにも文学好きであり、文学界の消息通として、外国文学の教養を持つ批評家としての活動が魯庵の持ち味であつた。それゆえにこそ湖処子は「文界の濁れるや久し」と言つて魯庵を端的な例として挙げ自らと區別したのであつた。魯庵の批評は、比較的公平に文界現象を整理し分析できるという点に特質があつたと見てよいだろうが、それは小器用ということでもあり、彼が強烈な刻印を残し得なかつた理由もその辺にある。しかし、一面それは魯庵が文学状況の中で湖処子とは又別の意味で中間的な位置に立っていたことを示しているのである。

湖処子と魯庵の批評には共通する点が多い。たとえば一葉の評価



緒をつけたままのあやふやな存在ということになるであろう。文学状況を高みから見下していた鷗外のように鏡花を「詩想に富めるものとせんはいかゞあるべき」(『めざまし草』明29・1)と言いつつしまえばすつきりするだろうが、魯庵の文界現象に対するこまめなアプローチは、今や却って仇となる。それは魯庵の位置を許容し得ないほど文学状況が変質して来たということだが、それだけに民友社とのつながりに必然性がなくなつて来たということでもあつたらう。湖処子とのやり合いの後、「獺祭書屋俳話を読む」(『友』275号明28・12)を発表して魯庵は『国民之友』から姿を消すのである。こうして『国民之友』は有力な批評家を失なつたわけだが、ここには、魯庵が追い出されたというニュアンスがないでもない。その細かい事情は定かではないが、民友社中に次のような意見に代表される流れがあつたことだけは確かである。

美術として文学を論ずるは高貴にして、一個の社会的、道德的現象として文学を論ずるは卑しきことなれば文士の文学論は貴くして史家の文学論は卑しきか此意僕の解する能はざる所也。

(『抱一庵主人に与ふ』)  
(『新』明28・8・20)

愛山のこの文章は、民友社の文学概念の強固さを示すものであり、その方向は終刊まで維持されていくのである。

## 5

『国民之友』最末期に時評を担当したのは浩々歌客(関)、角田勤一郎である。八面楼から浩々歌客への交替の経緯は明らかでない

が、浩々歌客の論調が一見して蘇峰口うつしであることがわかるから、文学批評への引き締めの結果であつたかもしれない。その活動は明治三十年から始まるが、その頃から誌面に多少の変化が現われる。四月の社告には、大町桂月・上田敏・久米桂一郎らを起用して新風を吹き込む計画を公表したり、或いは又、かつてあれほど嫌つていた審美論を掲載したり、何がしかの手直しを図つた形跡が歴然としてゐる。(『高瀬文苑』審美世界の「要案」(友)その一方で浩々歌客の登場を考えれば、時代の風向きに或る程度従いつつ、論陣を立て直したものと見てよいであろうか。しかし、それは紛れもなく衰微の兆であつた。

浩々歌客についてはあまりよく知られていないと思われるので、煩を厭わずその人物評を引いておく。蘇峰の筆に成るものである。

予角田君と相識る殆ど二十年。……家世々邑里の豪たり。而して徳川氏盛時の末期に於る東海道第一の碩学山梨稻川先生は、実に君の母系の親族たり。君結髮東都に出で、福翁門下に赴き学ぶ所あり。資性活淡人と號はず、物と争はず、唯だ思を天地に馳せ、懷を風雲に遣り、優悠和易其の志す所を染み、富貴功名我に於て浮雲の如き概あり。(角田浩々歌客著「漫遊人圖」  
「記」序文東葉堂書房 大2)

浩々歌客の基本的態度は明治三十年七月の「小説管見」(『友』338号)に明瞭である。文壇における「精神的思想の沈滞」を非難し、當時流行の社会小説を、専ら不徳・不義・醜汚墮落に興味を寄せたものと決めつける。「所謂隱微的描写を超絶的觀念の上に、良心の勢力の上に、活動的行為の上に發揮せんことを希望せんとす。」このよ

うな倫理の強調は社説とびたり呼吸を合わせた印象を与える。「言文一致の文脈流行」「講談文学の横恣」「物質的流俗の沈論」を罵るなど、それまでたまっていた鬱憤を一挙にぶちまけたような怒り様である。(『友』361号 明30・10) しかし、その激しさは内村のような方法に支えられていない。浩々歌客が蘇峰直系であることは、たとえば「理想的観念を根基とせる実行的思想の活動」を要求するといふ表現に如実に現われているだろうが(『友』362号 明30・10)、それは、数年前の主張の蒸し返しであり、しかもことは自体が形骸化しつつあることに無自覚なままなのである。それゆゑ、浩々歌客の演技はいささか笑劇風なものにならざるを得ない。またしても鏡花論を引き合いに出さねばならぬが、鏡花の「圭角」「異彩」が「真正の理路」に反した不自然なものであると言ひ、「眼が覚めて、物にうなざるゝやう」だと非難する時、まさかそれこそが鏡花の美質だなどとは想ひ到らなかつたに違ひない。(『友』365号 明31・1)『国民之友』社説は「人情小説歌さては悲惨小説」に對置するに「冒險談遠征記」「伝奇的文学」を以てするのみだつたから、浩々歌客的外れを責めても致し方ないように思える。だが、もう一つだけ浩々歌客の時評を引いておく。

若し政局の変革を以て文学と相渉るなしと思ふものあらむか、これ譬者なり譬者なり……写真としいへば狭斜を穿ち情慾を描くものと専ら解し、社会を四疊半若くは裏店長屋、立坊湯士馬丁車夫の境界と心得、理想観念としいへば世塵を避けて山水に放浪し、蕎麦粉か干菓を噛み、青天の月を睨んで世局の外に哲

理清談をなすが如き七賢人的仙人的理想と誤り、総べて一事一語、之を拡充的に解せずして収縮的に解し、弘くせずして狭くとり、普遍に応用せずして偏頗に施為するの傾ある従来の我読書社会は、まさにこの政局の変革、思想の發展の現象をもて、自然頭上の閱歴として実験として為す所あるべし。(『友』371号 明31・7)

写真・理想のいずれにも偏しない文学とは民友社年来の主張であつたが、「政局」とはつきり書いた例はさほどない。もちろん、「政局」は狭義の「政治」の意であるから、浩々歌客の主張が特に変化しているとは言えないだろうが、ここに前年の蘇峰が内務省勅任参事官に就任した事実(同年辞職)を並べて見ると、右の引用の具体性が浮かび上つて来るであらう。その点については、蘇峰を最もよく理解していたと言われる愛山が親友らしい危ぶみ方を示していた。

足下が世界に横行濶歩しつゝありし間に余は渋谷に閑居して故紙堆裏に首を埋めつゝありき。……足下よ、余を見るに墳墓の中より迷ひ出で、往時を語れる幽霊の如くせよ。(『戦国策とマキ』『友』361号 明30・9・10)

これは「政界」に出ようとする蘇峰に對する、歴史に学ぶことも忘れるべきでないとの忠言である。と同時に自己における硬文学の確認でもあつたであらう。愛山の民友社退社は明治三十年、翌々年には信濃毎日新聞社に赴任する。こうして浩々歌客の論説はいよいよ宙に浮いて見えて来る。さらに言えば、浩々歌客は先の引用の後に鷗外の名を挙げ現下の状況に對する発言を求めているのであり、そ

れは写真・理想のいずれにも傾かない文学的方法とは何かを訊ねて  
 いるようにさえ思えるのである。かつて透谷が困惑し、道鷗論争の  
 中にまみれた「想」の問題が、ここに隠然と姿を現わして来たと言  
 ってよいだろう。政治主義がこれら全ての矛盾に蔽いをかけたとし  
 てもである。

『国民之友』の終刊は明治卅一年八月第三百七十二号である。最  
 終号らしい編集が全く見られないのは、事実上の廃刊を認めつつ、  
 表面は『国民之友』を『家庭雑誌』『英文極東』と共に『国民新聞』  
 に「合併」するという措置をとったからである。言わば戦線の縮少  
 である。その実態は「国民之友」に出でたる精細高尚なる政治、文  
 学、経済、社会等の議論は、時々国民新聞に於て之を見るを得可  
 し」と社告が説明する如く(『新』明31・8・17)、断続的に「国民之友」  
 の欄を組み入れるといった体のものであった。さらに、蘇峰が外遊  
 中に買いつけた新鋭の輪転機と紙代の下落傾向とを理由にして新聞  
 の定価を月四十銭から三十五銭に値下げするという策も講じている  
 が、社告の言う「国民的にして世界的なる、学理的にして實際的  
 なる、常識に饒みて公平なる」との謳い文句も、事ここに及んでは  
 疑わしく見えて来る。『蘇峰先生年譜』に言う。「此年(明治卅一年)  
 衆毀群謗先生の一身に集り、新聞雑誌経営の事業殆んど困難の極に  
 達す。然も先生夷然其志を変せず。独立独行、漸く其の窮地を透脱  
 せり。」と。この脱出の支えは恐らく目をつぶって頑張るというス  
 タイルを与えられた心術即ちかつての「積誠」や「至誠」であった  
 に違いない。その意味でも、日清戦争後の推移の中に放下した成功

者の昂奮が、それらの中に育まれていたかもしれない理念を形骸化  
 したのである。

危機を乗り越えた蘇峰はそれでよかったかもしれない。しかし、  
 蘇峰に育てられやがて背いていった独歩や蘆花は、まさに育てられ  
 た分だけ自己発見の過程で重荷を背負わなければならなかった。世  
 代交番の必然と言ってしまうには余りにも多量の浪費をしなければ  
 ならなかった彼らの耳にはハーンのあの予言的なことばが響いてい  
 たはずである。

注

- (1) 「時勢の觀察」
- (2) ユツエナリス『風刺詩』第一章七十九行。
- (3) 『友』23号広告 明27・9・13
- (4) 「トルストイ翁を訪ふ」(『友』31号 明29・11・28)
- (5) 『友』30号 明29・12・12
- (6) 吉田精一「民友社の人々」(近代日本文学講座)第三卷 昭26 河出書房) 参  
 照。
- (7) 「文学社会の現状」(『友』30号 明29・10・31)
- (8) 風葉は「主人(「八面楼」が想と称ふるものに就ては、余は日頃疑ふ所無きにあ  
 らざれど」と述べている。(前掲『読売新聞』)
- (9) 蘇峰は湖処子をかばって言う。「世論何ぞ湖処子に向て、特に酷なる、人に完人  
 なし、文豈に完文あらんや。」(『妄言妄語』『新』明28・12・21)
- (10) 『友』30号 明30・8・7
- (11) 徳富蘇峰文章報國四十年祝賀会発行の単行書(非売品 昭3)

# 「文学界」の機構と変容

——天知・禿木を視座とする序章——

関 良 一

日本近代文学における明治三十年前後の時点での転換・変容という問題を、雑誌あるいは文人集団「文学界」に即して明らかにするのが与えられた課題だが、雑誌「文学界」は、明治（以下、同じ年号は省く）二十六年一月三十一日に創刊され、三十一年一月一日に第五十八号をもって廃刊されたから、与えられた課題に絡んで結論を急げば、その時点で「文学界」が廃刊されたこと自体が、文学史的な一つの季節の「をばり」〔「文学界」第五十八号の表紙の代わりの文字、したがって次の季節の始まりを示していることになる。もつとも、「文学界」と次代の文界とは、単に断絶的あるいは逆接的に関連しているだけではなく、瀬沼茂樹氏が、「文学界復刻版別冊」（昭和三十八年十月）所収の「透谷と柳村」に、

『文学界』の終わったところから新しい明治三十年代の文学が展開しはじめるが、『文学界』についていえば、その分化（のちの島崎藤村のいわゆる第三期のあり方―関注、以下同じ）が

静かな推進力であった。

と説かれているように、もちろん順接的にも関連していた。続けて氏の文を引けば、

日清戦争後の日本の世界的地位が紅露時代に象徴される明治二十年代の文学に試煉を加えて、創造性の転機が訪れていた（中略）この転機は『文学界』の内部にも用意されて、具体的な志向性をもった。したがって、

明治三十年代の再検討のために（中略）『文学界』後期の研究を、この見地から考え直してみなければならぬ。

ただし、以下に私の述べ得るところは、瀬沼氏の提起され、かつこのたび与えられた課題に対する答案とはなり得ず、「文学界」の発生・形成・機構・変容・解体などについての私なりの解説あるいは序説の、その一端にとどまるであろうことを、あらかじめお断わ

りしておく。

「文学界」は、(2)「女学新誌」(十七年六月十五日、修正社から創刊、ノンブルは雑誌の発行年月日順を示す、以下同じ)から分派したと見られる(3)「女学雑誌」(十八年七月二十日、万春堂から創刊、同十二月二十日より女学雑誌社から刊行、十九年四月二十五日から巖本善治が編輯名義人)の、その傍系と見られる(6)「同 甲の巻」(いわゆる「白表女学雑誌」、二十五年六月四日より)を間接の前身とし、(3)の正系と見られるのは(7)「同 乙の巻」「赤表女学雑誌」、二十五年六月十一日より、ただし、二十六年四月八日より「乙の巻」の名は削られた。(7)は三十七年二月十五日発行の第五百二十六号をもって廃刊された。また(6)は二十六年四月八日、(9)「評論」と改題され、二十七年十月八日発行の第二十九号をもって廃刊された)、(3)から派生したと見られる雑誌(5)「女学生」(二十三年五月二十一日、女学雑誌社から創刊、編輯人は星野慎之輔、天知、二十六年一月二十一日、第三十号(号外を合わせて三十一冊)で廃刊)を直接の前身として創刊された。(8)「文学界」が(5)の直接の後身であり、かつ誌名の初案が「くずぬの」であったことは、(5)第三十号の第一ページの、

以下新刊雑誌くずぬのに続く

同じく表紙の三の、

当号第一ページの初号に「くずぬのへ続く」は誤なり省くべし

同じく最終ページの、

文学界は言はゞ女学生の進歩改題せし如きものに付き(中略)

女学生の代りに文学界配達申上へく

などから明らかである。天知の『『文学界』雑誌発行顛末』(明治文学研究 昭和九年五月)の「二十六年の事」には、

一月も半ばを過ぎた(中略)まだ雑誌の名が無かった。そこで私は直に女学雑誌の文学界といふ名を書いて禿木に見せた、よかるうといふので

とあるが、樋口一葉の「よもぎふにつ記」(二十五年十二月二十四日の記事)には、

来新年早々女学雑誌社より女学生会といふ雑誌発兌に成らんとす

同じく二十六日の記事には、

雑誌は(中略)はじめ葛衣と名付けしを文学会と改ためぬ、

夫にはいはれありとて竜子君が異見の用ひられしを語る

とあるから、一葉日記に引かれている談話が、竜子田辺(のち三宅)花圃の自家宣伝的な創作でないとなれば、事実は、はじめ天知が「くずぬの(葛布)」という俳趣を帯びた誌名を考案し、のち花圃の「異見」を容れて「文学界」と改めたのではないか。さらに想像を逞しくすれば、花圃の「異見」を歓迎したのは、天知よりも、「顛末」(8)の創刊に当たっての「私の相談相手は禿木君一人であった」とある平田禿木のほうだったかもしれない。ただし、成瀬正勝氏の『星野天知自叙伝』と『黙歩七十年』——主として『文学界』時代について——「成瀬國文 第四号 昭和四十六年三月」に引かれている

「自叙伝」には、

婦人界商業界宗教界などという文字を頻りと用ひて居た矢先

だから女学雑誌の文学部ゆえ口癖で文学界と出た

とあり、『七十年』所収の二十六年一月の「日記抄」には、二日の項に「雑誌」、十一日の項に「新雑誌」、十六日の項に「雑誌創刊号」、三十一日の項にはじめて「吾文学界、第一号発行」とあるから、誌名のいわれについては、前の「顛末」の回想のほうに従うべきかもしれない。

しかし、それにしても当年の天知は、禿木を若年の助手視していただろうが、「文学界」では、そのそもそもから、実は天知のほうに禿木のロボットだったと見られないでもない。「文学界」は、当初の誌名は「女学雑誌 文学界」、発行所も女学雑誌社だったが、創刊号所掲の巖本の「文章道」に対して禿木が異議を唱え、天知の『黙歩七十年』（昭和十三年十月刊）によれば、「以後同君の寄稿を謝絶せよ」と天知に迫り、その結果、天知はやむを得ず、巖本を棚上げし、第三号からは「女学雑誌」という冠辞が削られ、第五号からは新設の文学界雑誌社から発行され、その文学界雑誌社は、第十号から女学雑誌社の所在地である麴町区下六番町を離れ、神田区下六番町に移転した。この事実も、(8)における禿木の発言権の重さの証明となる。その後、社の所在地はしばしば移っているが、「編輯人」「編輯者」だけは、創刊号から終刊号まで一貫して星野慎之輔Ⅱ天知だった。天知は『七十年』に、この第一号から第三・五・十号あたりにわたる対巖本のいきさつに関して、

三号（四号の誤り）までは女学雑誌社よりの発行で、巖本社

長配下に属して居た（中略）程よく巖本君へ断つて、私が出版をも引受け、茲に始めて「文学界」は、附属雑誌でなく、私の物になつたのである。

と表現している。そのように「文学界」は、確かに形式的、形而下的な意味では、なかならず出資経営の面では、天知の「物」、ほとんど天知の個人雑誌に近かった。しかし、実質的、文芸的には、あるいは編集面では、むしろ天知をいわばパトロンともかくれ襲もしていた禿木のほうが終始主導権を握っていたと見なされよう。いづれにせよ、私は、「文学界」の源流として、(2)「女学雑誌」、特に(5)「女学生」を重視しなければならないことは十二分に承知しているが、天知・禿木の生まれ育った日本橋本町にゆかりの深い雑誌(1)「親釜集」（天知が真心亭天地坊として同誌に活躍したのは、十三年五月創刊、十六年五月終刊の第一次Ⅱ能舞子廼社発行。第二次は十八年三月から二十三年九月まで、活東社発行）、ついで、兩人が通った日本橋教会（『七十年』によれば、天知・禿木は、二十年の同じ日に受洗した）、その教会の青年をメンバーとして天知が主宰した遠足会「愉観会」の(4)回覧雑誌（二十二年、禿木数え年十七歳の折りに創始か）などをこそ、むしろそれぞれ(2)(5)に先行する「文学界」の原点として注視しておきたい。その意味で、「文学界」は、『禿木遺囑文学界前後』（昭和十八年九月刊）に、

「親釜集」を発行して新興狂歌を提唱し（中略）、馬琴流の雅俗折衷の文も書き、書も千蔭流が何かで中々達筆であつた

とあり、「顛末」に、(5)に「頻りと東洋味を加へたい一念」を抱いて

いたという天知と、『七十年』に、

愉、會(中略)の、回、覽、雜、誌(中略)に偶々マコーレー卿の一文を寄せられた。私は此一文で深く同君の少年姿を視直した(中略)十七八歳とは云へ(中略)此文才を知つて居るので多忙な時は毎度女学生雑誌の編輯をも手伝つて貰つて居たとあり、自身の『前後』には、

『回覽雜誌』の方では(中略)「スケッチ・ブック」から英吉利の田舎を描いた小篇を訳出したり、コリヤールの英文学史からデヨンソン博士の逸事奇行を抄訳して出した。

と回想し、また「顛末」には、(5)に「君の援助が加はるに從ひ漸く西洋文学の趣味が増して来た」とある禿木とのコンビネーションを芯とし、「顛末」の語を藉りれば、それで「丁度好く成った」、パランスを保つていた、いわば二つの焦点をそなえた楕円形のごときものを、その原形としていたとも言えよう。

とすれば、その後の「文学界」の変容・解体のドラマの主役もやはり天知と禿木の両者であり、そのすじ書きも両者の、あるいは天知的なものと禿木の、反天知的なものとの背反を骨子としていただろう。禿木の環境・家風・性情・年齒・素養ないし教養・文芸観などが天知のそれらととも異質であったことについては、ここでは詳述する余裕がないが、文芸観のくい違い、禿木の天知への反発は、右に触れた「文学界」創刊当初の「文章道」事件から露呈し、(8)から分派した雑誌(9)「うらわか草」(二十九年五月二十六日創刊、禿木・藤村・戸川秋骨らが執筆、「文学界」第四十五号へ九月・四

十六号へ十月)に第二巻の予告が見えているが、一号雑誌で終った。命名者は川上眉山。ただし「編輯者」は、やはり星野慎之輔の名義)の発行にも顕著に示された。そして、それに並行する形で、二十二年ごろから始まり、二十五年ごろから書簡の往復が開始された、禿木の、天知の妹男子への恋愛が絡み、それは三十年にはいつて、『七十年』に、

私は、吾妹との交際を承諾してあつた。それが円滑に往かぬと見た姉が母と共に反対した。恰度その異議の席へ私が往き合せたが、双方が好まぬならば停めれば宜いと軽く言つた私の一言が因をなしたか、終に絶縁となつた

とあるような悲劇的な破局に到達した。その悲劇が最高潮に達したのは、成瀬氏の前掲論文およびそれに至る一連の労作によれば、すでに「文学界」の発行が不定期となつた(三十年八月末発行予定の第五十六号は九月十六日に、九月末発行予定の第五十七号は十月六日に、十月末発行予定の第五十八号は、前述のように、「をはり」として三十一年一月一日に発行された。天知は八月十三日付の書簡で禿木の「休刊の儀」を難詰した)、三十年十月の時点だった。禿木は第五十七・五十八号に寄稿せず、編集をも放棄した。同じ年のうちに、天知は、「文学界」廃刊を決意し、禿木・藤村に一方的に通告して、廃刊した。その間の事情については、『七十年』には、

私が家庭を持ち始めてから、文筆に親しむと家庭が淋しくなると苦情が出る。(中略)文士で立つのなら工夫もあるが、ただ社会教育の素志だから職業ではない。(中略)素志の一端

も認められても来たし、それに五十号近くになつた頃は、同人との交際も漸く疎くなり、且それ／＼職業に苦慮する緊急時にもなつて来たので（中略）禿木、藤村の二君へ通知して廃刊する事にした。（中略）創刊号の一月といふ月を待つて、明治三十一年一月、終刊号五十八号で閉幕したのである

とある。その意味で、「文学界」は、少なくとも天知の見解では「私物」だった。同書によれば、「文学界」は、

開放主義にして平等の扱ひする（中略）それ故、誌面では、誰が眞の編輯者か、誰が眞の同人かといふ事が分明して居なかつた。

が、それも裏から見れば天知独裁（？）の雑誌ということでもあつたかも知れない。それにしても、「文学界」の「発行緒言」に(5)「女学生」の後身であり、

今や女流文学の氣運に向ふて其友たらざるを得ざるという目標を明らかにしたはずの天知が、『七十年』に、

剛健にして單純な東北武士の血を受けて、教訓外の文学や小説名義の書籍などは大擱みに忌避するといふ文学嫌ひ

とある妻万（旧姓松井、天知の明治女学校での教え子、兩人が結婚したのは二十七年五月）の反発に抗し切れず、二十九年二月ごろ、心ならずも文学を放棄しなければならなくなつたのは、皮肉なめぐり合わせだった。しかし、「文学界」の廃刊の近因は、やはり前に触れた禿木との間柄が極端にこじれたことに求められよう。福原麟太郎先生編『平田禿木追憶』（昭和十八年十二月刊）所収の天知の「旧友追

慕」の、

私は偏に其（禿木の男子への愛の）円熟するのを待つて居たが、吾親族間に一種の魔視が生じて終に破縁の悲境に墮ちたが、其響く所は君が我れへの叛意と成り、終に雑誌の廃刊とも成り、終には友情の疎遠とも成つたのであらう。

は、その間の事情を明快に要約したものと云えよう。繰り返しになるかも知れないが、「文学界」の歴史は、禿木を若き無二の伴侶とも帷幕の軍師（？）ともしていた天知の、專制的、教祖的、あるいは偽善的（？）な宗教家Ⅱ教育家Ⅱ事業家ないし功利家だった嚴本との疎隔、彼からの独立、彼への反発などを発条として発足・形成され、天知の、教育のための文学ふうの、教育的、なかならず女子教育家的、啓蒙家的、武斷的、伝統的、「東洋味」的なあり方、イデオロギー（？）と、禿木の、芸術のための芸術ふうの、純文学的、文弱（？）的、近代的、「西洋文学の趣味」的なそれとのバランス、相互補完、ないしは天知の禿木への信頼、編集権の移譲などによつて形成され、展開ないし変容し、つまり天知的なものより禿木のなものの路線へのカーヴを描きつつ推移し、結局は兩者の背離、なかならず禿木の天知への文学的な造反、さらには不幸な悲恋の主人公、いわば浪漫人の、その悲恋の対象の骨肉に当たる得恋の人、いわば古典人（？）への「叛意」なり「絶縁」なりという悲喜劇的な幕切れを最後に、つまり、かならずしも文学的、文学史的とばかりは言い切れない形で空中分解を起こして終つた、と要約されるのではないか。そして、文学史は、そういう個々の存在の、偶然

的、運命的な絡まりのダイナミックスを内包しているものと解するならば、「文学界」の軌跡についての、右のように、必ずしも文学的とは言い切れない形で要約した史実も、また、啓蒙的な文学から芸術的、自律的な文学への転機と要約されるかも知れない明治二十年代を一つの転換の軸とする日本近代文学史の時間と空間のあり方を象徴する事項と見なせるかも知れない。前に引いたように、天知にとっては、「文学界」は「(他者である)社、会、教育の素志」実現の場であり、あえて「文学界編者 星野天知」の名で終刊号に公にした「廢刊告別」にも「其目的の幾分は慥に達し得た」とあるように、その廢刊は、多少とも右の「素志」の達成の自然の結果だった。彼は、少なくともそう表現した。しかし、禿木にとっては、「文学界」は彼自身を「教育」し形成・表現する場であり、天知との離反を契機とする廢刊という事件も、また彼の彼らしい生あるいは存在の、逆接的かつ極限的な証しだったろう。天知は「文学界」を廢刊することで、自身の信頼に背いた(?)禿木を懲罰し、枯らし、ほとんどその生命なり存在理由なりを絶とうとしたかに見えるが(事実、禿木は、その後数年、文学的に沈黙を続けた)、禿木は、むしろそのことよって、はじめてベアトリーチェに対する後年のダンテのごとき「新生」の契機をつかみ得たのではないか。たとえ、「明星」第十号(三十四年一月)以下に復活した禿木が、「文学界」時代に引続いてエッセイスト・翻訳家だったにしても。

天知は、はじめ築地の神学校に学び、『七十年』によれば「英文と宗教を熱心に探求し」たクリスチャンで、明治女学校でも、

レトリックの講義を始め(中略)ミゼラーブルやウエキフィールドなどを講演し、

『前後』によれば、女学校に就任する以前「ユーゴーのものを頻りに愛読してゐたやう」で、一方、禿木も、同書によれば第一高等中学校時代、バイロン・テニソン・シエクスピア・ペーターなどを愛読し、

天来の靈に打たれたやうに感動したのは、活字本で初めて西行の「山家集」を読んだ時であつた。

というから、天知に「東洋味」、禿木に「西洋文学の趣味」というレッテルを軽々しく貼るのは、もちろん慎しまなければなるまい。現に一葉の「よもぎふにつ記」二十六年三月二十一日の記事によれば、禿木自身も、

我文学界は女流文学者の日本思想をもて長ぜしめんとするを、雨夜の星といと稀なりかし

と語っている。したがって、この(A)「日本思想」的、「東洋味」的なものと(B)「西洋文学の趣味」的なものとの共存・交錯なしいし、たとえば北村透谷のエッセイ「國民と思想」(評論 第八号 明治二十六年七月)の、

復古、爾も亦た頼むべからず。消化、爾も亦た頼むべからず。誰か能く剛強なる東洋趣味の上に真珠の如き西洋的思想を調和し得るものぞ、出でよ詩人、出でよ真に國民大なる思想家。外来の勢力と、過去の勢力とは今日に於て既に多きに過ぐるを見るなり。欠くところのものは創造的勢力。

という主張に代表されるような、両契機をふまえた(C)統合・止揚、そして創造への志向は、(一葉はいささか別格として)「文学界」の主要なメンバーに共通していたろう。しかし(もちろん「文学界」の人脈および彼らの文学・思想の系脈の問題は複雑であり、その主要なメンバーは誰々かの判定も、前に触れたようにそれが天知の「物」であったことにも絡んで、たやすいわざではないが)、前に述べたように、「文学界」を、基本的に天知・禿木の二つの焦点をそなえた楕円形のごときものと想定し、それに引きつけた形で、その同人(?)、客員ないし主要寄稿家を、(A)天知的、「日本思想」的、「東洋趣味」的、「復古」的、現実的、人生派的、社会人・職業人的、行動的、啓蒙家的、宗教家・道徳家・教育家的、文明批評的、ある意味で非文学的なあり方(もちろん相対的な意味でだが)と、(B)禿木の、「西洋文学の趣味」ないし「西洋的思想」的、「消化」的、芸術派的、高踏的、書生・遊民的、非行動的、純文学的という、世代・年齢・境遇を含んだメルクマールを手がかりに区分けし、それに(D)創作型と(E)エッセイストないし翻訳・解説・紹介者型との対立(?)への目くばりを加えることも、「文学界」の機構、そのダイナミックスを解明する上に、何ほどか有効かも知れない。結論を先にすれば、二十六年に三十二歳すなわち同人中最年長者だった天知は(A)(D)型、同じく二十歳の高校生、同じく最年少者だった禿木は(B)(E)型だろうが、二十六歳の北村透谷は(A)(C)(E)型で天知型に近く、二十三歳の戸川秋骨(のち東京大学選科に入学)も(A)(E)(D)型で同様、二十一歳の樋口一葉も(A)(D)型で、いずれかと言えば天知型に近く、遅れて

参加した二十四歳の馬場孤蝶も(A)(E)型で同業であり、二十七年、二十一歳で参加した第一高等中学校生徒上田敏(号、柳村、禿木と同年)は(B)(E)型で禿木に近い。そして、天知・禿木とともに「文学界」を終始支えた二十二歳の古藤庵無声、のちの藤村は、透谷と敏・禿木との間を揺れ動いた、およそは(C)(D)型の存在だったと言えよう。その意味では、藤村は、行蔵および心情においては天知と疎かったにせよ(この点では、天知は、夭折した透谷以外の右の諸メンバーの何人とも疎く、結局は疎まれたようだ)、「文学界」という楕円の二つの焦点の中間に位置していた。ところで、右の諸メンバーのうち、透谷は二十七年五月に自殺し、一葉は二十九年十一月に病没したから(この二人の夭折こそ、「文学界」に近代ローマン文学史? 上重要な位置を占めさせる「秘鑰」だったかも知れない)、「文学界」は、たとえ藤村がみずから透谷の後継者をもって任じていたとしても、大勢は(A)天知・透谷型から(B)禿木・敏型へとカーヴして行かざるを得なかった。「文学界」の残したもつとも顕著な業績は、周知のように初期の透谷のエッセイ、中期の一葉の小説、後期の藤村の叙情詩だろうが、特にその後期に注目すれば、それは、(A)的な行き方を基盤としながら、(B)的な行き方に、ある面では手強く反発しながらも色濃く薫染され、そのことでもかえって、いわゆる「日本想」を意匠とする文学を達成した藤村を主役とする時期だったろう。私は、本考の範囲では、「文学界」を天知・禿木の連繫・緊張関係を芯とする楕円のイメージにおいてとらえようとしたけれども、その終局においては、死せる透谷(および一葉)の栄光あるいは悲劇と、生

ける天知・禿木の隔絶・沈黙、いわば両者の共倒れという悲劇を土台とも贅ともし、かつある意味で敏を導きの星とも見なしている藤村を主軸あるいは頂点とする金字塔ふうのイメージを思い浮かべることができるようだ。「文学界」終刊号所載の藤村筆の「告別の辞」は読者向けの形をとっているが、「再び相見さる云々」とは、「文学界」の解体の声明であると同時に、詩文人藤村の、(C)型の文学の唯一の

達成者、担当者、単なる翻訳者・紹介者などでない唯一の創作者としての自恃に支えられた、他のメンバー向けの独立宣言でもあったろう。「文学界」の全歴史は、究極のところでは、真に一貫してそれの同人だった藤村の「新生」<sup>ルネッサンス</sup>への屈折したプロセスだったと言えるかも知れない。

都合で未完の短文に終ったことをお詫びする。

**非公開**

# 明治三十年の日本主義

——その本質と背景——

高 田 瑞 穂

## (一)

「熟々本邦文化の性質を考へ、宗教及道徳の歴史的關係を審にし、汎く人文開展の原理に徴し、国家の進歩と世界の發達とに於ける殊遍相關の理法を認め更に本邦建國の精神と、國民的性情の特質とに照鑑し、我國家の將來の爲に、吾等は茲に日本主義を唱ふ。」

明治三十年五月『太陽』誌上に掲げられた高山樗牛の「日本主義」は、右の宣言に始まる。時に樗牛は教え年二十七歳、同年四月、第二高等中学校を辭して『太陽』文學欄の主筆者となつて上京した直後の筆に成つたのがこの「日本主義」宣言であつた。樗牛の「日本主義」とは何か。そのことの究明は、やがて、明治三十年の日本主義そのものの性格の解明につながるであらう。先ず、若き樗牛のことばをたどることとする。

「日本主義とは何ぞや。國民的特性に本ける自主獨立の精神に拠

りて建國当初の抱負を發揮せむことを目的とする所の道徳的原理即是れなり。」

冒頭に続く第二段において、樗牛は自らの日本主義を右の如く定義づける。この定義づけの中に明瞭に投影しているものは、西欧ルネサンスの概念である。このことは、樗牛がこの一文において最も情熱を傾けて説得しようとしたものが、宗教否定であつたことに徴しても明らかである。

「吾等は我が日本主義によりて現今我邦に於ける一切の宗教を排斥するものなり。即ち宗教を以て我が國民の性情に反対し、我が建國の精神に背戻し、我が國家の發達を沮害するものとなすものなり。」

樗牛の全面的宗教否定の主張が、先ず仏教に、次いで基督教に即して述べられているのは、当然と言ふべきであらう。そこにも、明治三十年という時点の一性格が浮かぶ。

「あはれ今日の仏教と称するものは殆ど空虚なる形式主義に非ざるか。仏教徒と称せらるる我國民にして、真に仏教の信仰に憑拠して、其思想行為を規定するもの、果して幾何ありや。形式は能く無を化して有となす。所詮仏教は決して是國民的性情の中に根拠を有せるものに非ざるなり。」

基督教の如きも亦然り。宿惡と云ひ、贖罪と云ひ、靈魂不滅と云ひ、神の国と云ふ、其超自然的、はた無差別思想は正に我が國民の性情と相反せり。」

この宗教否定の根拠が、「我が國民の性情」に置かれていることは明らかである。その「國民的性情」を、何よりも現世的・實際的傾向において見るのが樗牛の考え方であつた。仏教・基督教に比して、「我邦固有の神道は全然現世教たり。」と断定した樗牛は、その見解を次の如く告げる。

「吾人は現世に生息す。百般の改善進歩は悉く皆現在に就て為すべきのみ。世を厭ふて遁るる所無く、現世を外にして人生あること無し。若し世に理想なる者ありとせば、そは現実世界の自然的徑行によりて到達せらるべきのみ。苟も吾人が現世の幸福に貢獻する所無からむ一切の事物は吾人其の貴むべき所以を知らず。是の如きは我が國民の根本的思想に非ずや。」

こういう、「國民的性情」の把握は、おのずから國家主義につながる。

「之を要するに、現実界に於ける一切の活動は其の國家的たることに於て最も有効なりとす。國家は人生寄托の必然形式にして、又

其主上權力なり。」

一文の結末において、樗牛はその「日本主義の目的綱領」を明示する。

「日本主義は大和民族の抱負及理想を表白せるものなり。日本主義は宗教にあらず、哲学にあらず、國民的実行道德の原理なり。」

吾等は以上の確信によつて日本主義に賛同す。希くば最も健全なる國民的道德の確立を望むもの、建國の精神を發揮して大和民族の偉大なる抱負を実現せむと欲するもの、及び人道の最も忠誠なる伴侶とならむと欲するものは、吾等と共に來れ。來て而して吾等と共に日本主義を贊唱せよ。」

こういう樗牛の「日本主義」が『太陽』誌上に掲げられた三十年五月は、大日本協會の設立された時でもあつた。樗牛が、井上哲次郎を先導者とし、湯本武比古、木村鷹太郎、竹内楠三らとともに設立した同協會の綱目は、次の十箇条から成り、その中には、本来の國家主義に比較して新しい目標も見られた。

- 一、國祖を崇拜す。
- 一、光明を旨とす。
- 一、生々を尚ぶ。
- 一、精神の圓滿なるを期す。
- 一、清淨潔白を期す。
- 一、社会的生活を重んず。
- 一、國民的團結を重んず。
- 一、武を尚ぶ。

一、世界の平和を期す。  
 一、人類的情誼の發達を期す。

この協会の機関誌として發刊されたものが『日本主義』に他ならなかった。

## (二)

樗牛の日本主義を構成する支柱は、國家主義ないし民族主義と、現實主義と、道徳主義との三本である。そしてその三本の支柱の根底に置かれたものが「建國の精神」であつた。それでいて「日本主義」なる一文において最も明確でないものは、「建國の精神」自体である。それを自明と考へていた樗牛ではなかつたであらうが、例えば「我邦固有の神道は全然現世教たり。」と説き、「君臣一家は我が國体の精華なり。」と唱え、「社會的生活を尚び、國民的團結を重じ、君臣一家、忠孝無二の道徳を維持するは、現世的國民として皇祖建國の鴻圖を大成すべき運命を担へる所以に非ずや。」と呼びかける樗牛であつたけれども、依然として「皇祖建國の鴻圖」自体はあいまいに止まつてゐる。このことは、その宗教否定説の明快さに比較するとき一層際立つたものとならずにはいない。

先に私は、樗牛の「日本主義」に、ルネサンス的思考の投影を指摘したが、もう一度そのことにふれたい。

中世封建社會に生を享けたブルジョアジが、次第に成長し、初めて自己の文化的エネルギーを發揚することに成功した一時期、それがいわゆる文藝復興期である。十三世紀のイタリアに始まる西歐

のこの一大転換期の特質と方向とは、中世文化に比較して現實的、合理的であつたこと、そしてその根底に在り続けたものが、何百年も教會の召使とされてきた人間が、古代のギリシア・ローマにおける人間中心に学びつつ樹立したヒューマニズムに他ならなかつたことは、改めて言うまでもあるまい。進歩の担い手であつた中世都市ブルジョアジは、破壊と創造との繰返しの中から、次第に近代資本主義國家形成の緒を把握していったのである。そういうルネサンスの性格、ことに社會的性格は、これを日本の近代に移して考えるとき、丁度日清戰勝直後における日本主義の盛り上がりの中にこれを認知することができると思ふ。周知の通り、日本において一応近代國家の形態の整つたのは日清戰後であつた。日本の念願であつた條約改正と金本位制との確立がそのことを明らかに告げている。同時に、この戰勝によつて日本に先進諸國に伍するに足るといふ自負の生じたことも當然であつた。三國干渉は、そういう自負の盛り上がり、ある暗影を投じたけれども、それがかえつて、自負に根ざした臥薪嘗胆の情熱を燃え上がらせた。日本主義の台頭も、その一環に他ならなかつた。樗牛の日本主義は、世評の高まりにつれて、次々に『太陽』誌上にその主張を積み重ねてゆくこととなる。ほば次の如くである。

「日本主義を贊す」(六月)

「日本主義と哲学」(七月)

「日本主義に対する世評を概す」(七月)

「世界主義と國家主義」(八月)

「我団体と新版図」(一月)

「時代精神の統一を論ず」(一月)

右の諸論の共通主題が日本主義の提唱にあつたことは、言うまでもない。従つて、右の所論についていちいち触れる余裕はないが、「日本主義」において必ずしも明瞭でなかつた点は多少ともそれを補う必要があらう。

「属者客あり、吾等を難じて曰く、所謂日本主義は来世を説かずして現世を説き世界を取らずして国家を取り、平等を排斥して差別に執着し、超自然を棄て、自然に就き、飽くまで科学的事験的の立場に住まりて国家及社会の道徳を樹立せむと要するもの。是れやがて一切純理哲学を擯斥して実験、自然、唯物の主義を説くものに非ずや。」

「日本主義と哲学」の冒頭において、樗牛は、如上の属者訪客の批判を告げている。私は先に国家主義・現実主義・道徳主義の三点において樗牛の「日本主義を」享受した。私もまたこの訪客に近い。樗牛は、自らの「日本主義」への批判の盛り上がりを意識しつつ、先づ問題の所在を明らかにしたかつたにちがいない。その上で樗牛は自説を力強く展開する。

「吾等答へて曰く、否、大に否。吾等は日本主義を固執す。而かも純理哲学の研究に熱心なること、今尚昨の如し、是二者は毫も相背するものに非ざればなり。」

訪客が、「否、大に否。」だけで満足し、了承できないのは当然である。「希くは其説の審なるを了することを得むか。」との反問を設

置して、樗牛は滔々とその日本主義を説く。その結論と見られるものは、次の如くである。

「客知れりや、日本主義は世界普通の人道を規定するものにあらずして日本国民の道徳を指摘せるものなり。其根拠は国民の特性にあり、其目的は団体の發揮にあり。(略)是故に特殊の国民に於ける実践道徳の原理として、日本主義は倫理学の学理に率由す、而かも倫理学は実験上に根拠せる合理的人生觀に外ならず。然らば則ち、日本主義と哲学とは、毫も相背馳するところ無きのみならず、後者却て前者の所依たらずんばならず。(略)吾等が国家を先にする理由は、即ち倫理学が国家を以て人生の必然形式なりとするの理由なり。」

樗牛の日本主義の性格は、ここでほぼ明確となった。しかし、依然として「国民の特性」「団体の發揮」はあいまいである。そこには、樗牛における内外両様の理由が考えられるであらう。外在的理由については、既に少し触れた通り、日清戦勝による近代国家日本の形成とそれにまつわる不安とである。

「日清戦争によりて獲たる勝利は、一部国民の自負心を鼓舞し、排外自尊の病的思想を熾ならしめたるは甚だ悲しむべき結果なりき。然れども、遼東半島の地理と共に東洋の局面世界の大大勢は是の戦争によりて初めて国民の間に知られたり。戦に勝ちたる国民は世界に於て尤も危殆なる位置にあるの国民なることを覺りたり。黄白人種最後の大格闘は如何に其千年の歴史を紹きて、將に絶東の風雲を掀翻せむとするか、黄人種最後の運命を決すべき一大危機の如何

に肅々として眉睫の間に近づきつゝあるか、日本の戦勝は如何に外邦の猜忌を増し、如何に国民の前途に一層の險巖を加へたるか、戦勝の祝宴に醒めたる国民は悚然として怖れ、猛然として省みたり。是に於て、世界に於ける日本の位置てふ觀念は国民の間に最も痛切なる疑問として提供せられぬ。日本主義は是疑問に答へむが為に起りたるものなり。」

これは三十一年四月『太陽』に掲げられた「国粹保存主義と日本主義」の一節である。この一文には後に再度ふれる。それに対して内在的理由とは何か。私はそこに、樗牛に固有の心情的飛躍の典型を見るのである。

「この第三期に於ける信仰の傾向は第二期の国家主義に比して、一見豹変の如きも、その素地は仙台時代にも、近松研究の中にも、人生意想の研究にも十分に存し（第一期—筆者、第二期の諸論議中にも時々隠見し、特にその終りには益す明白の自覚に向ひつゝありし自然の結果に外ならず。此等の変化と連続との表裏隠見の關係は、本巻を通読せば烟眼の人の容易に看取し得る所なり。）」

これは、『樗牛全集』第四卷（明治三八刊・博文館）の巻頭に掲げられた、斎藤信策・姉崎正治による「序言」の一節である。樗牛における「変化と連続」において、「表」をなすものが「変化」であり、「連続」はその「裏」であることは、ここにも明らかである。しかし、今「日本主義」自体に即してそれを明らかにするためには、数々の批判を受けつつ書かれた三十一年度の論述が役立つ。その主要なるものを挙げると、次の如くである。

「国家至上主義に対する吾人の見解」（『太陽』一月）

「国粹保存主義と日本主義」（同四月）

「明治思想の変遷——明治三十年史総論」（同臨時発刊「箕都三十年」四月）

「国民精神の統一——帝国憲法、教育勅語及び日本主義」（『日本主義』七月）

最初に「国粹保存主義と日本主義」の冒頭を引こう。明治三十年に急激に台頭した日本主義にも、多くの反論の所在したことがそこに明らかである。

「何ぞ世人の褊狭にして他の言説を正解する能はざるか、預め成心を挾みて他に臨まむは、若かず、寧ろ初めより人に聴かざらむには。」

ここで樗牛のいう「国粹保存主義」とは、明治二十一年四月、三宅雄二郎、志賀重昂、杉浦重剛らによって結ばれた政教社の機関誌として創刊された『日本人』に展開された主張を指していた。そして樗牛の目標は、その「国粹保存主義」と「日本主義」とを峻別することにあった。峻別とは一の飛躍である。

「雑誌『日本人』を機関として、三宅、志賀等諸氏の唱道せる所は、今日より見れば甚だ漠然たるものなりき。既に名けて国粹保存主義と云ふ、保存せらるべき国粹の存在を仮定せるや素より論無し。然れども、是の如き『国粹』の何物なるか、何故に内外万千の事物の中、是の如き『国粹』の特に保存せらるべき価値ありとするか、社会経営の全局面に於て所謂国粹保存てふことは幾何か国家固

民の幸福を増進するに益すべきか。是等諸般の問題に就いては一も明示する所なかりしなり。諸氏の説く所は、単に『猥りに欧米を模倣する勿れ、我國粹は是を保存せざるべからず、一も二もなく外邦の文物に心酔して我が長所、美所、即ち國粹を拋棄するは甚だ不可なり』と云ふに過ぎず。是れ雜誌『日本人』の初号に徴して尤も明かなりとす。」

私は先に、樗牛の「日本主義」において、最も不明確なるものを、その主張の根本たる「建國の精神」に見た。その樗牛が、「國粹保存主義」を批判して、『國粹』の何物なるか』の不透明を追求する。当代の批判が、この両者に共通性を見たのも当然であつた。同時に、そのことが何より樗牛を憤らせましたのであつた。

「げに是主義や、其系統に於ては國粹保存主義の後を受けたるものなりと雖も其内容に於ては日を同じうして論ずべきものにあらず。今其差別を説明するに先ち、便宜の爲に世上の論者の誤謬を指摘せむ。而して是の如き誤謬の一例として水城学人の日本主義論を挙ぐべし。」

水城学人とは建部逕吾、その日本主義論とは、新聞『日本』に掲げられた論説である。

「所謂日本主義は十年前國粹主義が夙に道破し了せる所を取りて、新なる衣裳の下に之を衆人の前に開陳する颯然たる陋見なり。」

水城のこういう指適に声を高くして樗牛は反論する。

「水城の言や洵に壮なりと謂ふべし。然れども如何ばかり確的の論拠あれば水城は斯かる壯語を敢てし得たるぞや。(略)

苟も明治思想の歴史を理解し得たる人ならむには、國粹保存主義と日本主義との間に一の著大なる差別あることを認識せざるべからず。是の著大なる差別は、内にありては即ち國民的意識の明白なる自覚なり、外に表はれては即ち内外事物の真正の性質に抛りて、其取捨撰択を決し、其方法の全く研究的なることなり。」

反論を通じて次第にその性格を明らかにした樗牛の日本主義は、「國民精神の統一」においてその実体を明示した。結末の一節を引く。

「今日政治上の大綱は憲法によりて統一せられたり、教育上の本領は勅語によりて明にせられたり。然れども政治、教育は國民思想の全部に非ず、寧ろ其表面上の一現象のみ。國民的意識を根柢より統一し、是の憲法と勅語とに適應するの國民精神を陶冶するは即ち是れ日本主義の本分に非ずや。國家の發展は民心の統一を須要とす、統一は主義を預想し、主義は國体と民性にと待つ。國民精神の統一に對する日本主義の責任實に茲に存す。」

もう一つの決断を与えてよいであらう。樗牛の日本主義とは、明らかに、國家主義であり、上からの統一主義に他ならなかつたのである。日清戦後の日本において、憲法と勅語とに依存した主張、その時点における上からの統一の主張が樗牛の日本主義だったのである。時には、次のように放言する樗牛でもあつた。これも「國民精神の統一」の一節である。

「吾人にとりて研究の態度、時としては戦争の態度なり。是の如きは國民精神の統一上、万已むを得ざるなり。」

如上の「日本主義」批判の様相は、水城説にその一典型を見ることができるが、必ずしも同一視点よりの反論ばかりではなかつた。例えば当代の世界主義との対立も、かなりな激しさを示した。『国民新聞』『世界之日本』『新世紀』『六合雜誌』等々は筆をそろえて樗牛への反論を展開した。ことに、基督教に關連の深い『六合雜誌』の反論は激しかった。樗牛はそういう世界主義的批判に終始真正面から激突していった。

「狹隘なり、排他的なり」と云ふの理由に抛りて日本主義を難ずるものあり、是れ笑ふべきなり。若し日本國家の健全なる発達を以て國民的道德の原理となす事を以て、即ち世界、人道と云ふが如き平等通なる抽象觀念を離れ、別に國家を以て實際倫理の標準と為す事を以て、狹隘なりと稱するを得ば、日本主義は素より狹隘なる主義なるに相違なし。日本主義は國家を以て至上の權力と認め、其利福を以て道德の規準となし、苟も之に反するものは尽く之を排斥す。苟も主義として立つ所あるもの自ら然らざるを得ず、又然らざるべからざるなり。是意味に於て日本主義は儘に排他的なり。」

これは三十年八月の「世界主義と國家主義」における樗牛の反論である。次年度に到ると、樗牛の言論は一層その明確度を強める。

「人生の幸福てふことは個人説もしくは世界説によりて説明せられ得べし、然れども是によりて實現せられ得べからず。家屋の性質目的等の説明は、直に移して是建築の方法となすべからず。説明を移して直に主義となさむと欲せば、是に先ちて歴史的發達の一契点なる当代の社會を根蒂より打破せざるべからず。是も以て是の如き

大胆無謀なる主義は所謂啓蒙時代にありて歴に行はれ得べきのみ。若し夫れ個人説と世界説との間に立ち、一個否唯一の實踐主義として奉行すべきものは國家至上主義のみ。」

「國家至上主義に對する吾人の見解」における樗牛は、自らの「日本主義」を「國家至上主義」と重ねて自明なりとする態度を示したのであつた。

### (三)

樗牛の日本主義が、その主張に即して文學を考へるとき、如何なる文學論が展開するか。その方向は既に明らかであるけれども、少しく具體的にその点を見る必要がある。

私は先に、明治三十年という時点に激しく盛り上つた日本主義について多くの引用を重ねてきた。その三十年という時点において文壇をゆり動かしたものは何であつたか。この年の諸作中最も重視すべきものは、藤村の第一詩集「若菜集」(三〇年八月刊)であつた。そこで藤村は、自らの上に漸くめぐり來つた人生の春に對する喜びを歌つたのである。

春きにけらし春よ春

うれしや風に送られて

きたるらしとや思へばか

梅が香ぞする海の辺に (草枕)

透谷の内部生命が、その肉體とともに消滅したのは二十七年、藤村の上に新しき詩歌の世界の開けたのは、三十年のことであつた。

それは何よりも、「生のあけぼの」への感銘であった。時に藤村は数えて二十六歳であった。そういう藤村より二つ年長の樽牛は、この年、次の如き文芸評論を発表した。

「我邦現今の文芸界に於ける批評家の本務」〔太陽〕六月

「明治の小説」(同右)

「所謂社会小説を論ず」(同八月)

樽牛の文学観が、その日本主義によって濃く彩られていたことに疑いはない。

「あはれ、国民的立脚地に抛りて、衆愚の紛々たるを打破し、公平なる比較的はた含蓄的批判によりて、国民文学の旗幟を明かにする、是れ豈今日文芸批評家が最大本務に非ずや。」と説き、「明治の小説」を三期に区分し、第二期明治二十八年までを論じて、「吾等は我詩人小説家の社会国家に冷淡なるを見て文学亡国論の強ちに齋東野人の語に非ざるを認む。」と断じた樽牛であった。それよりも注視すべきは、「所謂社会小説を論ず」である。そこには、樽牛の日本主義にまつわる一つの底流が、明瞭に露呈されているからである。その結末を引く。

「今の所謂社会小説は、貧弱者に訓ふるに服従を以てせずして、反抗を以てし、犯罪者に訓ふるに、悔悟を以てせずして、遂非を以てし、不幸者を導くに救済の法を以てせずして、破壊の道を以てす。之れ實に社会道德に裨益するところなきのみならず、又彼等の為に真摯なる伴侶と称するを得ざるなり。

之を要するに吾等は今日の所謂社会小説を歓迎する所以を知ら

ざるなり。」

こういう三十年時の樽牛の文学観は、三十一年においては、「小説革新の時機——非国民的小説を難す」〔太陽〕四月を生み、三十二年においては、「時代の精神と大文学」(同三月)「日本主義と大文学」(同五月)を説くに到るのである。樽牛の「小説革新」が「国民的小説」すなわち「大文学」の誕生への熱望に他ならなかったことは、ここに明らかである。

「論じて效に到れば、大なる文学の出づるを望むもの、先づ時代精神の統一を望まざるべからず。而して時代精神の統一は、必ずや教育道德の主義の統一より初まらざるべからず。是に於てか大公至正なる日本主義の必要起る。」

「日本主義と大文学」の結末である。

この章の初めに、私は藤村の「草枕」の一聯を引いた。ここに、ほぼ時を同じくして成った樽牛の「わが袖の記」〔反省雜誌〕三十年八月の終りに近い一節を引いておく。その内的明暗の対比において、あるいは樽牛の日本主義そのものの底の底を覗きみる一つの契機、ひいては、「美的生活を論ず」〔太陽〕三十四年八月以降の心情の先取りを見ることができると考えるからである。

「月は半天にのぼりて、地には人のけはひだにあらず。あゝ月よ、長へに其歩みを止めよかし。永久の夜の是世界を覆ひつゝめよかし。風よ吹け波よくだけよ。松は其ひびきをならせよかし。

夜しづかにしてわが声は遠く松原のあなたにひびきわたれり。されども月にうつれる吾影はひとつなりき。」

## (四)

梶牛の日本主義は、要するに日清戦後の日本の現実的自負と現実的不安とに対する理想国家像の提示に他ならなかった。一切の内的価値を、真を、美を、善を、ことごとく「国体の精華」に内包するが如き国家のイメーヂの追尋——そこに若き日の梶牛の夢があったにちがいない。私は先にそういう梶牛の内に一の「心情的飛躍」をみたいと記した。そのことに今少し言及したい。

プラトンが『国家』論において、自らの理想国家から追放したのは芸術家・詩人であった。その理由は明確に三点にしばつて告げられてはいるが、その第二点は、芸術とは本来不道徳的なものであるという道徳的理由であった。梶牛の日本主義もまたその重要な一支柱を道徳に置いた国家論であったことは既に記した。そうだとしたら、梶牛もまたその理想国家から芸術家・詩人を追放する一つの根拠をプラトンに見出だすこともできたはずである。そういうプラトン流の芸術観は長くその生命を保ち続けたが、それを古き芸術観として全面的に否定したのはニイチェであった。ニイチェの新しい芸術観によれば、芸術とは人間の本務であり、芸術家こそ人間の典型であった。そういうニイチェの芸術観が、キリスト教に由来する西欧文明の精神的頹廢、資本主義体制に起因する人間の機械化に対する個人の生の解放の主張に根ざしたものであったことは言うまでもない。それはまぎれもなく非道徳のないし美的個人主義の提唱であった。梶牛が、その晩年に近い三十四年一月の『太陽』に掲

げた「文明批評家としての文学者」は、そういうニイチェに寄せた最初の、そして決定的な傾倒であった。

「遠くは『ロマンチズム』の運動も、近くはヘンリー・マッケーの無政府主義も、ニイチェが是の個人主義の極端なるに較ぶれば、尚ほ遙に緩慢なるを覚ゆ。而して吾人の最も注意すべきは、是の如き思想が独逸現代の人心を揺撼したることの予想外に深大なるの事実に在り。

是に於て吾人は文明批評家としてのニイチェが偉大なる人格を歎美するを禁ずる能はず。」

ここに一つの心情的飛躍ないし思想的転換の見られることは、周知の如くである。しかし、私が今ここで言わなければならないことは、こういう飛躍の根が、その日本主義自体の内に在ったということである。先にも引いた「日本主義の大文学」に徴して、そのことは明らかであろう。「大文学」を「時代精神の統一」に即して考えるという梶牛の主張は、プラトンの否定し、ニイチェの嘲笑を受けざるを得ない文学観ではなかつたであらうか。そういう自分らの弱みの認識、それが梶牛における内的飛躍だったのである。

そのことと関連してもう一つ付言したい。

周知の通り、西欧先進国における近代国家とは、近代的自我の確立に即した国家体制の樹立であり、その理念は、自我と国家、私的なものと公的なものとの相互媒介的調和に他ならなかつた。そういう近代国家のイメーヂを中性国家と表現したのは、カール・シュミットである。中性国家とは、真・善・美等の内的価値に関して

は中立的立場をとり、その選択と評価とを個人の自由ゆだね、そういう内的価値とは別の純粹に形式的な法機構の上に国家主権の基礎を置く国家を意味した。各国それぞれの現象的相違はあったにしても、西欧近代国家成立の過程は、確かに内的価値と外的価値、私的なるものと公的なるものとの区分を立てることによって、かえって両者の対立を解消し去ろうとしたものであったことには、多く疑問の余地はないであろう。ローマ教会の統一的支配に対するプロテスタントの蜂起、宗教改革に続く十六、十七世紀にわたる宗教戦争、それにもかかわらずルターもカルヴァンも、法皇に代る統一勢力とは成り得ないことの明確化、他方王權神受説を振りかざして自己の支配の内的正統性を保証しようとした絶対君主群に対する熾烈な民衆の抵抗——かくして西欧近代国家は、その支配権力を次第に公的秩序の保持という外的なものに移行していったのであった。中性国家とは、そういう歴史の流れの中から、法体系の中に集約された公的権力と、私的自由に委ねられた信仰・思想・道徳・芸術等との判別と融和とのうちに近代国家の本質を見ようとしたものであった。それに対して明治維新は、精神的権威と政治的権力との分離の前者による統一であった。幕末に渡来した異人たち、例えばラザフォード・オールコックは、大著「大君の都」(一八六三・文久三年刊)の中で次のように告げている。

「大名は概して改革には反感をもっており、天皇(ミカド)と大君(タイクーン)の双方に忠誠をつくさねばならないのを利用して、大君の執権を抑えようとするのにやぶさかでないようであり、

かれらはこの条約が自分たちを拘束するとは認めていない。かれらの歴史をこのように概略的にのべたのは、つぎのことを示すのに必要だったからである。それは、この国は封建的基盤の上に立って統治されていること、世襲の元首が二人おり、ひとりには神権によって元首となり、もうひとりには実力を背景にして政権を奪っていること、(山口光朗訳による)維新とは、正しくミカドとタイクーンのみカドによる統一であった。この政令帰一の経路が、西欧のその逆行であることは何人の目にも明らかである。この維新を経て二十数年、一切の内的価値を「国体の精華」と教示した勅語が下布されたのであった。かくして、絶対的国家権力は、一切の内的価値をその内に掌握してはばからなかったのである。日清戦争の始まったのは、教育勅語發布から五年目に当たった。樗牛の日本主義に、強く国家主義の投影し続けたのも、一の歴史の必然であったにちがいない。しかし、樗牛が、「国体の精華」に依存しつつ、換言すれば近代的自我不在の現状に於いて、一挙に、西欧的中性国家をさえ乗り越えた理想国家の現実的形成を論じたこと、ここにも大きな心情的飛躍があったと考えざるを得ないのである。

明治三十年の日本主義が、その波動の高さに比して、実績の乏しかったのも当然であった。

最後に言っておきたいことは、今日をもふくめて、近代日本における宗教不在の問題の重要性である。樗牛の主張は、この問題を考える上に確かに一つの手引きとなるであろう。しかし、宗教を全的に否定し、道徳において人間を生かし切ることの可能性は、特に今

日においては毎日に低下しつつある。同時に、日本において真の宗教の力の滅び去りつつあることも否定できない現実である。

樗牛の「日本主義」は、今、そのことへの誠実な対決をわれわれに迫る、ある生命を保有している。樗牛の「日本主義」、ひいては、明治三十年の日本主義の問題は、その意味では、真の否定的継承を待ちつつ、未だにその生命の糸をふるわせているのではないであらうか。

付記 内外多事の中にこの一文を草し得たのは、数々の文献に依つてである。問題の紹介に終り、入口における左顧右眈に終つたことを省み、それだけにかえて強い謝意をこめて、参考文献を列挙したい。

『樗牛全集』第二卷・第四卷「序言」

『高山樗牛研究』（『日本文学講座』第十三卷）

『明治文学史』

『近代日本に於ける『伝統』主義』（『近代日本思想史講座』第七卷）

『近代日本文学史』

『近代日本の作家たち』

『近代評論集』「解説」（『日本近代文学大系』第五十七卷）

『明治時代』「解説」（『現代文学論大系』第一卷）

斎藤 信策

姉崎 正治

高須芳次郎

永井 一孝

小松 茂夫

篠田 太郎

小田切秀雄

川副 国基

吉田 精一

以上

# 木下尚江の文学的出発

山 田 貞 光

## (一)

木下尚江が『火の柱』を毎日新聞に連載し始めたのは、明治三十七年一月一日からで、同年三月二十日完結した。その後、若干加筆して五月十日平民社から刊行した。同書はその後、由分社、金尾文淵堂、梁江堂などから出版され、明治四十一年には二十版（実際は刷）を重ね、『良人の自白』とともに最も多くの読者を得た。

従って、木下尚江が文学界に足跡を印したのものとしては、最初の小説であり、田岡嶺雲のいう「作家ならざる小説家」ゆえ、尚江の文学作品第一号の印象を色濃くしているが、実はこの作品以前に習作もあり、公表されたものとしても、いくらかの文学作品があるものである。

『火の柱』以前の文学作品で、習作草稿以外のものを最初に紹介したのは、おそらく山極圭司氏と思われるが、同氏は昭和二十八年

九月の「木下尚江の文学」(至文堂『国語と国文学』所載)で、

「木下尚江の文学が社会的なものになったのは、明治三十七年一月一日から三月二十日まで、毎日新聞に連載された小説『火の柱』が最初であると、一般には考えられているが、そうではない。明治三十二年毎日新聞社に入社する前の事は明かでないが、それ以後の毎日記者時代には、彼の文学作品は、短歌、歌日記、詩、随筆等かなり数多く、しばしば紙上に掲載されたし、しかもその中のあるものは、日本近代文学史上、極めて珍重すべき記念碑的作品である。」

と述べ、「浅草寺畔の怪光」、「鐘ヶ淵の女工」などを取り上げ、稚拙な文学的表現ではあるが、反体制的反戦詩としての意義ある作品として紹介した。

これらのほとんどは、木下尚江の署名で発表されず、松野翠、美登里、樹蔭生などの変名で載せているため、発表当時は木下尚江の

筆になるものとは、容易に気付かれなかつたようである。

しかし、彼が論説文のほかには和歌や詩などの文学作品を筆のすざびとしていたことは、一部の人たちには知られていたものと思われる。即ち、明治三十四年十二月の万朝報に載つた「当今の新聞記者」を見ると、「木下尚江先生」という一項があり、「先生英漢の字に長じ又国文和歌に巧なり。同新聞(毎日新聞のこと——引用者註記)紙上松野翠と署するの閑文字は先生の隠し芸なりといふ。」とあるからである。

ところで、木下尚江は、毎日新聞記者以前の在郷時代に、新聞記者として活躍した経験をもっているが、そのころには文学作品を発表したことはなかつたのであろうか。まず彼が遊学・在郷時代に新聞・雑誌へ掲載した文章で、現在確かめられるものを列挙してみる。

- △婦女ノ生涯    △自由離婚と制限離婚と別あるか    △吾人は吾人を殺すの權なきか    △松本親睦会改革意見    △県治問題に對する所信を述べ特に松本人士に訴ふ    △県治紛問の處理に就き松本人士に談ず    △松本の将来を如何せん    △廢娼論    △養子法に就ての疑問    △信州松本通信    △須く内地に於てすべし
- △二拾六年の社会と小説    △経済社会の事業を見て國民の思想を察すべし    △革新論    △偶感一則    △経済的進歩と我國民思
- 想    △普通選挙ヲ請願スルノ趣意

これらの題名だけでもわかるとおり、明治二十年から同三十二年までの間に発表された文章のほとんどは、社会、法律、政治、経済などに関するものであり、文学にかかわりをもつたものは、わず

かに「二拾六年の社会と小説」(明治二十六年一月、信府日醫所蔵)一編だけである。この文章は、現在、続編だけが見ることができないが、彼の主張する論旨は、大体次のようなものである。

今日の小説家が、懐古的な社会に慣らされた骨董屋の小説家に成り果てている。これに反し、数年以前に於ける政治小説の著者の多くが政論家で、日本将来の政治社会に對して、改革の精神(旧物破壊の精神と将来社会の理想を目的とした。)を持つていたために、「彼等が一枝の筆能く其利詛を社会に伝え得ることができた」のである。今日の小説家として、この点を猛省するところがなければ、おそらく社会は、小説家を遇するに毀潰しをもつてし、また懦弱社会の嗜好に媚びて、恬然耻じざるならば、最早やこれを文学者という尊貴な名称の下に列籍させることはできないとした。

また我が国の有様を見ると、外面の体裁は大いに進歩したようだが、國民の思想や精神はそれに伴わずに立ち遅れている。従つてこれを補正奨励し、教養訓致するためには、文学者が進んでその衝に当たらなければならぬ。今や我が国の社会は、改革の時機にあり、教育家、宗教家、政論家などが、懐古的思想を破壊して、新社会出現のために心掛けなければならず、特に便捷かつ並及の効力ある詩人、小説家の手腕に期待すると述べている。

この小論は、必ずしも文学論プロパーではないが、当時、木下尚江が抱いていた文学観が端的に表出されているものである。彼が同じころ文学作品に筆を執つたとすれば、この「二拾六年の社会と文学」に述べられた主旨を踏まえたものであったと推測される。

## (二)

さきほど木下尚江在郷時代に発表された文章として十七編をあげたが、これ以外に新聞等へ掲載したとみられる原稿が残っているようである。(柳田泉『日本革命の予言者木下尚江』)それらは現在、早稲田大学に所蔵(木下家から寄託または寄贈されたと思われるが)されているらしいが、柳田泉、稲垣達郎氏によって論題が報告されているものとしては、次のようなものがある。

- △国民道德の真相   △先づ洗礼を……   △婚姻トハ何ゾヤ
- △今日世人……   △物理を学ぶものは……   △立ちて海面を見渡せば……   △魔風は農民ノ子弟ヲ捲カントス(戦後の狂風)
- △女優を思ふて芸妓に及ぶ   △余ハ一個ノミ   △基督教と婦人   △昔の大学者は……   △往古仏教徒……   △誰レカ文学を末技なりと云ふ……   △露西亞が南の方……   △社会主義鎮庄
- △再建   △日本国民ノ天賦ヲ論ジテ発刊ニ代フ(『新評論』掲載)
- △憲法ト国家   △徳川慶喜君を思ふ   △信濃富国論   △万国の将来   △貧民救済と禁酒主義   △松本禁酒会   △松本禁酒会宣言書   △余は如何にして基督教を信ずるに至りしか   △一夜の仮寝   △ちごが淵

右の他、無題ではあるが、第一章——人性、第二章——政治、第三章——国家、と小分けしたものの一編、小説の習作三編がある。以上あげたものなかで、文学に関したものとえば、「誰レカ文学を末技なりと云ふ」、「一夜の仮寝」、「ちごが淵」、および小説習作

断片三編であるが、このうち「誰レカ文学を末技なりと云ふ」を除く他の文章は、既に全文が活字化されている。

まず習作断片(一)は、昭和十四年に柳田泉著『政治小説研究』下巻(松柏館書店に収録された。この三編は、いずれも製作年月がはっきりしていないけれども、(一)は信陽日報の原稿紙に書かれていて、早ければ「明治二十一、二年、遅くても二十三、四年を下らな(柳田泉著『日本革命の予言者木下尚江』)時代のものと推定されている。この作品は、末広鉄腸の政治小説『雪中梅』、『花間鶯』(明治十九年、明治三十年)の影響を受けたことがはっきりしたものの(柳田泉『政治小説研究』下巻および『日本革命の予言者木下尚江』)であるが、人民のために社会主義を實行しようという社会詩人が登場するなど、自由民権思想の宣伝的な政治小説とは違い、新しい社会主義時代を予見する作である。

あとの(二)、(三)の二編は、『良人の自白』や『靈か肉か』のある場面を想像させるようなもので、(一)より後(数年後か)に作られたものようである。三編とも習作断片で、充分な文学批評の対象にはなり得ないものであるが、評論「明治二拾六年の社会と文学」とともに合わせ考えると、木下尚江の文学は、政治小説の影響下に出発し、社会主義文学へと底流したことの証左をそこに見ることができよう。

次に「ちごが淵」と「一夜の仮寝」(昭和二十年、岩波書店発行の雑誌『文学』二十三巻七号に発表)であるが、前者はアメリカの女流詩人エリザベス・オークス・スミス夫人の作品を、尚江が訳したものであるとい

う。内容は貧困な母子家庭の子が、雇い主の老婆に酷使されて、水死するに至る十一節の詩であるが、貧者、弱者へ寄せた若い尚江の氣持がうかがえるものである。

後者の「一夜の仮寝」は、明治三十年五月上旬と記され、製作年月のはっきりしたものであると同時に、他の習作にくらべて完成度の高い作品である。柳田泉著『日本革命の予言者木下尚江』には、(一)から(七)までで中絶しているが、日清戦争後の下層社会が、ブルジョアの戦争景氣をよそに戦争のためにいかに大きな痛手を負うたかということを、一人の若い女医と山間の僻村に住む一老婆との問答をかりて語らせている。反戦氣分の満々たる作品である。」と説明されている。

この説明は大体、妥当と思われるが、(七)をもって中絶になった長編小説の一部なのかどうかは、にわかには断定し難く、一応、短編小説として完結したものと考えてもおかしくない作品である。また、作中の婦人を女医とみたようであるが、この作品のどこにも女医を想像させる描写はない。

彼女の身分は、「去らば我が一生は、鰥寡孤獨の、世に容れられず人に虐げらるるやからの友となりて、真なる道の光を蔽ふ浮き雲をひとひらたりとも払はばやと、乃ち此の卑しき身をは、我が信ずる大御神には献げぬ。」という一節に示されているように、神(キリストか)の福音を説く伝道婦とみられる女性である。この点も尚江文学の傾向を知る上で重要なことであるので、ここで確認しておく。

なお、この「一夜の仮寝」は、『火の柱』に先行する反戦小説、社会主義的作品として重要である。この小説の舞台は、日清戦争後の或る農村における、老婆と嫁と孫という一家の主人をなくした貧困家庭を中心としている。戦争に駆り立てられた息子は病死したために、お上からお金ももらえず、その上、県庁へ納める上納物が滞ると、役場から嫁の箆筒を売るようにいわれて、仕方なく老婆の古箆筒などを売って用立てるなどの誠意を示しても、誰も援助の手をさしのべてくれない悲惨な家庭である。嫁が製糸工場に雇われてさんざん働かされても、糸の値下がりを理由に、給料も当てがいが勘定。そこへ付け込んで、工女側と製糸家側との両方から金をせしめる悪徳人の話までからませてある。

また、婦人が老婆を慰めるために、「君のため、国のため、身を棄てての御働き、天晴れ普れを後々までも御残こし遊ばす……」というのに対して、老婆は「左様なる人だましの言ひ草は、此の婆はモウく聞き飽き致しました。若し其の国の為めとか何とか申すことが真ならば、其の様な働き致したるものの親や妻子に使ひあるきや山稼ぎなど致させ、御自分等ばかり栄耀栄華をなさると言ふが第一わからぬことでございます。」というばかりか、「兵隊に取られるのは、皆んな貧乏人の息子で、遊んで居るお金持ちの家の息子さんなどは、検査に当らしやるはございません。」と、徴兵の実態まで突いている。

これは、いうまでもなく、当時の木下尚江の思想が、如実に反映されたものである。彼の主張は、また作中の次の言葉にも表出される。

ている。

「実に今の世は弱いものいじめなり、権力あるものはなきものをいじめ、富めるものは貧しきものをいじめ、男は女を虐遇して、是れぞ此の世の道理なりと云ふ。去れど世の道理は決して此の如きものにあらざることを信ず。斯かる誤れる禽獸の世の有様を脱して、平和なる愛の世界の到来すべき時あることを信ず。其の時の早く来るべき準備をなすことこそ、人たるものの務めなることを信ず。」

ここに貧者、弱者に同情し、平和な愛の世界を招来しようとするヒューマニスト木下尚江の面目がうかがわれる。そして作中の婦人の言葉は、作者の木下尚江の言葉でもある。「平和なる愛の世界」というのは、明治二十年代半ばからキリスト教に傾斜していた木下尚江の伝記的事実からみて、キリスト教的発想の平和や愛の世界——それは後述の神の国を地上に建設しようという壮大な願望につながる——を想定しての言葉であつたといつてよいであらう。

### (三)

木下尚江は明治二十一年、東京専門学校を卒業して故郷松本に帰り、先輩降旗元太郎、吉田復平治ら（実際の社主は、松本市出身で内閣官報局長を勤め、東京米穀取引所の会頭であつた青木貞三）が筆を執つていた信陽日報の記者になつた。彼は次第に文名をあげ、県庁移転運動で頭角を現わしたが、移庁運動が失敗して分県運動に発展すると、松本地方ばかりではなく、長野県全体のためにな

らぬとする正論を主張して、ボスたちに反抗したため、新聞社はつぶれて失職し、浪々失意の身となつた。

これは明治二十三年七月ごろから二十六年一月ごろのことで、このころキリスト教に接近したという。彼がキリスト教とかかわりをもつた経緯を、彼自身の文章に求めてみると、次のようなものがある。それは「余は如何にして基督教を信ずるに至りしか」（柳田泉氏によつて昭和三年七月の岩波書店発行『文学』に掲載された）である。

この文章によると、彼が中学時代や東京専門学校時代には、宗教というものは野蛮時代の遺物で、文明世界、知識時代には無用の害物と一途に決め込んで、ふりむきもしなかつた。ただ、仏教の教理のなかに深遠な哲理が含有されていると聞いて、それを若干、学ばうと思つたことがあり、帰郷後、信陽日報社に入つて筆を執るようになった彼は、眼を社会全般に広く配るようになり、宗教上にも考え及ぼす必要が生じて、様々な経文などを借り集めて来て、読誦するばかりでなく、新聞掲載の論説にも務めて仏教典中の熟語を挿入したという。

これに反し、キリスト教にはなじめず、キリスト教徒がみだりに神という植物（尚江の用語）を崇拜するのは、野蛮の遺風であると思ひ、当時、彼の妹が毎日曜日、キリスト教会堂へ行くのを見て、すこぶる不平の言辞を吐露した。それにもう一つの原因として、キリスト教徒の言行をみるに、奸淫や飲酒を戒めるのを快く思わなかつた。それというのは、当時の彼が、こういつた人生の快樂を禁ずることによつて、水を失つた魚のような悲惨な境遇に陥いるものと

思い込んだためという。

ところが、名を社会公共に藉りて経営運動をする人びとの多くが、不徳義破廉耻をして恬として省みない有様に堪えることができず、政治家の徳義は如何、教育家の徳義は如何、仏教徒の徳義は如何と尋問し、結局彼は高尚潔白にして仰で宗とすべき者を得んことを欲し、座禅のまねごともした。

そうした或る日、彼は非行をして、これを知った妹が新約聖書中のキリストの言葉を用いて諷諫したところ、彼は大いに恥じると同時に、驚き悟ることがあったという。そのようなことがあって、新約聖書をときどき手にするようになり、聖書中に美妙の金言がおよびたたくあるのを知ったのであった。

だが、はじめは聖書から得たものは、キリストの言葉のみで、キリスト教の眼目であるところの精神生命については、一つも悟るところがなかったが、教会に赴いて説教を聞きまた牧師、伝道師と親しんで、彼等から様々の書籍を借り受けて研究した結果、聖書が目的、希望、光明、平和の源泉であることを知った。かくして、ここに光明を見出した彼は、「余は今ま幸福なる大道に途<sup>途</sup>ることを得たり。願はくば、敢へて邪路に迷ふことなくして此の公道を進み行かぬ。」と、その初心を披瀝している。

この「余は如何にして基督教を信するに至りしか」は、「明治二十四年六月八日夜偶々感ずる所ありて記す」とあるもので、当時の尚江のキリスト教への回心を率直に語ったものと見られる。一方、この文章だけでは、どのような動機で、またどのような目的で書か

れたものか不明であるが、明治二十四年六月という年月は、尚江にとっては無職、浪々中の身から新しい活動への道を模索していた時期に相当する。彼は「余は今ま幸福なる大道に途<sup>途</sup>ることを得たり。」と末尾に記している。いうならば、彼の旅立ちの歌でもあった。

ところで彼は、後年、キリスト教との関係について、いくつかの文章を書いているが、明治三十五年三月の六合雑誌に載せた「野生の信徒」をみると、彼が初めて神の存在を信じたのは、師友の教導によるものではなく、「只だ当時失意の境遇に在りて清閑の具を求め、政法の書を抛つて博物の学を涉猟し、人より買へる失望を自然により償はんことを求め」たところ、「自然界に行はるる整然たる奥妙の法則は、端なくも法則の淵源たる『神』の面影を我が混濁せる心地に投じ」たことによるという。

このくだりについては、彼の『懺悔』(明治三十九年、金尾文淵堂)にもほとんど同じ表現があり、神学というものは理解できなかった(余は如何にして基督教を信するに至りしか)にも、神学的キリスト教は、キリスト教の本質ではないといっている。)が、「自然界を通じて其の奥に神の存在を確信した」という。そして「予の心が『然り、神在り』との明答を与へた時、歓喜の状は如何であつたらう。真夜中の闇に迷い果てたる旅人が、意外にも額に近く朝日の上ぼるを見たる驚きと嬉しさに喩へ」るべきものであったと。

このようにして彼は、ここに神の存在を確信したわけであるが、彼のいう「自然界を通じて其の奥にある神」というのは、キリスト教とは合致しない自然神的なもので、そのような考えをもって、土

地の教会を尋ねて牧師と語って見たところ、「君の神は自然の神だ。耶蘇教のとは違う。」(昭和十二年九月九日付け、平野義太郎宛書簡)といわれたという。

しかし、彼は他人が何といおうと、神の存在を確信し、彼なりにキリスト教を理解し、自分のものとしたことは疑えない事実であろう。明治三十年代半ば、社会運動家として、また新聞記者として充実した活動をしていた時代、彼はキリスト教徒として嘲弄されても喜んでこれを甘受するといひ、「余は神の存在を信ず。余は神の愛を信ず。余は天国を地上に経営するを以て人類の本分なることを信ず。」と述べている(『野生の信徒』)。

彼の信仰の歴史をさらに追ってみると、はじめ神の存在を確信したものの、神の愛へ到着するまでには、苦しい日々があったといふ。もともと聖書は「神は愛である。」(ヨハネの第一の手紙四章十六節)と教えているが、尚江の場合、ただちに神の愛を信ずることができず、苦痛を経験した。そのため「懷疑煩悶、或は凡神論に赴かんとし、或は寧ろ強ひて無神論に陥ることの安心なるべきをさへ信じ」(前掲書)たのであった。

尚江が神の愛を信ずることができたのは、神の存在を知ったときから数年後のことであつたというが、それは牢獄の中でのことである。「野生の信徒」の文章では、

「余は案外なる出来事の爲めに静心反省の余暇を得たり。端坐冥目徐ろに過ぎ来し方を回顧すれば事々物々として我が傲慢の紀念ならざるはなく、罪証歴然として良心の痛苦堪ゆべくも

あらざりき。一旦声あり胸底深く私語して曰く、「此の罪に満てる我をさへ神は尚ほ且つ棄て給はざるや否や」と。既にして又た声あり、応じて曰く、「然り、神は決して捨て給ふことあらざるなり」と。此時余が心は山底深く隧道を鑿つて工夫が愈々進みて愈々暗黒をタドれる最後、一壁忽然破れて顔前近く光明を迎へたるが如く、蘇生の感涙禁ずるに由なく、「神、我を愛す」の金言は深く余が靈魂に彫刻せられて、従来遂に理解すること能はざりし「祈禱」は最早や片時も忘るべからざる精神の糧とはなりぬ。」

と記しているが、『懺悔』をみると、普通選挙運動中、県会議員選挙にかかわる疑獄事件に連座した彼が、松本監獄署の独房にはいつていたときに、彼の妹が聖書を差入れ、そのなかに英文で「神の愛常に汝に伴ふ」といふ一句を書き添えた紙片を挿入してあつたのに心を動かされ、自問自答の結果、神の愛を確信したと述べている。その年月は予審法廷から有罪の決定書が送られてきたとき(明治三十年秋)以前のようであるから、拘引された明治三十年八月十日から九月にかけての期間中とみてよいであろう。

このようなことから推定すると、彼が神の存在を信ずることができたというのが、最初の失意時代で、神の愛を信ずることのできたのが、第二の失意時代であつたといふことができる。それは後年の第三の失意時代(社会運動離脱後)も合わせ考えると、彼はそのような障壁に直面すると、苦悶の海に身を沈めながら、必ず浮上かつ転生の何物をかを求めて闘っている。おそらく第三の失意時代

が最も長く、その上さまざまな模索を重ねながら、到達し得たという確信的なものには遭遇しなかつたであらうが。

幸いにも、第一と第二の失意時代には、神の存在と愛を信ずることによって、転生の契機を見出したようだ。彼はいう。

「余は基督の人たることを疑はざる者なり。而して余は此人によりて世界的大革命の宣告せられしことを信ずる者なり。所謂世界的大革命とは則ち万国皆な其境を撤し、人類皆な同胞の愛情に満ちて天国を地上に建設すること是れなり。権力の私情を中心となせる帝国王国が天国の観念の前に滅亡すべきは当然なり。」(野生の信徒)

このような考えをもつた彼は、「予は『帝王神権』主義が政治に教育に宗教に、日本国民の全心を掌握して居るのを容赦することが出来なかつた。特に基督世界の空気までが之に感染し居るのを見て、悲憤の念に堪へなかつた。」(懺悔) というのは当然である。彼はこの点について、後年次のように説明している。

「僕は野生の基督者でした。教会の基督教と云ふものには、寧ろ深甚の憎悪を感じて居りました。其れは二つの事実が僕を然うさせたものです。第一は明治二十年頃、「教育と宗教の衝突」と云ふ事件が起りまして、基督教は日本の国体と相容れないものだと言ふ攻撃が八方に起りました。此の大切な挑戦に対する基督教諸名士の卑屈な態度が、僕に深い憤怒を起させました。すると第二が引き続き起りました。其れは明治二十七年の日清戦争です。僕は地上第一の罪惡此の戦争と云ふものに

対して、基督者は声高く「否」と叫ばねばならぬものだと思つて居りました。然るに東京に於ける教会の諸名士は、全国に互つて、手を分けて、「戦争の義」を宣伝遊説しました。僕は忍耐することが出来ませんでした。されば僕が山を出て東京へ来る時の胸中には、一個の基督者として一身を献げたいと云ふやうな青年の空想が充溢して居たものです。」(昭和八年十二月、『中央公論』四十八卷十二号所載「片山潜君と僕」)

以上のようにみてみると、彼がはたしてキリスト教徒と呼べるかどうか疑問もあるが、キリスト教の精神を武器として、地上に天国を建設することを目的として活動したことは間違ひなからう。彼がその活躍舞台を中央に移したとき、「一個の基督者として一身を献げたいと云ふやうな青年の空想が充溢して居た」というのも、当時の文章によって裏付けできる。

彼が東京に居を移し、毎日新聞に入社した年、普通選挙運動の同志であつた二木亀一(毒龍と号す)が、松本で『八面峰』という雑誌を発行すると、その第二号(明治三十二年十一月)に「我が同胞に警告す」という論文を寄せ、その末尾で次のように述べた。

「吾人は固く『愛』は宗教の目的のみならずして政治の基本なることを信じて着々之に接近し行くを以て政治の主眼なりと断定す。教会と国家と場所こそ異なれ『愛』の福音を宣伝するの職分に至りては則ち一なり。人類は信仰の動物なると同時に又た政治的動物なり。故に吾人は此の二方面の要求に応じて民主主義の食糧と兵器とは供給せざるべからず。何をか食糧兵器と言

ふや曰く基督教なり曰く普通選挙なり是れ皆に日本に於ける目前時弊の良薬のみならず実に永遠無窮に対する世界的衛生の滋養なり。」

ここに、素朴ではあるが、キリスト教社会主義者木下尚江の思想的根元をみる事ができるのである。彼はキリストを神としてではなく、人間としてとらえ、世界的大革命家とみた。また彼は使徒パウロを好み、猛烈なるパウロの意気に感激した（懺悔）という。そしてまたキリスト山上の垂訓に感動した（同書）という。彼はこれらを通じて、社会的、実践的な思想や行動の原理をそこに見出したものといえよう。

#### (四)

前述のごとく木下尚江が純粹のキリスト教徒といえるかどうかは別にして、彼がキリスト教と深いかわりをもちながら社会運動ないしは社会主義運動に入ったことが容易に想像されるが、彼自身のいう「余は如何にして基督教を信するに至りしか」というのと同様に、「余は如何にして社会主義者となりしか」という説明を聞く必要がある。

この命題は、彼自身の内的要求によって書かれたものではなく、週刊平民新聞のコラム欄に連載された設問に対する解答の一つで、必ずしも詳細に語られているとはいえないが、その要旨は大体次のようなものである。

彼はまずキリスト教を通じて神という思想を抱き、四海同胞主義

者となったが、地上の悲劇や矛盾は、神学の解釈にまつものではなく、社会主義の経済論によって解決されなければならないと悟った。そのような考えで、改めて聖書をひもといてみると、「一切の疑問は基督教の人格中に溶解せられ、其の言論行動の中に悉く説明せられ」ていることを発見し驚喜した。だから自分の信仰はキリスト教的共產主義または共產主義的キリスト教である。これが自分の社会主義者となった経路であり、現在の立場であると同時に、将来の念願であるというのである。

木下尚江が社会主義という言葉や概念に接したのは、いつごろのことであったか、その年月を詳細にすることは困難であるが、彼が東京専門学校在学中のころと、一応みることができよう。

「抑も僕等が学校通いの明治二十年前後、当時の書生の頭を動かして居た思想は何であつたか。君は本課の医学の外に、文学書も読めば政治書も読む。僕は彼の頃、君が小説を書いて居るのを見た。そうして芋を食いながら盛にミルの経済論や、ベンサーの社会学の講釈をして、社会主義の無政主義(マジョ)だのと喋々するのを聴いた。」（「荒野」）

ここに語られている君というのは、木下尚江の従兄（一歳年長）で、東京大学医学部別科を卒業後、松本で医院を開業するかたわら市政に関与し、晩年は松本市長を勤めた百瀬興政のことである。

木下尚江が東京専門学校を卒業して、郷里松本に帰り、さまざまな政治的、社会的団体に加ふまたは組織して、社会運動のスタートをきった時代をつぶさにみると、百瀬興政と提携して行動したこと

が多い。例えば松本衛生会、安原徳義会、松本禁酒会などがそれで、その影響関係は無視できない。はじめは、これらの団体が百瀬興政がイニシアチブをとったようだが、次第に木下尚江の活動が目立つようになった。このような経過をみてみると、初期においては、百瀬興政の言動からの啓発も少なくないと推測される。

また木下尚江の非戦思想の歴史をみると、彼が日清戦争ごろ既に非戦の態度を現わしていたことは、さきほど言及あるいは引用した「一夜の仮寝」や「片山潜と僕」などの文章で、ほぼ確かめられるが、百瀬興政も非戦論者であった。木下尚江の『荒野』によれば、日清戦争の最中、戦争賛成の弁明のために、東京から牧師が二人巡回してきて、一夜芝居小屋で演説会が開かれた時、二階の傍聴席から百瀬興政がノウ！と大喝一声して満場を驚かしたという。この面でも百瀬が兄貴格であったかもしれない。

ところで、木下尚江の社会主義についての考えを、別の資料で探ってみよう。彼は社会主義思想を次のように活写している。

「維新後の第一の事業は新政治の建設であつた。新政治——其制度と其知識——只だ是を海外の翻訳に依頼する外に道が無かつた。看よ。ベンタムの功利主義、ルツソウの民約説、即ち

個人の自由平等と言ふ改革的思想の原本は、其の昔実に元老院内に翻訳せられ、官費を以て印刷配布された。此の「個人の自由平等」と云ふ警鐘に促されて、国会開設の運動も起つた。自由党も出来た。改進黨も出来た。兎に角立憲政治の幕開きを見た。而して若し此の「個人の自由平等」と云ふ思想の苗木が無

かつたならば、社会主義若くは無政府主義も接木を試むる余地が無かつたに相違ない。」(『野人語』第二所収「基督抹殺論を讀む」)

彼はベンタムやルツソーなど、西欧の近代思想の移入により、日本の国会開設運動や自由民権思想の発生を促し、この苗木に接木を試みたのが社会主義もしくは無政府主義であるというのである。この言葉は、彼自身の思想、行動を少年時代から順に追ってみると、体験的実感として述べられていることが明白である。

人間の魂を形成するという幼年時代、あたかも尚江のそれは、近代日本の黎明期にあたり、西欧の近代思想の移植に汲々とした時代であった。これを具体的にいえば、天賦人権思想あるいは自由民権思想が大きく天下の輿論に作用した時代であった。

このような時代に少年期を過ごした木下尚江は、民権家たちの演説を近くの宝栄寺で聞き、自由民権思想の洗礼を受けた。或る日の演説会で、「国会を開設して、人民が皆な政治に参与せねばならぬ事」を教えられ(『神人間自由』所収「国家主義以前」)、「政治改革運動に誘惑」された(雑誌『明治文学研究』創刊号所載「福沢論言と北村透谷」という)。

また彼は、漢学からはなれた現代ものを読もうとして、福沢論言の『学問のすすめ』を手にしたところ、かの有名な「天の上に人を造らず、人の下に人を造らず……」という言葉に接して、その「感動は、言語に尽せぬ素晴らしいものであった。」(『国家主義以前』「福沢論言と北村透谷」という。これらは、尚江の自由平等思想の受容として重要な事柄である。

一方彼は、アメリカ前大統領グラント將軍の来朝(明治十二年)と明

治天皇の行幸（明治三十三年）を機に、共和思想を垣間見た（『懺悔』）。また中学時代、飯田事件の国事犯の被告人を見て満身の血を煮え立たせたり、イギリスの清教徒革命の中心人物で、イギリス国王チャールズ一世を処刑したクロムウエルの史実に感動して政治革命の野心を抱いた（『懺悔』その他）という。ここに、後年の国体批判者木下尚江の思想的萌芽があるのである。

このように、木下尚江の思想的系譜をたどってみると、自由民権思想（国会開設運動等）——普通選挙思想（同運動）——社会主義思想（同運動）というプロセスがあり、彼自身、自由平等という思想の苗木に社会主義の接木を試みたのである。彼の「普通選挙論」（雑誌『普通選挙』第二号）をみても、「国民の自由と平等とによりて普通選挙の大原理を唱道」しており、また普通選挙運動に先立って、社会問題を研究するために、松本に平等会なる団体を組織（明治二十九年ごろ中村太八郎等と）している。その発想は、いずれも自由平等思想を核としていることが歴然としている。

かくして彼は、明治三十年七月、中村太八郎らと全国に先駆けて普通選挙運動を起し、中央運動へと本流させるのである。そして、日露戦争の危機に際しては、反戦論者としてさまざまな言論戦を展開したのであった。彼の様々な政治的、社会的活動のなかに、際立ったものとしての反戦論と普通選挙論があった。それらは、在郷時代に萌芽し培われたキリスト教的社会主義の木々であったのである。彼は「人生の事、凡て最初の動機が最後の運命だ。」（『荒野』）という至言を吐いている。木下尚江にとって、まさに象徴的な言葉であった。

## (五)

木下尚江は明治三十二年二月、友人石川半山（本名安次郎。岡山県出身のジャーナリスト。松本の信府日報——信濃日報主筆を勤めた。）の仲介で、島田三郎社長の毎日新聞に入社した。尚江が最初に島田三郎に面会したのは、前年の十二月二十二日のことであったが、島田から青年問題、婦人問題、労働問題をモットーとしていて聞いて共鳴し、新たな決意をしたのであった。

尚江は入社後ただちに雑報記事などを書いたものと思われるが、木下尚江の署名で始めて毎日紙上に掲載した文章は、「世界平和に對する日本国民の責任」と題するもので、明治三十二年三月十七日から十九日にかけて三回連載した。以後、本名のほか木下生、松野翠、美登里、樹蔭生などの変名で論説、随想、詩歌など沢山な文章を掲載する一方、廢娼運動、足尾鉍毒問題、婦人問題、労働問題、普通選挙運動、非戦運動、社会主義運動等々、幅広い言論活動を展開した。

彼は明治三十二年十月、東京において組織された普通選挙期成同盟会に入会して、再び普通選挙運動に乗り出す一方、明治三十三年三月には、片山潜、幸徳秋水、安部磯雄らの設立した社会主義協会へも入会した。この会は、明治三十年四月、中村太八郎、樽井藤吉、片山潜たちが組織した社会問題研究会の流れを汲むもので、同会員中、社会主義に関心を抱く者たちが、社会主義を研究するために組

織した社会主義研究会（明治三十一年十月をさらに実践団体とするために改称（明治三十三年一月）したものである。

この社会主義協会は、明治三十七年十一月まで活動を続けるが、この間、日本で最初の社会主義政党が組織された。党名は社会民主党といい、創立メンバーは安部磯雄、片山潜、木下尚江、幸徳秋水、西川光二郎、河上清の六名であった。創立員はこのように少数のものであったが、この背後には、片山潜たちが指導していた労働組合員の多くが、党員予定者としていたのである。

社会民主党の宣言書は、安部磯雄が起草し、片山潜と木下尚江が幹事となった。事務所は神田仲猿楽町の木下の借宅であった。だが、同会が結成されたのが十八日で、翌十九日に神田警察署に届け出され、二十日に禁止・解散を命じられるという呆気ない最期であった。このとき起草された宣言書は没収され、掲載した新聞雑誌は発売禁止処分にあった。この宣言書には「理想綱領」、「実践綱領」が記載されていて、人類同胞主義に基づき、軍備および階級制度を全廃にすること、土地および資本などを公有とすること、財産の分配を公平にすること、政権および教育権を平等にすること、などが主張されている。宣言書の死産は、社会民主党の禁止とともに、まことに惜しまれることであった。

だが、木下尚江は、他の同志と共に盛んに社会主義的な演説を各所に開き、雄弁家としての地位を不動のものとした。そして、迫り来る日露戦争の危機に際しては、率先して非戦論を毎日紙上に発表したり、演説会で主張するなど、目覚ましいものがあつた。明治三

十六年十一月ごろになると、毎日新聞も主戦論に転じ、尚江の非戦論は紙上に発表できにくくなった。同じころ万朝報を退社した幸徳秋水、堺利彦らが平民社を起して平民新聞を創刊した。以後、同紙は非戦運動と社会主義運動の機関紙となり、木下尚江も社外から協力した。

毎日新聞社長島田三郎は、木下尚江の言論活動を理解し、大目に見てくれてはいたが、社の方針が主戦論に転じたということは、尚江の毎日新聞における活動面が、いちじるしく狭められたということと意味する。かくして彼は、その主義主張を小説という表現形式によって活路を見出さざるを得なくなったのである。

木下尚江の『火の柱』執筆の事情は、大正十二年三月二十二日付の長編小説刊行会あての尚江書簡（のち昭和三十三年二月二十三日）が詳しい。この書簡によると、明治三十六年秋、日露問題の危機が切迫したとき、社会主義協会の集会で、尚江は非戦論の発表を提唱して採用された。その結果、幸徳秋水と堺利彦が万朝報を退社して平民社を創立することになった。当時、尚江がいた毎日新聞は、平和主義を持論としていたが、戦争が到来すれば全紙にわたって戦争記事に占領されることは明白で、そのとき一行でも二行でも、自分の領分というものを持つていたいと思つていた。

そんな矢先、年末の社内総会議の議題で、小説をどうするかという問題がでて、小説を載せるとしたら一流作家に依頼したいが、高額の稿料を払うとなれば、政治部や経済部の人たちから抗議がでるなど、議論が紛糾した。そこで木下尚江がつい「僕が書きます。」と

発言して書く羽目になったという。彼は、「斯うして私は『火の柱』を書くことになりました。此の瞬間まで私の意識の中には、小説を書くなど云ふことは爪の垢ほどありませんでした。然かし『非戦論』を叫ぶ私の領分は、是で豊富に獲得されました。」と述べている。

彼は既に見たように、在郷時代、習作を試み、毎日新聞紙上でも詩や短歌などの文学作品を発表しているとはいへ、まとまった長編小説や新聞連載小説となると、まったくの素人であった。その彼が自分から言い出したということは、余程の覚悟があつたのことと推察される。だがそれは、彼自身の思想と実践活動を作品の主人公に具現するという強力な筆法に、かなりな自信をもっていたからであつたらう。

『火の柱』の篠田長二の経歴をみると、木下尚江そのものではないが、彼の思想や活動面を素材とした自伝的色彩の濃い人物として描かれている。篠田長二は、秩父事件の篠田長左衛門（架空の人物ではあるが、井上伝蔵にヒントを得たといわれている。）の遺児として生まれ、キリスト教社会主義者で非戦論者である。そして、同胞新聞の主筆で、廃娼運動の自由廃業で知られ、「基督の社会観」と題して演説し、「地上に建つべき天国に就て、基督の理想」を述べる男——それはまさしく木下尚江である。

かくして、ここに小説家木下尚江と社会主義小説『火の柱』の誕生をみる事ができたのである。そして『火の柱』の成功は、『良人の自白』をはじめ、『靈か肉か』、『乞食』、『墓場』、『労働』、『火宅』などの作品を創出する文学的出発点となつたのである。

# 非公開

## うたかたの記

佐々木 雅 発

越智治雄氏のドイツ便りとも称すべき「うたかたの跡」(「文学」昭四七・十)を拝見した。まさに珠玉の名篇に接したときのよくな爽やかな感銘があった。最近の鷗外学が展開するさまさまの大考証に畏敬を感じつつ、いささかうんざりさせられていた私にとつて、この感銘はまた格別なものであった。ミュンヘンの街々やスタルンベルヒ湖畔、美しい都会と自然に遊び、そこに鷗外の蹤跡を尋ね詩心を追う、いわば幾重にも豊饒な時間を過ごす氏の境涯に大きな羨望を抱きつつ、氏の文章に誘われて、私はいつしかバイエルの青く澄んだ空の下を歩いていく。

ところで、「うたかたの記」といえば、私には前から気になっていた論文があった。越智氏も今度の論文の中で引かれてい

る山田晃氏の「鷗外の『伝説』——『うたかたの記』小論——」(「古典と現代」昭四六・五)である。なぜ気になっていったのか、——その理由は私事にわたって恐縮なのだが、これを書かないと論が進まないので御勘弁いただきたい。

越智氏が山田氏の論文に言及されたのは今回がはじめてではない。すでに氏は「国文学」(昭四六・十)の「学界時評」においてこの論文に触れられている。ところでその折氏は、山田氏の論文とともに、私の『破戒』私稿——自立への道——という拙い論考にも寸評を加えてくださったのである。

越智氏はそので、△近代日本の芸術家像といった点で共通して触れた二論があった▽と前置きして、まず山田氏の論文につ

いては、その△最もユニークな点は、「巨勢はマリイ(中略)の実像を失わざるを得なかった。そしてその代償として彼が得たものは、彼女の『空像』であり、「美としての永生」を獲得した以上、それは芸術家たる彼にとつて勝利のあかし」だったとするとところである▽と要約し、しかしながら△「空像」は文字どおり絵が未完に終わったということではないかという別の論点への考慮を望みたい▽と評されたのである。続いて私の論文については、△「破戒」の原理を、「体制と関わる価値観を峻拒し、自らの手で自らの内に、それを超絶した普遍的な価値——(中略)『自立』の世界を實現すること」にみようとする▽と要約し、△それは丑松論であるとともに、氏がそこに藤村像を重ねようとしていることは疑いがあるまい▽と指摘し、それが△日常性から「完璧な一瞬」としての『生』の絶対性を救いだす」という四十三年に発表された『それから』論における漱石像とどうしても私には重なる点が気になる▽と評されたのである。

私に関していえば、私はこれを読んだとき文字通り虚を衝かれた感じがした。「破戒」論については、私は小諸から上京して

くる時期、藤村が行った「筆を執る労働者」という自己規定に示された清新な精神の高揚を、むしろいわば人生主義的に論じてみたかったのだが……。

たしかに「それから」論において、私は漱石の「書く」という行為を、彼が目前に見た虚妄なる日常性の淵に真実の生を架橋せんとする絶対の行為であったと捉え、そのためにこそ漱石には、代助が自足した生活を放棄して三千代への愛に没入してゆくという虚構が必須であったと考えた。だから私は代助が三千代に再会し、愛を告白し、しかも結末において狂気に見まわれる、その結末における狂気をも含めてすべての過程に、漱石の「書く」という行為がかけられていたと理解したのである。だがこのときも越智氏から、こういう論点からすると「雨」においても「心」においても、つまり漱石の全作家行程を同じように論じなければならぬのではないかという痛い御批判をいただいたのである。私にはこの御批判に答える術がなかった。かなり気に入った論点ではあったが、私はこの論点の未熟さを恥じ、ひとまずその場を退いたのである。私が藤村の「自立への道」を人生主義的に論じようとしたのは、実はこ

のためであったといつてよい。しかしそこにも、いわば聖なる世界を一瞬天空に輝かせることによって、このうつつ世を超える芸術家の自立の論理を重ねていたとは——私は正直ないうて驚いたのである。

さて、こうしたことがあったので、私には山田氏に向けられた越智氏の批判が、まさに自分のことのように痛かったのである。もちろん自分の問題を山田氏に於てはめてみるなどは、山田氏に失礼であるし御迷惑でもあらうが、しかし問題はかなり近くにあるらしい。

雨もよいの空の下、マリイと巨勢を乗せた馬車は、スタルンベルと湖畔を疾駆する。二人はまさしく至福の時間を生きているのだ。そしておそらくこの時間——鷗外の心のおくがに息づく近代西欧とともにあるこの時間、いやなづくくもない憧憬とともにあるこの時間を生きたことこそ、鷗外の夢であったにちがいない。思うにこのことに關するかぎり、御二人の意見は重なっているのである。

だが両氏は、山田氏がマリイの「実像を失」うことを代償として巨勢は「空像」を得る、つまり巨勢はその彩管によってマリイを「美としての永生」の中に封じこめた

と書かれた(多分そこに山田氏は、鷗外もまた「書く」ことによって、その夢を小説の中に封じこめたと言わんとしているのではないか)のに対し、越智氏が「空像」とは「画そのものの未完成」を指しているのではないかと書かれたことによって左右に別れる。たしかに結末において巨勢は、『ロオレイ』の図の下に跪くまでのみである。彼は「未成の人物」を描く機を失い、中心となる部分に空白を止めた画布だけが彼に残る。越智氏は続けて、△巨勢は二重に最も美しいものを喪失した。そして多分美しいものから距てられたまま彼は生きなければならぬ。ここに示されているものは疑いもなく鷗外の帰国後の鋭い認識であつて、情熱の陶酔の代わりに彼が引きうけているのは日本の重く長い日常であつた▽(うたかたの跡)と書かれる。いつもながらの深い読みといわなければならぬ。

だが、「空像」は「未完」の意味であるとしても、その前に跪くまる巨勢にとつてマリイは「空像」のままになお生きつづけていたのではないかという論点もあるのではないか。むしろ「未完」であるがゆえに刻々に命を吹きこまれるものとしてマリイは永生ではないか。巨勢はマリイと共有し

たあの至福の時間を反芻する。まさにその  
 持続の中に、巨勢の「まことの我」はかけ  
 られているのだ——というのが、お二人の  
 論を読みつつ確認した私の意見であった。

越智氏の鋭い視線は、作品の内部ですら  
 醒めた鷗外を見すえている。すでに鷗外に  
 バイエルンの日々は遠い。日本の重く長い  
 日常、その繰りかえされる時間、既知の時  
 間を生きる鷗外の苦い認識——△その認識  
 の縁取りの中であの日々は輝きを放ってい  
 たに違いない▽と氏は言われる。しかしこ  
 の言葉を噛みしめながらも、なお、だから  
 こそ鷗外にとつて小説を書くという時間  
 は、すくなくとも書きつづけるかぎりは、  
 みはてぬ世界、未知の世界に飛翔する時間  
 でなければならなかったと考えられない  
 か。そしてこのことに山田氏の言われる  
 △作者森鷗外のひそかな決意▽が潜んでい  
 るのではなからうか。結末における巨勢の  
 狂気は、そこに鷗外の苦い認識が託されて  
 いるというよりも、むしろこの鷗外の「決  
 意」こそが、託されていると私には感ぜら  
 れるのだが……。

はたしてこういう論点が成立しうるかど  
 うか私には実のところおぼつかない。しか  
 し、ただ時に、美しい音楽のように、なづ

くべくもない憧憬を追って疾走する作家の  
 精神の軌跡そのままの、そんな作品があつ

ても不思議ではないような気がする次第で  
 ある。

**非公開**

**非公開**

**非公開**

**非公開**

**非公開**

**非公開**

2009 年 10 月 1 日 起 施 行

第 10 條

**非公開**

# 漱石『坑夫』試論

## 坑道と梯子

### I

『坑夫』は、新聞連載中にすでに、否定的批評を受けねばならなかった作品である。まことにつたない宿命の下に生まれたといつてもよい。評者は一代の名編集者・滝田樗蔭である。

(前略)『坑夫』に至つては先生一流の説明が多過ぎて先生作中で一番見劣りするやうだ。尤も九十何回といふ長いものがまだ半分しか出ぬから、これからどうなるか分らぬが、今迄出た丈けで以て欠点の非常に多い作だといふ事はいへやうと思ふ。

(『中央公論』明41・3)

以来『坑夫』評は、結局、この言の埒外に大きくは逃れ出ることができず、漱石の長篇の中では、軽視され続けることとなつた。

この傾向からは、漱石の弟子たちですらも例外ではなかつた。松岡謙は

佐々木 充

『坑夫』は彼の作品として珍らしく平板であつて、普通の意味に於て面白くないものであり、又それ故に世評をわき立たせなかつたものであつたが、  
と云い、僅かに、

であつたが、作家漱石の發展史の上では大きな価値を認めなければならぬのである。つまり『虞美人草』ではロマンチズムを基調とし、『坑夫』ではナチュラリズムを前景に押し出したのである。さうしてこの二つともに漱石の中に内在してゐるのである。(『漱石・人とその芸術』)

と、前作『虞美人草』との態度と方法の違いにその意味付けをし、森田草平は

一番目に立つものは、やはり心理描写である。(略)が其処に何か知らまだ物足りない或物があるのは、先生の心理解剖は飽く迄解剖で、つまり心理状態の説明である。(略)此心理解剖

のあるがために、一層深く読者の心に喰ひ入つて、それを動かすといふやうには出来てゐない。

と、『坑夫』の基本方法を心理解剖と見、それが読者を捲き込まないと批判的なのであるが、同時に、

例の対照を好む先生一流の傾向から、(略) 派手な友禅のやうな『虞美人草』の後で、手織木綿の襦袢のやうな『坑夫』を見せることに興味を持つて、(夏目漱石)

と、やはり『虞美人草』との対比にその意味を求めている。また小宮豊隆は、直接そのよしあしを云うことは避け、

『坑夫』は当時、それほど読者からは、歓迎されなかつたやうに見えた。

と云い、一方でその意義を「一人の人間が経験した事実を、与へられた事実として尊重しつつ、その事実の『精神分析』を試みる」ところに見出しつつ、

爾後の小説の文体を規定する——その意味で漱石の、爾後の小説の幕をあける役目を勤めてゐる。(漱石の芸術)

と、そのもっとも積極的な意味を、以後の作品の文体的発条としての役割に見ているのであつた。

こうした発言が大きな影響を持たないはずはなかつた。もっとも代表的な否定論は、松村達雄で

この小説だけは、その題材の点からいつても、漱石の作品群中孤立した感が深い。(略) 要するに漱石が他人の話を耳にしただけで、ここまで詳細に念入りな描写が出来る、その想像力

の旺盛さにわれわれはおどろくだけである。所詮は、漱石の小説発展の道程に大きな意義をもつものではない。

だから、われわれは「虞美人草」につづけてただちに「三四郎」の考察に移らう。(夏目漱石「人」作品) (赤門文学会編『夏目漱石』)

と云う。他にも「題材がその資質に合わない点で失敗作である。」(伊藤整『夏目漱石の人』作品)、「これはむろん熟しそこねた失敗作」(片岡良一『漱石の作品』)といった云い方もされている。

だがその一方に、『坑夫』の意義を積極的に認めて評価しているところとする見方が無いではない。もっとも著名な発言は、中村真一郎の『意識の流れ』小説の伝統(『群像』昭26・12)で、

この小説は、一体何を描こうとしているように見えるか、ぼくには、ある異様な心理状態そのものの再現を試みているようにみえる。それを如何に描いているか、体験中の主人公の意識の流れを、可能な限り微細に観察し、分析している。(略)

『坑夫』は「無名」の主人公の、無意識世界探究の物語であり、無償の行為の分析である。それ故、その意識の流れのなかに投影された「現実」は、因果的必然を失つて、「背徳」となり「神秘」となるのである。(略) これは精神の冒険の、最大の振幅にわたつた報告書である。

と云う。

この論の出現の意味は大きかつた。それまでは心理分析とか心理解剖とか精神分析とか云われてきたものが、意識(無意識)世界の

探究と云い直されたのだが、これは単なる云い直しなのではなく、そこには『坑夫』の意味を探るべき、明確な方向性を内包していたのである。ただ『坑夫』に「意識の流れ」を指摘したのは中村が初めてではない。早く、かとう・まさただがその『坑夫』試論（『文学』昭22・4）でこの語を使っていたが、論は『坑夫』に漱石の社会意識を見る論に対する反駁で、中村の論とはまったくねらいが違

う。ともかく、中村論以後の評言は、この二傾向を踏まえてそれを各自の漱石観の中で微妙にその方向性を修正していく試みだったと、一口に云っておいてよいと思う。肯定的に見るにしろ否定的に見るにしろ、問題は作品の意味を、どこに、どんな風に、見出すかである。その意味ではまだ『坑夫』は論じ尽されたとは云い難いのである。

中村説に対しては、『性格』を否定して『意識』にっこうとする主張ではない。」という江藤淳の反論がある（『夏目漱石』）。確かに事の次第は単純ではない。が私は、中村説通りに『坑夫』を意識の流れ小説であるという点で評価するのではないが、そして他方に江藤の反論もあるのであるが、『坑夫』の作品としての最大の問題が、へ人間の意識Vというところに懸っていると思われ、ここから考えを展開してみたいのである。性格とは、どちらかと云えば、人間を外側から見る方法であるのに対し、意識とは内側から人間を見る方法であり、性格を基本的に裏打ちする、より根本的な人間把握だと大まかには考えられるのだが、『坑夫』とは、そういう人間内部の、

外からは容易に窺い見られない層への沈降を、そのモチーフのベースとして持っている作品なのではないかと思うのである。

そう考える理由の一つとして、『夢十夜』をどう理解するかということ私は考えるのである。『夢十夜』が突然の狂い咲きでないことは、最初期の作品『倫敦塔』に徴しても明らかではあるが、にもかかわらず、なぜあの時期にあのような形の作品として発表しなければならなかったのか、そのもっとも直接的な原因は何であったのかを考えると、私には『坑夫』という作品が特別の意味を持つものとして立ち現われて来るように思われるのである。『夢十夜』も長い間埋もれ続けてきた。『坑夫』も余り顧られずに置かれてきた。そうなったのには、何かこの両者に通ずる何か独特なものがあるのではあるまいかと思われするのである。その時へ意識Vという語は私には魅力的である。夢は深層意識の闇の奥をその淵源とするし、坑道は山腹をくり抜いて創世紀前の闇の中に人間を連れ込むものであろう。

そんな風に見えるとき、作品はどんな答えを返してくるか、『坑夫』の世界に入り込んでみなくてはならない。

## II

普通『坑夫』は、そのストーリーの基本をそっくりそのまま荒井某の談話によっていて、作者の手がその結構にほとんど加わっていないというように説明されている。が、実は、そう簡単に云ってしまえないのではないか。私には、やはりこの作品にも、作品構造に

意を用いること多かった漱石の姿が、まぎれもなく発見できると思われる。この作品は、思ったよりも複雑な構造を持っており、上手く仕組まれているので、注意の網の目にかからないでしまうのだ。それは素材の改変というよりは、素材の形は変えずにその内的意味を作者流に変質させてしまうという巧妙な処置なのである。

家出をして当てもなく歩いているうちに、ポン引きにつかまり、鉱山に連れ込まれてしまうという話の基本は、確かに荒井の話のままであるが、『坑夫』は、むしろ、それだけで出来上っているのではない。まずは、すでに周知の、例の人間無性格論と呼ばれてこれまでの『坑夫』論の中心論点となったものがあるのであるが、より作品『坑夫』に即して見るならば、そういう問題を作品が含んでいるという事実よりも、そういう理論を、主人公に語らせながら、その足下からそのような状態を主人公に取らせる方法、云いかえると、移り変わる現実には主人公がその意識を変化させ、その変化する自己をそのままに独白体をもって語るという方法を選んでいるところに、注目しなければならぬのではないかと、私は思う。作品の構造から云えば、すでにここに、主人公の外的世界と、その内部の意識の世界とが、同時に重層して存在するのであり、独白する主人公は、意識の変化を明白には意識してはいないのだから、ここで作者と読者は一種の共犯関係を結んでいるともいえる。また漱石は、談話『坑夫』の作意と自然派伝奇派の交渉で、「現実の事件は済んで、それを後から回顧し、何年か前のことを記憶して書いてる体」を採用したと述べているが、しかし、現に『坑夫』は、その叙述のべー

スをほとんど現在形で貫いていて、やはり回想というよりは独白というべき一種の現在性を持っていることも見逃がされてはならないことだと思う。(こうしたところに、上記中村説の出でくる理由もある。)

このように、意識の変化に添って独白しながら、変化しつつある自己を明確には意識していないという主人公を、もっとも鮮明に示す印は、この作品が最初から最後まで、章とか節とかの区切り——換言すれば語り手の意識の切れ目、ないし、時間の過去と現在との往復——をまったく持たない珍しい形を持っているということである。主人公の意識はただに語られているところの現在の時間に固着して、その瞬間瞬間の自己を語り続けるのである。これは明らかに漱石の構造意識の産物であり、漱石のこの一見ルーズな作品構成は、逆に意図的に主人公の意識世界に読者の眼を集中させることが採用されたものであることを物語るだろう。さきに述べたように、漱石は素材の事実を変更するのではなく、その内的実質を変化させているのである。

以上のことだけでも『坑夫』は荒井某の話のままでというのが粗い云い方だと云うことができるのだが、このような質的变化は、もう一つの層でも発見できると思われる。それも事としては新しいものではないが、例の素材省略の件——つまり、『坑夫』の作意と自然派伝奇派の交渉に漱石が云う「坑夫になる前の話」を採用しなかったということである。というよりは作意の方向に添ってより積極的な形で云うならば、荒井が力点を置いて語った前半部分でなく、

後半の坑夫になる顛末の部分だけをあえて採用したのは、どんな意図が秘められていたのかということである。これは明白に目的意識に添った行為である。作品構造の上にそれが意味を持たないはずがない。漱石はそれを有名な「個人の事情」には相渉りたくなかつたと云う云い方で説明しているわけであるが、これはきわめて消極的な理由表明であつて、もつと積極的・意図的な——作品創造の秘密に関する本質的な理由があるべきはずである。少なくとも採用部分に、漱石の創作への欲望と相映発する何かを、強烈に感じたということがあるはずである。この作がいくら、外的事情に促されて執筆されたとしてもである。素材の選択とは作者の構造作業に外ならないのである。そして問題は、漱石をしてかれを捨てこれを選ばしめたものは何であつたかということである。

一つにはやはり、鉱山に入るといふ珍しい体験とか、ボン引きなるものの特異な面白さとかを云わなくてはなるまい。がもつとも大きいものは、やはり「意識」Vという、漱石のモティーフのベースにあつたものだろうと私は思う。死を心の何処かに思いつつ、ほとんど無意識に歩いている青年が語るものは、前に記したように、彼自身の無意識への旅程なのでもあつた。となれば、自覚的に選び取つたのではなく、何となくそうなつてしまつた鉱山行き、そして遂には八番坑という地底の極みまで下りて行くことになる主人公の姿に、漱石は人間におけるおのが精神の基底・その深奥——当の本人にすら不明にして不確かな闇の中を探る、自己内部の探究・確認というイメージを見出したのではないか。みずから体験したかのよう

に具体的に描かれる坑内の様子は、その時漱石にとつて、不可解・不可思議な限をあちこちに残している人間の「ところ」の内部を意味した。おのれ「の捉え難さば、性格などという外側からの概念化・類型化では把握できないものであり、不規則・不安定な精神活動の連続的不連続・不連続的連続の軌跡をどう読み取るかということになる。それは洞窟の闇の中を手まさぐりしつつ行くという比喩的イメージでリアルに捉えられるのではないか。

こうして、一見確かに、素材そのままで安易な素材依拠とも思われるものが、質的な変化を与えられることによつて、はつきりと作者独自の構築物に變つたのであつた。それはちょうど技たくみな手品師が、高難度の技を見物人にはそれと思わずに、易々と演じてみせるのと似ていると云えようか。

### III

周知のように、素材のうち漱石が採用しなかつた「個人の事情」の部分は捨て去られて今見ることはできないが、直接利用した部分は全集に収められて残っている。基本的なプロットは上に述べたように素材を大きく逸脱はしないので、これまで、素材メモと作品との細かな比較対照はほとんどなされていまいとも良い。管見に入つたのは、木幡瑞枝氏の「敗北者——「坑夫」と漱石」(『実証文学』第19号昭38・6)で、作品末尾を素材メモと比較され、漱石における「孤絶者」造型という問題を引き出してきておられる仕事のみであつた。私もまず、素材メモと作品の読み合せをしてみて、そこから、上

に述べてきた私見の裏付を得てみたいと思う。

まず眼につくのは、先に触れたように『坑夫』を論ずるとき誰もが指摘する、主人公の独白による自己内部の説明が大量に付け加えられているということである。特に作の前半、鉱山に着くまでの道中は、素材メモは非常に簡単で、ほとんど順路表にも等しく、まさにメモという外はないのであるが、作品ではこの内部説明が作品の主軸をなしている。が、これが重要なのは、中村説風に、 $\wedge$ 意識の流れ $\vee$ 小説風であるということだけにかかっているのではなく、やはりその内容であろうと思う。意識の変貌していく有様であろうと思う。特に私の眼をひくのは、開巻直後から続く部分—— $\wedge$ 私 $\vee$ の眼の前に霧が立ちこめていて自分はその中に迷い込んでいく、というようなことを語っている箇所である。特徴的な表現をピックアップして記述されている順序に添って並べてみると、それはこんな具合になる。

(1) 顔の先一間四方がぼうとして何だか焼け損なつた写真の様に曇つてゐる。しかも此の曇つたものが、いつ晴れると云ふものもなく、只漠然と際限もなく行手に広がつてゐる。

(2) 抜け出さうとしたつて抜け出せないのは知れ切つてゐる。

(3) 此の漠々のうちへ——命のあらん限り広がつてゐる此の漠々のうちへ——自分はふらく迷ひ込むのだから心細い。

(4) 生涯片付かない不安の中を歩いて行くんだ。とてもものに曇つたものが、一層段々暗くなつて呉れよばい。暗くなつた所を又暗い方へと踏み出して行つたら、遠からず世界が闇

になつて、自分の眼で自分の身体が見えなくなるだらう。さうなれば気楽なものだ。

(5) 何でも暗い所へ行かなければならないと、只管暗い所を目的に歩き出した許り……………

(6) 只暗い所へ行きたい、行かなくちやならないと思ひながら……………

この変化には注意しなくてはならない。最初は「眼の先一間四方がぼうとして」いるというおのずからな現象（といつても天然現象ではなく心理現象）の記述が、次には「一層段々暗くなつて呉れよばい」といふ、暗さへの希求になり、そうなれば「自分の眼で自分の身体が見えなくなるだらう。さうなれば気楽なものだ。」と思へてき、最後には「只暗い所へ行きたい。行かなくちやならない」という当為に変質しているのである。右の引用に出て来る「不安」という語が素材メモには見えない、重要な語であるとは上記木幡論文の指摘であつてまさにその通りであると同感するものであるが、それとともに、最初の眼の前が霧で暗いという事実の説明が、遂には、行かねばならぬという当為に変つていっているという、そのところがやはり見逃がせぬと私には思える。これは彼の $\wedge$ 無意識 $\vee$ が彼に囁く声に外ならない。先には引用を省いたが、この囁きは「何でも人の居ない所へ行つて、たつた一人で住んで居たい。それが出来なければ一層の事……………」と、 $\wedge$ 死 $\vee$ の翳をもつて誘惑せんとするものである。この真の闇への願望は、 $\wedge$ 自己処罰 $\vee$ の願望といつてよいのではないか。そしてみずからを罰するとは、みずからを

決定的に試みることだと云い直してもよいであろう。それを△私Vの△無意識Vは囁き続けるのである。この心理のサスペンスを、読者たるもの見逃しえないのである。我々は彼を、より霧の濃い方へと、自由に(?) 歩かせてやらねばならぬ。

そうすると次に、もう一つ重要な素材との相違点に触れなければならなくなる。実はそれはすでに越智治雄『三四郎』の青春(『女子学生短期大学部私誌』第9号昭和40.12のち『漱石私誌』角川書店)に指摘されていることであるが、上に順路表などと云ってみたように、素材メモには通過した町の名が刻明に記されているのに、作品ではその一切を見事に省いているということである。越智論文ではその理由を「漱石の関心はひたすら意識に向けられていた」からだと説明されていて、基本的には私もその埒外に立つものではないが、前段との連関で私見を展開すれば、「意識」越智氏が云われるのを一段絞って、△無意識△Vに漱石は注目していると考えてみたいのである。どういうことかと云うと、前の△自己処罰Vという考えに続くのであって、より霧の濃い方へより暗い方へと、今やそのみを願って歩いている△私Vには、見えるのは霧だけ、それも彼の内部に漠々と広がるそれだけなのであり、にもかかわらずそれを凝視しつつ濃い方へと歩かねばならぬ彼の現身が具えている肉眼は、もはや盲ているというより外はないのである。△私Vの視線が伸びるのは、空しく霧の中へのみであり、外界は△私Vにとって存在しないも同然なのである。——地名がすっぱりと削られているのは、△私Vをいま衝き動かしている力が、この△無意識Vの△自己処罰Vの願望だけであるからだ。△私Vは

ちようど、次々と電波に受け渡されて進む自動操縦の飛行機のように、この願望が選ぶ、より暗い処、より霧の濃い処を選んで歩くだけで、そこが現に何という土地であるかは全く関知しないのである。そして漱石の細心さは、ただに地名を作品のおもてから省いたというに止まらない。もう一つ注目すべきは、素材メモには厳然と存在する土地「日光」を完全にネグレクトしてしまっているという事実である。△私Vは日光に相当する町を通らない。これなど、地名は出さずとも、町のたたずまいを記せば、ただちに日光と判つてしまい、それでは他の一切の地名を削つたことの意味が崩れてしまふと考えての処置であろうかと思われる。(とともに、後に、突然日光が出て来るところがあり、その唐突さの効果をも計つての処置であることも重なつてこよう。これについては後に触れる。)

この前半部分では、可能な限り、いわゆる現実とのコンタクトを避け、内部世界にすべてを集めていこうとする策が取られているのだ。後半の△私Vの彷徨を強調する効果をねらっているのである。それゆえに鉦山に向う△私Vは、ポン引きと一緒になつてからも、常に真昼の太陽を浴びないように作られている。たとえば、汽車に乗り込んだ△私Vは(メモでは「瀟車へ乗ル。」とだけ)たちまち下車駅までを寝こむことになつて、いわば闇の世界に閉じ込められるし、寝起きに下車した町で、駅前から一筋道が目路遙かに続いているのを見て呆然と夢見心地になるのは「見ると日はもう傾きかけてゐる。」とあつて、物限に夕刻の気配がしのびよりはじめる時刻になつているのだ。そして山道にかかるともう漆黒の闇の中で、足音

だけでお互を確めるといふことになる。途中一泊し、翌朝また歩きはじめが、その時は雲の中である。(これは素材メモにはない事である。)

こんな風に八私Vは鉾山まで来てしまう。そして、鉾山に着くや心ひそかに考えていた八私Vの、現実の姿としてのジャンボーにたちまち出くわす。八私Vつまりこれが後に曳くものはやはり闇であり、やがてその日も暮れるのである。現実との切り離しは、何か常に霧とか眠りとか夜の闇とか雲とかいふ風なものを置くことによつて処理されているのであり、最初の地名の省略と、このような全体的な処理法とは、作者においてはひと連りのものであるのだ。

これを延長して云えば、こうした作者の構成意識は、この一篇のクライマックスを、何時何処でどの様に実現するかということ、一重にかかわってくることになるのである。それは当然暗さの極まった時と処において、明るさを指向する形で、というように予測されるであろう。八私Vはいよいよ明治末年の原始的な、鶴嘴とカンテラが頼りという坑の中へ——闇の奥へ入って行くのである。

#### IV

翌朝の坑内めぐりも素材メモそのままではない。その後半の素材では金さん、作品では安さんとの出会いとその内容はそのままと云つてよいが、坑内の様子には大きな変化が見える。

そのうちでもっとも重大な変更点は坑内の梯子についてである。

『坑夫』では、梯子は一番深いところにある八番坑へ下りていく

為のものとして存在する。簡単に、入口からそこへ辿り直してみれば、案内人の初さんが「地獄の三丁目」と呼ぶ第一見張所を通り、狭い穴を這い抜け「峻しい坂」を下り、又狭い急勾配の穴を足から抜け、一つの「作事場」にたどりつき、似た様なところを幾度か通過しておおよそ坑内をめぐりやがてスノコを見、そこで改めて「おい、まだ下りられるか」「下りませう。」「ぢや、下り様、其代り少し危ないよ」というやりとりがあつて初さんが先に下りはじめ、それが地底の八番坑へ行く為の、垂直に取りつけられた十五の梯子なのであつた。八番坑に新前は配置されないというし、それから下へ初さんは行こうとはしないから、多分間違ひなく地の底の「作事場」なのである。作品ではここに梯子があるのだ。他のところには見られないのである。どの様に凄いものかを確認してみると

「ぢや、下り様。其代り少し危ないよ」と穩かに同意の意を表した。成程危ない筈だ。九十度の角度で切つ立つた、屏風のような穴を真直に下りるんだから、猿の仕事である。梯子が懸つてる。勾配も何にもない。此方の壁にびつたり食つ附いて、棒を空にぶら下げた様に、覗くと端が見えかねる。どこ迄続いているんだか、どこで縛りつけてあるんだか、丸で分らない。(略)

梯子段の数字は明かに記憶してゐた。丁度十五あつた。

この通りにメモがあるわけではないが、梯子のかかり方に変更は加えられてはいない。現実はこの通りで漱石風に表現され直しているのである。ただし、事実はこのような梯子がどうもこの八番坑へ下るところだけではなく、もっとあちこちに設置してあつたようであ

ることだ。それが漱石の手にかかると、この一箇所ということになつてゐるのが問題である。念の為に素材メモを確認してみると、坑口を入り第一見張所へ着きそこから「第一坑へ下ル」ことになる。「這フ所、腰ノ方カラ這入ル所。愛宕ノ坂ノ様ナモノガイクツモアル。」とあつてすぐ続いて次のように記されている。

此度ハ穴倉。アカリヲ用意シロ。先へ下リル。猿ノ様ニ下リル。

槽子ハ真直幅八寸位。階ノ間ハ八寸位。障ルトヌルノスル。ヘナ土がツク。草鞋ノ土へ清水ガ落ちル。

工夫ノ姿ガ遙カニ見えタノガ仕舞ニハ見エナクナツタ。種油ガジイト水デ消えカゝる。

ハシゴガ十五程ツナガル。ト休ム処ガアル。ソコニ工夫ガ待つテ居ル。ソコヲ這フ様ニ先へ這入ルト又穴ニナル。

「下リラレルカ」

「下リマス」

「デハ」

ト又先へ行ク。斯ノ如キ者三四ニシテニ番坑ニツク。

つまり、二番坑へ行くまでに、一ヶ所に梯子が十五くらいつながらつてゐる立て坑を、三箇所か四箇所下りなければならぬのである。この先はどうか。

ニ番坑ヲ下ル。必死ノ苦シミデ八番坑へ下ル。

ホリコガ銅ヲ箕ニ積ンデスノコヘナゲ込ム。

八番坑ハ水ガ腰キリアル。「ナレ、バ此所へクル」ト云フ。

上ル時ノ方ガ困ル。

下ルキハ身ガ前へ出ル。上ル時ハ身ガ後へ落ちル様ニナル。七番へ出タラ呼吸ガ変ニナツテ。ホノホノ様ナイキガ出ル。

「休メ」ト云フ。(略)

「ソウカ。夫ヂヤノロク上ツテヤラウ」

矢張り工夫ノアカリガワカラナクナル。暗クテイやニナル。一層手ヲ放して落ちて死ンデ仕舞フカト思フ。(略) 又思ヒ直シテ上ル。(略)

六番坑へ出ル。(略)

「ドウシタ

」

「メマイガシテ槽子ノ途中デ休ンデ居タ(略)

自分ハ決心ガアルカラ

「スグ上リマセウ」と云フ。工夫はケマンな顔をする。

「デハ上ラウ」

自分ハ夢中デアル。怖イ事モ何モナカツタ。無暗ニ上ル。

三番坑へ上ル。広イ所デ休ム。(略)

「スグ上ガリマセウ」

「馬鹿ニ元氣ダナ」ト妙な顔をする

外のこととは別にして、今は梯子の事にも注目すると、この一連に頻出するハ上ルVハ下ルVは、内容からみな梯子であることがほぼ確かであろう。随所に設置されてゐるのである。

はつきりそうとは書かれてはいないが、現実の梯子は、立て坑で結ばれてゐる各坑(何番坑と呼ばれてゐる)へ上り下りする為に、

立て坑の壁にとりつけられているらしい。現在の鉱山で云えば、立て坑のリフトとか、斜坑の人車に相当するということになる設備である。それが上に見たように『坑夫』では大変単純化され、ただ一箇所、八番坑へ下りる為の関門のごとく存在するものになつてゐるのである。そこへ下りるときの初さんと八私Vのやりとりは素材メモの二番坑へ下りるときのそのままだし、梯子の数も十五と合致しているので、場面としては素材のこの部分を応用したものと判断される。八番坑から上つてくるときの様子は（後に詳細に見ることになるが）いま引用した八番坑から七番坑、そこから六番坑へ上つてくる時のメモ内容を利用している。

こんな風に『坑夫』において坑内の梯子は著るしく事実を外れているのであるが、これはなぜであろうか。

## V

それは『坑夫』において、この梯子の場面がどんな意味をもつて描かれているかを見ればよい。この坑道の窮まりである八番坑と、そこへ下りてゆく垂直の梯子には、特別な意味が作者によつて託されてゐるのである。

八私Vはこの八番坑の關の中に立ち地底の空気を吸つたとき、以前からの願望であつた、例の、霧の濃い所、暗い所の窮みに到達したのであつた。こここそ、八私Vの極点である。そして心身共にその活動がゼロに近づくところであつた。そして、そのほとんどゼロに近いところから、否、と、再び動きはじめる場所でもあつた。つ

まり漱石はこの箇所——坑内でもつとも危険な、もつとも關の濃いここを、八私Vの八死Vから八生Vへの折り返し点とした——つまり、この一篇のクライマックスを構成する場と考えたのである。そうした場面にふさわしく効果を考えたとき、事実では他のところにもあまた設けられてある梯子を消し去り、ここにもある特殊な装置として限定することによつて、相対的にこの梯子の意味は強調され、その場面は八私Vにとつて、決定的な八場Vとなることになつたのであつた。

そしてこの私における内的転換——八死Vへの下降から八生Vへの上昇へという、このクライマックスの構成についてみても、——これこそ当然といふべきだろうが、素材メモと作品との間には著るしい相違がある。

まず素材メモから見ると。前の引用と重なるがポイントが違つたので一部の重複をかまわず引く。

上ル時ノ方ガ困ル。

下ルキハ身ガ前へ出ル。上ル時ハ身ガ後へ落チル様ニナル。

七番へ出タラ呼吸ガ変ニナツテ。ホノホノ様ナイキガ出ル。

「休メ」ト云フ

「自分ハナゼコ、デ働カナケレバナラスカ」ト思フ「モシ人間ラシクシテ居レバコソ。必然ノ結果デアル」。涙グム。

「ドウシタ。苦シイノカ」

「苦シイ」

「到底アシタハ作業モ出来マイ」

「毎日此所迄下ルノデスカ」

否 二番、三番、――

デハ大丈夫デス マギラス。足ノ勞レデス

ドコカラ来テ

東京カラ前橋迄、昨夜モ南京虫

夫ハ氣の毒ダ。モツト休。己ハ遊ビニ行ツテくる

夫から一人で稍二十分許居ル。万感<sup>原</sup>唱集。

ヤガテ来テ

「ドウダ。氣持ハ直ツタカ」

「ソウカ。夫ヂヤノロク上ツテヤラウ」

矢張り工夫ノアカリガワカラナクナル。暗クテイヤニナル。

一層手ヲ放シテ死<sup>原</sup>ンデ仕舞フカト思フ。始メテ浮世ノ苦痛ヲ感

ジタ。又思ヒ直シテ上ル。(日光ガ出タ。ドウセ死ヌナラ。日光

ガアル。コンナ蕃生ノ様ナ人間ノ所デト思ヒ直シテ猛進シタ。

六番坑へ出ル。工夫ガ待ツテ居タ。アマリ遅イカラ死<sup>原</sup>ンダカ

ト思ツテモヂくシ「テ」居タ

「ドウシタ

「メマイガシテ<sup>原</sup>櫓子の途中デ休<sup>原</sup>ンデ居タ

『坑夫』では、八番坑を去る為に下りて来た梯子の所まで戻るが  
 ▲私Vは「歩けなくなつた。」のでそれを見て初さんはどこかに遊  
 びに行つてしまふ。(右の素材メモではとにかく七番坑までは上つ  
 て「休メ」ということになり、案内の坑夫はどこかに遊びに行く。)

▲私Vはアテシヨに腰を下してうつけたようになり「身体が動かないから、心も働かないのか、心が居坐りだから、身体が怠けるのか、とにかく、双方相<sup>マ</sup>び合つて、生死の間に彷徨してゐたと見えて、しばらくは万事が不明瞭」という、心気喪失の時間を持つ(これは後に漱石自身が体験する修善寺の大患における▲三十分間の死Vを作品の中であらかじめ経験しているかのようでもある)。「もし此状態が一時間続いたら、自分は一時間の間満足してゐたらう。一日続いたら一日の間満足したに違ない。もし百年続いたにしても、矢張嬉しかつたらう。」がそこで事は新しい展開を示す。

意識を数字であらはずと、平生十のものが、今は五になつて留まつてゐた。それがしばらくすると四になる。三になる。推して行けばいつか一度は零にならなければならぬ。自分は此の経過に連れて淡くなりつゝ変化する嬉しさを自覚してゐた。嬉しさは何処迄行つても嬉しいに違ない。だから理屈から云ふと、意識がどこ迄降<sup>下</sup>つて行かうとも、自分は嬉しいとのみ思つて、満足するより外に道はない筈である。所が段々と競り卸して来て、愈<sup>い</sup>零に近くなつた時、突然として暗中から躍り出した。こいつは死ぬぞと云ふ考へが躍り出した。すぐに続いて、死んぢや大變だと云ふ考へが躍り出した。自分は同時に、轡<sup>し</sup>と眼を開いた。

この部分の前後にまだ独白はあるのだが省略せざるをえない。ともかく、そこへどこからか初さんが戻つていよいよ梯子を上ることになるのであるが、この八番坑の間の只中で一人▲私Vの意識が零に

近くまで絞られていってしまふ部分について、その素材の当該記述がどうなっているのかと云えば、さきに見たように、「自分ハナゼコ、デ働カナケレバナラヌカ」「モシ人間ラシクシテ居レバコソ。必然の結果デアル」という事と他は詳細は避けて「万感唱集」という抽象的な表現だけであった。(また、ちよつと『坑夫』の内容に触れて云つておけば、最初に見た冒頭部分で、ハ私Vは「それが出来なければ一層の事……」と心のどこかでハ死Vを考えていたのであるが、彷徨の極点ともいふべき八番坑の間にあってハ零Vハ死Vが躍り出したとき、にもかかわらず「大変だ」と思つて「睨と眼を開」けずにいられたかつたという事も確かめておく必要がある。)

そしていよいよ梯子を上りはじめるが、それは「下りる時には、胸から上が比較的前へ出るんで、……然し上りになると、全く反対で、稍ともすると、身が後へ反れる。」云々、と素材を利用した記述があり、その途中で立往生してしまふことになる(さきの素材メモでは七番坑から上へ行く梯子の途中であつたが)。

梯子を一つ片附けるのは容易の事ではない。しかも夫が十五ある。初さんは、とつくの昔に消えてなくなつた。手を離しさえすれば真暗闇に逆落しになる。離すまいとすれば肩が抜ける許りだ。自分は七番目の梯子の途中で火焰の様な息を吹きながら、つくづく労働の困難を感じた。さうして熱い涙で眼が一杯になつた。(略)自分は齒を喰ひ締つて、両手で握つた段木を二三度揺り動かした。無論動きやしない。一層の事、手を離しちまはうかしらん。逆さに落ちて頭から先へ碎ける方が、早く

片が附いていゝ。とむらむらと死ぬ気が起つた。梯子の下で坐つて居たときには、「死んぢや大変だ」と眼を開いたのに、梯子の途中ではまた急転して「一層の事、手を離しちまはうかしらん」になるのである。

所がいざ死なうとして、手を離しかけた時に、又妙な精神作用を承当した。

目まぐるしい心の変転である。

——愈死んぢまへと思つて、体を心持後へ引いて、手の握をゆるめかけた時に、どうせ死ぬなら、此处で死んだつて済まない。待て待て、出でから華嚴の瀑へ行けと云ふ号令——号令は変だが、全く号令のやうなものが頭の中に響き渡つた。ゆるめかけた手が自然と緊つた。曇つた眼が、急に明かくなつた。カンテラが燃えてゐる。仰向くと、泥で濡れた梯子段が、暗い中迄続いてゐる。(略)梯子の先には坑が続いてゐる。坑の先には太陽が照り渡つてゐる。広い野がある、高い山がある。野と山を越して行けば華嚴の瀑がある。——どうあつても登らなければならぬ。

先に見たように素材メモは「始メテ浮世ノ苦痛ヲ感ジタ」という簡単な一行で主人公の心理が説明されているだけだし、思い直す理由も「コンナ蓄生ノ様ナ人間ノ所デ」死んでたまるかという考えにすぎない。漱石は僅かな時間に継起するハ私Vの心の激しい揺れを、人間内部の、自我の真実の声による転換——かならずしも適切ではないが、ハ回心Vとでも呼ぶべきものとして考へていることは確

かなことである。さきに、作品のクライマックスとこの部分と呼んでおいたのは、このような内容をこの入場Vが持つているからであった。

## VI

△私Vの△回心Vは、八番坑の闇の底とそこにかかっている長く垂直に伸びた梯子の途中と、つまり孤独の極みにおいて惹起した。「暗中に正覚をうる」という語句を想起してよいであろう。坑道の奥の暗黒、そこに垂れ下った梯子に身を托して、△我在りVという感覚だけが、自己の存在を知る唯一のものであるとき、人間は虚空に抛り出された存在という外はない。△我在らずVと感覚すれば、確かに我は無と化すであろう。

漱石が荒井の話の後半だけをもって作品を構想したその真のねらいは、△無意識Vの底から、まさに「暗中から躍り出」すように湧き出す自我の諸相の、その最後のものを捉えるのに、この坑道の底、そこを隙間なく埋める闇の気配、闇を貫いてかかるとも凄まじい梯子、それらの魅力を如何ともしがたかったからではないか。坑道とは洞窟であり、そして虚空であり、意識下の世界なのであった。梯子はアポリアに外ならなかった。△私Vがそこで究極に掴むもの、それが△私Vの真実に外ならない。

ここを上り、△私Vは素材メモ通り安さんに出会い、その情愛に涙して死の心を翻すのだが、それは「日光」を思った瞬間に、すでに萌していたことである。日光とは地名であるとともに、闇に對す

る光である。暗に對する明である。さきに見た、一切の地名の省略は、はからずもここで突然「日光」が出てくる効果をもたらした。安さんの温い声は、生へのいわば駄目押しの一撃なのであった。

そして見て来たように、坑内の処々に設置されてあった危険な梯子をたった一つだけ残して他を削り去ったのは、作品としての必然だったわけであるが、その為に現実在る足尾銅山の坑内の様子は、大きく改変されてしまった。いふなればその巨大なスケール、その危険度、その労働条件の悪さ、など、そのありのままの姿からは随分遠いものになったと云う外はない。ここにも『坑夫』を、漱石が社会小説的意識から構想したという考え方の、かならずしも正しくないことの理由の一つを見ることができよう。

## VII

以上のように『坑夫』を見ることが出来るとして、また我々が『坑夫』に感ずる、何か物足りなさ、不満足感の胚胎するもの、このクライマックスの部分にあるのではないか。その空間的設定にではなく、その時間的設定に私は不満を持つ。

『坑夫』はみてきたように、一種△さまよえる人Vの、自己の真実発見のものがたり、おのれという不確かな不安心なものの本体を求める主人公の姿を描く作品と考えるとき、そのクライマックスを構成する時間と空間は、その重量を十分に担い支えるだけのものではない。そして私は、その空間的設定は非常に成功していると思うのであるが、時間的設定が脆弱だと云わざるをえない。

一口に云えば、△私Vはもっと長い時間を地底の闇の中で生きてみなければならなかったのではないかと思うのである。たった一度の、それも見学といつてもいい坑内めぐりでたちまち決定的な事が起るといふのは、何としても手軽の感をまぬがれ難いのではないか。むろんそこには、旅の疲労と前夜の睡眠不足、そして後に判明する病氣の影響等の身体的条件があつて、それが精神に大きく働きかけたということがあつてもなお、手早くピリオドを打つてしまつたという趣きは消し難い。△私Vは重ねて幾度も闇に分け入り、そこで自問自答をくり返し続けなければならなかったのではないか。その果てにはじめて、「暗中から躍り出」すものの重さが、読者によりも強く実感されることになつたのではあるまいか。またその時、それははじめて△回心Vという語の重量を支えうるだけの実質を持つことになつたのではなからうか。そしてまた漆黒の闇に閉ざされた坑道は、その潜められた眞の姿としての洞窟グロトを、より十分に機能したことになるのではなからうか。

がこの事を、『坑夫』を書き終えた漱石は気づいていたと思われ。しかし漱石は、それを、加筆訂正ないし改稿という形では表現しなかつた。その代りあらわになつた欠落を、他と切り離して純粹にそのこととして取り上げ、新しい作品を構成することで充填した。その新しい作品とは何か。『坑夫』 擱筆後致ヶ月のちに書かれた『夢十夜』だと私は思う。ここでは、暗黒の只中へ躍り入る人間、その中を手まさぐりしつつ歩む人間、闇が持つ属性△永遠性Vと張り合ひながらおのれの眞実を求め続ける人間——その姿が重ね

重ね描かれてゐる。これら『夢十夜』の主人公たちは、『坑夫』の△私Vの分身と考へてもよいものだ。もしくはその変身と考へてもよいものだ。

『坑夫』と『夢十夜』はそれぞれ独立した作品ではあるが、またかく並べ観察することによつて、それぞれが包摂するものを照し合うような關係を持つてゐると私は考へるものである。

\*

たまたま『明星』をくつていたら、その明治四十一年四月号に中島秀連（歌人の中島哀浪）の、次のような詩が載つていた。一篇のモチーフが私の解釈する『坑夫』と類似してゐるだけでなく、その時期もびつたり重なるので興味は倍加するのであるが、今はただ、上述のような『坑夫』解釈の可能性を若干傍から証するものとしてのみ引用しておきたい。

#### 鉦夫

坑なのなか

星夜のけぢめもあらず

ひそやかに心の闇を

かんでらの焰のかげに

力ある腕をあげて

たゆみなく鉦夫ほりゆく

ぶるぶると

をののきぬ。黒きしたたり

鉢の水そびらを打ちて

熱き汗こほりし刹那

疑惑の土の香せまる

安全の網もあやふし

かくてまた

いや深に、冷たき劫の

地にしも黄金の脈

美はしきかげをもとむと

愛執の鶴嘴ふりて

たゆみなく鉢夫ほりゆく

付記 本論は日本近代文学会昭和四十六年度秋季大会（九月二十五・六日  
立命館大学）において発表した『坑夫』と『夢十夜』を基礎に稿を成  
したものである。

## 小杉天外とゾラ

小杉天外といえ、ゾライズムというのが近代日本文学史の通説であり、ゾラから得た「遺伝と環境」の論を最初に小説に取り入れた作家として記憶されている。彼の作家生活は明治、大正、昭和の三代にわたったが、通説のごとく、ゾライズムの作家として文学史に名を留めるに過ぎないのである。その作品も「文学的に」というよりは「文学史的に」研究対象となるだけである。そして、その「文学史的」研究も「ゾライズムと天外」のごときテーマに偏在していたことは前述の理由からすれば当然といえる。その態度は、彼の作品がどの程度ゾラの「遺伝と環境」の論を盛り込んでいるかという、いわば比較研究的立場からの論及に終始して来たのである。

たとえば、明治文学研究の先駆的業績たる岩城準太郎の『明治文学史』（昭和初版）が天外の作品を「ゾラ一流の科学的実験小説」と規定して以来、戦後の代表的論考、すなわち、彼の小説は時期を経るにつれてゾラに接近し行くとした大野茂男氏の「小杉天外—紅葉か

森 英 一

らゾラへ」（昭和27年11月『国語と国文学』）や、時代評を考慮に入れたのみならず、ゾラの作品の「一々との類似点まで明らかにした吉田精一氏の「小杉天外の写実小説」（昭和30年11月刊『自然主義の研究』上巻）に至るまでこのような立場は一貫している。<sup>(1)</sup>それらの成果は大体において一致している。つまり、彼は「遺伝と環境」の論を盛り込んだ小説を書きはしたが、それは手法として学んだに過ぎず、ゾラの科学的事証主義とはかかわりがなかった、その作は人間の内面に目を注がなかったため、必然的に次期自然主義時代には脱落した、と。

このような従来の指摘は一応正しいものとせねばならない。なぜなら、『はつ姿』（昭和33年）以後『長者屋』（昭和41年）に至るまでの作についても「遺伝と環境」の論は示されているからである。しかし、注意すべきはゾラが『実験小説論』（千八百五十年）で述べたことや、永井荷風が『地獄の花』（昭和35年）跋文で主張したごときは数多の回想文のみならず、彼が好んで単行本に附した「はしがき」において

さえも一度も触れていないことである。ここに疑問が残る。また、従来のような視点からはなぜ彼が『はつ姿』や『女夫星』(明33年)にわざわざ〈写実小説〉〈写真小説〉と角書したのか、その理由も解明できないことになる。

一体、彼にとってゾラとは何であつたのか。私達はゾラとの邂逅にさかのぼってみる必要がある。

一

天外とゾラとの出会いは早ければ明治二十五年初頭、すなわち、彼が作家として出発する直前の習作を書きためていた頃にあつたと考えられる。彼の回想文「鷗外・紅葉・正直太夫」(明41年9月『文章世界』)によれば、『柵草子』の熱烈な愛読者であつた彼は〈発行日に来ると待ちかねて本屋へ行き〉、雑誌の発行が遅れ勝ちなので〈まだかまだかと何度も出かけて〉行つたという。この雑誌の二十八号(明25年1月)に鷗外の評論文「エミル・ゾラが没理想」が掲載されており、彼が一読したであろうことは推察できるが、その影響はこの段階ではみることはできない。

それから三年、新進気鋭の諷刺滑稽小説家として注目を集めていた彼は不幸にも二十八年十一月、病を得、一年余の闘病生活を余儀なくされる。病氣回復後、再び筆を執るようになるが、その心中は複雑なものがあつた。『蛇いちご』(明32年4月)序文は〈終日机に對つて一行の文も綴られないことがあつたし、筆を投じて、職を他に求めんかと迷ふたこともある〉と回顧しているが、それは後半の回想

文「写実小説時代」(昭9年8月『國語と國文学』)の次のような一節と合致している。

何かいゝ廻りどころになるものがないかと思ひあぐんでゐた(略) どういう方へ行つていゝのか、いろ／＼考えたりやつてみたりしたのですが、なか／＼わからないので弱つてゐた。

このような懊惱の原因として考えられることは第一に、せつかく得た作家的地位を一年以上のブランクによつて失なつたのではないかという危惧、第二は尾崎紅葉らの描写に不満を覚えながらも独自のものを未だ持ち得ないところから来る焦燥である。

◎曾て私は紅葉などの作を見て、どうしても物足りなく思つて居たことがあつた。それはいつも真先に事柄を持つて来てはその場がありありと浮んで来ない(観察と描写―強き感じから入る―)明41年10月『文章世界』。

◎当時の文芸界の潮流は、描写といふものが、即ち芸術だ、描写の完全が芸術の完全だといふことになつてゐました。それが自分としては甚だあきたらなかつたのです。紅葉の描写なども、自身の調、型にのみ捉はれて書いてゐましたので、自身ではともかく、読む者にとつては浪花節でも聴くやうな調子のものが多かつたのでした。かういふものではあるまい、私はさう思ひました(『魔風恋風』のこと) 大正4年4月『福田文学』。

ほぼ二十年の年月を隔つ右の二文は同様に当時のようすを伝えていとみてよい。すなわち、〈調、型にのみ捉はれ〉〈浪花節でも聴くやうな調子〉の硯友社の描写に不満を覺えた彼は〈その場がありあ

りと浮ぶ描写の工夫をいろいろと試行していたのである。しかし、ここで注意すべきは、当時の談話筆記において（此の頃は言文一致ばかりやつてゐるが、あの方が思想をそっくりそのまま写し出すに適して、文章で書くやうな嘘が少ない）（小説文体と新派作家）明治2年2月『早稲田文学』と述べているが、この（思想）の何たるかを追求せず、関心の的はもっぱら（描写）にあつたといふことである。それは彼が直接間接の利益を受けていた紅葉を意識し、それを乗り越えようとした時に、たとえば『金色夜叉』（明治30年以降）の主題よりもその文章に注目したであろうように、紅葉を抜くには文章の革新以外にないと考えていたに違ひないこととも一致するはずである。後年、紅葉の小説が一番好きだと述べる（正宗白鳥『天外翁と私』昭和26年3月『群像』）彼であり、大野茂男氏の指摘通りに理由は不明だが、（利益）を受けていた彼である。紅葉が偉大だと感ずれば感ずるほど、それを克服しようとしたというのが偽らぬ心理であろう。

そのような時、正に早天の慈雨ともいふべきゾラの出会いとが突然にやつて来る。

或る時ふと本郷の古本屋で「ナナ」を見附けたのです。三十年のことで（略）これだこれだともいふ気持で飛附いて（略）三十年前後の時代には実際真剣に苦しみました。この頃が一番ひどかつたでせうが、その挙句、三十二年に「蛇いちご」を単行した時、漸く自分の行く道が分つて来ました。丁度「ナナ」を読み了つてゐた時で、かう眼先に明りがさして来た様な、本屋も私の本を出して呉れるし、非常に気強く思つた（前記

「写実小説時代」。

およそ四十年も前のことを語つていながら、文章は新鮮である。それだけになおさら暗闇を出て光を得た者のうれしさが伝わつて来る。しかし、ここで英訳版「ナナ」を捲るめくおもいで読了したとしても普通いわれるごとく（性欲による破滅の小説）と感じるよりも、その徹底した描写に驚嘆したと考えるべきである。それは花袋のゾラに対する感想（大6年刊『近代の小説』）などと酷似している。（描写）上のヒントもさることながら、春陽堂の番頭との縁故から著作を刊行できるようになつたことも当時の出版事情からすれば天外にடுத்து意義深いことであつた。<sup>2)</sup>

ところで、引用文中にある（三十二年）という時期を確認しておこう。

三十年発表の十作中、二作は再掲、残り八作は深刻小説めいた作あり、一葉の抒情作品ありで、題材、描写ともゾラの影響は認め難い。三十一年は五作の発表があるが、三作は前年と同趣向、「ばけ柳」は柳浪の（七騎落）に示唆を受けており、「麒麟児」は幼児の心理を巧みに描いている。三十二年になると後述するようにゾラの影響を受けた作品が出て来る（小稿「小杉天外論」『はつ姿』以前の問題）昭和43年9月『国語国文新究』41号。

以上、検討したところから、天外が初めて読んだゾラの作品は「ナナ」であり、それは三十一年以降のことといえるのである。

間もなく彼は「ナナ」と共に熟読反覆数回に及んだ「大地」(Tara)も入手する。

ゾラの「ラ、テリイ」といふ作を読んで何だかパツと眼の開いたやうな心地がした。それはあの作の初めに、百姓が野に出て耕作をして居る光景を叙する処に、その百姓が土地の作物展覧会か何かで貰つた真赤な徽章のやうなもの胸にかけて、何とか馬にかけ声をしながら働いて居るといふやうなことが書いてあつたが、いかにもその場が先づハツキリと浮んで来るやうに書いてあつた。私はそれを読んで非常に嬉しかつた。何か一大発見でもしたやうな心地がして早速自分も試みをやつて見た。それは当時の「文芸倶楽部」に出した「みだれ髪」といふので(略)(前記「観察と描写」)。

「みだれ髪」は三十二年六月号に掲載されているが、ここでもやはりパールバックのそれと同名のこの小説を手にしても秀れた農民文学とは感じていないことに注意すべきである。彼にとつてあくまでも(描写)に関心があつたのである。

このようにゾラの精細な描写にいたく魅了されて行く彼だが、当時、ゾラ以外にも描写についてヒントを得ているのである。それは西洋画からである。前記「写真小説時代」の中で、(新写真を御工夫なさるに就いて一番影響をお受けになつたのは何でしたか)といふ湯地孝氏の質問に答えて天外は次のように述べている。

さうですねえ、私を感じたのは絵ですね。知人に西洋画を沢山もつてある人が居たりして、誰のをといふこともなしにいろいろ見たのですが、まあ、英吉利の人のものが主でした。やはりロセツチなどの頃のものでしたらうか。当時の影響では一番

絵に強く感じました。

ここでいうロセツチとはイギリス十九世紀なかばのラファエル前派運動の中心人物であるが、彼らはラファエル以前に帰つてあくまでも自然を忠実に写さねばならぬと主張した。彼らの絵は多分に宗教的雰囲気を持っていたが、天外がそれを理解しようとしたとも、しえたとも思われぬ。おそらく彼はエヴェレットが背景を描くために樹の葉を拡大鏡をもつて研究したという、あるいはハントがキリストを描くため辛苦を嘗めることもいとわず、二度も東方に旅行したという逸話に代表されるラファエル前派の半面、すなわち自然を忠実に描く点に驚嘆したと考える方が妥当である。木の葉一枚をもゆるがせにしない描写のリアリテイ、それは彼がそれまでに接したことのない絵であり、また前後して読んでいたゾラの筆致と共通するものであつた。ゾラと出会い、芸術の真骨頂ここにあり、と感じた彼はこのラファエル前派の絵に接し、紅葉克服、つまり、文章革新の確信をいよいよ強くしたものと思われる。

このようにして自己の進むべき道は客観描写にあることを発見できた天外は写生文の習作を試みる(小稿「写生文と西洋画」明治30年代の一文「芸相」昭和4年4月「国語国文研究」47号)。そして、それによつて自信の深めた彼は「ナナ」に就いて一女性の生涯を新趣向の連作で描くことを期す。時は三十二年の秋であつた。

天外、作なきこと幾月、近時人の伝ふるを聞く、来る十一月を期して三冊続の一長篇を公にし、以て世に問ふべし。是れ彼が一世一代なりと(略)(時事評論 明32年10月5日刊「太極」)。

## 二

かくして『はつ姿』(明33年8月)の刊行となる。著名な小説なので梗概は略すが、要するに清純な娘お俊が心ならずも妾同様に高利貸に嫁するまでの過程を描いている。人物の配置から筋の運び、冒頭の書き出しに至るまで「ナナ」の敷衍しであり、その意味でゾライズム第一作といえる。しかし、作品の出来栄は(趣向が無理で、支離滅裂V(明33年9月『帝國文学』)とか、八お俊が笠田に汚された後の、その心機の変化の余りに無雑作にあらざりしかV(平尾不孤「写実の意義を論じて」天外君の『初巻』に及ぶ、明33年10月『小天地』)などの不評が示すごとく立派なものとは思われない。天外の意図はこの作品や二か月後に刊行された『女夫星』の出版広告にわざわざ八写実小説V八写真小説Vと角書したことからも知れるように、それまで努めて来た描写法の体現にあつたとみられる。八読者の官能が猶ほ実世間の事に感ずるが如く感ぜしむるを以てわが作の能事足れりとなさんのみVという序文は以上のような観点から理解されるべきである。それは『女夫星』の序文についてもいえることである。すなわち、八どんな妙想があつても、これを實際なるかの如く読者に想はせることが出来なければ、其詩は失敗の作である。即ち、実世間を觀察して養ひ来つた読者の空想に、其詩中の事柄が恰も實際の如く映るのが詩の第一義なのであるVと客観描写の態度を明らかにする。ここでいう八詩Vとは八小説Vと同義に使用しているとみてよい。

このような態度は『はつ姿』の続篇『恋と恋』序文にもみること

ができる。

小説は作家の或空想界に、読者の空想を遊ばしむるものたるに過ぎぬ。其事相の如何なるを問はず、其事相を明に空想する事が出来れば、それで読者は満足しなければならぬ、それで作家は満足しなければならぬのだ。

八空想界Vとか八空想Vなどの語が使用されてはいるが、彼の真意は、客観描写が完全に達せられれば、それで満足しなければならぬ、というところにあつたと考えられる。もちろん何を描写するかというその対象についての彼の意見はここには伺えないのである、その点では彼が越えようとした硯友社文学とほぼ同一線上にあつたとみられるわけである。

しかし、この間にもゾラの作品を相当数渉獵しており、自作に手法として取り入れていることがわかる。ゾラの『ルゴン・マッカール叢書』に倣つて八明治中期の社会図を作る意図があつたV(前記、吉田精一氏かどうかはさておいても、『恋と恋』の続篇『にせ紫』(明37年8月刊)中に家庭教師として登場する円城寺竹代という女性は後述の『はやり唄』に既にその女主人公の妹として登場している)のである。このように他の作品の人物を別作にも使用するのはゾラの用いた手法の一つなのである。一方、八遺伝と環境Vの論も臚氣ながら理解して来たように思われる。

その意味で八淫乱の遺伝Vを持つ女性の姦通に至るまでを描いた『はやり唄』(明35年1月刊)は実験小説第一作といえる。

この作は八遺伝と環境Vの理論を濃厚に示しているのみならず、

部分的にもゾラの『制作』(L. Gervé)や『饗宴』(A. Caré)『大地』の影響があることは吉田精一氏や河内清氏の指摘(ゾラの日本自然主義文学への影響 昭29年『静岡大学文学部研究報告』)通りである。天外のゾラ涉猟が奈辺にあるかを示している。発表当時、非常な評判となり、各種の雑誌、新聞がこれを取り上げたが、決して好評ばかりあつたわけではなく、花袋は外面のみを描いて、読者をしてその内部を想像せしめようと為て居る(『はやり唄』合評 明35年1月20日『太平洋』)と外面描写に過ぎることを鋭く突き、梅沢和軒も内心的変化の描写今少しく精細ならましかば(『天外氏の『はやり唄』明35年2月『明星』)と批評を加えている。これらは本作の欠陥を正当に捉えたものであるが、それだけで一蹴できない可能性を秘めた作品とみられる。この点に関しては別の機会に述べることにしたい。<sup>③</sup>

ところで、この作にも著名な序文がついているが、八遣伝と環境Vに関しての説明でなくて、描写についての態度表明であることにはやはり注意すべきである。

自然は自然である、善でも無い、悪でも無い、美でも無い、醜でも無い、たゞ或時代の、或国の、或人が自然の一角を捉へて、勝手に善悪美醜の名をつけるのだ。小説また境界の自然である、善悪美醜の執に対しても、叙す可し、或は叙す可からずと羈絆せらるゝ理窟は無い、たゞ読者をして、読者の官能が自然界の現象に感觸するが如く、作中の現象を明瞭に空想し得しむればそれで汎山なのだ。

読者の感動する否とは詩人の関する所でない、詩人は、唯

その空想したる物を在のまゝに写す可きのみである、画家、肖像を描くに方り、君の鼻高きに過ぐと云ひて顔に鉤を掛けたら何が出来ようぞ。詩人また其の空想を描写するに臨んでは其の間に一毫の私をも加へてはならぬのだ。

冒頭に善悪の觀念を明確に提示しており、荷風の『地獄の花』(明35年6月)跋文などと照らし合せてみれば注意すべきかも知れないが、全体の論旨は『はつ姿』序文などで述べた描写態度をさらに明確化して、表現の排技巧、客観描写を主張するところにあつたと考えられる。八在のまゝに写す可きのみVというが、作家の八空想したる物Vの何たるかは明らかにされてはいないのである。やはり、この作品でも彼の意図は、たとえ第一章冒頭の部分で、

地の上は地の上で、何処でも家を空にして働きに出たか、田

にも畑にも一面に人影が散ばつて、日光を反射する農具の鉄がびか／＼と動き、温んだ水の中では蛙が唄つてゐる。

と書いているように描写の工夫にあつたように考えられる。

### 三

ともあれ、『はやり唄』によつて一躍、第一線におどり出た天外は檜舞台である『読売新聞』に三十六年二月から『魔風恋風』を連載するに及んで、押しも押されぬ流行作家となつた。当時社会の注目を引き始めた女学生生活をいち早く捉え、それに大学生との恋愛を絡ませて本郷学生街の雰囲気をはなやかに描いたので、学生を中心に大受けをし、八新聞紙は再版を出すといふ新聞紙界の歴史に

嘗てなかつたやうな現象V(前記『魔風恋風』のこと)を引き起こすという具合で、紅葉退社の空白を埋めるといふ期待にみごと応じたのであった。

この作品も主人公の女学生が人生に敗北して行く過程を描き、その原因として妾の子であること、環境の力に勝てなかつたことなどを推測させる。その意味では八遣伝と環境Vの論に従っているかのごとくである。しかし、この点については掲載広告の中で(明36年2月21日)八世間非写実主義者に向つて一大鉄槌を下し、併せて其反省を求むる所あらんとすVと客観描写の態度を明白に示したことや、のちの回想『魔風恋風』のこと(前記)において客観描写の方法として八風俗といふものに忠実でなければならぬVと述べていることからみても、やはり、眼目は客観描写にあつたと考えられる。

作品としての出来栄は読者受けも手伝い、回を重ねるに従つて通俗的な読み物と化して行き、八後半になるに従つて、次第に、以前に柳浪が陥つたと同じやうな、対話で運ぶ弊に陥つて行つたV(花袋『近代の小説』)のである。所詮、『魔風恋風』は大受けはしたが、彼自身の進歩を示すものではなく、後退せしめたものとすら言(4)うる。

以下、豚木が八建築家のような、事件を組み立てる上の恐るべき伎倆を持つているV(明42年4月21日『日記』)と評したことく、秀れた構成力、才に任せた脚色を發揮した小説を彼は発表して行く。『魔風恋風』の次に『読売』に掲載された『コブシ』(明39年3月以降)、経済

界の内面を暴露した『長者星』(明41年9月以降)『闇を行く人』(明44年1月以降)等々がそれである。

『コブシ』は『魔風恋風』の発表とほぼ同じ三十六年春に腹案が成り、ゾラまがいの系図を単行本前篇につけたりして、自ら八一世一代の大作V(明39年3月14日掲載広告)と称した長篇小説である。内容も八遣伝が如何に恐るべきものかを説明するために書かれた、興味本位の医学説明書或は宣伝書V(館岡俊之助氏『自然主義作家ノート』)とみられるほど八遣伝の力Vを強調した作である。その意味ではこれまでの作品中、最もゾラ的といえるのかも知れない。しかし、八遣伝Vはやはり作品の素材として用いられたに過ぎないのであり、彼の主眼は単行本前篇序(明41年7月刊)に八巧に写された物は即ち美であると信ずる。この作も又専ら工夫を描写に凝したVとあるごとく、客観描写にあつたとみるべきである。

この作は病気のための中絶はあつたにしろ、連載期間は足かけ三年にも亘り、彼自ら八筆が後篇に進む頃には(略)嚮きに私の声援者だつた評家の筆からも私は冷笑と嘲罵を聞かねばならなかつたV(昭5年1月刊『明治大正文学全集小杉天外篇』解題)と述べるごとく、文壇的にも無視された格好になつた。彼はかかる八汚辱Vを一新挽回すべく数か月の調査期間を費して、当時としては前人未踏の経済界の内面を暴露した小説を書いた。すなわち、『長者星』である。(6)

これは単行本(明43年6月刊)八巻頭辞Vにあるごとく、大隈重信や島山繁治の紹介によつて政治、経済界の実力者たちを訪問し歩き(掲載広告)明41年9月2日、数か月の調査期間を要したのである。構想

の根底には「金」(Arsena)があり、登場人物・麓の狂った姿を象徴的に描く結末の部分は「獣人」(La Bête Humaine)のそれにみられるごとくゾラのよく用いた手法であるとは諸家の指摘通りである。確かにこの作品は神崎清氏(小杉天外研究)昭7年12月刊『明治文学講座』などのいわれるごとく、<sup>(8)</sup>△何を描いたか▽という意味では注目すべきかも知れないが、△いかに描いたか▽という点からみれば、調査が不徹底なため作爲が目立ち過ぎ、筋の発展に必然性が乏しいなど欠陥が多く、単行本前篇序において、

小説的脚色から脱して、現代実業界の空気を在の儘に写す。筆を執らぬ前は斯る希望であつた。新聞に分載すると、我が意志の弱い為とて、此の最初の試は過半破れてしまつた。

と自ら告白しているように失敗に終わった作品なのである。この序文にみられるごとく彼の客観描写の態度はいよいよ徹底したものとなり、△描写▽のみを目的としている感じを与える。たとえば、この頃の二、三の文章を拾ってみると、

◎私は描写を描いて芸術は無いと信じてゐる。その描写の爲めに永い間苦心し努力して居る。如何に描写したら、読者の前に活躍せしむることが出来やうかと、唯それのみに苦心して居る(『芸術は技巧・自然は理想』明41年11月『文章世界』)。

◎私の主義は描写が主である。性格なり、生活なり、ステージなりを人生の実相として現はすにある(『文体について』明42年1月同右誌)。

◎自分の筆を以つて、此の生きた人生、人間、乃至自然を写す

と云ふことに非常なる興味を感ずる、そして如何にもそれが如く写された時ぐらゐ作家に取つて大なる喜びと慰藉になるものはない(略)私は好く写された小説が成巧に近いと思ふ、作家としての自分が書いたものが、好く写されて居ると云ふことは大なる誇りでもあるし、及作家としての成巧でもあるのだ(何故に小説を書かど大3年7月19日『秋田魁新報』)

このように述べている。

『長者星』以後、彼は自ら主宰した『無名通信』(明42年4月創刊)に二、三の小説を載せるが、問題とするに足りず、『闇を行く人』は完全に通俗小説と化してしまつてゐる。そして明治期最後の歴史小説『伊豆の頼朝』(明44年9月以降)を発表して以後は文壇の主流から完全にはずれて行く。<sup>(9)</sup>

#### 四

以上、ゾラとの邂逅にまでさかのぼつてみて来たわけだが、その結果、天外にとつてゾラとは何であつたのか、ということが理解できたはずである。

要するにゾラとの出会いは全くの偶然であり、花袋、藤村などとも異なつて、フランスの他の作家、たとえば、ゴンクール、モーパッサン、フローベルなどを読みはしなかつたし、必然性にも欠けていた。そして、ある程度読破したゾラからもその底にある文学精神を学び得たわけではなく、相当程度作品に具現できた△遺伝△と環境▽の理論は手法として取り入れたに過ぎなかつた。彼は頑なと思

えるほど終始一貫してゾラの客観的な緻密な描写に固執していたのである。ハいかにしたら如実に写せるかVということだけを念頭に置いていた彼にとって、その邂逅当時はよかつたとしてもハ文壇を支配する思潮に変化が現はれて来たV（前記『明治大正文学全集』解題）段階に至ってもなお旧態依然であつては取り残されるのも当然といえる。おそらく自然主義期について行けなかつた、かつ周囲からもみなされた理由はそこにある。

それでは彼の客観描写は我が近代日本文学史においてどんな意味を持つのだろうか。

既に見て来たように、対象をハ如実に写すVことを追求した点において文章即文学なりとの紅葉硯友社文学を克服できたかのようにある。しかし、果してそうであつたか。克服を目的としたが、結局は克服できなかったのではないか。対象をハ如実に写すVのではなくて、対象の所持するハ真実Vをハ如実に写すVのであるとの認識すら彼は持っていなかつたのだから、反紅葉を掲げながら、結局はその壁を打破できなかったと判断せざるを得ないのである。

しかし、彼のハ客観描写Vの旗印の副産物として次の事實は功績として認める必要がある。それは、彼が虚飾、文飾の凝らされた紅葉の擬古典的文章を排して、明治三十年以降、二、三を除いて全て口語文体で小説を書いたことである。彼のこの試みは完全に口語化された自然主義文学に至るまでの地均しの役割を立派に果たしたと考えられるのである。彼のような試みがあつたからこそ、花袋も、藤村も、口語文に容易に飛びついて行けたのではなかつたらうか。

天外がハ将来の文体を一致させることについて、風葉、春葉あたりと共に一大貢獻を明治文学に及ぼしたことは、争ふことの出来ない事實であつたVとは『近代の小説』（大正2年2月）の花袋の発言である。

#### 注

(1) しかし、神崎清氏が『写実小説』（昭和9年1月刊改造社版）『日本文学講座』十一巻の中でハ明治文学に於けるゾラの紹介、影響史、ソライズムの發表史V上から一覽表を作製し、その六と七の両方に天外を入れ、ハ具体的描写の方法Vとハ生物学主論Vを学んだとしたのは徳田秋声の意見（諸家・小杉天外論）明41年7月『中央公論』と共に示唆的である。

(2) 然るにその時分は文壇でも門閥とか系統とかハ八釜しい時代で、氏のやうに継子同様な位置に居るものは、なかなか顔出しする事が難しかつたのであるが、春陽堂の番頭助三君の骨折りで遂に出版する事になつた（小説家の出世調べ）明43年10月『無名通信』。

(3) たとえばハ「初姿」「女夫星」等に無き叙景の筆亦佳境に入れるをV（梅沢和軒）という評の持つ意味、本作は地方豪農家を舞台とし、その若主人の妾傭いが妻の奪取の一因となつてゐるが、この題材設定の意味等々ハお考察に値しう。

(4) 本作はハ幽霊の書Vとして她々方々から非難を受けた程多くの、（当時としては）官能描写を含む。これに関して福田清人氏は筑摩書房版『現代日本文学全集56天外界』月報で次のやうに指摘される。すなわち「蒲団」の最も印象的、愛弟子芳子とその家を立ち去つたあと、竹中時雄が彼女の残した蒲団のうすり香をかく場面は『魔風恋風』第四章「其の室」の情景描写に影響されたもので、花袋が『蒲団』を書く時、天外のそういう描写が記憶にあつて、それが『蒲団』に出て来たのではないか、というのである。両者をここに並置するまでもなく、発想の類似していることは肯言される。

ハフェミニズムの立場から見、第一に挙げべきなのは小杉天外氏の諸作であるV（本間久雄氏「明治文学に現はれたフェミニズム」大正15年1月『早稲田文学』）という視点からすれば女主人公初野の生き方は注目されるべきであろう。先行作「つとめ人」（明35年3月『文芸俱樂部』）もやはり親の決めた結婚に反対して上京、勉学に励む女性を登場させている。初野は独立心の強い女性が蓋頭して来る時代の傾向を代表する婦人の一人として描かれているわけである。

(5) 容易にみられない作なので梗概を紹介する——高等商業の学生新庄政男は父亡きあと、豊崎博士邸に下宿する妹と共に家へ再興すべく勉学に励んでゐる。淫乱な血統を持つ実母は男と逃げ、行方が知れない。ある日、豊崎夫人は別荘の厩で馬のお産があつた時、政男に近づくが拒否される。このことが新聞種となるが、夫人は夫の手前、政男から挑まれたのだと偽報する。これがため政男は友人二人の退学という犠牲をとまなう学内ストライキもむなしく退学させられてしまふ。彼ら三人は異国で一旗上げようと渡米を企てる。ところが、政男と将来を口約束してゐる順子の従妹・桃小路多賀子が夫の赴任地から帰国するや、彼は彼女に魅せられてしまふ。彼女も政男に引かれ、二人の仲は一子を設けるまでに進展するが、彼は彼で何かと煩悶することが多い。母が男に逃げられ、せむしの子を抱えて貧困状態にあること、そんな母を許せぬ自分、人妻との恋に対する罪意識、なかなかふんきりのつかない渡米、等々、一度は多賀子との結婚を決心するが、そのことを知つた順子が病死したと聞いてまた悩む日々が続く。酒にすがつて苦しみを紛らわしたりするが、それも習慣化して、半狂人と化する。終にはどうしようもない遺恨性を呪ひ、自刃してしまふのであつた。

(6) これも比較的入手し難い作品なので次に梗概を紹介する——東京築地に店を構ふる石炭商磯釣次郎はブローカー坂見強を利用して坂見の姉婿の東洋紡績株式会社購置願長谷川節三を買取し、石炭の売込みを図つたが、金懸困難となり、破産しそうになる。彼は銀行頭取淺沼長三郎と自分の情婦が関係あるのを利用して淺沼から金を借りさせる。また、東洋紡績社長田宮利兵衛の娘である淺沼夫人の遊蕩の後始末をしてやり、淺沼に近づく。前購置願長の舟橋寛二は全国の紡績会社の間にカルテルを組織しようとして、彼に好意を寄せる淺沼夫人を利用して田宮に近づき、その実現を図らう

とする。カルテルの計画が広まるにつれ、紡績株価は上がるが、彼の陰謀ですぐさま下落する。虚をついた彼は莫大な富を得て東洋紡績の社長となる。しかし、その頃から彼と淺沼は脳に異状を來たし、終に癡は発狂する。夜中、良い鯨豚が通つてゐるんだと言ひながら庭の鏡山を切り出す作樂を続ける彼である。

(7) 小田原在住の天外氏を訪問した事があつたが、その時、氏の机の上に、ゾラの『金』の英訳本の載せられてゐるのを見た(前記『天外翁と私』)。因みに天外の小田原在住は明治三十四年春から四十一年六月までである。

(8) 他にこの作が、当時の諸作品の間にあつてかなり異色を放つておるにもかかわらず、それが当時の文壇において全く無視されたという事実を指摘し、かつ、その事実が物語る意味について考察した論文が橋原英夫氏の『長者星』について(昭31年6月刊『近代日本文学の研究』所収)である。

(9) 『伊豆の頼朝』も实地踏査と創作メモを取るといふ実証的方法では『長者星』に劣らない。天外は小説と云ふ物Vでなく、八単に私の研究報告であるV(明44年9月13日掲載広告)と述べる。これは柳田泉が『歴史小説研究』(新潮社刊『日本文学講座』昭2年)で、八明治歴史小説の恐らく最終の取扱Vであり、八最大最佳のそれの一つVと高評価するまで長い間全く無視されてゐた。『座談会明治文学史』(昭11年岩波書店刊)でも天外の作品中、今日でも読むに耐え得るものはこの作品だけであると発言している。

付記 小稿は昭和四十六年度日本近代文学会秋季大会での発表原稿を礎稿としてゐる(昭四十七・三・二十二)。

# 「乱菊物語」の典拠

## 三 瓶 達 司

### (一)

新潮文庫「乱菊物語」の解説において、山本健吉氏は、この小説が「水滸伝」や「八犬伝」のような東洋的ロマンの系譜の上に立つ小説を構想しながら、その主人公である海龍王やかげろうの君の正体さえ明らかにされないままで、未完に終わったことを嘆き、「このような大胆な小説は、日本に数多い大衆作家の誰一人として試みたものがない。谷崎氏にして始めて創り出すことのできるはずのものである」と言っている。

たしかにこれほどまでに荒唐無稽に幻想的な舞台をくり広げた作品は、日本においては数少ないもの一つであろう。大明国の豪華船が船幽霊によって沈没する場面、そのちの海賊たちの異常な行動、そして最後に小五月祭の華麗な世界とそれに続く颯爽壮快な争闘と騒乱、それらはすべてあやしくも華やかな絵巻物か、豪宕な舞

台装置をもった歌舞伎の舞台を見ようと思いがするのである。

室君かげろうや海龍王を中心とした、主筋となる一連の物語は、まさに歌舞伎の時代物的な構想であり、それに対して上総介と掃部助の京の上臈さがしの脇筋は、いわば世話物といつてもよいであろう。この大時代的な主筋と世話にくだけた脇筋とが巧みに織りなされて、この物語は展開するのである。そしてこの二つの筋を結び付ける役目をしているのが、幻術師幻阿弥であることを思えば、谷崎が、この小説を、東京・大阪の両朝日新聞に発表した時（昭和5年3月14日、「大衆小説」の名を自ら冠したというのもまことに意あつたことである。

もともと谷崎は、小説とは、単純な日常生活をそのまま写すものではなくて、筋の組み立て方を考え、構想の妙を発揮するものだと考えている。谷崎の評論・随筆はあまり多くないが、その中でもいわゆる純粹小説といわれる自然主義的心境小説と、構想に苦勞を重ね

るいわゆる大衆小説との問題については比較的多く論じている。そのうち一番まとまっているのは「饒舌録」(昭和2年2月12日)であろう。いつたい私は近頃悪い癖がついて、自分が創作するにしても他人のものを読むにしても、うそのことでないと思ふ面白くない。事實をそのまま材料にしたものや、さうでなくても写実的なものは、書く気にもならないし、読む気にもならない。身辺雑事や作家の経験をもとにしたもので、イヤ気にならずに、どん／＼引き摺つて行かれるやうな作品はめつたにない。数年前に読んだ永井荷風氏の「雨蕭々」、近松秋江氏の「黒髪」――まあ此の二つが記憶に残つてゐるくらゐなものだ。かう云ふと何か小説は、その話に限る、無いことを有るやうにでつち上げたものではないればならぬ、と、そんな主義でも抱いてゐるやうに取られさうだが、決してさう云ふ次第ではない。事実小説でもいゝものはいゝに違ひないが、たゞ近年の私の趣味が素直なものよりもヒネクレたもの、無邪気なものよりも有邪気なもの、出来るだけ細工のかゝつた入り組んだものを好くやうになつた。此れは或は良くない趣味だと思ふけれども、さうなつて来た以上仕方がないから、まあ当分は此の傾向で進んで行かう。…そこで私は成るべく現代に縁の遠い題材のものを読むことになる。歴史小説か、荒唐無稽な物語か、写実物でも半世紀前の作品か、或は現代を扱つてゐても日本の社会とは非常にかげ離れた西洋のものなら、矢張一種の空想の世界として見る気になれる。とかなりひかえめに言つてあるのだが、それに対して芥川が、

「文藝的な、あまりにも文藝的な」(昭和2年2月7日)において、筋のおもしろさに芸術的価値はないという意味のことを言つたので、谷崎としては、珍らしく筆鋒鋭くそれに反撃を加えるに至つてゐる。

私は不幸にして(芥川氏と)意見を異にするものである。筋の面白さは、云ひ換へれば物の組み立て方、構造の面白さ、建築的の美しさである。此れに芸術的価値がないとは云へない。勿論こればかりが唯一の価値ではないけれども、凡そ文学に於いて構造的美観を最も多量に持ち得るものは小説であると私は信じる。筋の面白さを除外するのは、小説と云ふ形式が持つ特権を捨ててしまふものである。さうして日本の小説に最も欠けてゐるところは、此の構成する力、いろ／＼入り組んだ話の筋を幾何学的に組み立てる才能に在ると思ふ。…一体日本人は文学に限らず何事に就いても、此の方面の能力が乏しいのではなからうか。…沙翁でもゲーテでもトルストイでも、飛び抜けて偉大なもので、大衆文芸ならざるはない。

とまで言つて、日本のすぐれた作品として「大菩薩峠」をあげてゐる。それは、この小説が、創意と品格を持つてゐるからだといふのである。かつて「或る時の日記」(天竺。一)で、明治以後の作家では、紅葉・鏡花・漱石が一番えらい、中にも「紅葉だけは、西洋のどんな偉大な作家の傍へ持つて行つても、小さければ小さいなりに其の光を失はないだらう」といい、「兎に角紅葉が最も及び難し」と云ふ氣を起こさせる」といつた谷崎の小説観は少しも變つていない。文章表現と構想に最も作家としての努力を傾けた紅葉と谷崎は

軌を一にするものである。

この主張は、「大衆文学の流行について」(昭和5・6)、「永井荷風氏の近業について」(昭和6・11、のち「ゆのあとさま」を註と改題)にもべられていて、谷崎文学を一貫して流れているものと考えていい。

この「饒舌録」の書かれた昭和二年前後数年間は、谷崎作品の傑作が続々とあらわれた時で、三年前の大正十三年には「痴人の愛」、翌昭和三年には「卍」と「蓼喰ふ虫」、三年後の昭和五年に「乱菊物語」、次の六年には「吉野葛」「盲目物語」「武州公秘話」というふうで、正に谷崎文学の一つの黄金時代ともいふべき時である。

こうした中で、あえて「大衆小説」と銘うって発表した「乱菊物語」には、作者は十分の自負——ある意味では、「身辺雑事や作家の経験をもとにしたもの」に対する挑戦という気負いがあったと思われる。

ところが、この小説は前編だけで筆が断たれ、後編は書きつがれなかった。山本氏は、その間の事情を、「新聞社側の事情であったのか、それとも多事だった当時の作者の身辺に原因があったのか」(新潮文庫・解説)と説明をしている。

「作者の身辺の原因」とは、いうまでもなく、例の千代子夫人の佐藤春夫への譲渡事件をさすもので、伊藤整氏もそれを原因としているのであるが(新書版全集第十八巻解説)これはすでに「蓼喰ふ虫」に作品化されているし、昭和五年八月十八日付の離縁の「挨拶状」は、いわば形式的な手続きをしたものであって、これが今更作者の側からの中止の理由とは考えられない。

八月十九日付の朝日新聞の報道でも、大きい見出しで、この事をとりあげてはいるが、

因に谷崎・佐藤両氏の問題は古いことで、二人が互に文筆で発表してゐるから、世間ではかなり名高い話で事の起つたのは大正十年から十一年にかけての古いことである。

と、内容的にはこれというセンセーショナルな扱いをしていない。

もしあるとすれば、新聞社側との合意で止めたかもしれないということは考えられる。たとえば、当事者同志は十分に納得し、この記事に付して新聞に発表されている、里見弴・加藤武雄・柳原白蓮の意見がいずれも好意的であったとしても、新聞の編集側へは有形無形の圧力もあったであろうし、谷崎自身も考えざるを得なくなつたであろうということは想像に難くない。譲渡挨拶状の発表が八月十八日であり、前編終了が九月六日なのである。

しかし、ここで思い至ることは、谷崎の前の夕刊連載小説、林和の「遊俠一代男」も「前編終り」であるし、朝刊の細田民樹の「真理の春」もやはり「前編」で終わっている。林のは一〇七回、細田のは一四五回である。しかも林のには、「約束の百回を越したので一旦ここに筆をおく」となっている。これらから見ると、新聞小説は大概百回くらいを目やすにしていたこと、長いものは、何編かに分けていたであろうことが想像される。谷崎の「乱菊物語」は、一四八回になっている。たとえば、あの大長編「大菩薩峠」も、大正二年九月十二日から「都新聞」に連載、翌三年二月九日で一応筆を擱

き、その年八月以降、各紙に連載するという方法をとっている。前述の細田の「真理の春」も翌昭和六年一月から「中央公論」に書き継いでいる。もっとも同じ頃「東京日々」「大阪毎日」に連載されていた、直木三十五の「南国太平記」は、昭和五年六月十二日から翌年の十月十七日まで続いている例もあるから、谷崎級なら、当然もっと書き続けることは可能であつたらうと思われる。

しかも、「乱菊物語」の予告が、三月十四日に出ているが、その中に谷崎が、

この物語は室町將軍十代義植、十一代義澄、十二代義晴の頃に背景にする、戦乱の世の話であるのと、主人公の重なる一人にお菊といふ女性があるのと二つに因んで「乱菊」といふ題をつけた。

と書いている。その肝心の「お菊」はどうとう登場しないでしまった。あきらかに未完である。

谷崎は前編を終えるに当って次のように書いている。

この小説は、非常に長くなりさうなので、こゝらで一旦打ち切ることにしました。他日稿を改めて再び読者に見える時もありませうが、約半歳にわたる間愛読して下さつた方々に深くお礼を申します。

どうもあまり後編に意欲的でない口調だが、中止の理由は、存外この中に語られていたのではないだらうか。

「この小説は、非常に長くなりさうなので」——つまり、はじめに作者の広げた空想の翼はあまりに大きくはばたきすぎたしまったの

ではないか、この翼を破綻なくつづめることに谷崎は自信を失つたし、また興味も失つたのではないか、氣負つてとりかかっただけに、よけい自己の負担を感じたのではないか、そんなふうに思われるのである。翌昭和六年発表の「吉野葛」の終りに、

私の計画した歴史小説は、やゝ材料負けの形でとう／＼書けずにしまった。……

と書いているが、同じことが、「乱菊物語」にもいえるのではないか。いや、「乱菊物語」の失敗を再びくりかえすまいとしたのが、「吉野葛」を生んだのではないか。

「吉野葛」に書いている彼の意図した歴史小説は自天王を中心とするものであつたが、そのために彼が準備した資料は、「上月記」「赤松記」をはじめ、「南山巡狩録」「南方紀伝」「桜雲記」「十津川の記」その他、記録、古文書等「申し分ない」いくらい涉猟されてゐる。

一般に日本歴史のうちでこの時代は比較的人々になじみが薄い。前に応仁の乱を経、後に織田氏のたい頭を控へるこの一期は、来るべき戦国の世のあけぼのであり、地方においてこそ新勢力を築かんとする豪族のぼつ興があるけれども、中央においては特筆すべき英雄も画期的な大事件もない。作者がこの時代に眼をつけたのは、世に頭れない史実や人物を発揚せんがためではなく、作者にとつてやゝ自由なる空想の余地があるからである。だれでも知つてゐることを自分に都合の好いやうに解釈、又は作りかへるのは、古人に対しても今人に対しても氣恥

づかしい次第であるから、割にさういふ拘束の少い舞台で羽根をのばさうといふ訳である。その目的のために作者はなるべく京都や鎌倉の如き中心地を避け、わざと中国の辺すうに世界を選んだ。

徳川時代の戯作者は維盛をすし屋の養子にした。まさかこれほど勇敢にもやれないが、多少は歴史家に叱言をいはれても、首尾よく羽根を伸ばし切れることを望んでゐる。

と、「乱菊物語」の予告の「はしがき」に書いているが、いくら空想の世界に遊ぶといつても、「吉野葛」の例から見ても、多くの資料が集められ、その史実や資料にやはりこだわらずにはいられない傾向がこの文章にも見られるのである。『細雪』回顧」という文章の中で、荷風は長年克明に日記をつけていたが、その荷風が「何年何日に雨が降つてゐないのに雨を降らせたりするやうなことはない」と言っていたことに、深く感じてゐる。谷崎の創作態度もそういうものであった。「吉野葛」に資料としてあがつてゐる「南山巡狩録」以下いずれも、史書としてのいわば原典であつて、単なるのちの学者の書いた歴史を読んで、あとを想像ですますというやうなものではない。もつとも、直木の巧みな小説「関ヶ原」よりも、渡辺世祐の「稿本石田三成」の方に感動すると、『春琴抄』後語」でものべているから、現在の歴史家の物も大いに参考にはしたことがある。ことに、直木のよりも、渡辺のに感動したというのは、きわめて興味あることであつて、これは、おそらく作者が空想ですでに作り上げたものよりも、歴史家の書いた事実の方に、谷崎の心は

大きく傾くのであろう。その事実の上に、自分の空想をうち立てることに、谷崎は創作活動の充足感をもつからであらうと思われる。

「吉野葛」の場合には、歴史小説が書かれずして、かえつてあのような名品を生んだ。(溝江氏は、近代文学鑑賞講座の「吉野葛」声刈」において、前掲のことばは「吉野葛」の話を真実らしく見せるための手法だといつてゐるが、そうではなく「乱菊物語」の失敗から、別の発想を試みたとすべきであらう。拙稿「吉野葛」の構成」目白女短大紀要8号参照)。「乱菊物語」は、その資料のために未完で終つたのである。

私は以下、材料負けをしたほど彼が博搜した資料や、その幻妙に広がる空想の果てにはとても及ばないにしても、いささか彼の掘つたと思われる資料の一部に目を通して、できるならば、私なりの推理の翼をひろげてみようと思つたのである。

## (二)

この物語は、その発端において、まず「撰集抄」に出ている性空上人の話が語られる。「乱菊物語」の本文によると、延喜の頃、天女のような美女「花漆」がここ播州室の津に流れ来たつて、本邦遊女のはじめとなつた。遊女といつても格式高く、人々これを室の長者、室君といつた。この花漆は、実は普賢菩薩の化身であつた。

一方、播磨国書写山の開祖性空上人は、何とかして生身の普賢菩薩を拝みたいと願つてゐた。或る夜の靈夢に、ここから西南に室の津という所があるが、その地の長者、花漆と呼ぶ白拍子こそ普賢菩薩

薩の化身であると、まざまざと夢見たのであった。上人は喜んで彼女に会いに行くと、花漆は上人に酒をすすめ、

周防のみたらしの沢辺に、風のおとづれて、さら波立つやと、あでやかに舞を舞うのであったが、上人が目を閉じて、じっとそれに聞き入っていると、いつしか歌の文句が

法性無漏の大海には、普賢恒順の月、光ほがらかなり

というふうに関え、まぶたの裏には白象に乗った菩薩の姿がありありと浮かぶのである。

ふしぎに思つて目をあけると、やはり白拍子花漆の舞う姿である。上人随喜の涙を流して花漆を拝すると、彼女は白象に乗つて西の空に飛び去った。後世、室君の館のあたりを尾野町というのは、「尾の町」が変つたもので、花漆昇天の際、上人がとらえた白象の尾が切れて残つたあとだという話が引かれてゐる。

「撰集抄」では、この話は次のようになってゐる。「十訓抄」その他にもこの話が入つてゐるが、その話の趣きはほとんどかわりはない。性空は藤原時平の孫、時朝大納言に仕えた侍で仲太の小三郎というものであった。(「今昔物語」巻十二「書写山性空賢人語第卅四」は従四位下橘朝臣義根の子とある。これには以下でのべる「撰集抄」の話は全く見えない。)ある時、主君秘蔵の硯をわつてしまい、その怒りをかうが、主君の子が自分のしわざとかばつてくれたため、己が身は助かつたが、主君の子は、父に首をはねられてしまう。仲太は自分のあやまちの結果生じたことがらの恐ろしさと、幼君の後世を弔うために出家をする、と、まず性空出家の因縁を説く。のち、

上人の見た靈夢の話になるが、その内容は、谷崎のほとんど同じであるが、その中には花漆などという名はあらわれてこないし、歌の文句が、

周防のみたらしの沢辺に風の音づれてさゝら波たつ、やれこと  
つう

法性無漏の大海には普賢恒順の月の光ほがらかも

と多少異つてゐる。結末は、性空が菩薩を拝したのち、この長者は死んでしまつたということになつてゐる。「十訓抄」の話も、ほとんど「撰集抄」とちがつていないが、歌は

周防むろづみの中なるみたらゐに風は吹ねどさゝら浪立

実相無漏の大海に五塵六欲の風はふかねども随縁真如の波たゝ

ぬ時なし

とかなり異つてゐる。

「古事談」では話はずつと簡単に女は神崎の遊女となつてゐるが、歌は「十訓抄」にほぼ同じである。

一体、室の遊女が本邦遊女の濫觴であるということは、江戸時代の「色道大鑑」「好色一代男」などを始めとして、多くの書物に見えるが、それがいつ頃であるかということは記されていない。古く平安中期の大江匡房の「遊女記」(寛治年間一〇八七—一〇九四)には、江口・神崎・蟹島のこと記されていたり、宇多天皇(八六七—九三二)が鳥飼の院に江口の遊女を招いたこと、また道長(九六六—一〇二七)やその子頼通になじみの遊女があつたことなどは諸書にあるのだが、室の津が遊女の濫觴の地であるということは出て来ない。ところが

「播陽名跡志」（江戸初期）や中山太郎氏の「売笑三千年史」（昭和2年、「闇書抄」に中山太郎氏の「日本盲人史」のことが見える）などによると賀茂明神が、平安中期九州の高天原からこの地に降臨した時、遊女を連れて来たのが、本邦女肆の始めで、遊女の寄進によって社殿を修理したりしたために、「乱菊物語」に出てくるように小五月祭に遊女を参加させるものになっているという伝説が記されている。谷崎が「延喜の頃」、花漆と呼ぶ天女のような美女が流れて来、それが「本邦における遊女の濫觴をなしたといはれる」と書いているのは、これらの材料によったとともに、性空が藤原時平の孫に仕えたところから、延喜の頃という時代を測定したものであるのだろう。時平は貞観十三年（871）から、延喜九年（909）までの生存で、延喜は二十一年も続いているから、谷崎の推測は十分に可能なわけである。

さて、この話について、「乱菊物語」では、法然上人に救われた友君、その外宮木・大柄杓・小柄杓という名高い遊女の名が出てくる。法然上人と友君の話は、「法然檢詞」その他で有名な話であるが、宮木以下の遊女の名、また性空上人が白象の尻尾をとらえ、その尾が切れ落ちたので、尾の町（尾野町）という町名が残ったという話、いやそれよりも、本小説の実質的主人公であり、舞台廻しである二寸二分四方の容れ物に収まってしまふ十六畳吊りの羅綾の蚊帳、そのものになる四寸四分の箱に入る八畳吊りの蚊帳の話は、これら巷間に流布している書物には出てこないのである。

谷崎は、「伝説によると」とか「土地に伝はつてゐる口碑によれ

ば」といつているので、取材のため室津へ行った時（昭和5年頃）土地の古老に聞いたたりしたのかもしれないが、少しく目を転じて、その土地の地誌のようなものに目をさらしてみると、（谷崎が地誌に興味をもっていたことは、「私の姓のこと」という随筆の中で、「近江蒲生郡誌」をふと買い求めたこと、「老後の春」で「近江与地誌略」「大津史」などがあげられていることからよく分かる）実はこれらのことは「播磨鑑」、更にさかのぼると「播磨室津追考記」などに記されており、更に、未見で、実在するのかどうか知らないが、「尾の町記」「室遊廊之記」等に記されていると「追考記」にあるのである。「播磨鑑」（宝曆十一年＝七六一、平野庸傳）は「追考記」の記事を多く引用しているので、今、「追考記」について少しく記してみよう。

「追考記」は「天和改元（二六八）三月上流 見宜堂之後学孝穩齊立閑謹誌」「是時文化癸酉春二月書之 東嶮吉松逸」と奥書のある写本で、「第一室津」から始まって三十の章にわかれている。今、ここで問題になるところは、「第二十尾の町」の章で、

昔此津に華漆といふ美女有。先祖何人とも知れず。嘗て遊戯好色をわざとせり。元より所の長なれば室君ともいひしなり。是本朝傾城の権輿といひ伝へ侍る。書写山の性空上人生身の普賢菩薩の尊容を拜せんと折誓し給ひけるにある夜うつつにて童託して曰、室の遊女の長こそ真実の普賢なれとあらたにしめして失給ひぬ。上人おどろき給て、さては崇望の叶ひけるよと悦たまひて御弟子五人伴ひいそぎ此津に来て長の家に入給ふ。遊女

出あひて酒をすゝめ奉らんとてさま／＼まひうたひしに、其声音律にかなふて微妙の法文なり。

上人貴く思召、随喜の心を生じ給ふ処を、遊女たちまちに端巖柔和の普賢と頤はれ、白象に乗て西天にとびさらんとし給ふ。上人名残をおしめ、今暫と象の尾を引きとめられしかば、その尾されて爰にとゞまれり。此故に尾之町と名は侍る也。扱室君の詠ぜられしとぞ此所にいひ伝べし

歌に

花うるしぬる人もなき今宵かな室ありとてまのまればせず  
又金葉集恋の部下に

花うるしこやぬる人のなかりけりあなはらぐろの君のこゝろや  
誠に室君は世にかくれなき遊女にてかく歌にもよまれ、末の世にて名を残されぬ。此所に五ヶの精舎を建立せり。其由来を尋るに、昔唐船此津に船掛りのとき唐人より室君へ四寸四方の箱の内に八畳つりの蚊帳を入れて贈る。室君奇なりとして即禁闕に捧奉れり。その寝美として黄金数千両(播磨鑑・谷崎千両)拝領し其金子を以て菩提のために室津中に五ヶ寺を草創有しと也。其後官城(播磨鑑・谷崎官本)友君・大柄杓(播磨鑑・谷崎大柄杓)・小柄杓などいふ遊女あり。委くは尾之町記・室遊廓之記等にしるし侍れば是に略す。

少し長い引用になつたが、「乱菊物語」の始めに出てくる「口碑」は全部ここに尽くされているのである。そして、花漆が建立したといふ五ヶ寺の名も別の章に、見性寺・浄名寺・大雲寺・正洞院・正

法寺であることが記されている。(現在残っているのは見性寺だけである)

その他、小五月祭のことは「第二明神山」という章に出てゐるし、法然上人と友君のことは「第廿五向灘」の章に出ているのである。

「追考記」に比して、「播磨鑑」の記事はずっと簡略で、小五月祭のことも、法然上人のことも書いてないが、前掲の引用文中で注記したように、遊女の名の表記その他「播磨鑑」と「乱菊物語」は合致するが、「追考記」とは異つてゐることから見ると、どうやら谷崎は「追考記」までさかのぼらず、「播磨鑑」を直接のよりどころとしているように思われる。この見地になつて、更にまた別の材料をさぐつてみることにしよう。

### (三)

「乱菊物語」には、十六首の歌謡、九首の和歌が記されている。まず歌謡の方で出典のはっきりしているものは次のとおりである。

① 周防のみたらしの沢辺に風のおとづれてさゝら波立つや(さゝら波たつ、やれことう)

(撰集抄)

② 法性無漏の大海には普賢恒順の月光ほがらかなり(の) (撰集抄)

③ いとど名の立つ折ふしにたぞや妻戸をきりぎりす(たぞ) (の)

(狂言花子)

④ ここは山かげ森の下、月夜がらすはいつも啼く、しめておよ(およ)

れの、夜は夜中(狂言花子)

⑤ 木幡山路に行きくれて、月を伏見の、草枕(関吟集)

⑥ 難波堀江の葦分け船は、そよやそよろに、袖の濡れそろ(ナナ)

ずさんでいる。(恋)(憂き世)

⑦ 棹のうた、うたに浮世の「とふしを、一とふしを、夕波千

鳥こそそへて、友よびかはす海人をとめ、恨みぞまさる室君の行く舟や慕ふらん、浅妻舟とやらんは、それはあふみの海なれや、我もたつねたつねて、恋しき人にあふみの海山もへだたるや、あぢきなや、浮舟の棹のうたを唄はん、みなれ棹の歌うたはん(閑吟集)

⑧ そよともすれば下萩の、末こそ風やかこつらむ、見しや夢、ありしやうつゝ面影の忘れずながら遠ざかる(憂曲 龍田河恋の二部 (傍注は岩波大系本との異同))

あと八首にはこうした典拠が見当たらない。とりわけいちばん中心になる「裁ち縫はん」から始まる棹の歌の出典が不明である。

裁ち縫はん／裁ち縫はん／衣きし人もなきものを／なに山姫の／布さらすらん

棹のあらし／棹のあらし／長閑にて／日かげも匂ふ／天地のひらけしも／さしおろす／棹のしたよりなるとかや

さる程に／さる程に／春過ぎ夏たけて／秋もすでに暮れ行くや／時雨の雲も重なりて／峰しるたへに降りつもる／越路の雪の深さを

知るやしるしの／知るやしるしの／棹立てゝ／豊とし月の行くすゑを／はかるも棹の／歌うたひて／いざや遊ばん

こゝとてや／こゝとてや／室山かげの神かぐら／加茂の宮居は／幾久し

谷崎はただ「室の津の歌謡として昔から名高い」と書いているだけである。このうち、

裁ち縫はん衣きし人もなきものをなに山姫の布さらすらんは、「古今集」にある伊勢の歌であるが、「裁ち縫はん」が「裁ち縫はぬ」になっている。もちろん棹の歌ではない。

ところが、それが、「播磨鑑」には、「裁ち縫はん」以下五首の棹の歌として、全部のせられているのである。しかし「追考記」にはのっていない。

もつとも、この棹の歌は、大正七年刊の「播磨万宝智恵袋」という本にもものっているが、第三首目の「さる程に」の歌の中、「時雨の雲」が「智恵袋」では「時雨の空」となっていたり、「播磨鑑」は「時雨の雲」その他、初句のリフレインが有ったり無かったり、書きあやまりと思われる異同もあって、この歌謡に関しては、「智恵袋」は、谷崎の作品には、無縁のものと思われる。

次に、和歌の方を見て

家島は名にこそありけれ海原をわが恋きつる妹もあらなくにというのが、「乱菊物語」の「海島記」の章「その三」に出ているが、これを谷崎は北野の天神の歌としている。しかしこれは、「万葉集卷十五」の、「筑紫に廻り来りて海路より京に入らむとし、播磨国の家島に到りし時に作る歌五首」のうちの一つで、作者は不詳である。それを「智恵袋」は「詭人不知」として載せているのに、

「播磨鑑」は、「菅相公」と記している。もともと、そのあとに「万葉三に読人しらすとして結局は宗徳考也。妹もあらなくにと在し也」と注記しているのだが、谷崎は、それによらず、菅相公作という「播磨鑑」のあやまりをそのまま踏襲したのである。もう一つ

うゑおきし誰が家島の山桜春ゆく船の泊りあるらむ

という藤原家隆の歌(主三舞所<sup>三</sup>)が、前の歌のすぐあとに出ているが、これは「播磨鑑」には、そのまま出ているが、「智恵袋」では、

咲きそめし誰が家島の桜花春の行多や舟泊るらん

というふうにかなり異った形で記されているのである。これらの歌は、「追考記」にはすべて記されていない。

これらの点から、「乱菊物語」の出典は、まず「播磨鑑」と推測して間違いないのであるが、もししばらくこの考察を続けてみよう。

歌謡の方では、出典不明五首のうち、棹の歌の出典がわかったので、あとは、「酒はたゞく」「鶯がく」「先づ正月の初夢に」の三首だけになったが、これらの歌謡の歌われている場面からいって作者の自作ではないかと思われる。谷崎は、「老後の春」(昭和32年)でも、自分の家の花見の時、「心に浮かぶものは雅楽の旋律と朗詠や今様や催馬楽の文句である」と言っているくらいで、地唄等の自作もあるし、歌謡を作るくらいことは、きわめて容易なことである。

一方和歌の方は、以上二首のほかは「国歌大観」その他で出典の分かるものは次の二首しかない。

小倉山蔭の庵はむすべども岩せく水のすまれやはする(続後拾遺集 藤原為家)

うつゝには更にも云はず播磨がた夢さき川に流れてもあはん(古今六帖 紀貫之)

ところが、

雲井より下りし松もいつまでかまつ間すくなき枯葉をぞ見る(れても)

別るとてぬるともなしにわが見つる夢前川を誰にかたらん

の二首は、「播磨鑑」を見ると、一は小田某の作かとして、他は忠見(壬生忠見)の歌として出ているし、「智恵袋」にはない)

わが恋は飾磨の裾にあらねどもあひそめてこそこさはしらるれば、「あひそめてこそまさりけれしかまのからの色ならねども」として、藤原道経の歌としてのつているのである。(もともと、この

ように字句をかえると「国歌大観」にも道経の歌としてのつてい

る)かくして作者の自作かと思われるのは、胡蝶のよんだ

城山のさやけき月のかげ故にひかりを添ふる萩の宿かな

ただ一首となった。

かくまで、歌謡・和歌を纏めているのは、この物語に古典的真實性を与える手法と思われるが、それはともかくとして、「乱菊物語」と「播磨鑑」との関係はいよ／＼深いことが知られるであろう。

しかし、更にもう一步考察をすすめてみると、「乱菊物語」は、単に「播磨鑑」だけでなく、「播磨名所巡覧図絵」(文化元年刊)という本にもよっていることが明らかにされるのである。

「乱菊物語」の「小五月」の章のはじめに、抑々此処の明神は

日向国高千穂峰より山城の国二葉山へ遷座まします時、此の地に暫らく垂迹し給ひ斧、鉞、鎌の三刀を以て藤葛を伐り払ひ、港をお開きになり、その後洛北加茂へ光臨なされたのであるから、祭礼の神事の盛んな事は都の葵祭にも劣らない。

とあるが、この縁起は、「播磨鑑」には、

播州揖西郡室津は上古には大キ成藤葛の南山より北嶺にはひまとて海面見へ分さりしを賀茂別雷神日向国高千穂の峰より此国にしはらく影向し玉ふ時、此所名津也と見えなはし玉ひ則使者の神に仰せて斧鉞鎌の三刀をもて彼の藤かつらを悉く伐ひ玉ひしかは程なく名湊となり従來の客船風波の難を凌ぐ便りとなり侍る。

とある。そして「委室追考記に有之今略而大概ヲ記ス」とあるが、「追考記」の「室津」の項はほほこの内容と変りがなく、特に委しいわけではない。ただ「天神山」の章には次のごとく記してある。

抑当社は神代の昔日向国高千穂峯、二上の峯より洛北岡田の賀茂へうつらせ給ふ時、此所に先垂迹し給ふ、其后賀茂より神職三十六人來住すといひ伝ふ。また藤かつらを伐払、湊をひらき給ひし斧鉞鎌の三刀を末社に崇しと也、(その後破壊されたが)只三刀の形を作り神の宝物とす、また御鉾三本有是は智仁勇の三徳を表す何も祭礼のときひとつものにし持てねる也。此所ノ神事を小五月祭といふ賀茂競馬の神事に対していふなり。祭礼をとりおこなふ時は当社の神主鳥居大路下向有て御旅所へ移し

奉る。むかし室君此広前にて歌舞を奏し拍子ことをして神慮をすゝめし事あり、其例として全く祭礼の折からは此津の遊女數十人幣帛を捧て棹の歌をうたふ、大鼓小鼓笛などにてはやす貴見物成事ども也、室君といふ能は此いはれにて作りし也

これから見ると、賀茂明神が、室津にしばらくとどまったのち洛北加茂の地へうつったことなど、「播磨鑑」にはないことで、「乱菊物語」に書かれていることが、「追考記」に記されていることになる。ところがこれが「名所巡覧図会」になると、

神伝日抑当社の御神は日向国高千穂峯二上嶽より洛北二葉山へ遷らせ給ふ其時此地に須叟垂迹し給ひ厥后加茂へ光臨の時神職三十六人來住すといひ伝へりかの藤葛を伐払ひ湊を闕き給ひし斧鉞鎌の三刀をも末社の神と崇めし也此禿倉室町にありしが廢して今知る人なし例祭は小五月祭と称す是加茂競馬の神事に準ずるとかやその時当社の神主上加茂七家の内鳥居大路氏都より下向有て御旅所に移し旧例の祭式あり此神事は例年にはあらず九五ヶ年の間に一度つゝ執行有之又日限も定らず五月下旬なり祭の日は遠近の詣人稻麻のごとく其日の賑ひ云はん方なし町中には家宅を飾り一門知因の來客泊船の旅人爰に集ひかしに群り一津人ならぬ所なし祭日前後九十日許は家々の業を停て祭式の調度のみに罹れり皇都の葵御蔭につゝきて壯麗たる祭式なり

けり  
という記述になる。「乱菊物語」の「二葉山へ遷座」したというのが、「播磨鑑」にも「追考記」にも、その他「智恵袋」「播州めぐりの

「記」など、見ることを得たどの本にも見当らなかつたのが、ここに発見されたのである。またその祭の様が、加茂の競馬に劣らないというのは「追考記」にもあるのだが、「乱菊物語」のように「都の葵祭にも劣らない」というのは他の本では見ることができないが、「巡覧図会」にはそのことも記されている。そのほか小五月祭が七年に一度催されると「乱菊物語」には記しているのが、「巡覧図会」では「五年に一度づゝ」行なわれることなども記されているのである。

#### 更に「乱菊物語」の

祭礼の時の御輿の渡御はその一端にある明神の鼻から船で海上を乗り越えて、他の一端に設けられたお旅所に着き、此処に七日間安置される。有名な小五月の行列といふのは、七日の後に神輿を守護してお旅所から明神の社へ、その弓なりの線を縫ひつゝ町の中を練つて帰るのである。(小五月その二)

侍が一騎、前駆を成して先をひひながら過ぎる。

その後が暫く、しーんとした、神々しい静肅に支配される。つゞいて、錦の絹傘が、ゆるやかに宙に浮びながら、殆ど空間の一点に止まつてゐるやうに見えて、少しづゝ前へ押し出されてくる。

鷹揚な「棹の歌」の合唱と伴奏とは、その絹傘の下から湧いて出るのである。

稚児輪わらわしに、白い千早を着て、緋の大口を穿いた童女が二人、横笛を吹く。次に、同じやうな童女二人鼓を鳴らす。

次に、又童女が二人、太鼓の両側に控へて行く。

次にかげろふ御前が行く。両手に金の幣帛を捧げ、黄金の龍が珠玉を銜へた天冠を戴き、白の水干、緋の大口の下に、きら／＼しい唐綾の衣がかげの皮膚のやうに見える。

発声の婦を先頭に、十二人の傾城を選りすぐつた合唱隊が、二人づゝ二列に並んでかげろふ御前のしりへに従う。此の一隊は皆一様にすべらかしの髪、白の千早、緋の大口の服装で、同じく金の幣帛を捧げる。

十間程の間隔が此の後に置かれた。

再び騎馬の前駆が通る。

次に緋の総を飾つた神馬が二頭。次に御旗、御唐櫃、巫女の一隊、真榊。

素襖の随士數十人、稚児、仕丁等が前後に供奉して、当社加茂明神の神宝、斧、鉞、鎌を捧げて来る。

弓、胡篋、太刀、鉾等の神器がつゞく。

次が神輿。仕丁二十人が此れを舁き、うしろから長柄の傘をさしかける。上加茂七家の一家である鳥居大路氏が、烏帽子狩衣に指貫を穿き、白馬に跨がり、土地の神官、弥宜の一行を率ゐる。再び幣帛、榊、社家の侍、町の宿老。… (小五月その二)

という敘述は、「巡覧図会」の

祭礼行烈の初めには錦蓋をさゝげ、次に此地尾野町のけいせい二人づゝ二列につらなり錦のはかまむらさき帽子囃子ものして棹の歌を謡ふ音頭発声の婦一人又一人は金幣を捧げ頭に天冠水

千大口を十二人の神子これらをのく遊女にて大すべらかに  
加賀笠しらぎ白幣しらぎを捧ぐ

斧鉞鎌の神宝三本の鉾兎童仕丁等は携へて供奉すえほし素襖  
随士數十人弓箭太刀等の神器をさぐ神主加茂大路次に当津の  
桜間岡の二家幣神当所の宿老遊郭の長まで前後左右に列し神前  
には御神来はやしものあり

の記事そのままである。「巡覧図会」には四ページにわたって小  
五月祭の絵が画かれているが、それには、本文に記されていない  
で、「乱菊物語」には書かれている「弓・胡祿・太刀・鉞」などを  
捧げているありさまが詳細に描かれているのである。

それでは、谷崎はこの「巡覧図会」にのみよったのかというところ  
ではなく、前掲の和歌・歌謡の問題は「巡覧図会」では全く解明  
することはできないのである。

これらのことから「乱菊物語」が「播磨鑑」「名所巡覧図会」を  
直接の素材にしていることは、もはや疑いを入れる余地のないこと  
であろう。谷崎の後期の作品には、「吉野萬」にしても「盲目物語」  
にしてもまた「聞書抄」においても、こういう歴史・野史からの取  
材が多いことは、よく人の知るところである。谷崎は、「多小は歴  
史家に叱言をいはれても、首尾よく羽根を伸ばし切れることを望ん  
でいる」と予告に書いても、結局多くの点で典拠になるものをしっ  
かり把握して、その上に自己の幻想を創造したのである。伊藤整  
が、「雪」を例にして

地唄の「雪」の極めて単純な歌詞と「浪花の妓りセキが男に捨

てられて出家した情趣をうたつた曲」といふ短い解説から一つ  
の連想を作り出す。「京美人―ありし日の名妓たちの顔―庵室  
―ちりめん―白い肌―涙―おしろい―袂―紫色―古代紫―茶室  
―孤独―茶釜の音―切炭の香―薰香―一輪の山茶花」そしてそ  
の女性はそのように具体化されて行く。「雪の夜の寒さにふる  
へながら夜着の中で眠りもやらず鐘の聲に耳を澄ましてゐる人  
の、とき／＼そつと涙をぬぐふ縮緬の袂が見え袂の端をつまん  
でゐる指先の白さが見える。(略) 女は起きて経机のやうなも  
のに凭つてゐることもあり、釜を前にして炉のほとりに坐して  
ゐることもある。女の顔や指の白さが見えるとき、何かその白  
さを引き立てゝゐる紫の色が見える。それは時として座布団、  
頭巾、時としては半襟などであるが地質はしほの高いごり／＼  
したちりめんである(略) 多分このような心的操作が、作者を  
駆つて多くの切れ切れな記録や残された和歌などから人間の具  
体性を作り出して行くものと思はれる。(新書版全集第三十七巻解説)  
といっているが、谷崎はやはり永井荷風と同じように「雨が降つて  
ゐないのに雨を降らせたりする」ことはできない作家なのである。

これは研究論文としては蛇足であるが、どうも気がかりなので、  
一、二の点について、私なりの想像の翼を拡げてみることを許され  
たい。

まず、新聞広告に出ている女主人公たるべきお菊であるが、すぐ

頭に浮かぶのは、室津からほど近い姫路の皿屋敷のお菊の話であるが、これは「番町皿屋敷」と同じ内容の話であって、「乱菊物語」とは直接に結びつかない。しかし、お菊の靈魂が、お菊虫となって、寛政七年大流行し害を与えたという話は、谷崎の興味をそそりそうな話である。

またお菊と同様に遂にその正体不明のままに終わっている海龍王についても、次のような臆測をすることはできる。

南朝の北畠親房らが瀬戸内海の家賊をあやつり、その没落後、懐良親王の西下に際して熊野・紀州の家賊衆がこれに協力したことは、史実に示されているが、海龍王の着ている赤地錦の直垂が、まこと「室町將軍ならでは召されぬもの」(「室君」その三)であるならば、室町將軍に対抗するものとして吉野方の武將があえて着するに何のふしぎもない。野村尚吾氏も同様の意見を出している。(全集月報也)

このように考えてみると、「乱菊物語」の翌年発表された「吉野

葛」に書かれている「とう／＼書けずにしまった」歴史小説とも、「乱菊物語」は自らに結び付いてゆくようにも思われるのである。

南朝の武將と海龍王とを結合することは、「江戸時代の戯作者」の行なつた「維盛をすし屋の養子にした」のよりは、まだ史実に近いだろうが、同様に奇想天外な、しかもずっと壮大で、目を見張らせるものであることは間違いない。そのほか、家島群島の「韓荷島」の地名説話となつている、唐土の船が難波して荷物だけが島に流れついたという話は、この物語の舟幽霊の典拠になつていようようにも思われるが、いずれも、まだ私の想像の域を脱していない。

谷崎・芥川・菊池などが作品化している平中と本院の侍従の話の種を暴露する話(「燕」その五)なども、とりあげるとおもしろいのであるが、これは、この物語の世話物的部分に色濃く流れている戯画的要素として、別にとらえてみたいと思つたのでここでは割愛することにした。(昭和46・7・30)

# 真山青果と三好十郎の接点

——『斬られの仙太』発想の源流——

大 西 貢

1

真山青果は、越智治雄が指摘しているごとく、長い間「忘れられた」劇作家であつたかもしれない<sup>1)</sup>。たとえば同時代の正宗白鳥は青果を高く評価した人の一人であつた。しかしそれは『玄朴と長英』などで青果が劇作家として文壇に復帰してからずっと後になつての話である<sup>2)</sup>。極端な酒癖の悪さ、原稿二重売り事件を二度も起こすなど、多くの事情で世の人から聲塵を買い、文壇からは疎外されたまま、新派の座付作者として有能な存在だつたとは言うものの、真の意味で正当な評価がなされない不遇な人であつた事は周知の通りである。吉田精一なども、青果の戯曲に点の辛い人の一人であり、岡本綺堂と青果の戯曲について、次のように述べている。

現代や世相を歴史的時代に仮りて諷刺した作品が綺堂にもないではないが、結局彼の作品は時代の文学意識と相当に隔絶し

た、新しい戯曲ならぬ脚本たるにとどまつたのである。同様に青果の方も文学的であるけれども、結局歌舞伎劇や歌舞伎の芸の根本的革新とはならずして、歌舞伎に一つの新しい味をつけるに止んだ。(『現代日本文学全集』第五六卷・筑摩書房、昭和32年6月「解説」)

それに対して、最近、次第に青果の価値を再認識しようとする気運が生れつつある。藤木宏幸「真山青果の戯曲」<sup>3)</sup>や越智治雄「『玄朴と長英』まで」<sup>4)</sup>もそうだが、「真山青果と劇術の探求」<sup>5)</sup>を書いた尾崎宏次は「日本近代戯曲の一考察」の中で次のように青果の戯曲について問題を提起した。

私たちの近代戯曲は、典型的な人物の思想、感情、行動が、複雑になつてディスプレイするという興奮と批判をもちそこなつたので、そのことから、劇的対立という近代劇の入口の観念を、ただきわめて公式的なものとしかみなくなつたのではないかと思ふのである。対立はカブキ劇における勸善懲惡におきか

えられて、その範囲でしか理解しようとしなかったのではないか。対立概念のつぎに、真実とはなんだろうかという方向へ変わっていくこともなく、したがってグロテスクな現実反映の戯曲ができる時期を持たなかった。その直線的な系譜のなかで、カブキの近くにいた真山青果がロジックの注入を試みたのである。私はその成果を見直さなければならぬと思う。（『古典・近代文学』第八号・有精堂・昭和45年10月）

しかし、尾崎宏次は、まだ具体的に、近代戯曲の中で、誰のいかなる作品に青果のいかなるロジックが注入されたか、影響を与えたかという事については述べていない。

真山青果が近代の戯曲にロジックの注入を試みたという尾崎宏次の説を受けとめて、さらにその問題を発展させようとしたのが、永平和雄の「近代戯曲から現代戯曲へ——戯曲史における『近代』」である。永平和雄はその中で、岸田国士の『チロルの秋』と真山青果の『玄朴と長英』が同じ大正十三年九月に発表された偶然を指摘し、次のように述べる。

岸田国士の「魂の韻律」、青果の「性格対位法」において、日本近代社会と人間の真実をとらえるドラマトウルギーへの道が切りひらかれたのではないか。（略）岸田国士、真山青果という対照的な作家によってあらためて踏み出されたその可能を、より本質的な形で実践することによりその主役を勤めるのは、プロレタリア演劇運動の中から巣立った一群の作家たちであった。（略）近代文学の創造者たちが立ち向かった課題に、

彼らは複雑困難な現代において、政治に傷ついた負の体験に足をとられながら、いどまなければならなかったのではないか。（略）そうした苦闘をもつとも典型的に生き通したのが「斬られの仙太」から「浮標」にいたる三好十郎であり、久保栄・久板栄二郎もまた、それぞれのたたかいを経て「火山灰地」「北東の風」にユニークなドラマトウルギーをつかんだのであった。

（『解説と鑑賞』昭和46年3月）

こうして、真山青果が近代戯曲史の中で果たした役割が、新たに検討されつつあり、青果の価値は今や次第に復権しようとしているのである。しかし、ここでも、永平和雄は真山青果の「性格対位法」や岸田国士の「魂の韻律」が『斬られの仙太』から『浮標』にいたる三好十郎に与えた影響を指摘しながら、それでは青果のどの作品が、いかなる形で十郎の『斬られの仙太』や『浮標』に影響したかという具体的問題には、まだふれていないのである。やはり越智治雄の言う通り、青果の重い足どりが本当に明らかにされているとは言えないようである。

## 2

三好十郎の作品を年代順に読み進めて行く者は、その粘り強さに感銘を受けると同時に、作者が次々と人間の穢い面を反吐のごとく出し続ける暗さにやりきれぬ感情をいだくであろう。それは、大武正人が労作『私の三好十郎伝』（永田書房・昭和43年6月）で見事に解き明かしてくれた通り、三好十郎があまりにも普通の人とは異った境遇で育

つた事によるその影響も考えられるであろう。その言語に絶した異常な成長過程をぬきにして、三好十郎の性格及び芸術観・人生観を考えるわけにはゆかないだろう。三好十郎は「戯曲研究会のノートから」(6)の中で、「作家の精神が最も高く作品の中で昂揚されるのは、彼の心底からの怒りの火が点じられた時のようだ。」また「戯曲は、たいがい、なにものへかの攻撃だ。斬り込みだ。プロテストだ。」と言っている。このような怒りに満ちた攻撃の姿勢と精神が、おそらく、三好十郎の生涯を貫く根本的な態度であり精神であったと考えて間違いないまい。彼の精神内部で怒りの火が消える事は、彼にとって創作意欲を失う事を意味した。そのためか、彼は生涯にわたって、ことさらに、他人と妥協する事を極度に避けようとした形跡がある。

それでは、三好十郎の言う攻撃なり斬り込みが、彼の作品の中で、どのように生かされ表わされているだろうか。その初期、プロレタリア文学者であった頃、彼の作品は、たしかに一つの「プロテスト」になってはいても、誰に対して、何を抗議したらよいのか、具体的な問題や目標が明確でなく、読者を納得させるに足る作品として完成してはなかった感じがする。たとえば、初期の代表作の一つである『疵だらけのお秋』(昭和5年)を見よう。登場人物は、病気で働けない娼婦の沢子、それに娼婦のお秋とその弟——工場で働いていて盲目となった少年、お秋の婚約者となる仲仕の阪井——この阪井もウインチにはさまれて片腕をなくした人物である。こうして、盲目の少年、病気の娼婦、片腕の仲仕などを登場させる事によ

って、暗に読者あるいは観客の同情を求め、作劇上の未熟さを、題材にもたれかかる事で、カバーしようとした安易さがあつたと見るのは、あまりにも酷であろうか。

しかし、全体的に見て、お秋の描き方は、見事に成功したと言えるだろう。「淫売を普通の女になす事は、普通の女を淫売になすことよりも、むづかしい」と指摘し「一度地獄ん中におつこちた者は、神様の手ちや上へ昇れないわ。地獄へ落ちた者同志で助け合つて、這ひ上る外に途は無いんだわ。」と述べる秋子。そこには、不自然さや作り事という感じが全然見られない。あるいは、友達の子をつけ廻す、ならず者の杉山に対して「私達がこんな女であるのは、私達が好きこのんでなつたんだと、お前さん思っているの？」(略)見たかつたら見せてあげるわ。疵だらけで、みじめで、弱い、自分の命を少しづつ切りきざんで、やつとの事で生きている女だわ。——世間では私共のことを何とも言ふがいのよ。(略)私達がいなくなれば、誰かが又私達になるんだもの。」だから自分は娼婦を続けるんだと思いきつて啖呵をきる。こうして、作中におけるお秋の性格だけは、リアリティに富んだ人物として描かれ、終始、生き生きとした感じに満ちている。

それに対して、他の人物の描き方はどうだろう。どう考えても劇を構成する上で、有効に動かしきつているとは言えない。その中で特に、無理をしながらやと愛する初子と結ばれた町田は、その性格があまりにも弱く、劇としての盛り上がりがあり緊張感を作り出すのに失敗している。ならず者の杉山がゆすりに来ると、すぐに乏しい金



理由で転向する事になったのか、その事情を、具体的に詳しく知りたい。それにしても、三好十郎は結果的に『斬られの仙太』を書く事で転向した。そして、さきに述べた通り、この作品を書く過程で、歴史と人間と社会を分析するための武器・道具としてのドラマの論理を体得した。それでは、三好十郎がドラマの論理を何から学んだか。私はそれを真山青果からの影響ではないかと思うのである。

## 3

私は『斬られの仙太』と真山青果の作品の中に、いくつかの共通点を見る。三好十郎が思想的転換をして自分の世界を作る時に、最も多くの影響を受けたのは、真山青果の史劇ではなかっただろうか。即ち、青果のすぐれた史劇の中でも、特に『償金四十万弗』(昭和2年)、『首斬代千両』(昭和5年)、『人斬り以蔵』(昭和8年)、『徳川千姫』(初出未詳)などの作品から強い影響を受けているように思えるのである。以下それらの作品との共通点を実際の作品と比較しながら検討してみたいと思う。

『斬られの仙太』は昭和九年四月にナウカ社から単行出版された。だから、原稿は昭和八年にほぼ完成されていた筈である。しかし、もっと早く完成していたと考える事も出来、たとえば堺誠一郎は『三好十郎』<sup>(8)</sup>の中で「昭和七年に書かれた」とか「この作品が書かれていた昭和七年」と書いているから、昭和七年頃に書き始められ、かなり苦労しながら時間をかけて完成されたものであったかも

知れぬ。青果の『人斬り以蔵』は昭和八年二月に発表されたので、実際にはどの程度の影響があったか、時期的な問題は残るが、内容から見てやはりその影響を無視する訳にゆかないと思う。『徳川千姫』の初出が未詳で、これの影響関係を述べるのは考慮の余地がある。他の作品については年代的に問題がなからう。

『斬られの仙太』の主人公は百姓の仙太郎である。紙幅の関係で詳しく内容を紹介出来ないが、博徒となって見違える程、斬り合いの腕が上達する。腕を見込まれた仙太郎は、天狗党の説得により世直しの大義に心を引かれ、武士を信じて天狗党に参加する。その後の仙太郎の活躍はめざましく、天狗党の一員として働く間に大切な兄を斬る。そのうち、天狗党の運動は組織の指導者層と末端にいる者との間で内輪喧嘩を始めるようになる。最後に指導者側は、士分以下の者まで語らった拳兵だと見られると一揆か単なる暴徒と見られ、全部が死罪か斬罪をまぬがれないからとの理由で、指導者の十人余だけを生き延ばすため、町人百姓から出た同志を殺し処分しようとする。仙太郎は「これまで同志々々と言っておきながら、そんなアコギな方法があるか!」と昂奮する。天狗党は仙太郎を銃でねらう。弾が命中した仙太郎は刀を抜いて狂ったように叫ぶ。

畜生つ! ひ、ひ、人をだましやがつて! き、貴様達それでも男かつ! それでも士かつ! い、い、いや、そ、それが士だ! だましたな! だましたな! 犬畜生つ! (略) 士なんぞ、う、うぬ等の都合さえよければ、ほかの者はどうでもいゝのだつ! ご、ご、御一新だと! 阿呆つ! うぬ等がいゝ

目を見たいための、うぬ等が出世したための御一新だつ！

だましたつ！ だまされたつ！ 犬畜生！ 犬畜生

仙太郎は、わめきもがきながら崖縁まで追いつめられ、同時に、崖を踏みはずして落ちる。必要な間は必要なだけ使って、不要になると容赦なく捨てられる人間（仙太郎）を描くことによって、革命運動ひいては政治にたずさわる者が持つ非情さ残酷さを追求し批判した作品である。

『斬られの仙太』は、三好十郎自身が、プロレタリア文学の運動、あるいは革命運動としての演劇活動に、直接参加する過程でそれらの集団とか活動が持つ内的矛盾を体験して、次第に小笠原克が指摘するごとく「内的必然性の醗酵」をした結果、生れた作であろうと思う。しかし、これは、あくまで想像にすぎない。運動の中でどのような事が実際にあったか、私達は知るすべがないのである。

吉田精一は、前述の通り、青果の戯曲が歌舞伎の芸の根本的革新にならなかつたと言う。尾崎宏次は、青果が近代戯曲にロジックの注入を試みたと言う。私は青果の感覚に古い面があつたかも知れぬと思う。しかし、吉田精一の言うごとく、青果がただ歌舞伎に一つの新しい味をつけただけでなく、近代の戯曲が發展するうえで、もつと別の役割を果たしているのではないかと思う。真山美保は「父のあの日この日」<sup>10</sup>の中で「私が育つ頃、父は激しくマルクス主義に傾倒していた」と思ひ出している。しかし、これも考慮の予地が充分残っており、青果が、いつ、どれだけマルクス主義に傾倒していたか、青果自身が書いたものか、他の証拠らしいものは残っていない

いようである。青果は、性格的にも内部に多くの矛盾を持っていた人だと言われる。かりに、青果がマルクス主義に傾倒していたとすれば、彼なりの方法で、彼の強い生命力を持って、新しい世界をきり拓いて行こうとしていた努力のあらわれではなからうか。

青果には、「政治」は非情なものだ、残酷なものだという、終始一貫した信念のようなものがあつた。それが、ある時には怒みのような形で、また呪いのような形で作品の中に出て来るのが青果の特色である。勿論、青果の考えていた政治は、革命政治運動とは異質のものであつた。政治の犠牲になつた人物の一人として、青果は江藤新平に関心を持ち、その晩年を同情しながら戯曲化している。その中でも、政治の残酷さを表わしたものととして『首斬代千両』が最も著しい特色を持つ。『首斬代千両』とは、裁判長の河野敏鎌が先輩で恩人の江藤新平に死刑（梟し首）の判決を下して賞金千両をもらつたという意味である。大逆を罰するためとの理由で、新法律を適用せず、遡って旧法律を使用し、江藤を除族した上で獄門にかける梟し首を宣告する。異議を申したてようとする江藤に河野が退場を命じ、邏卒が江藤の上に折り重なって取り抑える最後のシーンは印象的である。この作品の中で、青果は、大久保利通に言わせている。

政治は信念だ。自信を失うては政治は成り立たぬ。これが最上最善の意見と信じた以上は、倒れても、死しても、その意見を貫くために邁進しなければならぬ。

この「倒れても、死しても」は、『首斬代千両』の場合、河野敏鎌のごとき醜態極まりない出世亡者を利用する事によって「倒して

も、殺しても」と訂正する必要がある程、作品全体が政治にたずさわる者の持つ非情と残酷さを語っている。また、別に、こうも言わせている。

わたくしは、新日本の建設のためには、新帝国を確立するためには、……断然、決心……親友西郷吉之助を殺さなければなりません。(恣然として落涙) 否、西郷一人ではない。全国百六十万の土族……、封建思想の幽霊を負うている憫れむべき人々を殺して……新しき建設をなすべき大事の時だと考へます。

(略) 吾々はそれ等の憫れむべき階級を……倒し、殺し、その屍を踏み越えて新しき国を樹立しなければなりません。

その他に「政治」の非情さについて、『西郷隆盛の首級』(昭和7年)の中で「おはん達は、政治々々ちふが、政治も一つの欲ぢや、体面だ、見栄だ、おのれの思ふところに人を引き擦らうとする暴力ぢや。」と言うところがあり、あるいは『償金四十万弗』の中では、岡野新助に「然し一國の政治と云ふはみな嘘だ、恐ろしいほどの嘘で固めて平気であるものだ。聞け、聞け、聞け。國の政治を行ふやつほど、恐ろしい酷いこゝろはないのだ。」とも言わせている。政治の嘘とエゴイズム、権力欲の冷酷などは、青果が、これらの作品の中で、最も主張しなかった事であり、青果その人の終生變る事なき信念であったと考えて間違ひなからう。

## 4

『償金四十万弗』と『斬られの仙太』との間に共通点があり、影

響関係があるだろうと考える事には異論があるかもしれない。それは表面的な形の上で何ら共通する点がないように見えるからである。しかし、ドラマの論理、作品の発想法には何処か通じるところがあるように思えて仕方がない。

ここで、廻り道のようにあるが、青果の戯曲の特色である人物の設定のしかたについて説明しておく必要がある。『償金四十万弗』の主人公は、千谷道雄が「真山青果」<sup>(12)</sup>の中で「日本近代文学史上にも特記されるべき的確な描写を得ている。」と言う異常な性格の持主岡野新助である。この作品は生妻事件を題材に、詳しく史料を調査した上で、史実に基きながら作りあげられているが、主人公の岡野新助だけは、作者も言う通り「空想の所産」である。作者は、この作品の目的を「この一篇によりて、些かなりとも、当時は現在思潮の一端に批評を加へ」るところにあったと「あとがき」で説明している。青果には、周知の通り一種の執念とも言ふべき考証癖があった。だから彼は、作品の出来が拙いと言われるのなら納得出来るが、作品の内容が史実と異なると言われたら、それを許す事は出来ぬとよく語つたらしい。それ程までに史実を重視する青果が、史劇の中でよく架空の人物を設定して使うのは何故だろう。

真山青果は、大正八年に独歩の『酒中日記』を、大正十四年には同じく『富岡先生』を脚色している。それまでに『不如帰』『たけくらべ』など座付作者として多くの作品を脚色しているが、大正十四年に『富岡先生』を脚色して以後、主として現代劇・史劇の創作に向い、その後、脚色の仕事は極めて少ない。その経過から推す

に、『酒中日記』や『富岡先生』などを脚色する過程で、彼は作劇手法に自信を持ち得たのではないか。青果にとつて『富岡先生』を脚色した事は、『玄朴と長英』(大正13年)の創作で成功した事と共に記念すべき出来事だったのである。そこで青果は、『玄朴と長英』及び『富岡先生』で成功した同じパターンを少しづつ変形しながら使つて行く事になる。

青果は『酒中日記』の脚色につきて<sup>(13)</sup>の中で「病院に入院中に、独歩全集を枕頭に置いて、幾度それを組んだりほぐしたりして見たか知れぬ」と書いている。そうして彼が原作を組んだりほぐしたりする過程で、原作を舞台にふさわしく再現する手法を考え、次第にその技術を獲得していったものと考えられる。彼は、

脚色も一種の創作でなければならぬ。原作者の隷属者ではない、独立した創作だ。小説作者が紙の上に活字で描いただけの効果を、人を動かして舞台の上に、完全に收穫せねばならない創作家である筈だ。その為めには、別な絵具も使はねばなるまい、又意識して原作者の構図をも取り換へねばなるまい。(略)一人の人物を二人に分けたり原作にない場面や光景をつくつたり、自分ながら大胆過ぎはせぬかと思ふほど大胆に脚色させて貰つた。(略)小説と芝居の約束上、さうする事が最も原作を完全に近く舞台に再現する方法だ(略)

と書いている。原作の構図を取り換へたり、一人の人物を二人に分けたり、原作にない場面や光景を作つたりする事は、青果における歴史そのままと歴史離れを語るものではないだろうか。特に一人の

人物を二人に分ける手法は、史劇の中で架空の人物を設定する事にも通じ、彼が性格対位法を構成するために欠く事の出来ない技術であり、その後の青果の作劇上重要な特色を示すのである。

『富岡先生』を独歩の原作と青果の脚色とで比較するならば、まず、作者と脚色者で作品に対する視点が違ふのである。独歩の意図は富岡先生その人を描くより、小学校長細川の人物とその弱い性格から来る悩みを描く事にある。青果の場合は、細川にはあまり眼がそがれず、富岡先生の、時代にいられぬ、頑固な性格を出す方に重点が置かれている。富岡先生の娘梅子と細川の愛情の問題などは、脚色される過程で原作から遠くへ放置され、その代りに原作にはない政治の問題が取り入れられて、作品が一層緊張感を持つように構成されているのである。こうして、青果戯曲の特色とも言うべき、舞台の上における男女の愛情や濡れ事を極端なまでに排除するストックな作劇法が完成して行く。原作にはない江藤卓文(伊藤博文がモデル)や高槻由一、梅子の姉お種などの人物が、脚色の中には登場するが、それは『償金四十万弗』で岡野新助という架空の人物を設定したと同様、性格の対立を作り出し、作品を躍動的に構成する役割を持つのである。

さきに引用した通り、三好十郎は、作者の心に怒りの火が点じられた時、作者の精神が最も高く作品の中で昂揚されると言つた。また、戯曲は、たいがい何物かへの攻撃であり、斬り込みであり、プロテストだと書いた。そこで青果の『富岡先生』を見ると、三好十郎の言葉通りという感じがする。私は『富岡先生』の系譜が、青果

のドラマトウルギーの特色を理解するための鍵ではないかと思ひ、極めて重視したのである。しかし、この系譜について藤木宏幸は、すぐれた「真山青果の戯曲」の中で、

今日的にいへば、自閉症とも思考停止症とも見える老人像は、青果戯曲の一つの特徴的人物として（略）「富岡先生」を頂点に、こののちも、「戦艦三笠」（東郷平八郎のうち）の蒲池一弥太や、「凱旋乃木將軍」（昭和12・4初演）の油井賛平という老人たちに描き継がれていくのである。

と書いている。しかし、ここで考えてみなければならぬ事がある。これらの人物を、単に「自閉症」「思考停止症」と理解したのでは、青果が、せっかく作りあげたドラマの論理を正確に把握出来なくなるからである。これらの人物に共通する特徴は、否定の精神あるいは否定の論理の強烈な持主だという事である。歴史に対する、社会あるいは人間に対する怒りを持った攻撃役であり、斬り込み役であり、プロテストの役である。

『富岡先生』の場合、立身出世主義の社会思潮に激しい攻撃をする富岡老人。それはまた脚色者青果の心でもある。それに対して時代と社会への適応性を失った老人に高槻由一は斬り込んで行く。息もつかせぬ対立を生じる。あるいは江藤卓文が、老人の偏屈なものの方を批判する。その事によって、さらに深い緊張感が増して行く。どの登場人物も、がなりたてる事によってではなく、たがいに相手の抜き差しならぬ論理的矛盾とか急所に対して、言葉という刃物をつきつける事によって、読者あるいは観客の手に汗を握らせ

る仕組みになっているのである。そして、それが青果戯曲の特色でもある。富岡老人の怒りの気持は青果の心にも通じ「攻撃」と「斬り込み」のエネルギーとなっているのだ。論理的思考力の持主だからこそ、怒りと否定の精神が高く昂揚するのである。これを「自閉症」「思考停止症」と考えたのでは、作品の中における彼等の役割が生きて来なくなるのではなからうか。

富岡老人は崩れた人物ではない。次に、この富岡老人を一層崩れた形に変えたのが『償金四十万弗』の岡野新助である。青果は新助の妻に「余計者」と言わせている。酒と女で失敗し、薩摩藩から追放された人物で、最低のところまで落ちぶれた人物として描かれる。しかし、この「余計者」が、ドラマを構成する上では欠く事の出来ない人物なのだ。生表事件の際、大久保利通は「落魄の旧友に酬ゆる」との理由で、新助の名前を下手人として幕府にとどける。新助は必要な時には追放され、人間として扱われない蛆虫のような人物だが、薩摩藩ではそれを必要な時にだけ使うのである。下手人にされた新助はそれを逆手にとって、大久保をはじめ薩摩藩の連中を徹底的に嫌がらせる。新助の処分に困り抜いた大久保は新助をそのままにしておけず、そうかと言って殺す事も出来ず、薩摩から新助の妻を呼び寄せて引き取らせる事にする。

『償金四十万弗』と『斬られの仙太』の関係を述べるつもりが、ずいぶん脇道へそれてしまった。私は、人物の設定のしかたについて、単なる形式的共通点にすぎないが、『償金四十万弗』の岡野新助が架空の人物であり、『斬られの仙太』の仙太郎も実在の人物で

はないという共通点をまず指摘したい。「『斬られの仙太』資料」を見ると、三好十郎が相当のエネルギーと時間を使って、千葉市立図書館などを利用してながら資料を調べた事が知れる。三好十郎の全作品の中で、この作品ほど題材を歴史的事件にとり史実に基いて根気よく書かれたものが他にあるだろうか。三好十郎が、おそらく、他から強制されてではないと思うが、ともかく転向しなければならなくなつた時、史劇を創作する事の中に、プロレタリア文学の道以外にも、自分が劇作家として生きて行くそれなりの道が存在する事と、作劇上の技術を青果の作品から学んだのではないかという事を考えてみたいのである。

## 5

そこで次に人物の描き方を問題にしたい。岡野新助の崩れた、しかし、ある面で、開き直つたと言うか、居直つた生き方の中に、『斬られの仙太』で仙太郎が天狗党に、メチャメチャに斬られて崖から落ちた後、不思議に生き残つて百姓となり、その事件からずつと後、明治十七年になって、自由党员が協力を申し込むのに対し、それを、さんざん愚弄する仙太郎の態度と論理に共通するところがあると思つて仕方がない。

岡野新助はさきにも引用した通り「一国の政治と云ふはみな嘘だ、恐ろしいほどの嘘で固めて平氣でいる」「国の政治を行ふやつほど、恐ろしい酷いこゝろはない」と言う。別のところで「勤王と申しても、要するに各藩の功名争ひだ」とか「それはたゞ幕府いじ

めの権略に過ぎない。」などとも言っている。それに対して仙太郎は自由党员に、「あんたら、自由党とかで今の政府を倒すそうなが、……それで、政府は倒したら、その後、どうなさいまつす？ あんたらがこんだ大臣やなんにおなりけ？」とか、

考えて見な、公方様の天下を倒して大臣参議になつたのが、その昔は下士や軽輩の士分の者だ。(略)今度は、そうして出来た新政府を横暴だ倒せなどと騒いでゐるのが、自由民権か何か知らねえが……(略) こんだ自分達が出世しちまへば、同じ様に横暴ば働いてぶつ倒される側になるのだ。(略) 自由党にしてからが、せいぜい自分等の役に立つ間だけ俺達を出しに使うて、自分等が世の中に出てしまへば、放り出そうと言ふ手だ。俺にやチャンとわかつてゐら。

と言つている。仙太郎は決して自由民権運動に参加しようとせぬばかりか、ここで徹頭徹尾、政治及び政治運動にたずさわる者に対する不信の念を表明する。「自分等の役に立つ間だけ俺達を出しに使う」あるいは必要な時にだけ使つて不要になればあとと捨て、という「政治」のメカニズムが持つ非情さ冷酷さを追求し批判するのが『斬られの仙太』の内容であつた。そのような内容の作品は勿論、青果の作品にいくつもある。ここでは、『徳川千姫』と『人斬り以蔵』の例を引いて、その關係を考えてみたい。

『徳川千姫』は坂崎出羽守成正とそれに仕える湯浅新六が中心となる。大坂城が落城する時、徳川家康は孫の千姫を猛火の中から救い出したいあまり、救い出した者を千姫の婿にすると言う。その言

葉を聞いた成正と新六は、矢弾の中を突き進み姫を助け出す。しかし二人とも猛火のためひどい火傷をして醜い姿となる。姫は醜い不具者となった成正を嫌い本多忠刻と再婚する。徳川家にとつて、約束の手前もあり坂崎出羽守成正が邪魔になつて来る。そこで家康は、坂崎家が主人浮田を取り潰した油断のならぬ者と攻撃しはじめ。成正は、怒みを込めて次のように言う。

事ここに来て、初めて明らかなのは、徳川家は初めより坂崎家を取り潰さう考へてあつたことぢや。諂らうても潰れ、争うても潰れ、いづれにしても潰るゝ家の坂崎なのぢや。この上はたゞ、眸を正しく徳川家を見詰めて、用あるときは欺きても人を用ひ、用なき時は慨きても人を捨つる、徳川家の穢き、無慙さ、冷酷さを……味はゝれるだけ味はふのが、せめてもの心ゆかしぢや。

これは、発想のしかたにおいて『斬られの仙太』で「自分等の役に立つ間だけ俺達を出しに使う」という考え方と共通のものではないだろうか。青果は、この言葉が好きなのか、本多忠刻にも同じ作品の中で「用あるときは欺きても人を用ひ、用なき時は、慨きても……人を捨てゝ顧みぬ。——徳川家の御家風が、平八郎には厭はしうござります。」と言わせている。

『人斬り以蔵』も同じような発想のパターンを使っている。無学な岡田以蔵は、全人格的に傾倒し尊敬する武市半平太に従つて勤王運動に加わり、極端な斬奸事件を起こすが、会津藩に捕われて調べを受けた後、無宿者の虎蔵として土佐藩に引き渡され長く百姓牢に

入れられる。そして、最後には天祥丸を飲まされて殺されるのである。この作品の中で、叔父の鎌十郎が甥の以蔵に対して、武市半平太を狩人に、以蔵を狩犬にたとえて語るところがある。

噛み付きどころは悪かつたかも知れん、が、犬は一生懸命、夢中になつて兎を倒したのぢや。(少しく涙を含み) その犬の苦勞も汲み取らず、肝の臓に齒を立てたが悪いというて、犬に、人外畜生の耻辱を与へ……、果ては、殺して鍋に入れようとする惨さを……、叔父の身として快く見てゐられるか。

と言う鎌十郎に以蔵が「武市……先生にしても、自分の身が切なかつたからぢや」と言う。鎌十郎は、さらに言葉が続けて、

然うぢや、わが身が切ないのぢや(略)おのれ一人を無宿者におとし、土佐人ぢやない、同志ぢやないと知らぬ顔したのは、みな自分の命が惜しいのぢや。(略)働かせる用のある時には、おだてつ賺せつ働かせて、それ国のためぢや同志のためぢやと、智慧の足りないお主を散々働かせて、今まで何人京都で人を殺させたのだ。(略)その大事を勧めさせたお主を、その後同志の人々の扱ひ方はどうなのぢや。いかに自分等が助かりたいとて、お主を無宿者、入墨者にするとは何事ぢや。(略)われは同志に売られたのぢや。

と言う。これもやはり『斬られの仙太』で「自分等の役に立つ間だけ俺達を出しに使う」という考え方と基本的なところで共通する面があると思えるのである。以上、具体的に作品を長々と引用しながら検討して来たごとく、『斬られの仙太』は発想法において青果の

作品から多くの影響を受けていると考えてよく、三好十郎が最初『斬られの仙太』において、政治批判の作品を企画したとき、その発想を効果的に描く手口の見本として、あるいは青果の作品からドラマの論理を学び取り入れたのかもしれない。さらに、想像を逞しうすれば、三好十郎は、政治一般そのものより、革命運動指導者の身勝手な、その問題に限って批判しなかったにもかかわらず、青果の手法を取り入れる過程で、革命運動批判が政治一般批判に拡大されてしまったのかもしれない。

しかし、十郎が青果の影響を受けたからと言って『斬られの仙太』の価値が下がったのではない。今日にもなお通じる重要な課題を彼はよく昇華し、鑑賞にたえ得る作品として結晶させる事に成功した。こうして、三好十郎に与えた青果の役割を考えなおしてみるとき、吉田精一のごとく「歌舞伎に一つの新しい味をつけるに止んだ」とだけ評価するのは酷であり、近代戯曲史における青果の価値をもう少し改めて認識する必要があるのではなからうか。三好十郎は『斬られの仙太』以後、史劇からは次第に遠ざかり、イツヒドラマの道を拓いて行く。そして彼は昭和十五年に絶唱『浮標』を完成するのである。彼がイツヒドラマを書く時、青果の『桃中軒雲右衛門』（昭和2年）『雲のわかれ路』（昭和5年）あるいは『一本杉』（昭和3年）などの作品から、何かを学んだかもしれない。それよりも、三好十郎の生き方そのものの中に、これら青果の作品から受けた影響があるように思えてしかたがない。しかし、これらの問題は今後、別の面から十分に検討してみなければならぬ課題である。

注

- (1) 『日本現代文学全集』第三四巻（講談社・昭和34年6月・月報）のち『明治大正の劇文学―日本近代戯曲史への試み』（楡書房・昭和46年9月）に収録。
- (2) 『正赤白鳥全集』第八巻（新潮社・昭和43年5月）所収「文芸時評」の「坂本龍馬」のち「劇作家としての真山青果」と改題し『現代日本文学大系』第二巻（筑摩書房・昭和45年10月）他「作家論」各版などに収録。
- (3) 『日本近代文学』第六集（昭和42年5月）、なお藤木宏幸は近代戯曲に関する優れた仕事を次々に続けており、他に『国文学』増刊号、昭和43年6月、『現代文学研究の手帖』の「真山青果」がある。
- (4) 『東京大学教養学部人文科学科紀要44』（昭和42年12月）のち『明治大学の劇文学』に収録。
- (5) 『中央公論』（昭和40年9月）「近代日本を創った」〇〇人（芸術家一〇人）
- (6) 『三好十郎の仕事』別巻（芸芸書林、昭和43年11月）
- (7) 『久保菜研究』第10号（昭和44年1月）のち『昭和文学史論』（八木書店・昭和45年2月）に収録。
- (8) 『解釈と鑑賞』（昭和46年3月）
- (9) 昭和四十六年十一月二八日に愛媛大学で行なった研究報告「山本有三の戯曲―作劇術の生育過程を中心に」で、青果と有三の関係にふれた。後日発表の予定。
- (10) 『決定版 日本中が私の劇場』有紀書房・昭和36年11月）
- (11) 『風葉先生酔中語』（『真山青果隨筆選集』第三巻・講談社・昭和27年）に「昨夜江藤新作君に会った。佐賀の乱の江藤新平の長男だよ。（略）江藤新平の心事を聞いて涙くだね。然し僕の書く材料ぢやない。真山君が少し読書するといふんだがね。」とある。
- (12) 『日本文学講座』第六巻「日本の劇文学」（東京大学出版会・昭和32年5月）
- (13) 『脚本・富岡先生 酒中日記』（新潮社・大正15年5月）
- (14) 藤木宏幸が指摘する『戦艦三笠』の浦池一弥大、『凱旋乃木將軍』の油井豊平以外に、『借金四十万冊』の岡野新助、『京都御構入愚書』の野添次翁、『血笑記』の鏡柄源内、『西郷隆盛の首級』の木場原圭吉、『人斬以蔵』の吉村鐵十郎と岡田以蔵などがある。

附記 浦池文雄・谷沢永一・清水チエ、以上の方々に一方ならぬお世話になった。心から感謝の気持を表わす。  
（昭和四十七年二月十六日稿）

# 井上 靖

## ——その運命觀の原点——

### その近作と運命觀について

井上の詩はある種の衝撃を讀者に与える。それはわれわれを即興的に愉しませるような性質のものではなく、さりとして官能の悦びを人に与えるような機能を持つものでもない。中桐雅夫はそれが、「作者が出会ったある状況、ある事件を叙述し、それに対する作者の感慨を述べる」という形をとっているという。しかしその状況なり事件なりも、むしろ表面さりげなく世の常の自然のありようを描いてきて、突如それがさし示す隠された運命的な意味を、その人の人生を変えてしまふにたりるものとして提起してくるのである。ここでは鮮烈なイメージが閃めくように啓示され、それによって状況が内的に転換するのであって、そのような推移のもつ劇的な主体のありようが、人に戦慄に似たものを感じさせるのである。詩にはものごととの隠された本質を透徹した直観で見抜き、あるいはものごととも

### 三 枝 康 高

のごととの關係を、新らしく組み立てる機能があるといわれている。それを人は譬喩とか象徴とかという言葉で呼ぶのであるが、井上の場合にはとくにその傾向が顕著であるといつてよい。

たとえば最近刊行された詩集『季節』の冒頭の詩『雨期』は、つぎのように書かれている。

深夜、依然として降り続けている  
烈しい雨の音で眼覚めると、  
いつも私の寢室兼書齋の小さい部屋は  
方舟になつてゐる。松脂と瀝青で塗り固めたあのノアの  
方舟。ただ私の方舟はノアが神の命によつて造つたあんな大きなものではない。  
私製の小さい奴だ。私は己が方舟に収めるものを物色する作業にとりかか  
る。——花という花が死に絶えた中でひとり神韻を帯びて、わが家の庭に咲き続けているあじさい。  
長雨のために野性を取り戻し、何ものをも信じない孤独な眼付きになつてゐる白い紀州犬。同じように雨に叩かれて、  
廢園としての不逞な相貌を帯び

て来た浜木綿の花壇。そして創世紀の童女の面輪と純潔な魂を併せ持っている五歳の孫娘。

未明、私はやがて来る愛する者たちとの別離の悲しみで心を濡らす。私が己が方舟に乗りこむ資格を持っていないからだ。私は耳をすまます。何ものかが天地に充満し、移動している。季節の、と言うより、正しくは業(わざ)のようなもののエネルギーが、その場所を変えようとしているのだ。美しいものだけを乗せた小さい方舟を、私が両の手で暁闇の中に押し出す時は刻々迫りつつある。——こうした時なのである。私を別離の悲しみの中で眠らせるために、終夜烈しく降り続いた雨が突然霧のような静かなそれになるのは。

この一篇の散文詩の特長として挙げるべきは、井上特有の運命観の表出であろう。それは象徴的な形象につながる日常的な発想を、叙事詩風に表現するといった格好で、非現実の世界を成立させている。清岡卓行のいい方でいえば、「それは究極的には、彼の散文詩の原型が、個人生活や民族の興亡などにおける、なんらかの意味で比較を絶する情感の、冷徹な定着にあるということである。その情感は、人生や歴史などを認識する短い散文性のうちに、きびしく客観化されなければならない。」そこにはたしかに作者の神秘的な発想に伴なう緊迫した危機感があり、自己犠牲の冷徹な定着がある。しかもそれは詩集『季節』の他の詩にまでおし及ぼすことのできる傾向であるだけでなく、近作『四角い船』や『星と祭』においては明瞭な体系を形づくり、かれ特有の運命論にまで発展しているのである。

る。

たとえば『星と祭』に出てくる「もがり(仮葬)」の説がある。

「実際に日本の古代においては、仮葬という死者の葬り方があった。人間が亡くなると、すぐ本葬は行わないで、ある期間、仮りに葬っておき、そしてその上で本式に葬るといふ二重の手順を踏んでいたのである。……人間は死んでも、すぐ鬼籍にはいるのでなく、生でもない、死でもない、詰まり生と死の間に、死者の魂が浮遊している期間のあるということ、古代人は信じていたのである。」また数学者のたてた仮説というもある。「この地球上に居る自分の他に、宇宙のどこかの遊星群の星の一つに同じ自分が居て、今この時も同じことを考え、同じことをしている。この地球上に居る自分と、他の星に居る自分とは、どちらかが実像であり、どちらかが虚像であった。……一たい、自分は虚像か実像か。——しかし、この問題は永遠に確かめることはできないはずであった。こちらの自分が虚像か、実像かという問いを発している時、もう一人の自分も、遠い星の一つで、全く同じ時、同じ問いを発しているのである。」

『星と祭』の作中に出てくるこれらの構想は、たとえば「もがり」の説は人間の生死に関し、「数学者の仮説」は人間存在そのものに関するもので、まさしく作者の抱懐する運命観に根ざしている。近代のロマン主義はいずれも反俗的精神を持し、たとえば北村透谷のごときはかれ独特の汎神論的な神秘主義に拠っていた。けれども井上の場合、自己の内面に介在する矛盾や相剋を前提とし、人間存在の現実不在を強く主張しているのである。そこにかれの虚無的な

態度と情緒の相対化が必然的に生じてくるのであって、清岡はこういっている。「情緒のこうした相対化は、詩人の戦中の苦渋と、主題の季節であつた戦後の潮流の交差から生じたものだろう。」この指摘は井上自身も行なっているが、ここではその運命観の原点に還る意味合いで、かれの戦中から戦後へかけての時期までさかのぼってみたい。

### 八月十五日の体験と感想

昭和二十年八月十五日の午近く、ほとんどすべての国民はラジオの前に集まり、重大放送の始まるのを待ちかまえていた。折しも太陽は頭上にあつて、あぶら照りの日ざしがじりじりと照りつけていた。人々はそれまでの仕事を一時中止し、そこかしこに数人ずつがひとかたまりになり、みなひとしくかたずを呑む思ひであつた。正午の時報。つづいてアナウンサーの緊張した第一声があたりの沈黙を破った。

「ただいまより重大なる放送があります。全国の聴取者のみなさま御起立願います」

それをうけて下村総裁がいった。

「天皇陛下におかせられましたは、全国民にたいし、畏くもおんみずから大詔を宣らせ給うことになりました。これより謹みて玉音をお送り申します」

つづいて「君が代」が奏せられ、「玉音放送」が開始された。

「朕深ク世界ノ大勢ト帝國ノ現状トニ鑑ミ、非常ノ措置ヲ以テ時

局ヲ收拾セムト欲シ、茲ニ忠良ナル爾臣民ニ告グ。朕ハ帝國政府ヲシテ米英支蘇四國ニ対シ、其ノ共同（ポツダム）宣言ヲ受諾スル旨通告セシメタリ」

ラジオの前で、みな膝をのばして直立不動の姿勢をとり、うなだれて聞き耳を立てた。天皇のかん高い声が、いっていることが決定的なことであるだけに、それは名状しがたい感情の高まりを伴いながら、しかし何をいっているのかよく聞きとれないもどかしさのうちに、スピーカーから流れ出た。「ポツダム宣言」を受諾し、連合国に無条件降伏をおこなったのだ。国民にもアジアの諸民族にも未曾有の大戦争を終結させるにあたって、天皇は「忍ビ難キヲ忍」んで降伏し、「国体ヲ護持シ得」たことをよろこんで、今後いよいよ「誓テ国体ノ精華ヲ発揚」することを、国民に求めたのであつた。満州事変は昭和六年九月十八日に勃発していたから、以来十五年にわたる戦争が、ここに最後の幕をおろしたわけである。

『あすなる物語』のなかで作者の井上靖はこう書いている。文中の「鮎太」は、そっくりそのまま「井上」と読みかえてもよさそうに思われる。「終戦の詔勅が放送された日、鮎太は終戦の日の町の表情を記事にした。社会面の大半はそれで埋められた。町の表情と書いても、市街の大部分は焼野原と化していたので、そこをうろついている人々の虚脱した姿や、会話を、そのまま記事にしたわけであつた。記事の取り扱いは全く鮎太にも判らなかつた。明日の日本というものが判らない以上、どのような事をどのように書いていいものか見当はつかなかつた。鮎太はただ客観的にそれを何十行かの

文章に綴った。」

この日の報道部デスクは、事実学芸部出身の井上に割り当てられていたのである。かれの『玉音・ラジオに拝して』という記事は、翌十六日の『毎日新聞』(大阪版)朝刊の第二面のトップを飾った。そこには「忝けなき・滲む感涙」「脈打つ決意、一億祖国再建へ」という大見出しにつづいて、つぎの記事が掲げられていた。「十五日正午——それは、われわれが、否三千年の歴史がはじめて聞く思いの『君が代』の奏であった。その荘厳な『君が代』の樂の音が消えてからも、ラジオの前に直立不動、頭を垂れた人々は、二刻、三刻、微頭だにしなかつた。生れて初めて拝した玉の御声は、いつまでも耳にあつた。忝けなき、尊さに身内は深い静けさに包まれ、たれ一人毛筋一本動かすことはできなかつた。幾刻か過ぎ、人々の眼から次第に涙がにじみあふれ、肩が細く揺れはじめてきた。本土決戦の日、大君に捧げまつる筈の、数ならぬ身であつた。畏くも、陛下にはその数ならぬわれら臣下の身の上に御心をかけさせられ、大東亜戦争終結の詔書をいま下し給われたのであつた。『帝国ノ受クベキ苦難ハ固ヨリ尋常ニアラズ。爾臣民ノ衷情モ朕善ク之ヲ知ル。然レドモ朕ハ時運ノ趨ク所、堪エ難キヲ堪エ忍ビ難キヲ忍ビ、以テ万世ノ為ニ太平ヲ開カムト欲ス。』『朕ハ茲ニ国体ヲ護持シ得テ、忠良ナル爾臣民ノ赤誠ニ信倚シ、常ニ爾臣民ト共ニ在リ。』

玉音は幾度も身内に聞え、身内に消えた。幾度も幾度も……勿体なかつた。申訳なかつた。事茲に到らしめた罪は悉く、われとわが身にあるはずであつた。限りない今日までの日の反省は、五体を引

裂き地にひれ伏したい思いでいっぱいにした。いまや声なくむせび泣いている周囲の繰ての人々も同じ思いであつたらう。日本歴史未曾有のきびしい一点に、われわれはまぎれもなく二本の足で立ってはいたが、それすらも押し包む皇恩の偉大さに——すべての思念はただ勿体なきに、一途に融け込んでゆくのみであつた。

詔書を押し終ると、われわれの職場、毎日新聞社でも社員会議が二階会議室で開かれた。下田主幹が壇上に立って、『詔書の御趣旨を奉戴するところに、臣民として進むべきただ一本の大道がある』と、社員の日から進むべき道を説けば、上原筆統いて、『職場を離れず、己が任務に邁進することのみが、アツツ島の、サイパンの、沖繩の英靈に応える道でもある』と、じゅんじゅんと声涙共に下る訓示を与え、最後に前倉専務また社員の前までの『戦い抜く決意』を、新しい日本の建設に向けてることを要請した。われわれの進むべき道は、三幹部の訓示をまつまでもなく、すでに御詔勅を拝した瞬間から明らかであつた。

一億団結して己が職場を守り、皇国再建へ新発足すること、これが日本臣民の道である。われわれは今日も明日も筆をとる。「併し」と『あすなる物語』には書かれている。「これは鮎太が何年か振りで書いた何の作為も主張も持たない、記事らしい記事であつた。何の飾りの前書きも要らなければ、必勝の信念という言葉も、国の御盾という言葉も要らなかつた。あるいは鮎太が新聞記者になつてから書いた初めての、当然そうあるべき本来の新聞記事というものであつたかも知れなかつた。」この作品にはある程度のフィクション

を織りませてあるように思われるが、この部分は少なくとも作者自らの経験をつつわらずに書いているのではないかと想像される。それはゼロ体験とでもいふべきものであつたらう。しかし作者自らのここに語られている感動は、かれが戦争をどう受けとめていたかというところをつきとめてみなければ、明瞭なかたちをとるにいたらない。そこでいまかれの戦争体験を、その詩と小説と閲歴とによつてたどつてみよう。

\* ここに引用したのは、『玉音・ラジオに拝して』の全文である。これは昭和二十年八月十六日付の『毎日新聞』第二面を飾つてゐる。当時の新聞はタブロイド版で、二面から成り、この日は休刊した新聞も少なくなつたが、『毎日新聞』大阪版は立派に刊行されている。なお引用にさいして、漢字や仮名遣いはすべて、現行のものに改めた。

福田宏年編の『井上靖年譜』によれば、かれは昭和十一年八月に「毎日新聞社大阪本社へ入社、学芸部勤務」、翌年九月には「日支事変（日中戦争）に応召し、第三師団輜重隊に入隊して、北支方面各地に駐屯」したが、翌年一月、「病氣のため四カ月で内地送還、四月除隊となり、大阪府茨木町下中条一七五番地に転住」したといふ。しかもそのあと昭和十九年までの七年間、かれの『年譜』はなにごと目立ったことは記していない。山本健吉のいいかたにしたがえば、それはかれの閲歴における「欠史時代」である。私もそのことに気づいて、「戦争についてどうお考えですか」と聞いたことがある。かれはその質問に答えて、「戦争については一般に、固定的な考えかたはしていませんね。しかし私は自分が経験しているだけに、その公式的なとらわれた考えかたばかりはしません」といっ

た。

いまかれの詩のなかに、戦争にふれた作品をさがすと、『瞳』と『元氏』の二篇が見当るであらう。そこでまず『瞳』のほうであるが、それはつぎのとおりである。

七歳ごろであつたらうか。明るい春の、風の強い日、私は誰かに背後から抱いて貰つて、庭の隅の古井戸を覗き込んだことがある。苦むした古い石組と生い茂つた羊歯、ひやりとする冷たい空気、地上から落込んだその方形の空洞の底には、動かぬ水が錆びた鏡のように置かれてあつた。思うに、私の生涯に大きい関係をもつ何ものかが、初めて私の軀の中に這入り込んだのはその時であつた。

若し私が幼時のその春の日の一刻を持たなかつたら、刺客の冷たい瞳を埋めた地中の暗処をのぞかなかつたら、——私は二十歳の時友の眉間を割り、二十五歳の時思想運動に奔り、三十歳の時恋愛に生命をかけ、三十五歳の時絶望の思いをもつて永定河を渡り、四十歳にして或は市井に名をなしていたかも知れない。

併しすべては違つていた。あの北支永定河の川波に乱れ散るこの世ならぬ白い陽の輝きに、ふと生命惜しからぬ戦いの陶酔を味わたつた以外、あらゆることに、私は怠惰であり、常に傍観者でしかなかつたようだ。

この散文詩には、作者に独特の虚構があり、実際にはかれは思想運動に走ろうとしたことも、恋愛に生命をかけようとしたこともな

く、そうならざるをえない必然的な人間関係も持たなかった。またかれが北支を転々としていたのは、三十五歳ではなく、三十歳のときのことであつた。しかしいづれにせよかれは結果的にはその種の行動に走ることなく、無為に青春を過したと自らを回想している。

そしてそれが、「古井戸の底」の「動かぬ水」の記憶のせいだとかれは考えるのである。しかもこの水鏡を見たときの恐怖にも似た心情は、『暗い潮』の主人公の落莫たる運命を示す場合にも使われている。けれどもただ一つ例外があつた。それは北支永定河を渡りながら、「生命惜しからぬ戦いの陶醉を味わつた」ことである。つまりかれの戦争についての考えかたには、それを体験した自己に即しての、諦念にやや近いと思われる運命観と、その枠にはまり切らぬ行動者としての自覚があつたといつてよい。

しかし永定河の渡河戦については、『あすなる物語』につきのような叙述がある。「鮎太は、彼が大陸で経験した最も凄惨なその渡河戦の翌日、多くの戦友たちの屍体を河州の一隅で焼きながら、自分が昨日までの自分と全く異つていてることを感じていた。」「その時は、自分が生きていたと言ふことだけの大きい感慨でいっぱいだった。あらゆる人間の営みは絶望的であつたが、そうした中に於てもなお人間は生きなければならぬ、生きることが貴い、そんな感情の昂ぶりだった。広い河の水の面には北支の初秋の陽が細かく散り、屍臭と、屍体を焼く紫の烟りが川波の上をゆっくりと渡つて行つた。鮎太はぼろぼろ涙を流していた。自分が生きていたという不思議な今日という日に対する感激だった。」これはまさに衝撃的

な体験であり、「昨日までの自分がそれに取り憑かれていたことが、可笑しい程ちっぽけで貧弱だった」という、運命観の核心をなす感慨であつた。そしてそれはつぎの『元氏』という詩で、いっそう強調されたものになつてゐる。

河北省西部の元氏という小さい部落でわれわれは崩れかかった城壁の上に乗せせと土囊を積んだ。やがて何時間か後には行なわれるであろう敵襲に備えて、おのおの自分の前の砦を補強するために忙しい日没の一刻を過していたのだ。その時の不思議に静かな薄暮の訪れを、初冬の平和な村々の茂りを、遠く地平のあたりを南下して行つた鳥の大群を、そして遙か西方の山裾にしきりに打揚げられる烽火の煙を、あるいは又その時われわれ三人が交わしたひどく屈託のない会話を、それら一切をいま思い出すことのできるのは私ひとりである。右の友も左の友も、その翌日からはこの世にいないのだ。あの夜にはいったい何が行なわれたと言ふのか。激戦——そんな濁つた騒がしいものは微塵も起こりはしなかつた。運命の序列、そうだ、われわれが持つていてしかも知らない己が運命の序列を、仮借なくつきつけて見せるひどく冷たいものが、あの夜の闇の中を静かに、だが縦横に走つていたので。そして硫酸のような雨が音もなく、併し小やみなくわれわれの精神の上に降り注いでいたので。

この作品には『腫』よりもいっそう徹底したかたちで、運命がうち出されている。「右の友も左の友もこの世にいない」という運命は、同時にかれひとりだけを「この世に」生きのこらせたそれでも

ある。つまり前作で運命と対置されていた行動までも、『元氏』において「運命の序列」のなかに収斂されてしまっている。だから運命にはプラスとマイナスのふたつの場合があり、かれの言葉でいえば「清冽」なその運命の前に、小気味よく自己の存在をさらしていたといつてよい。そしてそれだけに、目前の目まぐるしい戦争の局面には、さして心を動かすことなく、その数年間を経過したもののように思われる。

ところで元氏ではいったい何ごとが起こったのだろうか。井上はそこで「激戦——そんな濁った騒がしいものは微塵も起こりはしなかった」といい、「ひどく冷たいものが、あの夜の闇の中を静かに、だが縦横に走っていたのだ」といつている。しかも作者は『ある兵隊の死』という短篇を、昭和二十四年四月号の『世界の動き』に発表し、『銃声』と題する作品を、昭和二十六年一月号の『文学界』に掲載しているのである。これら二篇はいずれも同じ事件を扱っており、それゆえこれに酷似した事実が、作者の体験のなかに介在しているのではないかと思われる。しかもかれの作品は直接戦争を扱ったものが少なく、これらその他にはほとんどその例を見ない。くり返していえば『年譜』もまた、「第三師団輜重隊に入隊して、北支方面各地に駐屯する。病気のため四カ月で内地送還」とあるにすぎない。

すなわち『ある兵隊の死』は、昭和十八年十一月末、独立輜重隊N部隊が元氏から順徳へ行軍したときのことを書いてある。小杉一等兵は脚気からくる神経性の心臓障害の発作に見舞われ、軍医には

重大視されず、車輛に乗せられる破目になって、ついに逃亡を企てた。しかし老上等兵が通りかかり、後送患者として取扱われて、かれは元氏の駅の待合室で親切にされ、やがてひとりりでそこに取残された。すでにかれは城壁の上の一隅で、自ら引金を引いて自殺しようとしたが失敗し、今はもはや孤独に堪えられなくなっているかれであった。また『銃声』という作品もこれと全く同じ素材を扱っているが、ここでは衝心性の脚気に悩まされている兵隊を岐部と名づけ、同じく後送される一等兵として小島をこれに配している。岐部は元氏で原隊が遠ざかって行くのを見送るのだが、行軍の隊列が見えなくなってしまうから、その方向で機銃の音が断続的にすると、もと所属していた部隊に戻りたい衝動にとりつかれた。ついにかれはその気持を口にし、隊長を勤めている伍長に訴えながらも、その途中で発作のため姿勢を崩さずにはいられなかった。かれはアペラの上に投げだされて、しばらくの間故郷の山河を夢みたりしていたが、汽車が来る時刻間近く、自分から立ちあがってホームへ出ていくかれの傍で、突然一発の銃声がした。それはさつきからさかんに咳きこみ、後送の書類を紛失した小島が、自殺したためであった。

作者がこれら二篇で同じ素材を扱っていることは、そのこと自体がすでに、よほど印象深い体験に裏づけられていることを示している。かれは後送されて生き残り、僚友の兵隊が少なからず死んだだけでなく、そのなかのひとりには明瞭に自殺と見てとれる死にかたをした。そこにはやはりかれの運命観を跡づけるにたりる事実があつ

ただろうし、だからこそそれがかれには忘れがたい挿話であったに相違ない。かくて終戦の日の『玉音・ラジオに拝して』という見出しの新聞記事にしても、その抑制した筆致の背後に介在しているのは、やはりまぎれもないかれ独自の運命観にはかならなかつた。

### 『通夜の客』の主人公の死

ところで『年譜』によれば、井上は終戦直後から「詩作に専念し、『京都大学新聞』、関西の同人雑誌等に詩を発表する」とある。そして昭和二十二年、二月～三月、この間に千葉賞の『流転』以来、十一年ぶりで小説『鬨牛』を執筆し、翌年には『猟銃』他数篇を書いている。かくて昭和二十四年に『ある兵隊の死』を『世界の動き』四月号、『猟銃』を『文学界』十月号、『鬨牛』をその十二月号、『通夜の客』を『別冊文芸春秋』十四号に発表し、翌年二月『鬨牛』によって芥川賞を受賞したのである。

すでに明らかのように、かれは終戦直後三、四年の間に、作家として発足している。わが国の文壇では、大学に在学中二十歳そこそこで斬新な作品を書き、あるいは同人雑誌に加わって天才ぶりを発揮し、新進作家として文壇に登場する場合が多い。第一次戦後派と称せられた大岡昇平、野間宏、三島由紀夫、椎名麟三、武田泰淳、梅崎春生など、みなそれぞれの青春期に小説を書きだしている。けれども井上はかれらとは異り、『鬨牛』によって芥川賞を受賞したとき、すでに四十三歳に達していた。しかもその翌年、ようやくかれは「十五年間にわたった記者生活に終止符を打ち、毎日新聞社を

退社」して、作家の境涯に入ったと『年譜』は傳えている。このような閨歴の上の表面的な推移が、かれの文壇的な成功によつてもたらされたことはいままでもないが、かれが新聞記者たる自分を転換して、中年の作家として再出発するにいたつた内面の劇が、はたしどどのような経過をたどつたかが、ここでは問題である。

すでにみたように、かれは戦争を運命と観じており、それは『瞳』や『元氏』という詩、『ある兵隊の死』『銃声』などという小説に十分に示されていた。その世界には諦念にやや近いと思われる運命観と、その枠にはまり切らぬ行動者としての自覚があつたのだが、それが前線における発病や自殺などという「冷たいもの」によつて収斂され、一そう強固な観念となつた。しかしかれにとつての最大の問題は、自分の運命を演ずる立場から、他人の運命を書く立場への転換でなければならぬ。それは新聞記者としての自分を、否定的なものとして自ら、捉えなおし、そこに新しい生命を産みだす契機を見出す基盤が用意されるべきことを意味する。つまりそれはかれの場合、終戦がひとしく「激しいかぶり」と、阿呆のごとくうつけた」表情とをもちたらしめた、あのゼロ体験に立つことでなければならなかつた。

その意味で私が取りあげたいのは、当初の作品のなかの第三作、『通夜の客』である。この作品は発表後好評を浴び、いっぺんは映画化されたこともある。いま小松伸六の「解説」によれば、『愛』の問題を中心にして、この作品を解説するならば、主人公は語り手の水島さよである。いやもつと正確にいえば、愛の発生による水島

きよのさまざまな精神のドラマの秘密を描くことにあるのだ。少女時代、彼女が秀弥と新津との間にあった見てはならぬ人間の深淵をのぞいたとき、新津が『大きくなったら浮気しようね』といった、あの一撃が、彼女に幸福な愛の誕生をあたえずして、むしろ水島きよという一個の女性の『存在の苦痛』といったものをあたえてしまうのである。』また江藤淳はこう「解説」する。『通夜の客』の主人公である新聞社の元東亜部長は、敗戦の責任をとって妻子を東京においたまま鳥取の山中に引きこもり、あとを追って来た柳橋の芸者屋の娘と三年間、誰にも知られずに同棲して、旧友と交歓するために帰京したとたんに急逝する。この、三年間と区切られたひそかな愛の生活は、そのままモロワの森に隠れ住んだトリスタンとイゾーの、三年間の愛の生活に照応しないであろうか。』

実をいうと私はこれら二つの「解説」がいささか気に入らない。いずれも違った意味で俗論や先行の作品にこだわらず、この作品そのものに直面して、作者の意図を酌んでいないように思われる。もしこの作品を論じようとするならば、やはり作者の閲歴と詩とで裏づけながら、かれの目ざしているところを明らかにしなければならぬ。そこで『年譜』をみると、「昭和二十年六月、鳥取に家族疎開」とあり、『高原』という詩でかれはつぎのように謳っている。

深夜二時、空襲警報下の大阪のある新聞社の地下編集室で、やがて五分後には正確に市の上空を覆いつくすであろうB29の、重厚な機械音の出現を待つ退屈極まる怠惰な時間の一刻。私はつい二三日前、妻と子供たちを疎開させてきたばかりの、中国山

脈の尾根にある小さい山村を思い浮かべていた。そこは山奥と  
いうより、天に近いといった感じの部落で、そこでは風が常に  
北西から吹き、名知らぬ青い花をつけた雑草がやたらに多かつ  
た。いかなる時代が来ようと、その高原の一角には、年々歳  
々、静かな白い夏雲は浮かび、雪深い冬の夜々は音もなくめく  
られてゆくことであろう。こう思っ、ふと、私はむなししい淋  
しさに突き落された。安堵でもなかった。孤独感でもなかつ  
た。それは、あの、雌を山の穴に匿してきた生き物の、暗紫色  
の瞳の底にただよう、いのちの悲しみとでもいったものに似て  
いた。

『年譜』にある「鳥取への家族疎開」は、『ある偽作家の生涯』にも書かれており、ほぼ間違いない事実とあってよい。しかも単身空襲警報下の大阪にいるかれ自身は、「雌を山の穴に匿してきた生き物の、いのちの悲しさ」を、一瞬「思い浮かべる」のだ。とすれば、この事実からみて『通夜の客』には明らかに作者の作為があつて、鳥取へ籠るのは疎開ではなくて、亡国を悼むものの隠棲であり、しかもそれは戦後三カ年にわたる新津の所業とされている。

小松の筆にならつていえば、「新津は終戦まではB大新聞の東亜部長として外地生活がながかったが、『それだけに新聞記者としては仕事をしましたな』と、通夜の晩にしみじみと述べられるような行動的な記者である。しかし仕事に対しては野心的であつても、どこかに虚無的な感情が流れていたとみえて、終戦と同時にまさき  
に責任を負つて、鳥取県の山奥にさっさとひきこんでしまう一種の

世捨て人というか、ミザントロップというか、自らを『野心の流刑人』とするような一面がある。したがって彼らの根本のところには、『生への不安』『死への共感』『人間不信』の孤独感やニヒリズムといったものが、流れているにちがいないのだ。しかも、彼らに間断なく仕事をさせたのは、この孤独感や不安の感じなのである。したがって彼らの行動は、そんな点では受動的といえるし、もしかしたら、彼らは行為者ではなくして、現代の受難者かもしれないのだ。つまり、なにものかへの情熱の奴隷になることによって、救われているともいえるのである。」——それを作者は「運命」といういい方で呼んでいるのだ。

山本健吉もまたかれについていう。「新津は敗戦当時、大新聞の東亜部長の職にあり、戦後同僚がだれ一人やめた者はなかった中で、責任を負って一人身を引いた。『俺だけは違うんだよ。俺だけは』と言う新津の気持には、彼を三年間山中に放擲して置くことのできた冷い妻をも含めて、俗世間への嫌悪の感情が根底に存在するのである。彼は結局、絶対に世間と融和しようとしなない、また融和することのできない魂を抱いている。おそらくそこには、作者自身の心の深い投影があるのであろう。そしてその閉ざされた心の真実をこじ明けようとするのが、この小説の語り手の水島きよである。彼女は中国の山村に押しかけて行って、生命をかけた『浮気』に三年の月日を捧げる。」「これをしも『浮気』と表現するのは、作者のイロニーである。それは俗塵の世界では結ばれることのできない恋情であるがゆえに、『浮気』とより言いようのないものである。」

新津の遁世ともいふべきこの所業は、『通夜の客』ではこう書かれている。「あの人は何もかも知っていたのだ。そもそも軍人嫌いだったし、戦争なんか性に合わなかったけれど、そして又、日本の国が敗けてこんな惨めになることも知っていたけれど、あの人はどうすることもできなかったのだ。自分の生れた可哀そうな日本の国といっしょに亡んでしまふ以外、どんなことも思いつかなかったのだ。」「あの人の心には、風に吹かれて揺れる草の葉のように、妙に素直なところがあつて、時々それがむき出しになることがある。」「責任などというそんな難しいものじゃあない。ふと、戦争が終つたら、一人でお山へ行つて毎日下を向いて土を耕したくなつたのだ。心底からそんな気持になつたのだ。」かれはそこでかねてから計画していた『中国塩業史』の大著を、たつたひとりで心ゆくままに書いてみたかつたのかも知れない。

おそらくはしかし新津の山籠りは、かれの性格からくるものというよりは、他の人がそれに徹しきれなかつたかれなりのゼロ体験によるものであつたのではないか。それはいうまでもなく作者の死を孕んだ運命観に基づくものに相違なく、かれはそれを『友』という詩でこう書いている。

どうしてこんな解りきつたことが  
いままで思いつかなかつたらう。

敗戦の祖国へ

君にはほかにどんな帰り方もなかつたのだ。

——海峡の底を歩いて帰る以外。

ここでは「友」と呼ばれた対象がだれであるかは、さして問題ではない。村野四郎もいつているように、「友がとぼとぼと生きては渡れない海底を歩いてくる姿を心に描き、」そのイメージを大きく覆う亡国の深い歎きをうち出しているのである。そこには敗戦によってもたらされた屈辱感もあるであろうし、あるいは打ちのめされたような虚脱感もあったに相違ない。しかしこの一篇はいわば天地の寂寥相に徹した悲しみの無限の涯を、非情なまでにまじまじと凝視している趣きがある。

新津の急逝は脳溢血のためとされている。けれどもその山奥の「天に近い、天体の植民地のような村の、悲しみも喜びもみんな揮発してゆくような虚しさ」は、実のところ死を予知させなかつたらうか。きよのいい方にしたがえば、山へ発った日のかれは、「私から別れると、風に吹かれながら何処へ行ってしまうか、まるで見当のつかないような孤独な顔だった」という。そのようなかれを一人ぼっちにして置くことができず、きよはその後を追うのだが、それだけにその土地は、「私が私の愛情を誰にも気兼ねせず純粹に空に向けて（ほかに何処に向けてところがあつたでしょう）花咲かすことのできた唯一の小さい天地」となる。かくてかの女はかれとの愛情を、「もはや人間の力ではどうすることもできない運命」と予感するのだが、いうまでもなくかの女は視点人物であり、主人公は新津に他ならぬ。

京都へ行くといつたはずの新津の洋服のポケットから、東京・岡山間の急行券を発見した日、かの女は「何かに誘われるように、戸

外へ出て行った。」「私は家を出た時は、何も死ぬ気で家を出たわけではありませんでした。でもあなたに追いかけられている時は、私は本当に死のうと思っていました。今考えても、私はあの時の自分が怖い気がします。あんな時に、人間は案外簡単に死ぬるのではないかと思えます。」しかし実際に死に直面していたのは、かの女であるよりも、新津のほうであつたのだ。だからかの女もその気持にわれ知らず触れたのであろうが、この山奥の眠られぬ夜の静寂が、かれの頓死を必然的なものにするのである。新津は亡国の深い歎きを人知れず胸に抱いて、死なねばならぬ人物として作中に登場し、かの女はどこまでもその情感を肌合いで理解し、まじまじと看取ってやる女性にすぎなかつた。

しかしそれ以上に、作者が新聞記者としてのこの主人公を死にいたらしめ、この一作によってそれまでの自分を否定し、「いのちの悲しさ」を謳う作家への転換を試みたことが、ゼロ体験に裏づけられた必死のものとして、行間から読みとれるのである。周知のとおり新聞記者はこれ以外の作品にもしばしば登場する。たとえば『閻牛』の津上、『暗い潮』の速水、『貧血と花と爆弾』の木谷、『櫻門』の木守、『司戸若雄年譜』の司戸などがそれであるが、そこにわれわれはかつて毎日新聞社の記者であつた作者の、ドッペル・ゲンガ（影法師）をみることができる。だがしかしかれららむしろ、「いのちの悲しさ」を確認する人物として現われるのであつて、この他にかれ自身死にいたるべきものとした新聞記者は絶無である。そこに『通夜の客』の「通夜」の意味するものを、われわれは読み

とらねばならぬであろう。

その意味で山本健吉のつぎの言葉は正しい。「第一作『闘牛』で芥川賞を受けたとき、氏は『小説を書く以外、もう私には別段何にも面白いことはないようである』と書いていた。この言葉には、もう自分には実生活上の面白いことはしつくしてしまった、とでも言っているような響きが、ないわけではない。それが事実であるかどうか、私は知らない。また、知らなくてもよい。だが、氏にとって小説を書くことか、実生活上のある断念を経て後に始まっていることは、想像できるのである。」氏によれば、一つの断念から、本当

の人生が始まるらしい。そういう断念を知っているのは、概して女性よりも男性だから、氏の小説では、女性像よりも男性像の方に魅力がある。氏の小説のヒーローには、人生の勝負師といった行動的な男がしばしば登場するが、どこかある一点で人生を降りた人の、ニヒルな影を持っている。実生活上のある断念に裏うちされた行動者であり、勝負師なのである。女はそういう行動者の賭の対象として、美化される。」こうした主人公の最初の場合が、つまり『通夜の客』の新津礼作だったのである。

**非公開**

**非公開**

**非公開**

**非公開**

**非公開**

# 近代文学研究論文目録 (一九七二年後期)

— 付・一九七二年前期拾遺 —

石割 透・大塚 博・黒木 章  
 千葉俊二・中島国彦・原 邦良 編

\* この目録は昭和四十七年後半期(七月〜十二月)に刊行ないし発表された日本近代文学関係の単行本・論文等を取めた。

\* 目録の体裁、収録文献の範囲等は前回にならったが、論文集に關してはだいたいの内容が理解出来るよう配慮した。

\* 単行本には『』を、編者の注記には\*印を付した。

\* 前回の目録の拾遺(その2)を付したが、これは前号一三四〜

一七(その1)に続くものである。

\* 本目録の作成は、会員から寄せられた資料をもとにしたが、その他、石崎等氏はじめ多くの方々から御教示をいただいたり、資料閲覧の便宜を与えていただいた。お礼申したい。なお、作成作業が年度末にぶつかり遺漏も少なくないと思う。ぜひ、編集委員会・事務局あてにお教え下さればと思う。

題名	氏名	発行所名 (巻号)	月
近代文学一般			
『文壇史事典』	長谷川泉編	至文堂	10
『俳史蘇鉄20年史II年譜II』	樋口昌夫編	蘇鉄社	10

『出雲・石見地方詩史五十年』	田村のり子	島根詩史刊行会	7
『大正の文学：近代文学史II』	紅野・三好 岡編	有斐閣	9
『日本文壇史16大逆事件前後』	伊藤 整	講談社	7

『日本文壇史17転換点に立 つ』	伊藤 整	講談社	10
『展望・現代日本文学』	瀬沼茂樹	集英社	9
『日本近代小説へ世界名著 案内3』	竹内書店		12
『日本の近代文学』	三好行雄 塙書房		7
『日本文学の近代と反近代』	三好行雄	東京大学出版会	9
『森鷗外・夏目漱石・三木 露風未発表書簡集』	日本近代文学館		8
解説 竹盛天雄・古川清彦			
『文学と現代』	霜多正次	新興出版	7
『文学概論』	小田切秀雄	勁草書房	12
『詩的断想』	村野四郎	冬樹社	11
『作品にみる東西文学の接 点』	富田 仁	早稲田大学出版部	11
『無頼文学研究』	森安理文編	三弥井書店	10
無頼文学の系譜 長谷川泉／無頼文学の意義 伴悦／戦争・天皇・無頼 森岩根／無 頼の倫理 竹内清巳／日本文学における無頼の本義 森安理文／谷崎潤一郎のデカダ ンス 高田瑞穂／坂口安吾 倉橋由美子／永井荷風 大森盛和／石川淳 戸栗弘／成 島柳北 有山大五／辻潤 馬渡憲三郎／折口信夫 村岡空／石原純 小山敬一／岩野 泡鳴 三田英彬／その他			
『漱石・啄木・露伴』	山本健吉	文芸春秋	10
『北窓の眺め』	寺田 透	筑摩書房	11
（*白鳥・夜雨・近代詩他）			
『苦悶の文学者―作家の精 神構造―』	津川武一	造形社	11
（*子規・民雄・漱石・芥川・葛西・寛・太宰・広津・三島・川端）			

『革命的ロマン主義者の群 れ―殉教と背教の美学―』	大久保典夫	三省堂	10
『文学非芸術論』	高橋義孝	新潮社	10
（*鷗外・芥川）			
『文学と歴史の影』	桶谷秀昭	北洋社	12
（*明治の知識人他作家論・詩人論・作品論）			
『時の楔・北川透初期評論・ 発言集』	北川 透	死蕪出版会	12
（*藤村・透谷他）			
『存在への征旅』	梶木 剛	国文社	12
（*井上良雄・梶井・漱石他）			
『半眼抄』	若杉 慧	木耳社	9
（*高見順・梅崎春生・志賀直哉・島尾敏雄他）			
『檸檬と爆弾』	宮内 豊	小沢書店	9
（*梶井・埴谷・吉本他）			
『情況と予兆』	奥野健男	潮出版社	12
（*三島・川端・安部・井上光晴・倉橋・大江他）			
『情念と虚構』	笠原伸夫	国文社	12
（*井上光晴・和巳・鏡花・茂吉・折口・亀井他）			
『情念を喪つた光景』	西尾幹二	河出書房新社	12
『私の作家評伝Ⅰ―草平・秋 声・漱石・鷗外・武郎・ 藤村―』	小島信夫	新潮社	8
『私の作家評伝Ⅱ―四迷・泡 鳴・虚子・花袋・蘆花・ 啄木―』	小島信夫	新潮社	10
『現代作家論』	白川正芳編	第三文明社	7

『三島由紀夫論 白川正芳／高橋和巳論 高橋康雄／大江健三郎論 菅孝行／松本清張論 樺田万治／倉橋由美子論 橋本真理／野坂昭如論 渡辺宏』							
『呪詛はどこからくるか』	遠丸 立	三一書房	7				
（*深沢・和巳・小川国夫）							
『異常が正常をあばくとき』	白井健三郎	朝日出版	7				
『あの夏 あの花』	阿部 昭	河出書房新社	11				
（*独歩・菊池寛・直哉・戦後作家等）							
『花と風』	秦 恒平	筑摩書房	9				
（*谷崎・川端他）							
『水中花』	生島遼一	岩波書店	10				
（*谷崎・達治・作之助他）							
『於母影』	平野 謙	集英社	8				
『花万葉』	安成二郎	同成社	12				
（*露伴・秋声・藤村他三代にわたる文学者との交友録・回想記）							
『寓目愚談』	藤枝静男	講談社	9				
（*昭和作家にふれる）							
『私の星は炎える』	生方たつゑ	東京美術	9				
（*川端・井上靖・田中文字等にふれるエッセイ）							
『作家の素顔』	河盛好蔵編	駸々堂出版	10				
（*谷崎以下24人との対談集）							
『随筆集・サンザシの実』	清岡卓行	毎日新聞社	8				
（*國外・近代詩人等）							
『詩神の魅惑』	小川和佑	第三文明社	10				
（*三島・堀・吉本・中村真一郎・朔太郎・伊東静雄・立原道造他）							
『夢魔の構造—作品行為論の展開—』	天沢退二郎	田畑書店	10				

『詩論集 抒情性の変態』	笹沢美明	朝日出版社	7				
（*朔太郎・光太郎・白秋他）							
『神なき詩の神学—抒情のイメージと実存—』	饒庭孝男	青土社	10				
（*朔太郎・達治・静雄・中也・宮永太郎・道造・光太郎他）							
『詩人の館』	高橋英夫	青土社	8				
（*朔太郎・宮永太郎・中也・神西清・静雄・達治・小林秀雄他）							
『発禁の詩—抹殺された詩人の発掘—』	小寺謙吉	評言社	9				
『詩人たち』	粟津則雄	思潮社	12				
『詩の意味』	粟津則雄	思潮社	12				
『現代詩史』	粟津則雄	思潮社	12				
『自然・自己・自由』	萩原井泉水	勁草書房	12				
（*俳句一般）							
『定任漂泊』	金子兜太	春秋社	10				
（*放哉・山頭火・光晴・虚子他）							
『奈良の诗情—会津八一展』		毎日新聞社	9				
『アンソロジー—日本文学における美と情念の流れ・幻妖』		現代思潮社	12				
解説 渡沢龍彦							
『探偵小説五十年』	横溝正史	講談社	9				
△付録／回想 神戸時代の横溝君と私 西田政治／大阪薬専時代の横溝正史 平吉広州／魅道の鬼 横溝亮／正史さんと私 松江春江／諏訪時代の横溝さん 神沢太郎 若き日の思い出 楠田佐太郎／思い出のこと 佐野英／少年時代の作者 吉川秀雄／色のある夢 福井久吉／年譜・目録 中島河太郎							

『東京文学百景』	志村七郎	有峰書店	9
東京二六新聞『時代文芸』抄 —明治四一年四月—明治四 二年一月—	大屋幸世編	研究報告（東工大 付高）3	10
年表・日本の詩論		ユリイカ	12
飯説のすすめといましめ—近 代文学界の動向（一九七 二年前期）—	川副国基	日本近代文学17	10
近代文学研究論文目録（一九 七二年前期）—付・一九七 一年後期拾遺		日本近代文学17	10
学問と芸術	内田義彦	思想	9
（*欄外にふれつつ）			
文学と宗教—その方法に関す る若干の省察—	佐藤泰正	古典と現代37	10
光と闇—文学的想像力と全体 としての世界	岡庭昇	辺境9	11
非在のユートピア—孤島近代 の挫折	松本健一	ピエロタ16	10
児童文学における時間と空間	本田和子	児童文学研究2	10
日本人と自然—批評と危機意 識について—	渡辺広士	文学	12
破壊的要素としての自然	饗庭孝男	すばる9	9
文学の場について	三木卓	展望	10
雑誌『文芸文化』の方法と思 想—国文学界に寄せる提言	栗原克丸	文学的立場7	7

△座談会▽現代文学における 天皇制問題	堀田善衛・ 西田勝・渡 辺澄子・古 林尚・和泉 あき・伊藤 成彦・小田 切秀雄	文学的立場7	7
△座談会▽日本の近代と作家 の自殺	松原新一・ 松崎晴夫・ 右遠俊郎・ 佐藤静夫・ 鮎川信夫・ 奥野健夫・ 平野謙・ 丸谷才一	民主文学 現代詩手帖 文学界	7 10 10
△対談▽詩と小説のあいだ			
△対談▽文学・実生活・死			
（*私小説の評価をめぐって）			
△対談▽殺すこと・殺される こと—ニヒリズムと創造行 為	武田泰淳・ 寺田透	群像	11
自由律の俳句—その歴史と展 望（419）	上田都史	俳句研究	7 12
近代和歌史におけるキリスト 教（19122）	上田哲	岩手短歌	7 9 12
見つつ畏れよ—神の眼とリア リズムの眼	高橋英夫	新潮	9
（*直哉・小林秀雄也）			
続私小説再発見—近代心境小 説の生成と本質—	西田正好	淑徳国文13	7
テオフィル・ゴーチエと日本 耽美派—上田敏から芥川龍 之介まで—	倉智恒夫	学燈	8

日本におけるドストエフスキ	清水孝純	比較文学研究22	8
空想の早稲田文学ライブラリ 即ち「本のさんぼ3 稲垣達郎」 「角鹿の蟹」	紅野敏郎	国文学	7
主体性の国文学者風巻景次郎 とその歌論	加藤将之	短歌研究	11
風巻景次郎の日記・書簡	塚本康彦	古典と現代37	10
文学片影Ⅶ・「高音部」と「低音部」の変遷	森山重雄	日本文学	11
(*伊藤整他) 正直か、正直か?	中野好夫	文学	10
「正直」か、「正直」か?—中野好夫氏に答える—	十川信介	文学	12
双壁を生かす眼	進藤純孝	中央公論	10
「時代閉塞」と思想的破局の意志	伊谷隆一	現代の眼	11
小説を書く詩人たち (*藤村・金井美恵子他)	松原新一	現代詩手帖	10
作家の自殺と時代の転換	高橋英夫	歴史と人物	7
レーニン・素人の読み方続きの13—もう一度「文獻」または「文学」のこと—	中野重治	展望	12
文筆人の社会的責任—鮎川信夫氏の言論への抗議を中心—	家永三郎	展望	11
沖繩と日本の断層 (*吉本隆明にふれる)	川満信一	中央公論	12
部落の解放と人権の思想	原田伴彦	世界	10

(*藤村の「破戒」にふれる) 小説にみる部落差別の表現	土方 鉄	人間として11	9
(*風葉「寝目粉」藤村「破戒」島木健作「黎明」) 北海道文学研究瞥見—地域文学圏から—	木村真佐幸	日本文学	11
八幡浜・西宇和の文学者たち 日本人と中国人の仲—王水江・金子雪斎・松崎鶴雄—	菊池啓泰	愛媛国文研究22	12
史伝 早稲田文学 (34と39)	北村謙二郎	浪漫	12
あの日の日—文学的自伝風に— (31と36)	浅見 淵	早稲田文学	7と12
満州児童文学回想	尾崎一雄	群像	7と12
後藤檜根と日本童話会	石森延男	児童文学研究2	10
童話作家協会の創立と解散まで	根本正義	児童文学研究2	10
明治新聞雑誌文庫の思い出 (4・5)	渋沢青花	児童文学研究2	10
芝居むかしばなし (12)	西田長寿	みすず	8と10
作家と睡眠薬	福原麟太郎	学燈	12
まとまらぬ感想	中野喜一	新潮	9
金田一京助博士追悼号	中村光夫	図書	8
特集 説話—伝承と創造		国学院雑誌	11
現代文学における伝承の再生—泉鏡花「高野聖」を視座として 関良一／森岡外一「山椒大夫」を視座として 畑有三／芥川龍之介「袈裟と盛遣」から「蔽の中」へ 安田保雄／太宰治「お伽草紙」を視座として 佐藤泰正／三島由紀夫「弱法師」を視座として 堂本正樹		国文学	9
特集 中世日本人の美と思想		解釈と鑑賞	11

現代作家における中世的世界—小林秀雄の「当世」を中心に—佐藤泰正／唐木順三  
 ハその中世的世界へ—遠丸立／花田清輝ハ転形期の論理—栗坪良樹／山崎正和 神谷  
 忠孝／三島由紀夫ハ中世とのかかわり—遠藤祐

『近代文学評論大系9 演劇論』

角川書店

11

総説 野村喬 / 解題 野村喬・藤木宏幸 八月報▽演劇論からみた近代日本演劇の  
 歩み 秋庭太郎 / 劇評家の承譜 武智鉄二 / 小山内薫の悲鳴 渡辺保 / 近代文学評論  
 書解題 永平和雄

『明治文学全集』月報ハ第60・7巻▽連載文

10・12

明治文学余話15・16 木村毅 / 明治の新聞21・22 「朝日新聞1・2」 浅井清 / 明治  
 への視点 松田道雄・池田弥三郎

明治初期

『幕末・維新期の文学』

前田 愛 法政大学出版社

10

『明治文学全集7 明治翻訳文  
 学集』

筑摩書房

10

日本翻訳史概説 木村毅 / 解題 木村毅 / 明治翻訳文学年表熊潤津子編八月報▽「花  
 柳春話」の位置 前田愛 / 秋澤と「権姫」 高橋邦太郎

近代文学の成り立ちをめぐって

関 良一

文学・語学65

9

明治時代語の研究—明治初期  
 における漢語の研究—

飛田良文他

国立国語研究所年  
 報23

8

近代ナショナリズムと「維新  
 国家」—たとえば福沢諭吉  
 の場合

中村生雄

現代の眼

10

パリの柳北—「航西日乗」を  
 めぐって

前田 愛

古典と近代文学13

11

矢野龍溪の文体

中村暢時

文学史研究（大阪  
 市立大）13

7

魯庵と露国文学—ハ意味深い  
 瞬間▽の周辺—

歌田久彦

吉祥女子高等学校  
 「研究誌」7

10

『現代日本文学大系2 福沢諭  
 吉・中江兆民・徳富蘇峰・  
 三宅雪嶺・岡倉天心・内村  
 鑑三集』

筑摩書房

7

八月報▽文明とはなにか—諭吉・兆民・蘇峰・雪嶺の思考から 鹿野政直 / 茶の本  
 の感動 桶谷秀昭 / 苦悩の能力と社会主義（\*鑑三） 八山康 / 研究案内 前田愛

逍遙・二葉亭

森山重雄

日本文学

8

文学片影VI 二葉亭における  
 「実行と芸術」

富田 仁

明治村通信27・28・30  
 8・9・10

坪内逍遙と「比照文学」—近  
 代日本比較文学史への試み  
 (II&IV)

菅谷広美

日本文芸論稿（東  
 北大学）4

9

「小説神髓」における馬琴の投  
 影

井上英明

研究紀要（立正女  
 子短大）16

12

ゾライズム移入の原点

松崎晴夫

歴史と人物

11

坪内逍遙とH・M・ボズネット  
 II—歴史的方法をめぐって

関 良一

古典と近代文学13

11

逍遙と黙阿弥

清水 茂

国文学研究48

10

二葉亭四迷と外交

塩谷 贊

創樹社

7

「浮雲」と二葉亭—その成立  
 と挫折—

福本和夫

法政大学出版局

10

嗟哦の屋おむろと二葉亭四迷  
 (上)—「流転」をめぐって—

土佐 享

近代文学研究1

8

紅葉・露伴・鏡花他

創樹社

法政大学出版局

7

『露伴と遊び』

土佐 享

近代文学研究1

8

『日本ルネッサンス史論から  
 見た幸田露伴』

土佐 享

近代文学研究1

8

「寒帷子」作者考

土佐 享

近代文学研究1

8

硯友社同人書簡	田中善信	文芸と批評(3)	8・12
紅葉の初期女物語について	風間栄四郎	近代日本文学(二 松学舎大)創刊号	11
泉鏡花の「妖術」	森 銑三	ももんが	8
秋成と鏡花	三田英彬	別冊現代詩手帖3	10
鏡花作品における能と狂言	三瓶達司	宝生	11・12
「高野聖」の典拠について	三瓶達司	解釈	12
響庭篁村とエドガー・ポー	宮永 孝	明治村通信30	11
透谷・一葉			
『日本近代文学大系9 北村透谷・徳富蘆花集』	角川書店		8
解説・註釈 佐藤泰正・佐藤勝 八月報透谷の混池 稲村徹元/作家の書跡 中村素堂		葎禎子/「芦花学」の周辺	
人生相渉論争の展開 試論13	北川 透	あんかるわ31	7
若き挫折者の肖像―北村透谷を中心に―	秋谷 豊	地球53	7
「かみのくに」への幻視行― 「蓬萊曲」試論―	黒古一夫	視向2	8
透谷と朗読	吉増剛造	文学界	10
北村透谷と「弱者」像―「鬼心非鬼心」を中心に―	平岡敏夫	古典と近代文学13	11
北村透谷「蓬萊曲」と箱根	西川 修	近代日本文学(二 松学舎大)創刊号	11
不眠の詩―北村透谷の詩の論理―	北川 透	ユリイカ	12
埋もれていた「北村透谷論」― 関文月の遺業にふれて―	色川大吉	図書	12

「ゆく雲」小論	中西芳絵	文芸と批評(3)	9
日記の中の桃水像―「うし」から「ぬし」へ―	中西芳絵	文芸と批評(3)	10
「たけくらべ」のユーモア― 「たけくらべ」ノート8―	青木一男	解釈	12
明治思想史上の「浪漫主義」― 明治20年代の高山樗牛―	渡辺和靖	文芸研究71	9
民友社			
『NATURE and HUMAN LIFE』	Yoshiy Ueno	私家版	8
『蘆花徳富健次郎・第II部』	中野好夫	筑摩書房	9
『徳富蘇峰・その文学』	中村青史	熊本大学教育学部 国文学会	11
蘆花徳富健次郎(続8・12)	中野好夫	展望 7・9・11	12
蘆花雑感	小玉晃一	明治村通信28	9
「黒潮」評価の一視点―東三郎と地方ブルジョアジ―	中村青史	日本文学	11
徳富蘆花「黒潮」論	大塚達也	日本文学	11
蘆花探訪拾遺(11・12)	中野好夫	文学	8
平民社時代(4・完)	荒畑寒村	歴史と人物	7・12
国木田独歩へ日本文学を読む	ドナルド・キーン	波	12
文学に現われた北海道の精神 風土/独歩文学/とその来 道の背景	木村真佐幸	北海評論8	8
独歩と自然主義	山田博光	日本文学	12
社会主義文学			
「ヒラメキ」について想うこと	松本健一	文学的立場7	7

(\*)『火鞭』系の雑誌)

浪漫的革命観の挫折―宮崎滔天と「革命評論」― 太田雅夫 展望 8

大塚甲山―資料と管見4― 大塚甲山研究小会 12

『経験録』解題・索引 加賀谷健三／大塚甲山書簡―諸家宛の分― 風穴真悦

鷗外

『鷗外・闘う家長』 山崎正和 河出書房新社 11

『森鷗外私論』 吉野俊彦 毎日新聞社 11

鷗外11 森鷗外記念会 7

鷗外書簡三通 中村不折宛 川田茂／鷗外書簡集のことなど 富士川英郎／森鷗外と聖書(五) 野溝七生子／森鷗外とトードー「戦僧」・「冒帝の曲」をめぐって

富田仁／鷗外文学における人間性の研究Ⅱ 河村敬吉／横倉日歴のこと―森鷗外博士と父桂湖村 丹藤壽恵子／森鷗外の『戦論』訳述―新資料にふれて 小林安司／資料(森鷗外未発表書簡・続、「ロオト年報」中鷗外の寄稿及び独文の「陸軍軍医学校」)

福間博の履歴／英訳「安井夫人」 森鷗外記念会 7

森鷗外記念会通信22 鷗外と狹手 河村敬吉／鷗外を偲ぶ日の記 志摩海夫／ほか 森鷗外記念会 7

『鷗外全集第九、十四巻』 岩波書店 7、12

八月報9▽掖齋消息(1) 石川淳／鷗外と学海 森統三(\*再録あり) 八月報10▽掖齋消息(2) 石川淳／翻訳原本及び創作の素材について(3) 一ヘルナック・フ

アヒンガー・オイケン 小堀桂一郎八月報11▽掖齋消息(5) 石川淳／翻訳原本及び創作の素材について(6)―ギョツツ及びギョツツ考― 小堀桂一郎／「阿部一族」改稿手続の不備について 小堀桂一郎八月報12▽掖齋消息(4) 石川淳／翻訳

原本及び創作の素材について(7)―鷗外はいっ「ファウスト」を読んだか― 小堀桂一郎(\*再録あり) 八月報13▽掖齋消息(5) 石川淳／翻訳原本及び創作の素材について(8)―「ファウスト」註釈・研究をめぐって― 小堀桂一郎(\*再録あり)

八月報14▽掖齋消息(6) 石川淳／翻訳原本及び創作の素材について(9)―マークベス翻訳をめぐって― 小堀桂一郎(\*再録あり)

『日本人の再発見』

(\*明治の終焉と日本人―鷗外・漱石の文学に表われた殉死の位相―小堀桂一郎をその一章に含む) 弘文堂 11

森鷗外の詩 財部鳥子 地球53 7

鷗外「佐橋甚五郎」小考―遠藤周作と比較して― 中島洋史 新潟大学国文学会誌16 7

鷗外ともう一人の軍医 山崎国紀 関西文学124 8

鷗外とゲーテ(14、19) 星野慎一 学燈 7、12

近代日本文学史への視点8・9―豊太郎の反噬(1・2)― 竹盛天雄 国文学 8・9

鷗外の歴史小説試論(3)―初稿「興津」から改稿「興津」へ― 木村真佐幸 札幌大学女子短期大学部紀要4 9

史伝小説「伊沢蘭軒」 新谷保次郎 福岡県立鞍手高校「鞍高学報」― 9

「興津弥五右衛門の遺書」論―八個性的V自我の視点から― 板垣公一 潮流4 9

パリアも明珠―寒山拾得V寸感― 滝沢精一郎 野州国文学(国学院栃木短大)10 9

文士の筆跡と文学―森鷗外ニヒリスト 鷗外の定位と挫折―「灰燼」をめぐる覚え書き― 菊池久治郎 崑崙1 9

鷗外の神話を疑う 清水 茂 日本近代文学17 10

近代日本文学史への視点10―浦島のイメージ・序章― 滝内旗雄 歴史と人物 10

「阿部一族」論―武士道倫理の史的座標― 竹盛天雄 国文学 10

板垣公一 潮流5 10

鷗外先生を偲んで 森鷗外論―孤絶からの出発― 特集・森鷗外	森永武治 山崎一顯 民主文学	中央公論 11
▲座談会V鷗外の文学と人間 の愛憎―うしろめたさについて ―安心立命―をめぐって―樋口正規／森鷗外と明治の青春 ―磯貝英夫／森鷗外と同時代美術(上)―原田直次郎との交友をめぐって―芳賀徹／うたかたの跡 越智治雄／森鷗外と三村竹清 富士川英郎／森鷗外の高イネ傍註 伊藤勉／森鷗外の文体 山本正秀／鷗外断片 森統三	中野重治・寺田透・加藤周一・三好行雄／太田豊太郎 十川信介／「青年」の周辺―「利他的個人主義」と 竹盛天雄／啓蒙批評時代の鷗外(上)―その思考特性 山崎一顯 日本文学	10
森鷗外「かのやうに」論―主 題把握への試み―	小泉浩一郎	11
森鷗外と革命―大逆事件を中 心として―	山崎一顯	11
「興津弥五右衛門の遺書」論覚 え書―歴史小説における鷗 外精神の恰好―	福本 彰	11
鷗外と反近代	三好行雄	11
鷗外「山椒太夫」の世界	奥野政元	12
『うた日記』中の一句	大屋幸世	12
鷗外「青年」について	長野勝久	12
漱石	愛媛国文研究22	12
狩野亨吉資料と漱石	青江舜二郎	7
「漾虚集」における漱石の原 体験	中山和子	7
ある相聞歌―漱石と大塚楠緒 子―	小坂 晋	7

江藤淳の「漱石・嫂不倫説」 批判(2)	宮井一郎	7
夏目漱石の恋(上下)	宮井一郎	7・8
漱石漢詩註釈上の疑義(3、 5)	和田利男	11
夏目漱石「ころろ」(4)文 学研究から現代国語教育へ のアプローチ(4)	佐藤泰正	7
「漱石」断想	吉村善夫	7
漱石における俳諧的なもの ―「狂愚」および「烟霞の 癖」をめぐって―	小室善弘	8
漱石の「我」の問題―吉村氏 の「夏目漱石」を読んで―	蒲生芳郎	8
明治村の夏目漱石初版本由緒 分)の位相(上中下)	山田朝一	8
漱石の詩(3)	福本 彰	10
漱石の満韓旅行	飯田利行	9
「行人」の残した問題―「こ ろ」への展開―	米田利昭	9
「虞美人草」の世界	竹腰幸夫	9
熊本時代の漱石	棒谷啓二	9
「吾輩は猫である」論・序と 断章	松山清英	9
漱石と諧謔	内田道雄	9
作家と時代(＊漱石論)	村瀬啓子	10
	伊豆利彦	10
	宮井一郎	7
	文学	7・8
	ももんが	7・8・11
	解釈と鑑賞	7
	春秋	7
	俳句	7
	春秋	7
	明治村通信27	8
	潮流45、別府大 学国語国文学149	8
	専修国文12	10
	文学	9
	国文学研究・試論 (中央大)創刊号	9
	潮流4	9
	歴史と人物	9
	古典と現代37	9
	藤女子大学国文学 雑誌12	10
	日本近代文学17	10

まなざしについて―神話はやめたい―(*漱石・川端)	田中保隆	日本近代文学17	10
近代文学の鑑賞(13 14) 漱石と文明(1・2)	越智治雄	国文学	10・11
夏目漱石と「明治の精神」	伊豆利彦	民主文学	10
夏目漱石―起点としての「それから」を中心に―	重松泰雄	日本近代文学17	10
漱石「門」の一考察	伊沢元美	島根大学文理学部紀要(文学科)6	11
作家評伝・続夏目漱石	小島信夫	日本の将来5	11
文・学者漱石―漱石における実作と理論(2)―	高木文雄	女子聖学院研究紀要	11
漱石試論―潔癖と自己本位と則天去私と―	鈴木敏幸	立正大学国語国文学研究(梅光国学院大学)8	11
「夢十夜」の世界―漱石・その夢と現実―	佐藤泰正	国文学研究(梅光国学院大学)8	11
∧日文科協第27回大会・総会討論V「漱石論の主体と方法」	伊豆利彦 畑有二三 益田勝美 向井芳樹	日本文学	12
漱石漢詩の「美人」―不倫説に関連して―	和田利男	もんが	12
「坊ちゃん」解析(1・2)	小谷野純一	解釈	11・12
漱石門下の三羽鳥∧日本文壇史217V	瀬沼茂樹	群像	12
漱石「草枕」の世界	棒谷啓二	日本文芸研究(関西学院大)(24)4	12
漱石「こころ」の世界	山本勝正	日本文芸研究(関西学院大)(24)4	12
『それから』解説	吉田精一	講談社文庫	7
『門』解説	吉田精一	講談社文庫	9
自然主義			
『島崎藤村事典』	伊東一夫編	明治書院	10
『木曾路と島崎藤村∧歴史と文学の旅V』	瀬沼茂樹	平凡社	10
『落穂―藤村の思い出』	島崎静子	明治書院	11
『花咲く桃李の蔭に―モラリスト・島崎藤村』	大塚幸男	潮出版社	8
藤村と晩翠の二つの系譜	斎藤庸一	地球53	7
青春の潮音・若菜集をめぐって	唐川富夫	地球53	7
詩と散文の架橋―島崎藤村にみられる過渡的軌跡―	沢 豊彦	研究年報(錦城高校)	7
藤村における芭蕉	横山和雄	高知大国文3	8
小特集・藤村研究のためにI ひとつの道標「農夫」 伊豆利彦/藤村論の試み―籠りの発想 森山重雄/藤村とラ ランス 須藤哲生	日本文学		9
藤村文芸における風土―「夜明け前」の文芸性―	早坂礼吾	専修国文12	9
島崎藤村∧日本文学を読む8V	ドナルド・キン	波	9
島崎藤村「家」上巻・鑑賞ノ ート(前)	本多 仁	情念5	10
島崎藤村と「自分」	伊東一夫	東洋	10
「春」の一考察	鈴木昭一	青須我波良(帝塚山短期大学)6	11

藤村と方言	宮地幸一	短大論叢(関東学院女子短大)47	11
「夜明け前」のモデル // おまん // 考	堀口貞幸	解釈	12
花袋再考―「時は過ぎゆく」を中心に―	相馬庸郎	文学	9
『蒲団』ノート	山本昌一	研究報告(東工大付高)3	10
「時は過ぎゆく」覚書	本多 浩	日本近代文学17	10
花袋作「池大雅」の意義	小林一郎	近代日本文学(二松学舎大)創刊号	11
『春』解説	三好行雄	講談社文庫	8
『田舎教師』解説	瀬沼茂樹	講談社文庫	8
島村抱月(2)5) ^ 評論の系譜61~64 V	吉田精一	解釈と鑑賞	7 / 10
長谷川天溪(1・2) ^ 評論の系譜65・66)	吉田精一	解釈と鑑賞	11 / 12
小品と水野葉舟(上下)	山田清吉	風炎	9 / 10
岩野泡鳴と大杉栄	伴 悦	日本近代文学17	10
「文芸の発売禁止に関する建白書」考―岩野泡鳴論―	朝日奈誼	現代文学7	10
徳田秋声	篠田一士	さばる9	9
徳田秋声―開眼から喪失へ―	和田謹吾	日本近代文学17	10
人間秋声とその文学の成立	飯塚優子	東京女子大学日本文学38	10
徳田秋声のオノマトペ	石崎 等	文芸と批評(3)10	12
雪の日の幻想―明治四三年冬の近松秋江―	中島国彦	文芸と批評(3)9	8

近松秋江論序説	小久保伍	親和国文(親和女子大)5	9
山本健吉氏への反論 (*白鳥に関連して)	後藤 亮	文学界	7
妄執の作家たち(1・2)正宗白鳥	内村剛介	文芸	7 / 10
「棄てる」ということ―私の文学散歩(12)(*白鳥)	山本健吉	文学界	12
耽美派			
『永井荷風の生涯』	小門勝二	冬樹社	11
荷風とモーパッサン	大塚幸男	学燈	7
永井荷風ノート―「監獄署の裏」の主題・方法・形式―	三好文明	新潟大学国文学会誌16	7
永井荷風の頽廢―保田与重郎との関連において―	塚本康彦	伝統と現代16	7
机上の空論―「四畳半襖の下張」をめぐる―	平野 謙	新潮	9
「四畳半襖の下張」は猥褻にあらず	野坂昭如	中央公論	9
「腕くらべ」覚え書	野口富士男	学燈	9
荷風の短篇「心づくし」攷―戦後短篇論のための序章―	高橋俊夫	文学研究36	12
『谷崎潤一郎』^ 日本文学研究資料叢書 V		有精堂	10
解説 大屋幸世			
『谷崎潤一郎研究』	荒正人編著	八木書店	11
総論 荒正人 / 谷崎潤一郎・初期の作品 小原元 / 「刺青」を中心に 者の悲しみ 吉田精一 / 初期の作品を読解する 林四郎 / 小さな王国 土屋哲 / 痴人	荒正人編著	八木書店	11

啄木と天理教—明治四一年日誌を中心にして—

啄木における『思想』成立の背景—そのアプローチへの一視点—

石川啄木の死—日本文壇史第212頁

『鑑賞石川啄木の秀歌』

『啄木今影』

『刺青・異端者の悲しみほか六編』解説

谷崎の悪魔主義—関西移住以前に見られる特色—

私の中の日本人—斯波要—

谷崎潤一郎の文体

谷崎潤一郎論(2) 6)

丸谷才一 中央公論

野口武彦 海 7 9・11・12

河野多恵子 波

栗原 稔 近代日本文学(二松学舎大)創刊号

高田瑞穂 講談社文庫

吉田孤羊 洋々社

玉城 徹 短歌新聞社

瀬沼茂樹 群像

石井勉次郎 古典と近代文学13

上田 哲 北流

11 11 7 10 9 12 11 9 12 11

啄木のポエティカ—『弓町より』について—

詩に遂はれた生—石川啄木の逆説—

最近における啄木研究文献4

昭和45年1月より昭和47年11月に至る—

明治の詩歌

『日本近代文学大系53 近代詩集I』

解説—笹淵友一/註釈 小川和佑・新聞進一・古川清彦・山路峯男・乙骨明夫・佐藤勝八月報V詩・詩人・詩碑 太田三郎/自由詩社について 人見東明

『日本近代文学大系16 正岡子規集』

解説・註釈 松井利彦八月報V子規の平衡感覚 国崎望久太郎/子規をどう把えるか 平井照敬

『明治文学全集60 明治詩人集一』

創始期の新体詩—『新体詩抄』より『抒情詩』まで 矢野峰人/解題 矢野峰人八月報V『新体詩抄』の詩人たち 森亮/『抒情詩』について 笹淵友一

『三木露風全集第一巻』

露風の芸術 岡崎義恵 八付録V全集のこと 三木なか/『全集』刊行まで 安部宙之介/内海信之宛露風書簡について 家森長治郎

『歌人大島病葉』(\*野の花文芸会同人)

新体詩人の群像—『新体詩抄』『抒情詩』を中心に—

『父虚子とともに』

小川武敏 neo apres guerre 9

鈴木和成 ユリイカ

岩城之徳 日本大学文理学部(三島) 研究年報

藤沢 全 21

角川書店

角川書店

角川書店

筑摩書房

三木露風全集刊行会

柏葉書院

地球53

今岡文雄

高浜年尾 牧羊社

碓登志雄

11 12 12 7 7 11

虚子俳句のレトリック	北住敏夫	文芸研究71	9	近代詩の黎明と軍歌	磯村英樹	地球53	7	
ヨーロッパの鉄幹と晶子	野田宇太郎	学燈	7	『前田夕暮全集1巻・3巻』	角川書店	7・9	9	
与謝野晶子詩作品年表	西川順子	東京女子大学日本文学38	10	解説 香川進				
松山版「ほととぎす」誕生	松井利彦	俳句	7	△対談「夕暮・その生涯と作品」前田夕暮全集刊行に寄せて	前田透・武川忠一	短歌	10	
景樹と子規	中村幸彦	国文学(関西大)47	9	特殊研究・吉井勇の土佐伊野時代―隠棲生活の心境を中心に―	永岡健右	国文学	8	
子規俳句における写生説の推移	佐伯照市	解釈	11	晩翠先生とその画像	島中尚志	図書	10	
子規書簡・松浦正恒宛―明治三二年十月二四日付―	和田茂樹	愛媛国文研究22	12	白秋雑稿9―「曼珠沙華」と「狐のかみそり」―	西本秋夫	風炎	8	
子規に関する雑話	井手淳一郎	愛媛国文研究22	12	特集・北原白秋三十年記念	形成	10	10	
伊藤左千夫のみた人間子規―馬酔木を中心として―	武智雅一	愛媛国文研究22	12	白秋先生遊きて三十年、白秋回想I・白秋諸論考及び編纂及び解説 木俣修／「新古今集」と近代短歌―白秋の幽玄歌風について、久松潜一／明治四一、二年の啄木と白秋 水口英／「黒檜」と白秋 吉野昌夫／白秋と千鶴・庄死 勝山格				
「芭蕉新聞」にみる明治俳壇の封建性	東次三郎	愛媛国文研究22	12	牧水・夕暮時代△日本文壇史第213V	瀬沼茂樹	群像	8	
長塚節と風土	横瀬隆雄	紀事(日本文学風土学会)4	8	若山牧水の結婚△日本文壇史第214V	瀬沼茂樹	群像	9	
長塚節の想像力―初期アララギの文学的エネルギー―	米田利昭	短歌	8	私説・明治詩史考	小川和佑	地球53	7	
長塚節の写生文についての研究(1)	深川明子	金沢大学教育学部紀要21	12	武島羽衣「小夜砧」論	劍持武彦	近代日本文学(二松学舎大)創刊号	11	
上田敏の詩論―「律」の問題を中心として―	清田文武	日本文芸論稿4	9	貌の軌跡―山之口貌ノート―	仲程昌徳	文学	12	
上田敏とインソップ寓話	北垣あつし	明治村通信31	12	沢村胡夷詩初出年表補遺	大嶋知子	東京女子大学日本文学	10	
『定型幻視論』	塚本邦雄	人文書院	10	『海潮音』解説	吉田精一	旺文社文庫	10	
(*窪田空穂小論ほか)				『文庫』時代の小島烏水(16)	近藤信行	アルプ	7・9	
空穂の個我と生来―窪田空穂論その1―	原邦良	文芸と批評(3)	12					

小島烏水伝の試み  
その他明治文学

近藤信行

アルプ

10

『秋田雨雀研究』

藤田龍雄

津軽書房

8

『児童文学の誕生—明治の幼  
少年雑誌を中心に』

続橋達雄

桜楓社

10

『日本近代文学大系57 近代評  
論集I』

角川書店

角川書店

9

解説 川副国基／註釈 川副国基・中村完・久保田芳太郎・畑美八月報V明治文学批評の系列 木村毅／明治期の文芸評論—その特色について— 瀬沼茂樹／文芸評論史の素材 谷沢永一

特集・日清・日露戦後の文学

解釈と鑑賞

8

日清・日露戦後の文学 高田瑞穂／戦後文学としての観念小説深刻小説 笠原伸夫／日本自然主義の戦後文学的性格 大久保典夫／日清・日露と戦争文学 山田博光／日清・日露戦争とナショナリズム 飛鳥井雅道／日清戦後の新文学—観念小説の功績 伊狩章／日清戦後の浪漫主義 平岡敏夫／日露戦後状況の文学 和田謹吾／日露戦後のリアリズム精神 榎本隆司／日清戦後と親友社の変貌 岡保生／日清戦後と近代詩の成立—「独歩吟」序にふれて— 関良一／前衛文学としてのゾライズム 野村喬／自然主義と西歐 櫻庭孝男／岡倉天心 佐古穂一郎／泉鏡花—「琵琶伝」と「海城笈篋」— 村松定孝／広津柳浪 久保田芳太郎／岡田田独歩 片岡憲一／正岡子規 浦池文雄／山田花袋—日露戦争と山田花袋— 田中保隆／高山樗牛 石丸久／徳富蘆花 清水茂／島崎藤村—「破戒」の後— 佐々木雅彦／田岡嶺雲 山田貞光／河東碧梧桐 松井利彦／与謝野晶子 熊坂敦子／川上眉山—「書記官」 中村元／樋口一葉—「にこりえ」 小原元／小栗風葉—「亀甲鎧」 前田愛／与謝野鉄幹—東西南北— 新聞進—「内田魯庵—くれの二十八日」 島田昭男／小杉天介—「はやり雨」 畑美／永井荷風—「地獄の花」 宮城達郎／真山青果—「南小泉行」 高橋春雄／日柳秀湖—「歌夫日記」 田中喜一／正宗白鳥—「何処へ」— 兵藤正之助／若野泡鳴—「戦話」 伴悦／徳田秋声—「新世帯」 野口富士男

『柳田国男』

牧田 茂

中公新書

11

『柳田国男論序説』

後藤総一郎

伝統と現代社

12

柳田国男と水野葉舟(下)

山田清吉

風炎

特集・柳田国男

国内之命族虚報—柳田国男の自己と国家發生と解体— 田中基／日本の山人の歌による交響曲—柳田国男の思想の愚註— 花井純一郎／八幻の国家Vをめぐって— 藤枝元／柳田文学と転向— 後藤総一郎／北一輝と柳田国男— 橋川文三／柳田国男の「序文」 谷川健一

岡倉天心論(1-3)

桶谷秀昭

海

9・11・12

第一高等学校不敬事件—評伝

小原 信

歴史と人物

7

近代と反近代の相剋—内村鑑三—

櫻庭孝男

すばる10

12

大逆事件と文学—啄木・鷗外

都築久義

風紋3

7

鈴木三重吉の小説—「桑の実」

根本正義

立正大学国語国文

11

鈴木三重吉と青木健作—日本

瀬沼茂樹

群像

11

阿部次郎の彷徨—日本文壇史

瀬沼茂樹

群像

10

小川未明研究(1)—同人雑

伊狩 章

新潟大学国文学会

7

誌—「黒煙」創刊の前後—

伊狩 章

誌16

7

童話集—「小さな草と太陽」と

続橋達雄

野州国文学(国学

9

「気まぐれ人形師」について

続橋達雄

院栃木短大)

10

広津柳浪の志向と限界(附「著

森 英一

近代文学論叢3

12

作年表」補遺)

森 英一

近代文学論叢3

12

横瀬夜雨と出羽の国の女—

前田 博

解釈

10

「酒田の寺の三の君」考—

前田 博

解釈

10

比嘉春潮伝(1)—明治時代

瀬良垣宏明

琉球の文化2

10

田岡嶺雲の天皇制観 東洋回帰の画家たち―忘れられる明治の漫画 志賀直哉	西田長寿 関川左木夫 明治村通信29	歴史と人物	7 10
座談会 志賀直哉の人と作品	高田瑞穂・ 紅野敏郎・ 三ツ木照夫 三ツ木照夫	解釈	7
志賀直哉月報総覧	桜井勝美	解釈	7
志賀直哉と北海道―『網走まで』のハ網走Vほか―	菊田茂男	解釈	7
志賀直哉の作風についての序章	ドナルド・ キーン	波30	7
日本文学を読む第六回 志賀直哉	平野 謙	群像	8
『暗夜行路』後篇の逸文	武智美根子	愛文(愛媛大学)	9
「城の崎にて」の冒頭鑑賞	池内輝雄	日本近代文学17	10
志賀直哉初期の問題―「鳥尾の病氣」の意味するもの	柄谷行人	季刊芸術23	10
私小説の両義性―志賀直哉と嘉村磯多	浅利康子	淑徳国文(愛知淑徳短大)14	12
志賀直哉における自然	須藤松雄	清泉女子大学紀要	20
志賀・梶井二作家の自然―日本文学における自然の研究の一環として―	高山亮二	明治書院	9
『有島武郎研究』 Vへの視点を中心にして			

『有島武郎研究のために』文獻目録	内田 満	私家版	
『有島武郎研究』	瀬沼茂樹・ 本多秋五編	右文書院	11
結婚前後の有島武郎―教授時代のうち作家の原風景について 桶谷秀昭/有島武郎の「自己所有」と「自己消費」―「大正教養主義」の一つの異態 折原信三/有島武郎とイブセン 長谷川泉/有島武郎と倉田百三/静思論争を中心に 高原二郎/有島武郎の文体 原子明/「かかん虫」から『カインの未審』へ 佐藤勝/『宣言』の内部構造 山田昭夫/『クララの出家』 笹刈友一/『迷路』―始めと終り、一つの渾沌 野島秀勝/『生れ出づる悩み』 武井静夫/『石にひしがれた雑草』 小坂晋/『或る女』論 西垣勤/『或る女』後篇のノート 江福潤子/『或る女のグリンプス』その成立について 福田禪之輔/『惜みなく愛は奪ふ』 安川定男/『三部曲』論 宮野光男/『星座』―その成立をめぐる覚え書き 遠藤祐一/『宣言』から『小きき者へ』 坂本浩/有島武郎の戯曲 藤木宏幸/有島武郎の『狂言』『骨』『独断者の金語』 野坂幸弘/有島のM・A (修七 論文をめぐって 小玉晃一/有島武郎とキリスト教離反について 上杉省和/有島武郎とホイットマン 小泉一郎/ 豊郷解放について―有島の作家的エゴと豊郷解放 高山亮二/札幌農学校時代の師 原田三夫/チルダ・ヘックの想い出 有島生馬/全集未収録・逸文集 山田昭夫・福田禪之輔/未発表書簡(十三通) 瀬沼茂樹/文獻目録・年譜 山田昭夫	増子正一	解釈	7
有島武郎『老船長の幻覚』試論	増子正一	解釈	7
有島武郎『迷路』論―半自叙伝的小説『迷路』の問題性―	坂下知子	藤女子大学国文学雑誌12	10
「或る女」の世界	三好行雄	国語展望32	10
有島武郎の童話―童話創作の動機を中心に―	高橋 弘	近代日本文学(二松学舎大)創刊号	11
有島武郎の児童文学―童話成立過程とその前後・その一―	増子正一	児童文学研究2	10

有島武郎研究―『或る女』の成立をめぐって(五)―	宮野光男	国文学研究(梅光女学院大) 8	11
有島武郎『三部曲』序論	増子正一	解釈	12
有島武郎小特集		近代文学研究 1	8
「カインの未審」論―有島武郎とキリスト教― 佐藤泰正 / 有島武郎の『衣服哲学』受容・試論―とくに新渡戸稲造、森本厚吉、内村鑑三との関係のなかで― 江頭太助 / 有島武郎研究―『或る女』とキリスト教― 宮野光男			
米寿の武者さん	市原豊太	新潮	7
『幸福者』解説	竹盛天雄	講談社文庫	8
長与善郎―その運命観について―	弓削幸代子	藤女子大学国文学雑誌 <sup>12</sup>	10
長与善郎著作目録	田中栄一	新潟大学国文学会誌	7
『白樺』と近代美術・2―続・近代美術史ノート・4―	高階秀爾	季刊芸術22	7
奇蹟・新思潮とその周辺			
大正の文学者たち―『葛西善蔵と広津和郎』によせて―	西垣 勤	春秋	8
広津和郎の或る手紙について	荒 正人	春秋	11
『苦の世界』解説	山本健吉	岩波文庫	7
夢見る部屋の構図 八宇野浩二	篠田一士	さげる10	12
久米正雄の社会劇とその構造	大西 貢	愛媛国文研究22	12
『江口渙自選作品集ⅠⅡ』		新日本出版社 8・10	10
解題 小林茂夫			
江口渙と大正文学	小林茂夫	民主文学	11

『現代日本文学大系44 山本有三・菊池寛集』	山本有三	筑摩書房	10
八月報▽菊池寛と山本有三 遠藤祐 / その後の山本有三先生 高橋健二 / 菊池寛の作劇精神 大西貢 / 山本・菊池研究案内 浅井清			
芥川龍之介			
『批評と研究 芥川龍之介』	文学批評の会編	芳賀書店	11
芥川龍之介覚え書 菊池弘 / 芥川龍之介における小説の破砕 久保田芳太郎 / 俊寛の系譜 清水茂 / 羅生門・芋粥 関口安麿 / 地獄変 竹盛天雄 / 舞踏会 坂本隆司 / 將軍 島田昭男 / 一塊の土 伴悦 / 文鶴山房 塚越和夫 / 河童 塚越和夫 / 西方の人 中村完 / 芥川龍之介―人と作品 山歌和男 / 『芥川龍之介未定稿集』をめぐって 森本修 / 芥川龍之介参考文献目録 中島国彦編 / 芥川龍之介主要作品ノート 文学批評の会編 / ほかも再録論文			
『侏儒の言葉・西方の人』解説	高田瑞穂	講談社文庫	7
『芥川龍之介』断片―わが読書記から―	小田大蔵	新潟大学国文学会誌	7
龍之介の短歌「砂上遅日」	石割 透	文芸と批評(3)	8
芥川の文芸時評についての覚え書き	北条常久	日本文芸論考4	9
『西方の人』の運命と美(その三)(その四)	高田瑞穂	成城文芸63・64	9・11
『文芸的な、余りに文芸的な』解説	高田瑞穂	講談社文庫	9
芥川「藪の中」再考説―小泉八雲「ブラウニングの研究」との関係について	広瀬朝光	文芸研究71	9
芥川龍之介のライトモチーフ	保坂宗重	解釈	9
技巧			

特集・芥川龍之介と太宰治  
 △日本的と普遍的▽

解釈と鑑賞

10

芥川龍之介と太宰治△日本的と普遍的▽ 佐伯彰一／芥川龍之介における世紀末の思想 平岡敏夫／芥川龍之介における自我と超越 梶木剛／芥川龍之介における発想と方法 水谷昭夫／芥川龍之介と太宰治における「私」 松原新一／芥川龍之介と太宰治におけるキリストと罪の意識 佐古純一郎／芥川龍之介の「死」と太宰治の「死」

大久保典夫／芥川龍之介と「大正」 紅野敏郎／芥川龍之介と今昔物語 和田繁二郎／芥川龍之介とアナートル・フランス 森啓祐／志賀重哉における芥川龍之介と太宰治 遠藤祐 中野重治における芥川龍之介と太宰治△クレインの像を軸に▽ 杉野要吉／三島由紀夫における芥川龍之介と太宰治 田中美代子／芥川龍之介作品事典

浅井清・浅野洋／主要モチーフからみた芥川龍之介 菊地弘

「湖南の扇」論考―芥川龍之介  
 晩年の位相―

塚谷周次 日本文学

11

芥川書簡の日付推定

海老井英次 日本近代文学会九州支部会報<sup>14</sup>

11

芥川と Breuer―「尾生の信」とアウルクリーク橋事件」について

鳩貝久延 近代日本文学(二松学舎大)創刊号

11

教材「羅生門」研究―改作の跡付け―

甲斐睦朗 解釈

11

芥川龍之介の手帖

国文学(臨時増刊)

12

対談・芥川龍之介の内なる神 遠藤周作・三好行雄／芥川龍之介における抒情 大岡信／芥川龍之介における歴史小説の方法 竹盛天雄／作品論・羅生門 菊地弘／作品論・偷盜 越智治雄／作品論・戯作三昧 遠藤祐／作品論・蔽の中 浅井清／芥川龍之介における終末観 高橋英夫／作品論・手巾 磯貝英夫／作品論・支鶴山房 海老井英次／作品論・菊 佐藤泰正／芥川龍之介における「童心」／島越信／作品論・杜子春 渡部芳紀／作品論・少年 羽鳥一英／芥川龍之介における批評の発想 吉田照生／作品論・侏儒の言葉 石崎等／作品論・続西方の人 鈴木秀子／芥川龍之介における現代 柄谷行人／芥川龍之介における知性の意味 西尾幹二／芥川龍之介における想像力 櫻庭孝男／芥川龍之介と日本の古典 平岡敏夫／大正文学史における芥川龍之介の位置 紅野敏郎／他人のなかの芥川 編・解説三好行雄／芥川龍之介研究史―問題

と展望 関口安義

芥川と鶴外―明治文学授受の一コマ

塚谷周次

近代文学論叢3

12

近代文学作品研究9 芥川龍之介―羅生門(一)△八文学研究から現代国語教育へのアプローチ▽

三好行雄

解釈と鑑賞

12

白秋・犀星(七)―△肉眼▽をめぐる白秋と茂吉―

西本秋夫

風炎

9

コスモス北原白秋歿後三十周年号(コスモス創刊二十周年第一記念号)

室生犀星

コスモス

11

『憑かれたひとと二つの自伝』

室生犀星

冬樹社

7

室生犀星ノート―「小景異情その二」について

本多 浩

立教大学日本文学

7

処女句集を語る『犀星発句集』(室生犀星著)

室生朝子

俳句

12

室生犀星の詩の世界

三木サニア

日本文芸研究(関西学院大学)(24)

12

『山村暮鳥ノート』

三木サニア

豊島書房

11

編集・解説 和田義昭(\*初期の説教・講話草稿の複製)

山村暮鳥児童文学考―『爺嬭物語』の典拠と方法―

和田義昭

群馬女子短期大学

11

『詩の宇宙―重吉・暮鳥・元吉・賢治』

藤原 定

皆美社

9

詩人・北村初雄(二)

安部宙之介

詩帖23

8

高村光太郎



宮沢賢治の手帳・創作メモなど  
賢治の原稿をめぐって  
奥田 弘 ちくま41 9

聖物毀損の罪―宮沢賢治の自然観の一面―  
恩田逸夫 明葉会誌88 10

宮沢賢治の作品行為と時間  
天沢退二郎 現代の眼 10

斎藤茂吉  
藤岡武雄 桜楓社 9

『評伝斎藤茂吉』  
山上次郎 古川書房(古川叢書) 9

『茂吉探訪』  
黒江太郎 白玉書房 11

『隆応の生涯と茂吉』  
結城哀草果 中央企画社 11

『茂吉とその秀歌』  
三一書房 10

『現代短歌大系第一巻』  
吉本隆明 国文学 8

斎藤茂吉論へ老残について  
二面の茂吉・斎藤茂吉論への一視点 本林勝夫  
斎藤茂吉における伝統 梅原猛  
ララギ派と茂吉山脈 上田三四二  
歌人斎藤茂吉の感性―『赤光』断想 佐佐木幸綱  
歌人茂吉と歌壇人茂吉 新聞進一  
青年期の茂吉と歌本―一九二〇年代歌人への道  
岩城之徳 茂吉と地獄 地獄極楽園 一連をめぐって 片野達郎  
茂吉の写生説と西欧思想 小畑桂一郎  
茂吉と狂気 重松泰雄  
茂吉と女性たち 藤岡武雄  
鼎談 父茂吉を語る 斎藤茂太・北杜夫・(司)巻 山下秀之助  
作品論『赤光』『あらたま』『つゆじも』  
『遠遊』『遍歴』  
堀本剛 作品論『ともしび』『たかはら』  
『連山』『石炭』  
藤田福夫 作品論『白桃』『桃紅』『寒雲』のぼり路  
『箱』  
渡川善夫 小園 白き山  
『つきかげ』  
斎藤正二 評釈『白き山』  
三十二首 本林勝夫

『つきかげ』論 老年文学の魅  
立岡章平 関西文学128 12

秋迢空ほか

『私説折口信夫』  
池田弥三郎 中公新書 8

『折口信夫坐談』  
戸板康二 中央公論社 8

『折口信夫』八日本文学研究資料  
料叢書V  
解説 長谷川政春 有精堂 12

秋迢空の翁歌について  
宇田篤司 下商研究紀要4  
(下)関商業高等学  
校 11

詩語の研究・批評の成立―折口信夫の詩論  
藤井貞和 ユリイカ 12

『共苦共楽―九条武子の生涯と歌集』  
東京親鸞会 土屋書店 10

『定本高橋新吉全詩集』解説  
栗津則雄 立風書房 10

『現代日本文学大系41』千家元  
廣・山村暮鳥・福士幸次郎  
・佐藤惣之助・野口米次郎  
堀口大学・吉田一穂・西脇  
順三郎集』  
筑摩書房 12

八月綴り鼎談近代詩成熟期の詩人たち  
大岡信・川村二郎・篠田一士/研究案内 千  
葉査一

雑誌・出版社関係  
雑誌『金星堂のころ』―書籍人『青春記』  
門野虎三 ワーク図書 9

近代文献ノート(3)(4)―遺稿集の掘野  
高橋春雄 解釈と鑑賞 8・9

『片山正雄遺文』と郷土芸術論の場合  
本のおさんぼ4・ジャーナリス  
トの作家論―守田有秋『目然と人』  
紅野敏郎 国文学 8

本のさんぽ5・野性的ユーモアリストの文集―生方敏郎『敏郎集』 紅野敏郎 国文学 9

近代文獻ノート(5) 隨筆雜誌『隨筆』の検討 紅野敏郎 解釈と鑑賞 10

「反響」の位置づけをめぐって 紅野敏郎 日本近代文学17 10

本のさんぽ6 まめほんの評伝―山田昭夫・木田金次郎 紅野敏郎 国文学 10

本のさんぽ7 ぶった煮の魅力―三上於菟吉『隨筆わが漂泊―』 紅野敏郎 国文学 11

本のさんぽ8 評論家「緒方流水」の位置―『塵影録』をめぐって 紅野敏郎 国文学 12

その他の大正期 武林無想庵盲目日記 無想庵の回顧談 白井吉見(\*昭19~37の日記) 記録文化社 7

『加藤武雄年譜』 年譜・資料・思い出 加藤花子(後記) 安西勝 私家版パンフレット 11

『日本近代文学大系48 大正短篇集』 解説 吉田精一/注釈 国岡彰一・助川徳是・田中栄一・浅井清/八月報/田村俊子の新しさ 瀬戸内晴美/「青銅の基督」の映画家 岩淵兵七郎 角川書店 10

『中里介山全集20巻』 評伝中里介山 尾崎秀樹/年譜・執筆及び著作目録・解説 尾崎秀樹 筑摩書房 7

八月報/武者著としての介山 いいだ・もも/思い出(?) 中里幸作 尾崎秀樹 古典と近代文学13 11

中里介山拾遺 尾崎秀樹 ちくま 12

『内田百閒全集6~8』 解題 平山三郎/八月報6/シャパン 車谷弘/百鬼園隨筆三絶 後藤亮/では、貴君 沢野久雄/合羽坂時代 高原四郎 八月報7/百閒談 阿川弘之/特別列車ウチダ号 青木権三/温イオ酒 上田健次郎/かいま見た百閒氏 正木ひろし 八月報8/稲門堂と砂利場 浅見洵/百閒先生の思い出 本多顕彰/百鬼園先生町内古地図 江国滋/「干丁の柳」と小石滑 小林博/由比の浜風 永田博 講談社 8・10・12

「田園の愛憐」[十七章の意味と女性への幻想] 藤田修一 日本文学論究(国学院大) 23 11

「へどろ」と「田園の愛憐」 岩淵悦太郎 群像 12

近代文獻ノート(2)―長田幹彦と近松秋江 紅野敏郎 解釈と鑑賞 7

「マイナー作家」の位置づけ―郡虎彦・豊島与志雄・佐佐木茂索・田畑修一郎をめぐって 紅野敏郎 文学語学65 9

片上天弦の変貌 助川徳是 日本近代文学17 10

細田民樹氏を悼む 山田清三郎 民主文学 12

「青踏社」に関する覚え書き 北川正洋 neo apres guerre 6 11

『民衆芸術論』論争に関する試考 熊木哲 国文学研究試論1 9

やさしきテロリスト村木源次郎 秋山清 歴史と人物 12

「ひややかに」の詩私解―「ものあはれ」を短詩に凝縮した日本近代詩の高峰生田 谷崎昭男 浪漫 11

長江の詩心を称揚する 日本児童演劇史ノート(5) 9/大正期(1~4) 昭 富田博之 日本児童文学 7~12

和前期(1) 富田博之 日本児童文学 7~12

江渡狄嶺研究 18

大正一〇年前後の狄嶺 相沢文蔵／中国の鄉村指導者と狄嶺 渡辺敏夫／資料（手記  
—トルストイについて、狄嶺蔵書の扉書き、江渡家の往復書翰2、船橋時代の家計資  
料、土と心を辨む）ほか

江渡狄嶺研究 19

狄嶺ノート（1） 菊池蓬也／那事は何？（その一） 白山秀雄／江渡狄嶺の綜業農  
制について（下） 瀧下貞夫／資料（黄白弁、支那の友達へ、断想、江渡狄嶺を偲  
ぶ、江渡さんの人と手紙）ほか

プロレタリア文学とその周辺

『小熊秀雄における詩と思想—  
その民衆性の問題によせて』 法橋和彦 創映出版 12

芸術的価値論争

森山重雄 情念5 10  
城戸淳一 私家版 9

『葉山嘉樹伝』  
『海に生くる人々』の改題・改  
稿・発表経過等について

浦西和彦 国文学（関西大学） 9  
小樽にて—小林多喜二の思い  
出— 風間元三 北方文芸 7

『小林多喜二と宮本百合子』

中野重治 講談社 11

解説 大江健三郎

宮本百合子のこと

中野重治 群像 11  
『伸子』 生誕をめぐって 北田幸恵 近代文学論叢3 7

『伸子』解説

中野重治における人民戦線の  
問題

渡辺澄子 講談社文庫 7  
杉野要吉 短大論叢（関東学  
院女子短大）46 7

利己心と良心と—『甲乙丙丁』  
論—

満田郁夫 文学 10  
満田郁夫 日本文学 12

中野重治に於ける農村

満田郁夫 日本文学 12

狄嶺会

7

狄嶺会

12

ある文学的出発—『驢馬』以  
前の窪川鶴次郎・中野重治  
との関連で—

杉野要吉 北方文芸 12

『現代日本文学』大系58 村山知  
義・久保栄・真船豊・三好  
十郎集—

筑摩書房 9

△月報▽半世紀の重み—村山知義の位置—菅井幸雄／真船戯曲の妙味 松本克平／  
久保栄と三好十郎の印象 平田次三郎／村山・久保・真船・三好研究案内 藤木宏幸

小林秀雄ほか

亀井秀雄 塙書房 11

『小林秀雄論』

清水孝純 近代文学研究1 8

小林秀雄における二つの「仮  
面」

秋山 駿 ユリイカ 12

小林秀雄の詩論

佐藤昭夫 実践国文学2 9

保田與重郎覚え書—△皇統美  
論▽を支えるもの

饗庭孝男 ユリイカ 12

世紀末の美学—保田與重郎の  
詩論

武田友寿 北方文芸 8・10・12

亀井勝一郎試論（5）（7）  
民衆の中へ—閉された歲月

三枝康高 政界往来 9

回想の亀井勝一郎

『亀井勝一郎全集2・5・11  
・12巻』 講談社 8・11

△月報▽2巻解説 平野謙 △16▽5巻解説 中村光夫／亀井さんのこと 石坂洋  
次郎／三鷹個人 保田與重郎△17▽11巻解説 佐古純一郎／思いだすこと 真盛仁／  
亀井氏における「宗教」の問題 松原新一 △18▽12巻解説 進藤純孝／断片的思い  
出 池田弥三郎／ただ一度の出会い 渡辺淳一

川端康成・新感覺派とその周辺 沢野久雄 実業之日本社 10

『川端康成点描』

『川端康成展へその芸術と生涯』

日本近代文学館

9

『川端康成追悼号』

解釈(臨増)

7

川端康成をいたむ 久松潜 / 川端康成をしのぶーハワイでの思い出 吉田精一 / 時空を超越するもの 長谷川泉 / 或孤児の一生 川端康成短篇全集より 高田みづ / 美しい手紙 伊豆の踊子の主格をめぐって 村松てい / 奇語委説 川端を送る 羽島一英 / 川端康成 林武志 / 「雪国」の終焉 藤森重紀 / 「ちよ」私記 関良一 / 「伊豆の踊子」について 文体論的考察 小林一郎 / 「化粧の天使達」小考 川端康成の詩をめぐって 松坂俊夫 / 川端康成における「事美」の馴致 広島一雄 / 川端文学における美意識 その配色効果を中心として 小林芳仁 / 無限の祈り 武田勝彦 / 川端先生の思い出 月村題子 / 川端康成の「死体愛好症」 鶴田欽也 / 抒情歌 1 フォークナー作品を枕として J・T・ヤマタケ / 川端文学に於ける聖書の位置 1 松坂俊夫 / 武田両氏の解釈のつれをめぐって 正木義道 / 川端康成の文体 吉田精一 / 「ちよ」から「伊豆の踊子」へ 長谷川泉 / ノーベル賞委員会による川端文学の評価 武田勝彦 / スペイン人の見た川端康成作品 H・フェルナンデス / 『川端康成の人間と芸術』出版記念会における故川端康成氏御挨拶速記録 / 文献解題 林武志 / 略年譜 川端康成 藤森重紀編

特集 川端康成

向陵(一高同窓会)

11

川端の想出あれこれ 守隨憲治 / 康さん 池田麗進 / 「南方の火」の写真 長谷川泉 / 二高時代の川端君 鈴木彦次郎 / 回想の川端君 水室吉平 / 若き日の川端康成君の思い出 片岡義雄 / 川端康成君の想い出 菱沼勇 / 川端さんとベンクラブ 高橋健二 / 第一級の人物 吉田精一 / 第四の原因 小島信夫 / 川端康成の死 1 回憶悲傷 長谷川泉

川端康成『落花流水』論(1)

東洋(東洋大学)

10

を中心にして

小林一郎

6・7・9・10

大人から子供への旅 1 「雪国」

鶴田欣也

文学・語学65

9

魔界の住人 川端康成の戦後

森本 稜

函 20

9

『伊豆の踊子』校異

藤森重紀

近代日本文学(二松学舎大)創刊号

11

鏡の中の花 川端康成の死と生

阿部正路

文学者

12

川端文学研究の新資料・「新晴」と「篝火」

長谷川泉

解釈

11

特論「雪国抄」と「雪国」

長谷川泉

解釈と鑑賞

10

新しい鷲 川端康成の終焉 1 「新思潮」時代の川端康成

栗原雅直

中央公論

7

美神の反逆 1 「たんぼぼ」の世界

鈴木彦次郎

歴史と人物

7

事実・伝記・小説の間

川端香男里

新潮

9

「浅草紅団」時代の浅草風景

後藤 亮

ちくま

7

『伊豆の踊子』十六歳の日記

長谷川泉

講談社文庫

11

ほか三編 解説

角川書店

『日本近代文学大系42 川端康成・横光利一集』

7

△解説 佐伯彰一 / △注釈 長谷川泉 久雄 / 『機械』のころまで 石塚友二

神谷忠孝 / △月報 桜木町の家の鳥籠 沢野

鳴田 厚

9

横光利一「紋章」(2)

茂木雅夫

歴史と人物

10

二つの「家族会議」について

太田 登

情念5

12

横光利一

大河内昭爾

新鐘(早大)

12

歴史小説『露命』と福留氏

山本 大

歴史と文学4

12

(＊中山義秀)

鶴見祐輔論

昭和十年前後の作家たちほか

「鬼涙村」考

篤実な誇張法―牧野信一論―

『檸檬』の成立について

梶井文学の幻想性

幻視とリアリティ―梶井基次郎論―

梶井基次郎と音楽―文学巷談10―

梶井と「冬の日」―文学巷談11―

『檸檬・Kの昇天』編―解説

傷ましき精神たち―北条民雄ノオト(二)―

北条民雄の出生をめぐって

『堀辰雄の世界』

堀辰雄『菜穂子』試論―『源氏物語』若菜の巻との関連について―

堀辰雄の『杜詩訳稿』

伊藤整伝12

小樽再訪―伊藤整・その人と文学の一面―

田辺明雄

磯貝英夫

川村二郎

津田 薫

鈴木二三雄

高橋英夫

高橋英夫

河盛好蔵

河盛好蔵

河盛好蔵

高橋英夫

須永博志

五十嵐康夫

大森郁之助

大野節子

内山知也

武井静夫

瀬沼茂樹

関西文学124

日本文学

群像

文芸と批評(3)9

国語国文(立正大学)9

文学界

新潮

新潮

新潮

講談社文庫

視向2

解釈

桜楓社

日本文芸論稿(東北大学文芸談話会)4

日本近代文学17

日本文芸

波

8

7

8

8

11

11

11

10

11

10

8

10

10

11

9

10

7

7

7

伊藤整の詩―文学巷談9―

初期の伊藤整

伊藤整の青春

『伊藤整全集6・10・7・5・4巻』

『付録6』6巻解説―青春の残像―佐々木基一/若き伊藤整 更科源蔵/塩谷村幻想紀行 小笠原克 10V10巻解説―性と死・性と老年 平野謙/ふたつの死 奥野健男 17V7巻解説―1伊藤整の石坂洋次郎論2昭和十六年から昭和二十五年まで 3『花ひらく』 丸谷才一/足袋の思い出 上林晔/晩年の伊藤整 小田切進 15V5巻解説―面期的な知識人小説―奥野健男/伊藤整さんの思い出 山室静/『文芸レビュ』の頃 福田清人 14V4巻解説―伊藤整の卓抜した独創―小田切進/伊藤整君のこと 河原直一郎/三つの助言 河野多恵子

高見順「故旧忘れ得べき」考 辻橋三郎

『高見順全集第15巻』

解説 山本健吉/解題 小野美沙子・武田文章/8月報V高見順についての回想 岡本潤/宿三題 佐藤敬/高見さんと私 松本克平/臨終の日 松元真

『現代日本文学大系48』龍井孝作・網野菊・藤枝静男集』

8月報V網野菊さん 広津桃子

中島敦における中国史

中島敦と短歌―享楽主義の終焉―

中島敦の南洋行

『新潮日本文学19』尾崎一雄集』

解説 本多秋五/8月報V回覧雑誌「極光」 尾崎一雄/男性的なひと 円地文子/歴史と文学2 中村真一郎

河盛好蔵

伴 悦

小笠原克

内藤 濯

文学界

新潮

国文学研究48

日本文学

文学界

新潮社

新潮社

勁草書房

勁草書房

筑摩書房

季刊芸術22

都留文科大学研究紀要8

国語国文

新潮流

新潮流

新潮流

新潮流

新潮流

新潮流

新潮流

新潮流

9

10

11

11

11

11

11

11

10

11

11

10

8

12

7

8

12

12

9

9

『新潮日本文学25大仏次郎集』

新潮社

11

解説 藤田圭雄／八月報▽日暮れて  
／歴史と文学3 中村真一郎 大仏次郎／「横浜文士」大仏次郎 河上徹太郎

檀一雄氏の「類聚」

谷崎昭男

新潮

11

檀一雄私論

石川 弘

断崖1

8

戦後文学史観の問題1—織田作之助の場合—

矢島道弘

解釈

10

「宮本武蔵」論—その修業と遍歴のイメージ—

佐藤忠男

伝統と現代16

7

「人生劇場」論

都築久義

風紋5

12

「風にそよぐ葦」研究

小関きよ子

国語の研究(大分大学)7

9

戦場文学ノート—「生きてゐる兵隊」と「悲風千里」を中心に—

都築久義

風紋4

10

『石川達三作品集8・4・15・1・9・19巻』解題

久保田正文

新潮社

7

『現代日本文学大系75 石川達三・火野葦平集』

筑摩書房

11

八月報▽石川さんのこと 巖谷大四／まぼろしの短篇小説 久保田正文／若き日の火野葦平 井上友一郎／火野葦平と河童 野田宇太郎／石川・火野研究案内 岩尾正勝

『葦平文学への招待』

松岡昭彦

私家版

9

(＊著書目録を付す)

「橋の手前」の資質—芹沢光治良論の基点として—

大森郁之助

札幌大学紀要4

9

『愛と知と悲しみと』(芹沢光治良)解説

瀬沼茂樹

新潮文庫

9

昭和の詩歌

『詩に架ける橋』

斎藤庸一

五月書房

9

(＊三野混沌・葦野心平ほか)

三好達治ノート—その初期詩篇と萩原朔太郎

池川敬司

国文学研究試論創刊号

9

三好達治「薨のうへ」小考

安藤靖彦

説林(愛知県立大)

12

『内なる中原中也』

青木 健

麦書房

7

『中原中也全詩集 アルバム』

中原中也 吉田照生編

角川書店

10

中原中也の詩に於ける「空」の意味

秋山公男

文芸研究71

9

中原中也論

中村 稔

ユリイカ

10

中原中也研究ノート「朝の歌」の成立(上)

大石 健

現代文学7

10

『立原道造全集2』

角川書店

角川書店

8

解説 鈴木孝／編註 堀内達雄 八月報▽「あひみての」との頃 高尾亮一／立原道造 村松英子／貧乏な天子 国友則房／立原道造と私4 近藤武夫

特集・昭和の抒情—中原中也と立原道造

国文学

国文学

10

認識者の抒情 中原中也と立原道造—三好行雄／△対談▽昭和の抒情とは何か—中原中也と立原道造を中心に 大岡信・中村稔／近代詩における△口語▽使用の転回—中也、道造の場合— 北川透／中原中也の青春 分銅惺作／中原中也の生の原型 鈴木村和成／中原中也と故郷 境忠一／中原中也とダダイズム 吉田照生／中原中也の宗教意識 桶谷秀昭／中原における小説・日記・手紙など 高橋英夫／中原における詩の言語とイメージ 原崎孝／立原道造の青春 佐藤勝／立原道造とメルヘン 星野徹／立原道造と自然 杉本春生／立原道造と日本浪曼派 神谷忠孝／立原道造の背後にあるもの 小山正孝／立原におけるノート・書簡など 饗庭孝男／立原における詩の言語とイメージ 鈴木孝／中原中也・詩編の分析と鑑賞 飛高隆夫／立原道造・詩編の分析と鑑賞 成田孝昭

「垂直の声」・吉田一穂大系第 「卷」詩篇	菅野昭正	すばる10	12
矢山哲治の詩	四季派研究 会	四季派研究3	8
矢山哲治の詩作	山田俊幸	四季派研究3	8
矢山哲治「詩集」解題	笹村弘文	四季派研究3	8
津村信夫の小説志向	大森郁之助	四季派研究3	8
伊東静雄の発想について 「哀歌」的世界の形成と崩 壊	早川雅之	文学	8
詩「わがひとに与ふる哀歌」 メモ	笹村弘文	四季派研究3	8
「わがひとに与ふる哀歌」の 世界	森田進	4国学院大学論集 24	8
「自然に、充分自然に」小考 ——伊東静雄と小林秀雄——	永淵道彦	日本近代文学会九 州支部会報14	11
△妖精の距離△の意味・滝口 修造の場合	鶴岡喜久	現代詩手帖	9
内田巖の詩	平野謙	ちくま	9
古代の春の復活—西脇順三郎 詩学によせて	由良君美	ユリイカ	12
『西脇順三郎全集Ⅹ』	筑摩書房		8
△月報▽存在をかきさ 増剛造／素描 那珂太郎	山本健吉／旅人のひとりごと 多田智満子／永遠の謎 吉		10
『私的金子光晴論』	堀木正路	理論社	10
『人間悲劇』試論—金子光晴 ノート2—	米倉巖	情念5	10

金子光晴にみる状況と詩的真 実	暮尾淳	黒の手帖14	11
『鮫』への道—金子光晴論序 説—	石崎等	研究紀要(早実)7	12
金子光晴の評論について	満田郁夫	春秋	12
黒い天鵞絨の天使—左川ちか 小伝—	小松英子	北方文芸	11
『淵上毛銭全集』	国文社		7
校註・解説・解題 大重進一			
『短歌の復権』	田島静香	現代書房新社	8
木俣修の歌—その鑑賞—	河内一治	研究年報(錦城高 校)11	7
「鹿鳴集」の歌校異(2)—「山 中高歌」・「放浪陰草」—	和泉久子	鶴見女子大紀要10	12
現代短歌論争史・第三部・戦 時下の歌壇論争(14~18)	篠弘	短歌 7~10・12	12
『現代短歌大系第1巻』		三一書房	10
解説 上田三四／釈迦空論 川村二郎／会津八一／秋草園残花▽ 塚本邦雄		三一書房	12
『現代短歌大系第6巻』		三一書房	12
解説 上田三四／佐藤佐太郎論△『帰郷』の世界を中心に▽ 本林勝夫／宮格二論 △『晩夏』について▽ 山本太郎／近藤芳美論 鶴見俊輔			
石田波郷伝(18~23)	村山古郷	俳句研究 7~12	11
特集・加藤楸椰	俳句研究		11
冬の鏡(30句) 加藤楸椰／初期句集と主宰誌の誕生 田川飛旅子／隠岐紀行の精神 的基盤 中拓夫／「火の記憶」『沙溪の鶴』と加藤楸椰 住谷不未夫／『野冥』におけ る楸椰 矢島清男／『起伏』『山脈』と加藤楸椰 小椋山繁子／句集『まぼろしの鹿』 について 川崎辰彦／「石の火」の作品について 八木莊一／人間探求派と加藤楸椰 平井照敏／新興俳句から見た加藤楸椰 三谷昭／楸椰句案管見 島朝夫／俳句認識に			

おける檉榔 竹中宏／加藤楳嶮論 友岡子郷／加藤楳嶮三百句 平井照敏(編)／俳句管見・加藤楳嶮の一句 村野四郎・森澄雄・平畑静塔・宮柁二・高屋密秋・金子兜太・古沢太穂・鍵谷幸信・和知喜八・佐藤鬼房・能村登四郎・峰岸杜丘・牧ひでを・前田正治・相葉有流・矢島房利・安東次男／楳嶮と中国 広田二郎／加藤楳嶮と石田波瑠 吉田北舟子／加藤楳嶮と旅 加藤知世子／楳嶮と美術 目について 松崎豊／加藤楳嶮の門流 久保田月鈴子／加藤楳嶮著書解題 石倉昌治／加藤楳嶮略年譜 石倉昌治(編)

特集・飯田蛇笏読本

俳句研究

飯田蛇笏三百句 飯田龍太(抄)／いのちの相 広瀬直人／飯田蛇笏と甲斐の自然 福田甲子雄／飯田蛇笏の光と影 米山源雄／虚子の句・蛇笏の句 大井雅人／「飯田蛇笏」私論 阿部完市／蛇笏管見 飯島晴子／俳句管見 飯田蛇笏の一句 飯田龍太・山口青柳・皆吉爽雨・永田耕衣・塚本邦雄・佐藤鬼房・金子兜太・原子公平・能村登四郎・藤田湘子・上村占魚・三橋敏雄・赤尾兜子・小川双々子・岸田雅魚・高柳重信・林田紀音夫・草間時彦／硬質のやさしさ 山口冬男／飯田蛇笏とその門弟たち 田中鬼骨／蛇笏先生のこと 小林富司夫／蛇骨と旅 石原舟月／桐ヶ谷 松村蒼石／飯田蛇笏の旅 高室真龍／秋田夜情 依田由基人・恩田季子／わが師・飯田蛇笏 柴田白葉女／飯田蛇笏の印象 岡部弾丸／ある日あるとき 植村通章／神のごとく 細田寿郎／十字を負うて 須並二衛／飯田蛇笏著書解題 河野友人

特集・阿波野青歌読本

俳句研究

護摩ノ壇山(30句) 阿波野青歌／卯の花の契 富安風生／古き寄せ書 水原秋桜子／挿話 皆吉爽雨／葛城山の青歌 山口青柳／『萬阿』の世界について 星野麦丘人／句集『国原』の作品について 後藤比奈夫／『春の鶯』断想 清崎敏郎／『紅葉の賀』の秀句 草間時彦／阿波野青歌の近業 森田時／四S時代と阿波野青歌 高柳重信／四S時代・俳句年表 高柳重信(編)／阿波野青歌の写生観 北住徳夫／阿波野青歌と連句 岡本春人／俳句管見 阿波野青歌の一句 平松憲吉・秋元不死男・永田耕衣・米沢吾亦紅・三谷昭・角川源義・桂信子・岸田雅魚・楠本憲吉・赤尾兜子・堀荻男・森澄雄・草野純王・小路榮映・中西利一・山本杜社／阿波野青歌二百句 阿波野青歌／大和と青歌 加藤三七子／阿波野青歌と「かつらぎ」 鳥居ひろし／わが師・阿波野青歌 福本鯨洋／わが師・阿波野青歌 下村梅子／わが師・阿波野青歌 堀磯路／青歌余技の書画 南上北人／阿波野青歌句碑一覽 山本多河史／阿波野青歌著書解題 千原草之／阿波野青歌略年譜 阿波野とい子(編)

新資料発見 鬼城と大阪びと	松本 旭	俳句	10
『山頭火を語る』	萩原井泉水、伊藤完吾編	潮文社	8
『放哉の秀句』	上田都史	潮文社	10
放哉・山頭火の孤絶	村上 護	伝統と現代16	7
放哉と山頭火	金子兜太	春秋	7
反戦川柳作家―鶴彬の肖像	前田慶穂・深井一郎	世界	8
昭和(戦前)一般	宮岸泰治	未来社	9
『劇作家の転向』	川嶋 至	北洋社	10
(*森本薫・木下順二ほか)	平野 謙	筑摩書房	12
『美神の反逆』	石川淳(談)	文学的立場7	7
(*川端・坂口・織田ほか)	紅野敏郎	文学	7
『純文学論争以後』	大久保典夫	文学者	10
昭和十年代を聞く・第7回	梅原正紀	伝統と現代17	9
昭和十年代文学に関する一考察(下)―新創作―青年芸術派―「新文学」をめぐる	中田耕治	伝統と現代17	9
政治的ロマン主義と美意識(316)	伝奇文学のグロテスク		
政治的ロマン主義の行方／殉教と背教／日本への回帰／戦争とロマン主義	グロテスク・孤独の楯―日本		
雑誌『グロテスク』の周辺―昭和エロ・グロ文化について	伝奇文学のグロテスク		
	(*江戸川乱歩・小栗虫太郎・夢野久作ほか)		

『近代文学評論大系7 昭和期』 角川書店 9

総説 平野謙／解題 高橋春雄・保昌正夫／八月報6▽伝統感覚について―小林秀雄と保田与重郎 桶谷秀昭／ナルフ解体と私 山田清三郎／「私小説論」における「自然」 吉田照生／近代文学評論書解題(1)小林秀雄『文芸評論』(2)森山啓『文学論争』 小笠原克

井伏・太宰・坂口・石川淳

『井伏鱒二文学書誌』 永田書房編 永田書房 8

特集 井伏鱒二研究 近代文学試験(広島大)10 9

井伏鱒二の位置 磯貝英夫／井伏鱒二の会話部方言表現技法―「枋助のある谷間」の場合 藤本千鶴子／井伏鱒二とその郷土 岩崎文人／初期の井伏鱒二―「岬の風景」を中心にして― 榎林況二／井伏鱒二と常民―枋助のある谷間―「川」を中心にして― 横山信幸／「多基古村」論 田辺健二／「遠野談」の構造と位置 相原和邦／「瀝民宗三郎」論―庶民文学の方法について― 江後寛土／「黒い雨」管見 寺横武夫／サバルワルさん―ニューデリー便り― 藤高征子／井伏鱒二著作年表(昭和21〜40年)

『黒・水中世界・自然のナルシシズム』井伏鱒二論 徳永 恂 人間として(終) 12

『特集・芥川龍之介と太宰治』 解釈と鑑賞 10

太宰治における反俗 磯貝英夫／太宰治における道化とデカダンスの倫理 小久保実／太宰治における文体と方法ハ、情念の模範ヲをめぐって▽ 高野斗志美／太宰治と『昭和』 三枝康高／太宰治と井原西鶴ハ「言野山」を中心に▽ 田中伸／太宰治とチエーホフハ「斜陽」の成立を中心に▽ 東郷克美／太宰治作品事典 浅井清・渡部芳紀／主要モチーフからみた太宰治 鳥居邦明

太宰治の伝記における盲点 長谷川吉弘 解釈 9

『人間失格』論 平泉道子 国文学研究試験論創刊号 9

『斜陽』について 須藤仙之助 情念5 10

太宰治の文章―文学巷談7 河盛好藏 新潮 7

『グット・バイ』解説 奥野健男 新潮文庫 7

『パンドラの匣』 解説 林富士馬／『パンドラの匣』について 奥野健男／『パンドラの匣』について 村上英雄 旺文社文庫 8

『晩年』解説 櫻庭孝男 講談社文庫 9

『二十世紀旗手』解説 奥野健男 新潮文庫 11

旅と風土と無頼派と 檀一雄・奥野健男 青春と読書 12

(\*太宰・坂口) 奥野健男 文芸春秋 9

『坂口安吾』 解説 奥井光男 冬樹社 12

『坂口安吾研究I』 兵藤正之助 冬樹社 12

『偉大なる落伍者坂口安吾』 森安理文 現代教養文庫 9

『作品論の新視角／坂口安吾I』 島田昭男 日本文学 8

『真珠』論 兵藤正之助 朱羅6 8

『吹雪物語』の問題点―文学位相の転換― 矢島道弘 日本近代文学17 10

坂口安吾小論 細 夏美 京都精華学園研究紀要10 11

坂口安吾のフアルスと戯作 黒田 征 日本文学 11

坂口安吾論―「鬼」の用語を中心に― 兵藤正之助 短大論叢(関東学院女子短大)47 11

坂口安吾と外国文学

江口 清 海 8

「無頼派」からの脱却―石川  
淳の世界4―

中島真二 文宴32 7

石川淳「義貞記」の方法(上)  
(下)

青柳達雄 日本文学 8・9 9

『新潮日本文学33 石川淳集』

新潮社 9

解説 大江健三郎/八月報Vコスモスの夢 石川淳/委細面談 丸谷才一/歴史と文学1 中村真一郎

戦後文学

『わが戦後文学史』

平野 謙 講談社(名著シリ  
ーズ) 9

解説 小笠原克

『現代作家その世界』

山本容朗 翠揚社 9

『戦後文学の青春』

奥野健男 第三文明社 9

語りえぬもの―戦後文学論―

粟津則雄 群像 7

(\*野間宏・春生・昇平・泰淳)

流れる時・流れない時―戦後  
文学の八時間Vについて

黒井千次 人間として終刊号 12

戦後文学の原点―梅崎春生に  
おける「体験」の意味

岡庭 昇 人間として終刊号 12

全体小説と「日本のレアリテ」

尾末奎司 文学 10

て―

小田 実 人間として終刊号 12

いくさの影

岡庭 昇 冬樹社 9

(\*「青年の環」ほか)

『椎名麟三』

大庭 健三郎 群像 7

椎名麟三・懲役人の自由―同  
時代としての戦後7―

大庭 健三郎 群像 7

花田清輝の方法

白川正芳 人間として終刊号 12

『増補植谷雄高論』

白川正芳 冬樹社 9

『植谷雄高作品集別巻』

河出書房新社 11

植谷雄高の想像力 竹内泰宏ほか再録論文八月報V復元能力について 平野謙/俗人・植谷雄高 平田次三郎/つぎの時間の象徴 日高六郎/戦争が終ったあと 中田耕治

純粹と豊饒―福永武彦論(現代作家論22)

菅野昭正 文芸 10

特集・福永武彦―現代小説の  
意識と方法

国文学 11

対談小説の発想と定着―福永武彦氏に聞く 福永武彦・菅野昭正/福永武彦―意識と方法 辻邦生/福永武彦におけるA暗黒意識V 清水徹/福永武彦におけるA幼年V 入沢康夫/福永武彦における愛のかたち 安藤元雄/福永武彦の時間感覚 平岡篤

類/福永武彦の詩 そのA原型Vについて 大岡信/原風景としての絵画 高階秀爾

小説と音楽 粟津則雄/福永武彦と説話 竹西寛子/福永武彦と推理小説 結城昌

治/福永武彦とフランス象徴派覚書 旅行中の日記から 小佐井伸二/福永武彦の風

土に関する試論 源高根/近代日本の作家と福永武彦 關外・漱石の場合 重松泰雄

/戦後文学史のなかの福永武彦 小久保実/風土 畑有三/草の花 熊坂敦子/忘却

の河 粟坪良樹/海市 水谷昭夫/死の島 佐藤泰正/福永武彦著作目録

『幼年』解説

清水 徹 講談社文庫 10

『夢みる少年の昼と夜』解説

篠田一士 新潮文庫 11

中村真一郎への視覚 「小説  
の方法」と現実

竹長吉正 解釈 10

『新潮日本文学48 中村真一郎  
集』

新潮社 7

解説 丸谷才一八月報V昭和初頭の文学少年 中村真一郎/夢見る人 平岡篤頼/社  
会と文学5 中村真一郎

『中村真一郎評論全集』

河出書房新社 12

解説 丸谷才一/解題 小久保実

環境と個のドラマー大岡昇平論	菅野昭正	中央公論	8・9
死のリアリテイにおいて八大岡昇平	中野孝次	すばる10	12
大岡昇平『野火』の研究―改稿を中心として―	池田純益	文学・語学65	9
『レイテ戦記』論序	渡辺澄子	文学的立場7	7
『俘虜記』と『野火』―大岡昇平論3―	中井正義	文芸32	7
『野火』解説	柄谷行人	講談社文庫	10
『現代の文学大岡昇平集』		講談社	8
卷末作家論 平岡篤頼八月報▽断片三つ	丸谷才一		
昏き底からの想像力―武田泰淳と高橋和巳	利沢行夫	群像	11
武田泰淳「廃園の女」―「女」の変貌をめぐって	藤田修一	解釈	12
『司馬遷―史記の世界―』解説	竹内好	講談社文庫	10
『武田泰淳全集 第15巻』		筑摩書房	7
解説 古林尚八月報▽武田さんのこと 夫婦」と武田先生 根本長兵衛	吉田健一／或る縁にし 鳥島敏雄／『日本の		
『武田泰淳全集 第16巻』		筑摩書房	8
解説 古林尚八月報▽武田泰淳さん瞥見 土桜高原 近藤信行	市川三郎／結節点武田泰淳 奥野健男／富		
特集 七〇年代の東洋と日本・武田泰淳		解釈と鑑賞	7
武田泰淳―「賭行無常」と「我慢」について	桶谷秀昭／武田泰淳における「政治と文学」	松原新一／武田泰淳における「滅亡」の思想 森川達也／武田泰淳にお	

『井上靖の世界』	福田宏年	講談社	9
井上靖の少年小説―『あすなろ物語』と『しろばんば』	三枝康高	日本児童文学	8
対談父的なる世界―井上文学のキー・ワード―	井上靖・山崎正和	波	9
『天平の堯・敦煌（井上靖小説全集15）』		新潮社	10
△月報▽解説 福田宏年			
『あすなろ物語・緑の仲間（井上靖小説全集6）』		新潮社	11
△月報▽解説 福田宏年			
『おろしや国酔夢譚・楊貴妃伝（井上靖小説全集28）』		新潮社	12
△月報▽解説 福田宏年			
『楊貴妃伝』解説	石田幹之助	講談社文庫	9
『額田女王』解説	山本健吉	新潮文庫	10

る性と愛について 宮内豊／武田泰淳における風刺の精神 利沢行夫／武田泰淳と仏教思想 諸田和治／武田泰淳の文明批評 櫻庭孝男／武田泰淳におけるグロテスクなもの 笠原伸夫／武田泰淳における文体の特質 小久保実／武田泰淳における転向体験 大久保典夫／武田泰淳における中国体験 布野栄一／武田泰淳における戦中と戦後 白川正芳／武田泰淳と竹内好 尾崎秀樹／武田泰淳とドストエフスキー 拓植光彦／武田泰淳と第一次戦後派 紅野敏郎／『史馬遷』 荻久保幸／『蝦のすゝめ』 水谷昭夫／『「愛」のかたち』 田中美代子／『異形の者』 清水孝純／『風媒花』 松本鶴雄／『ひかりごけ』 高野斗志美／『土魂商才』 島田昭男／『森と湖のまつり』 久保田芳太郎／『貴族の階段』 大河内昭爾／『ニセ札つかいの手記』 山田博光／『秋風秋雨人を愁殺す』 千葉宜一／『富士』 石巻つばいの手記』 山田修一ほか

『櫻門』解説	山本健吉	潮文庫	11
『白の風景 井上靖・詩と写真』	井上靖展パンフレット		9
井上靖・人と作品 福田宏年			
『井上光晴の世界』	ゆりはじめ	第三文明社	8
『黒い森林』解説	高野斗志美	講談社文庫	7
『海へ行く駅』解説	森川達也	潮文庫	9
『階級』解説	松原新一	講談社文庫	11
『現代の文学・井上光晴集』	白川正芳八月報ノ優しきについて 首藤慎爾	講談社	10
巻末作家論 井上光晴のノ戦後ノ	西田 勝	文学的立場7	7
開高健の『夏の闇』		筑摩書房	7
『現代日本文学大系87 堀田善衛・遠藤周作・井上光晴集』			
八月報ノ国際作家堀田善衛 竹内泰宏ノ遠藤周作氏の『掘辰雄』 小久保実ノ全身小説家井上光晴 堀谷雄高ノ堀田善衛 遠藤周作・井上光晴研究案内 古林尚			
原型的再生—日本の「私」を求めてⅧ—(*円地文字)	佐伯彰一	文芸	9
『なまみこ物語』解説	竹西寛子	新潮文庫	8
『新潮日本文学36 田宮虎彦集』		新潮社	12
解説 進藤純孝八月報ノ昭和十年前後 田宮虎彦ノけむり友だち 花森安治ノ歴史と文学4 中村真一郎			
長谷川四郎・モラリストの遍歴—同時代としての戦後8	大江健三郎	群像	8
壺井栄『二十四の躰』解説	壺井繁治	講談社文庫	7
『木下順二評論集Ⅰ』		未来社	11
藤枝静男論	上田三四二	群像	7

『現代日本文学大系48 滝井孝作・網野菊・藤枝静男集』	筑摩書房	21
八月報ノ藤枝静男のこと 本多秋五 藤枝静男研究案内 紅野敏郎		
『現代日本文学大系73 阿部知二・丸岡明・田宮虎彦・長谷川四郎集』	筑摩書房	11
八月報ノ阿部ちゃんのこと 青地良ノ丹念ど釣糸をほぐす丸岡 庄野誠ノ田宮虎彦の文学・岩崎親ノ庶民的な大男 霜多正次ノ阿部知二・丸岡明・田宮虎彦・長谷川四郎研究案内 井口一男		
『山室静著作集3・新編踊り場にて』	冬樹社	
八月報ノつつましさ 結城信ノ山室さんのこと 萩原葉子ノ魔法使いの弟子 立原えりかノ根性を捨てたヒューマニスト 桶谷秀昭		
『山室静著作集4・愛読する作家たち』	冬樹社	9
八月報ノ山室静の詩 会田綱雄ノ平明に澄んだ水面 渋沢孝輔ノ不可能性としての『善』 磯田光一ノ信州佐久と山室先生 福田光子		
『山室静著作集5・世界文学の窓』	冬樹社	11
八月報ノ山室さんとアイランド・サガ 柄谷行人ノ静かな山室さん 堀多恵子		
『現代日本文学大系5 世界文学の窓』	教文館	10
『現代日本文学大系5 世界文学の窓』	教文館	11
解説 佐々純一郎八月報ノ対談自然に流れ出ることば 小川国夫・武田友寿 (*遠藤周作『海と毒薬』島尾敏雄『死の棘』椎名麟三『神と道化師』)		
『現代日本文学大系8巻』	教文館	11
解説 武田友寿八月報ノ対談キリストが大好き 田中澄江・森礼子 (*椎名麟三『美しい女』第三の証言 森内俊雄『傷』三浦朱門『セミラミスの園』)		
『現代日本文学大系3巻』	教文館	12
解説 上総英郎八月報ノ対談生き方の底を流れる文学 森有生・斎藤末弘		

〔矢代勝一〕『享楽考』島尾敏雄『出孤島記』曾野綾子『河岸群像』遠藤周作『その前日』椎名麟三『重き流れのなかに』高堂要『よいやきのよいやき』

三島由紀夫と安部公房

『総括三島由紀夫の死』

奈須田敬

原書房

11

文武両道の沙漠―三島由紀夫論―

入江隆則

新潮

11

ドラマのはてに―三島由紀夫の真摯―

高橋英夫

新潮

11

死の絵

高橋睦郎

新潮

11

三島さんとギリシアのこと

呉茂一

新潮

11

表面的な思い出など

北杜夫

新潮

11

『豊饒の海』

寺田透

文芸

8

『仮面の告白』成立をめぐる詩の訣れ

齋藤順二

近代日本文学(二) 松学舎大) 創刊号

11

三島由紀夫少年詩篇

小川和佑

現代詩手帖

10

パリの三島忌

黛敏郎

浪曼

11

特集・三島由紀夫

浪曼

12

△対談▽三島由紀夫とその生と死

林房雄 村松剛▽三島由紀夫と蓮田善明 岡保生

▽三島由紀夫のスキヤングリズム 田中美代子▽三島由紀夫とギリシャ悲劇 利光哲夫▽保守有終の文化 古本春哉▽三島由紀夫の悲劇△第一部▽今野哲男▽三島由紀夫の憲法論「権の会」裁判の証人として 田中忠雄▽辞世の歌について 高島賢司▽息苦しい想い出 徳岡孝夫▽わが心の三島由紀夫 山口基▽三島由紀夫 保田与重郎▽演出家の眼 五社英雄▽雷(＊)学習院時代 清水文雄▽私の「青春のうた」の終焉 村松英子▽「剣道五段」三島由紀夫 吉川正実

終末観と「覆夷」△三島断想▽

村松剛▽三島由紀夫における天折の思想 松原新一

▽三島由紀夫における意識と存在 渡辺広士▽三島由紀夫におけるエロスとタナトス

特集 美と殉教・三島由紀夫

解釈と鑑賞

12

終末観と「覆夷」△三島断想▽

村松剛▽三島由紀夫における天折の思想 松原新一

▽三島由紀夫における意識と存在 渡辺広士▽三島由紀夫におけるエロスとタナトス

西村亘▽三島由紀夫における唯美と詩精神 田中美代子▽三島由紀夫における古典主義美学 櫻庭孝男▽三島由紀夫における劇的精神 堂本正樹▽三島由紀夫の文明批評 谷崎昭男▽三島由紀夫における時事的素材とその造形 高野斗志英 三島由紀夫における反社会性 遠丸立▽三島由紀夫における文体の特質 松本鶴雄 三島由紀夫と日本浪漫派 大久保典夫▽三島由紀夫と古今集 新古今集八月光垂迹▽塚本邦雄▽三島由紀夫における戦後の意味△「野火」と「金閣寺」▽利沢行夫 三島由紀夫と川端康成 三枝康高▽三島由紀夫とジョルジュ・パタエ 古島健三▽「文化防衛論」をめぐる 村上二郎▽三島事件の内包するもの 古林尚▽「花ざかりの森」長谷川泉▽「仮面の告白」 吉田潤生▽「愛の渦き」 久保田芳太郎▽「潮騒」 助川徳是▽「近代能楽集」 水谷昭夫▽「金閣寺」 石崎等▽サド侯爵夫人 野村胡堂▽「真夏の死」 曾根博美▽「憂国」 「英霊の声」 島田昭男▽「美しい星」 白川正芳▽「太陽と鉄」千葉宣一▽「豊饒の海」 栗坪良樹▽三島由紀夫のアプローチ 拓植光彦▽海外における受容状況 千葉宣一ほか

文学と祝祭―『仮面の告白』から『風流夢譚』まで―

堀切直人

道

対談三島文学を俯瞰する―

佐伯彰一・村松剛

波

三島由紀夫とラディゲに就いて

江口清

ちくま

全集の校訂からみた三島文学

田中美代子

波

三島裁判か陽明学裁判か

平岡梓

文芸春秋

三島事件の裁判長として

榊淵理

文芸春秋

三島由紀夫氏の蔵書から

島崎博

波

//三島作品連続公演の裏方

葛井欣士郎

波

特集 安部公房―文学と思想

国文学

9

対談 人間・共同体・芸術―安部公房氏に聞く 安部公房 磯田光▽安部公房の詩

頭防衛/安部公房における小説の方法と文体 平岡篤朗/壁―S・カルマ氏の犯罪

小笠原克/けもたちは故郷をめざす 栗坪良樹/砂の女 磯貝英夫/燃えつきた

地団 石崎等/安部公房のドラマツルギー 岩淵達治/どいり狩り 大島勉/友達

石沢秀二／未必の故意 渡辺淳／安部公房の批評の構造―「砂漠の思想」を中心に  
 紅野敏郎／猛禽の心に計算機の手を 山田博光／内なる辺境 砥谷悠／演出家としての  
 の安部公房 尾崎安次／安部公房と映画 佐藤忠男／鋪石の言葉 秋山駿／渡辺公房  
 の矛盾 日野啓三／安部公房と敗戦体験 大久保典夫／安部公房と共同体 渡辺広士  
 ／安部公房と転向論 松原新／安部公房における仮面の思想 高山鉄男／カフカと  
 安部公房 諸田和治／チャベックと安部公房 栗橋雅／シュルレアリスムと安部公房  
 生田耕作／西欧の批評にみる安部公房 武田勝彦／福谷体・評伝安部公房 高野斗志  
 美

日本文学を読む(7・9) 安 ドナルド・ 波 8・10  
 部公房(1・2) キーン

『安部公房全作品 第5巻』 新潮社 7

△付録3▽最も国際的な作家 荒正人／虚無からの出発 櫻庭孝男／変形のイメージ  
 (2) 高野斗志美／「他人の顔」をめくって 武田勝彦

『安部公房全作品 第3巻』 新潮社 8

△付録4▽あまりにも砂的な 倉橋由美子／残糖きとやさしさと 萩原正寿／実在し  
 ないもの 高野斗志美／『飢餓同盟』はこう読まれている 武田勝彦

『安部公房全作品 第1巻』 新潮社 9

△付録5▽安部公房との事 島尾敏雄／「終りし道の標へ」の改訂 磯田光一／ハ  
 裸の現実▽の問題 高野斗志美／ヒューマニズムの論争 武田勝彦

『安部公房全作品 第9巻』 新潮社 10

△付録6▽舞台上の権 小島信夫／観光客としての安部公房 ドナルド・キーン／日  
 常性▽微視的連続感(1) 高野斗志美／『幽霊はどこにいる』論 武田勝彦

『安部公房全作品 第8巻』 新潮社 11

△付録7▽探す人・逃げる人 黒井千次／『友達』のことなど 武満徹／日常性につ  
 いて 高野斗志美／分析批評の結果 武田勝彦

『安部公房全作品 第10巻』 新潮社 12

△付録8▽『壁』の思い出―青春ノートから 小松左京／自己完結への拒否と破壊  
 辻井喬／△発動座標▽と△前庭器性空間知覚▽ 高野斗志美／二十世紀文学の中で  
 武田勝彦

第三の新人その他

『新潮日本文学55 庄野潤三集』 新潮社 8

解説 進藤純孝／八月報V家にあった本・田園 庄野潤三／庄野さんの足 三浦哲郎  
 ／社会と文学6 中村真一郎

『ザボンの花』解説 阪田寛夫 角川文庫 12

跋行の文学―小島信夫論― 饗庭孝男 文学界 12

『現代の文学 小島信夫集』 講談社 12

巻末作家論―「汚れ」と「おかしさ」による変身 大橋健三郎八月報V小島さんの内  
 なる情熱 八木修一郎

私小説の陥穽―安岡章太郎― 山中節子 文学地帯40 7

情報への魔―「月は東に」をめ 阿部 昭 文学界 8

文学的出発論(2) 吉行淳之 清水 信 関西文学16 10

『董謡』について 石垣義明 日本文学 12

『董謡』の多様性と班学習 増田 修 日本文学 12

『董謡』雑感 遠藤誠治 日本文学 12

現代小説理論の形成―遠藤周 玉置邦雄 日本文芸研究24 9

作『宗教と文学』を中心として

遠藤周作『哀歌』解説 武田友寿 講談社文庫 8

『火山』解説 武田友寿 角川文庫 9

『聖書のなかの女性たち』解 矢代静一 講談社文庫 11

説『わたしが・棄てた・女』解 武田友寿 講談社文庫 12

夢の世界―島尾敏雄と庄野潤三―	柄谷行人	文学界	7
島尾敏雄・「崩れ」について―同時代としての戦後9―	大江健三郎	群像	9
△深淵Vにて 島尾敏雄ノ―ト(12)	岡田 啓	あんかるわ32	11
『死の棘』研究	玉置邦雄	人文論究(3) 22	12
『現代日本文学大系90 島尾敏雄・小島信夫・安岡章太郎・吉行淳之介集』	筑摩書房		10
△月報V△関係Vとしてみえる文学(※島尾) 吉本隆明/すんだ目―ある日の小島さん 宗左近/ひぐらし(※安岡) 石山昭/吉行と『世代』の仲間たち 中村稔/島尾敏雄・小島信夫・安岡章太郎 吉行淳之介研究案内 桜井克明			
山川方夫研究	稲垣美知子	藤女子大学国文学雑誌12	10
高橋和巳の戦後	徳久哲夫	人間として終刊号	12
目に見えぬものを伴侶として―高橋和巳と私―	埴谷雄高	文芸	7
高橋和巳のこと、最近の新人作品のこと	小田切秀雄	青春と読書15	7
大江健三郎の表出基盤の把握	永淵道彦	潮流5	10
『芽むしり仔撃ち』論―大江文学の初期―	相原和邦	文学研究36	12
深沢七郎『東北の神武たち』解説	佐伯彰一	新潮文庫	11
野坂昭如と親族―『母陰呪縛譚』への展開	船戸安之	文学者	11

柏原兵三『徳山道助の帰郷』解説	谷口 茂	潮文庫	9
戦後の詩歌	高良留美子	筑摩書房	10
『文学と無限なもの』(※戦後詩・西脇順三郎・天沢退二郎ほか)			
『詩人と権力―戦後民主主義詩論争史―』	浅尾忠雄	新日本新書	11
沖繩戦後詩史	清田政信	現代詩手帖	9
拾ったひとつの眼珠―戦後詩の展開(11)	明珍 昇	関西文学126	10
『全集・戦後の詩(4)』解説	小海永二	角川文庫	11
『安東次男・渋沢幸輔(現代詩論2)』		晶文社	8
『山本太郎・粟津則雄(現代詩論5)』		晶文社	9
『長谷川竜生・片桐ユズル(現代詩論6)』		晶文社	10
『関根弘・鈴木志郎康(現代詩論10)』		晶文社	11
総特集・戦後詩の27年	現代詩手帖		8
偽善の系譜 杉本春生/死者との連帯の風土 星野徹/墮落の思想 花田英三/意味と行為 高石四郎/意味場の構造 沢村光博/『現実の空間』から『虚の空間』へ 平井照敏/戦後詩における形式について 原崎孝/律の回復―戦後詩と短歌 馬場あき子/錯眼からの脱出―戦後詩と俳句 赤尾兜子/座談会・定型と韻律のゆくえ 菅野昭正・篠田一士・田村隆一/座談会 戦後詩とはなにか 鮎川信夫・粟津則雄・長田弘/戦後詩年表1945-1970 小川和祐編ほか			
共同討論・現代の詩論 変貌する現代の詩論	粟津則雄・天沢退二郎・ユリイカ 入次康夫・渋沢幸輔		12

共同討論・現代の詩論 とは何か	詩論	吉本隆明・清岡卓行・大岡信・鮎川信夫	ユリイカ	12
前衛の詩論―小野十三郎・長谷川竜生の詩論		中川 敏	ユリイカ	12
清岡卓行と批判		宇佐美斉	ユリイカ	12
入沢康夫詩論についての覚え書		池沢夏樹	ユリイカ	12
対自の臆―天沢退二郎の詩論		橋本真理	ユリイカ	12
不可視の沈黙をめぐって―黒田喜夫の詩論―		倉橋健一	ユリイカ	12
不可視体へ疾駆する言語―山本太郎の詩論―		諸田和治	ユリイカ	12
批評の遊撃性―大岡信の詩論		星野 徹	ユリイカ	12
鮎川信夫の詩論―鮎川・吉本の戦争責任論をめぐって―		高良留美子	ユリイカ	12
古びて大きな共和国一つ 谷川雁ノート(3)		藤枝 元	あんかるわ31	7
『現代短歌美と思想』		菱川善夫	桜楓社	9
『現代の短歌』		碓田のぼる	新日本新書	10
戦後批評				
『戦後文学論争(上・下)』			番町書房	10
監修 臼井吉見／編集 課題 紅野敏郎・大久保典夫・三好行雄・高橋春雄・吉田照生・保昌正夫				
戦後私小説論の方法―反市民性を敵とする文芸批評―		石阪幹将	neo apes guerres 9	11
寺田透論―スタヴローギンの肉体―		磯田光一	群像	10

絶望の起克(*竹内好)	川本三郎	辺境9	11
日本浪漫派の自己否定	松本健一	辺境9	11
(*竹内好)			
鶴見祐輔論	田辺明雄	関西文学124	7・8
特集 吉本隆明	臨増現代詩手帖		8
思想詩人吉本隆明 鮎川信夫／吉本隆明の戦争責任論 大熊信行／吉本隆明の詩論とその位置 遠丸立／『固有時との対話』研究 宮城賢／安保闘争と近代文学賞 壇谷雄高／吉本隆明との通交 島尾敏雄／自然科学者としての印象 奥野健男／吉本隆明と三島由紀夫 白川正芳／福田恒存と吉本隆明 磯田光一／吉本隆明の光太郎研究史への一言 上村武男／今氏先生のこと 北村太郎／府立工业化時代の吉本隆明 川端要寿／ただ黙々と 黒田三郎／えみと沈黙 月村敏行／『試行』創世期における吉本隆明像 村上二郎／年代抄 1939-1952 川上春雄ほか			
∧指示性の根源∨について―吉本隆明	菅谷規矩雄	ユリイカ	12
詩的迷路の向うがわへ―吉本隆明の詩論	岡庭 昇	ユリイカ	12
吉本隆明私論―第一章戦争と敗戦―	根本博愛	未踏3	11
吉本隆明論『言語にとつて美とは何か』の構造(上・中)	河野信子	ピエロタ16・17	10・12
続『マチウ書試論』批判	上総英郎	早稲田文学	10
『現代の文学 吉本隆明集』		講談社	9
卷末作家論―吉本隆明・受記品 毛利ユリ八月報∨黙示録のひびき 島享			
『中村光夫全集 第3巻』		筑摩書房	7
八月報∨留学生時代の思い出 小林正／陽気な敵意 大久保房男／明治の作家論 秋庭太郎			

- 『中村光夫全集 第6巻』 筑摩書房 12  
 解説 江藤淳／八月報／東京人 永井龍男
- 『中村光夫全集 第8巻』 筑摩書房 9  
 八月報／学生時代の光夫さん 鈴木力衛／「戦争まで」の思い出 三浦朱門／証人席の中村さん 渋沢竜彦
- 『中村光夫全集 第6巻』 筑摩書房 10  
 解説 寺田透／八月報／中村光夫と戦後派 壇谷雄高／小判がた 庄野潤三／論争家・中村光夫 平野謙
- 『中村光夫全集 第12巻』 筑摩書房 8  
 解説 大岡昇平／八月報／「戦争まで」―むかしはじめて読んだころ 中野好夫／半紙のこと 遠藤周作
- 『現代日本文学大系66 河上徹太郎・山本健吉・吉田健一 江藤淳集』 筑摩書房 8  
 八月報／晩年の仕事と志（\*河上） 林房雄／経営の頃（\*山本） 遠藤周作／吉田さんのこと 杉森久英／『三田文学』の頃 田久保英夫／河上・山本・吉田・江藤研究案内 紅野敏郎
- 『現代日本文学大系47 中島健蔵・河盛好蔵・中野好夫・桑原武夫集』 筑摩書房 9  
 八月報／中島健蔵のこと 諸井三郎／河盛さんのこと 桑原武夫／中野好夫のこと 中島健蔵／交友五十年（\*桑原） 河盛好蔵／中島・中野・河盛・桑原研究案内 今村忠純
- 日本近代文学館第8号 日本近代文学館 7  
 「読書する怠け者」 小松伸六／評論の世代 野口富士男／私信と原稿 遠藤周作／白崎礼三詩集のこと 富士正晴／熊沢復六の文学理論翻訳書 谷沢永一／吉村達「美しき墓標」 竹盛天雄／結城素明「芸文家墓所誌」資料 石井潤／「大衆文学」の歩み展 特集Ⅴ大正デモクラシーと大衆文学 木村敏／われ等の歩み 白井番二／端境期に生

きる 杉本苑子／長谷川伸と新麗会 村上元三／「家庭小説」あれこれ 和田芳恵／大衆文学のおもしろさ 尾崎秀樹

日本近代文学館第9号 日本近代文学館 9  
 文士と色紙 飯沢匡／日記と手紙 瀬戸内晴美／「川端康成展」特集Ⅴ世界の中の川端康成 川端香男里／「伊豆の踊子」まで 長谷川泉／「雪国」創作メモについて 平山城児／川端先生の書斎 北条誠／川端さんの全集 進藤純孝／桜痴研究のたかり 前田愛／「火野葦平展」始末 劉寒吉／三木露風書簡 安部宙之介／私小説作家の小説観ひとつ 大森澄雄／第一書房のころ 三浦逸雄／牧水記念館 大悟法利雄／「雑誌目録」のこと 小田切進

日本近代文学館第10号

日本近代文学館 11

赤字・黒字 三浦朱門／中国の姿 中島健蔵／「川端康成展」を見て 生方たつる／「俳人展」雑感 石原八束／「雑誌目録稿」私見 千葉直一／風雨楼主人・緒方流水 山田博光／川端康成の北条民雄宛書簡 光岡良二／「近代作家展特集Ⅴ」逍遙先生 稲垣達郎／花袋と自然主義作家 小林一郎／回覧雑誌「学生倶楽部」 高田瑞穂／小林多喜二の初期 紅野敏郎／堀辰雄の詩「病」 菊地弘

一九七二年前期・拾遺（その2）

- 『円朝考文集4』 円朝考文集刊行会 6  
 虜囚の辱 井上 弘 かながわ高校国語の研究8 5
- （\*鋤雲・柳北ほか）
- 「人生相渉論争」をめぐる二、三の問題 水上 勲 同志社国文学7 2
- 鷗外の歴史小説試論(2)―「興津」改作の背景― 木村真佐幸 札幌大学紀要3 3
- 森鷗外と「宮中某重大事件」 古川清彦 東京学芸大学紀要23 2

「草枕」のモデル考（改訂補稿）	蒲池正紀	熊本短大論集45	6
「それから」論	深江浩	同志社国文学7	2
夏目漱石「それから」とダヌンツイオ「死の勝利」	剣持武彦	イタリア学会誌20	1
作家評伝 正岡子規—開汗	小島信夫	日本の将来4	5
作家評伝 石川啄木—洪民小天地	小島信夫	日本の将来3	2
石川啄木伝の一研究—遺骨の函館埋葬について—	桜井健治	湘南文学（東海大）5・6合	3
近代和歌史におけるキリスト教—啄木とキリスト教（4）8	上田哲	岩手短歌 1と5	5
長塚節について—明治四十年の平泉・象潟—傷心—の旅の実否を中心として—	横瀬隆雄	茨城工業高等専門学校研究彙報7	3
「廢園」と先行詩—露風—作品発表年譜（抄）—	三浦仁	山梨県立女子短期大学紀要5	3
定型短歌論のための検証—土岐善麿・大熊信行の視点	篠弘	雁—映像—定型詩2	3
河東碧梧桐の「八年間」その他	北川漸	かながわ高校国語の研究8	5
茂吉歌集の日記形態化について—いわゆるスランプ時をめぐって—	鮫島満	かながわ高校国語の研究8	5
永井荷風論—花柳小説の成立をめぐって—	渡辺善雄	文芸研究（東北大学）70	6
『野の花』の序」論	小林一郎	東洋大学短期大学紀要3	3

『毒菓を飲む女』論	瀬良垣宏明	興南研究紀要（興南高校）創刊号	5
清子との闘争—「果鴨日記」を中心として	瀬良垣宏明	馬車（興南文芸クラブ）2	2
岡本綺堂の新史劇—初期作品の素描—	川崎明	文芸研究（東北大学）70	6
白樺派の文章史的考察（上）—自分小説の創始をめぐって—	遠藤好英	文芸研究（東北大学）70	6
志賀直哉の文学—赤城・草津を中心に—なき志賀直哉氏にささぐ	市川為雄	前橋市立工業短期大学研究紀要6	5
武者小路実篤とトルストイズム—『幸福者』の世界—	朝下忠	文芸研究（東北大学）70	6
△飛躍の論理△の構造—「或る女」論のための一視点—	佐々木靖章	文芸研究（東北大学）70	6
△弱者の論理△の構造—有島武郎の作品理解のために—	佐々木靖章	文化（35）4	3
倉田百三論—愛について—	熊田裕子	たまゆら（比治山女子短大）4	6
芥川龍之介の美的技巧	今野宏	文芸研究（東北大学）70	6
「藪の中」恣考	寺横武夫	国語国文論集（安田女子大）3	6
『芥川龍之介—その歴史小説と—今昔物語—』	布野栄一編	桜楓社	4
「地獄変」をめぐる問題	岡崎義恵	文芸研究（東北大学）70	6
「奉教人の死」論—「この国のうら若い女」のイメージ—	平岡敏夫	湘南文学（東海大学）5・6合	3

芥川龍之介の評論「芭蕉雜記」 について	北条常久	文芸研究（東北大 学）70	6
無頼の反措定—三野混沌覚書 (1) —	馬渡憲三郎	みとす5	5
賢治のベエトオフェン	佐態紘也	国語研究会報（東 国学園高等部国語 研究会）	6
宮沢賢治とその周辺	川原仁左エ 門編著	私家版	5
「赤い鳥」童謡研究	兼子明美	国語の研究（大分 大）6	6
「風立ちぬ」の構成的性格— 作中作の設定をめぐって—	大森郁之助	札幌大学紀要3	3
川端文学における美の世界に ついて	竹本博子	たまゆら（比治山 女子短大）4	6
小林秀雄「無常といふ事」私 解—その方法への序説—	越智良二	愛媛国文と教育4	6
「人間尾崎放哉」	上田都史	潮文社	6
『立原道造論』	小川和佑	五月書房	5
『立原道造全集4』	角川書店	角川書店	1
解説 鈴木享／立原の建築論Vについて 生田勉／編註 堀内達雄 △月報V△腕 さVについて 小川国夫／立原道造さんと矢山哲治さん 松原一枝／綴友立原道造 伊藤憲治／立原道造と私3 近藤武夫			
狼疾の人・中島教—教科書に あらわれた作家論（2）	五嶋靖弘	国語研究会報（東 国学園高等部国語 研究会）	6
「人虎伝」の周辺	水野美知	かながわ高校国語 の研究8	5
坪田譲治における児童像	高橋 功	湘南文学（東海大 学）5・6合	3

『石田波郷全集』別巻 解題 村山嘉郷八月報V病床の詩人の思い出 橋本英吉／永遠の作家 五所正之助／ 俳句は生命 石田あき子／私の貰った句 池上浩山人	角川書店		5
『猪狩満直と「移住民」』	佐藤久称	尼子会	4
荒正人ノート—戦後文学出発 をめぐって—	矢島道弘	かながわ高校国語 の研究8	5
真の自由に憧れた首のない黒 い犬—椎名麟三『懲役人の 告発』	倉科克彦	国語研究会報（東 国学園高等部国語 研究会）	6
大江健三郎論 △辺境Vをめぐ めず言葉	菅 孝行	日本の将来3	2
散文におけるフレイムの問題	鳥居邦朗	雁—映像十定型詩	6
文芸映画と歴史映画—内田吐 夢の昭和十年代	富士田元彦	雁—映像十定型詩	6
萩原朔太郎『月に吠える』論	岩根町子	帝塚山学院大学日 本文学研究4	3
書簡を通じて見た漱石と子規	西浦英之	皇学館大学紀要10	1
鷗外と漱石	長谷川泉	学士会会報74	1
蒙求と芭蕉・子規・漱石	早川光三郎	滋賀大図文9	1
「道草」論—「私」の相対性に ついて—	菊田 均	風宴8	1
漱石と大塚楠緒子	松本健次郎	日本医事新報	3
『文学論』第五篇について— 比較文学的研究—	塚本利明	研究論叢（都立商 科短大）6	3
漱石と書2	中島茂三	群馬大学教育学部 紀要（人文・社会 科学編）21	3
夏目漱石『坑夫』試論（一）	本多 仁	芸文叢5	4

夏目漱石『草枕』について	浜千代清	女子大國文55	4
漱石と神経衰弱	松本健次郎	日本医事新報	5
特集・夏目漱石	実存主義60		6

一九七二年後期論文目録拾遺(その1)

\* 余白に、校正の段階で気づいたもの、発行日付よりかなり刊行が遅れたもの一部を記しておく。なお、更に漏れたものは(その2)として次号に掲載したい。

漱石と内向性鬱病	松本健次郎	日本医事新報	7
漱石と大川周明の精神病	松本健次郎	日本医事新報	8
漱石への方法的接近―「野分」を中心に―	鈴木醇爾	徒・創刊号	8
『漱石文学における「甘え」の研究』(*改題新装版)	土居健郎	角川文庫	9
『留学の思想』		三修社	9
漱石の留学 谷口茂/留学の明暗―鷗外と漱石の場合 滝内楓雄			
夏目漱石におけるG・ギッティング体験―『門』に関連して―	中野記偉	比較文学15	10
漱石文庫蔵 Tolstoy: What is Art? にみられる漱石の書き入れについて―	高橋美智子	比較文学15	10
「則天去私」についての私見	杉山和雄	比較文学15	10
漱石論序説―『夢十夜』をめぐって―	安川定男	同時代28	10
夏目漱石と外国文学	井上百合子	英語青年	10

『夢十夜』―十夜―夜の夢と現つと 柏原啓一/『それから』自然と現実 片山洋之介/『彼岸過迄』と『行人』―通心の不可能性と想像的視点 吉沢伝三郎/『こゝろ』石原静雄/『道草』と『明暗』についての対話 湯浅泰雄/漱石における「天」と『経済』 北山正迪/夏目漱石における自己の問題 野崎守英

『草枕』雑見	釘宮久男	大分工業高専研究報告8	11
夏目漱石論VI―知識の位相とその論理―	梶木剛	試行37	11
『漱石文学全集 第八卷』	集英社		8
解説 荒正人/八月報V大塚楠緒夫人のこと 林原耕三/第一高等学校時代の夏目金之助先生 山下清/硝子戸の中の女 早坂礼吾/漱石と病跡学 平田次三郎	集英社		12
『漱石文学全集 第九卷』			
解説 荒正人/八月報V最近の漱石研究 平野謙/漱石の北海道移籍に就いて 林原耕三/漱石の幻想女性と百合の花 小坂晋/エリセイエフ教授を訪ねて 倉田保雄			
漱石研究の問題点	小坂晋	浪速書林古書目録5	12
壇一雄素描	堀江晋	東海紀要(東海大)8	7
鷗外『津下四郎左衛門』の主題と史伝	北川伊男	皇学館論叢(5)5	10
日本浪漫派についての回想―その論の序として―	榊原忠彦	日本文学研究(高知)10	12
大正文壇における「中央文学」の位置	紅野敏郎	学術研究(早大)21	12

## ▽書評△

## 布野栄一著 『本庄陸男の研究』

小笠原 克

大正十二年、長野県に生まれた布野栄一氏が、一兵士として敗戦を迎え、学窓に戻ったのは、昭和二十五年のことであった。滝川・石狩当別・小樽と転任、母校日本大学へ移るべく北海道を離れたのが昭和四十年だったと思う。二十代後半からの十五

間は、誰にとっても、夢を充実させるための最も重要な時期である。布野氏における北海道時代は、その過半を本庄陸男生誕の地・当別で送った。氏にとって本書が、ことさらに意味深いものであることを憶わずにはいられない。

当別は国鉄札沼線さしなまで札幌から四十分余り、例えば土曜日ちうりつに札幌で集りがあると、勤務にはさしたる支障なく出て来られる。北海道大学の研究室在勤当時から現在の職

場に変っても、私は研究会などで氏としばしば顔を合わせ、同人誌『位置』でも一緒に仲であつたから、その人柄も学風も並以上に知りえたし、今でもそのことをしあわせに思っている。本書が、私にとっても意味深いゆえんである。

第一章『石狩川』の研究』五篇、第二章『本庄陸男 人と文学』二篇、第三章『本庄陸男作品研究』三篇、第四章『石狩川』の資料翻刻一二篇。これらのほとんどすべてを私は、本書の成る前に読んだ。第五章「写真・年譜・研究文献目録」それ自体も読んでいた。文献目録所掲の、本書収録以外の布野氏の論や、主要な本庄論も読んでいる。研究書には珍らしいカラー写真、文学碑『石狩川』を訪れた回数でなら、私はあるいは日本有数でもあるだろう。NH

K教育TV「教養特集」の一時番組にしゃしゃり出て、当別開拓の旧武士団や『石狩川』を語った恥も含めて、私は、本庄陸男を論じた本書を論ずる資格を、否応なしに備えていることにもなる。

それだけに、責任も重い、気も重い。まず私は、本書から布野氏の人柄を感受してしまふ。論文は二の次ではないが、原稿用紙のマス目を埋め、グラ刷を校正する氏の姿と重ねて論文を読むことになってしまふ。誠実にして溫柔。これが本書第一の特色である。

それは布野氏自身の、そしてたぶん本庄陸男その人の、人柄の表現でもあるだろう。よそ見をしない、愚直に近いひたむきさ。生の静かな、そして激しい燃焼。数え三十五歳で逝つた、病身薄幸の、一部にしか知られなかつた大才へ、布野氏は敬愛と親炙を積み重ねることで、論文を書いた——というよりも、それがおのずから論文を成した。あざとい言辭はかけらもない。いたわりの念、哀惜の思いが本書を包んでいる。年譜・文献目録で「友情出演」した山田昭夫氏の篤実精緻な博搜とあいまって、本書

は本庄研究の記念碑であり、文学碑と並び立つ紙碑である。

私が最初に接した布野氏の本庄論は、本書冒頭の『石狩川』が描いた開拓集団」であった。それはたしか、日本文学協会北海道支部の研究発表において聴説し、稿成つて『日本文学』（昭31・2・8）で熟読したものである。叙事詩的文学としての『石狩川』論であった。

本書では、その部分——『日本文学』誌初出では冒頭と末尾に配された、叙事詩的把握とエンゲルスのリアリズム論が削除された。それは、おそらく『石狩川』論——その歴史文学性——（初出は『石狩川』論、昭34）との重複を配慮してであり、代つて随所に新稿を補入することで厚みを増そうと意図したものであろう。

しかしそのことによつて、「開拓集団」論は、資料へのもたれかかりを深め、史実による説得力に頼る結果を招いた。『石狩川』が描いた」というところにアクセントを置くモチーフ（これは、初稿でも必ずしも十分な展開はなかった）が薄れ、論としての前進をもたらしていないように思

う。

『石狩川』論——その歴史文学性——も、その△歴史文学性▽なり△叙事詩▽性なりをルカーチの『戦争と平和』論や、『世界文学大辞典』（中央公論社）の「叙事詩」の項（藤好義執筆）や（初出誌ではさらに西郷信綱の論を引用）に寄りかかつており、全体としてハメ絵的・解説的な域にとどまっている。つまり、『石狩川』という作品そのものに内在し、こみあげてくる感動が△叙事詩的文学▽論を必然とするとくには論が底深い地点から生成されていない。

……『石狩川』を△叙事詩▽として完成しようとして、本庄が述べたその叙事詩の意味は、右の工藤説と同じ基盤に立ち、ほぼ同様な内容と思われる。そして『石狩川』の素材となつた時代は、そのような叙事詩的文学の生れ得る転形期であった。明治維新と呼ばれるその時期は……（本書一八ページ）

たしかに、「あとがき」によれば本庄陸男はこの小説で、石狩川の△興亡史▽——△その川と人間の接触▽を土地の歴史に見ようとし、その土地の半世紀に埋められた

△われらの父祖の思い▽を覗こうとした。

△あれこれ不備は指摘して貰いつつ、一大叙事詩として完成しよう▽と志した。その願望希求はそれとして、しかし、問題はそれがいかなる表現として達成し得たかが論じられなければならない。布野氏は、史実との密着・乖離をデータとして詳しく指摘はするが、また、△素材となつた時代▽を手短かに平叙はするが、それらのことと作品とのダイナミックな相関については、鋭音鋭くめぐり出してはいない。「開拓集団」論から叙事詩文学論をとりはずしたことは、論の整序において奏功したけれども、『石狩川』が描いた、表現世界の功罪を論ずる姿勢からは後退したと言わなければならない。

この、いわば資料主義的な傾きを見せる立論の態度と無縁ではないものとして、本庄陸男という創作主体なり作品なりの客体化が手薄なことを感ずる。やや美々しく甘い筆致が顔を出すのもそのゆえだろう。

……彼（父、一興の）は開拓農民としての一生を苦難のうちに閉じた。その時、陸男は上京し青山師範に学んでい

て、父の死をみとることが出来なかつた。陸男は慟哭の思いなくしては父一興の生涯をふり返れなかつたのである。(六〇ページ)

これは、新聞小説『石狩は懐く』が『石狩川』の習作であり、前者の主要人物山科儀助のモデルは父本庄一興だろうと推論する文脈のなかに出てくる。その問題はあとで吟味するとして、私は、論文中のこういう文章にはなじまない。

……『石狩川』では彼は父祖の思いを覗いてみようとし、父石狩川興亡史Vを描きたいと念願した。このことは父の生涯とその夢をしのび、作品に生かそうとする陸男の子としての愛情であったのである。(六一ページ)

作者の「あとがき」における含意のふくらみを、ストリートに『石狩川』の達成に直結させることも吟味を要しようが、さらにそれが父子としての愛情Vの産物と哀傷されるのはどんなものか。

……本庄陸男はその生を、るつぽのような激動の地に享けた。父一興と結びつく、その興亡史の回想は、彼をなつ

かしがらせ、勇気づけ、感動させ、哀傷させる。ここに『石狩川』を過去の回想の文学とさせた一根拠が成立するのである。(六一ページ)

なつかしがらせた、とは、何のことが、何を証拠とすることか。この一言が父過去の回想の文学Vという規定をナイーブに曳き出すことも含めて、布野氏の史実を見る眼はうるみがちであり、ことはむしろ布野氏の主観的な抒情で処理されすぎてはいないか。

……『石狩川』はこうして二重の意味で現実の自己を語り、自己の姿を描く作品として創作されたのであった。そして、現実をいかにきびしく生きるかというテーマとして昇華し、作中すべての登場人物の描写を通して風雪に耐える姿を造型したのであった。父石狩川の興亡史V、父祖の思いVに密着しながら……。(六九ページ)

しかし、これを実質的な結論とする『石狩川』論——その歴史文学性——が、論証のために引用する文献は『石狩は懐く』、有島武郎「カインの末裔」、書簡・諸家の

評、そして先にあげた辞典の記述などであり、『石狩川』本文からの引用も、場面や情況の説明の域にとどまり、文学作品としての独自の特色を内側から照らしたするための論理形成の契機たり得ていない。道路開通の場面の父集団Vの描写に触れても、

……今、三十年を越える年月を経て、この小説を読んで、岩出山武士集団のたどった苦難の前進が、荘重な筆致で語られていることに、私は強くうたれる。(中略)まことに感動的ださえある。(七八―七九ページ)

という讚嘆的筆致が先行し、……そこには中心に置かれ、頂点を形づくる指導者がいる。しかし、それと共にその事業に加わった集団の中の一人一人の意志と行動が、彼らを支えていることを如実に描いた作品である。このような描写を叙事詩的規模の達成と見てよいのであろう。(七九ページ)

と解説されてしまうと、父叙事詩V的とはこの程度の描写なのかとも思う。そして、

……そこで、この集団を離れるとき、

小説中の邦夷も謙も、その人間的魅力を減少する。それは集団の可能性を代表し、統一するという土台を失い、個人的・観念的諸性質をそれに代つて具備して来るからである。そうした要素は『石狩川』第四章に見られる所である。(七九―八〇ページ)

と反転するのも機械的にすぎはせぬか。第四章が心理的葛藤Vや劇的心理描写の色彩Vが強いことは事実であるが、そのことがまた再転させられて、

……『石狩川』のあらけずりで、壮大な、生き生きと描かれた群像の文学という性格から見て、第四章は素材・表現の傾斜した章と思われる。この事も『石狩川』全体の叙事的文学の特徴を、明確に受け取めさせる働きとなっている。(八〇ページ)

と強引に納めることは、その論に承服できないことはさておき、論証も論理もそのけの脱兎、の感がある。氏が△性格Vを規定する……群像の文学Vだと△性格Vを規定すること自体、いささか事大主義的な先入観にすぎぬし、第四章の△傾斜Vが作品の

△性格Vからみてそぐわないのなら、そのことは、論理的には△叙事詩的文学の特徴Vなのではなくて、むしろ△叙事詩的文学Vたりえなかつた欠点とされねばならぬ。さらには、△昭和十年代の、歴史文学の隆盛現象は、農民文学・生産文学・開拓文学の盛んな創作活動の一環として現われたVにせよ、それらは明らかに負数的なものであって、転向作家の大部分が△文学的挫折を経て生計の道に苦吟し、権力による弾圧、執筆内容の制限などの中で、きびしく自己を鍛えなおしたVという認識には同じがたい。具体的に誰々をもつて△大部分の人Vと見なすことができるのか。布野氏の、論証ならぬ観照はあまりに素朴すぎ、判官びいきの△傾斜Vなしとしない。

『石狩川』未完の構想』は、私の論文(『石狩川』の流滅(上))、『立置』(四号)、『石狩川』の完了性論』と名づけ、これへの反論として執筆された。本書には△補論Vとして、拙著収録時の私の論文に改めて触れている。氏に従えば、氏は反論で△作者本庄にとって『石狩川』は完了された作品とは言えないだろうと考え、そのことを推論

したのであるが、私の論には依然として賛同できぬし首肯しがたく、理解出来ないという(二〇六ページ)。何故か、を詳論してないので、私としても遺憾である。

しかし、本書の「転向作家の像・本庄陸男」も併せ、△石狩は懐く』をどのように評価したらよいのだろうかV(二〇七ページ)と問いかけていることには、この場を借りて答えることで書評を閉じたい。

布野氏は『石狩は懐く』を読んだ時△興奮Vをおぼえ、これは『石狩川』の、△明治、大正、昭和と展開する作品構成に見通しを与えるための習作Vと感じ、そのことに△重要な意義Vを見るという(九五ページ)。しかし、この小説は△習作Vであるにしても失敗作であり、むしろ悪作に近い。筋立がごたつく。必要以上に時間の流れを前後させる。心理描写の髪が荒く、作者一人が合点する態の独白が多い。人物の過去と現在の複線を把握しきっていない、等々の、目立った欠陥がある。布野氏は、作品としての評価は投げうち、資料としての意味を重視する。

それはそれでよいでしょう。しかし作中

人物名と、本庄一家の實在人物名との類似を、思いつきの域を出ぬ類推で重ね、いつしか、『石狩は懐く』は、△祖父と父とを事蹟の上で、また名の上で作品の中に描きこめることで、本庄は彼の転向者としての自己の心理を切実なものとして描き、その真实性を与えるための構成を作ろうとしたのであろうV(トコベージ)ということに飛躍してしまう。

残念ながら、それは幻影にすぎない。大井広介の伝える『石狩川』未完の構想における△西南戦争Vの叙述を、布野氏は、本庄一興が関係したらしくもある、佐賀の乱と重ねて想像し、それを、『石狩川は懐く』に出てくる△××騒動Vと△想像を加えながら展開させVて△符号Vさせる。

××騒動が秩父騒動ないし秩父困民党事件であることは明白である。とすれば、作中の太田善兵衛の旧名である井田伝兵衛が、井上伝蔵と重なる名であることのほうが、本庄の祖父に善兵衛がいることよりも重要だろう。困民党の領袖井上伝蔵は、逮捕を逃れて、北海道に渡り、変名し、転々、居を変えた。石狩に足跡を残し、北見

で死んだ。死に際して初めて妻子に真実を打ち明けたことは、大正七年に大きく報道され、講談にもなった。

布野氏がこれを知らなかったらしいのは残念だが、本質的に、秩父困民党ヴィジョンと西南戦役とは天地の差があることを、明らかにした史実に即して辿り直してほしい。

紙幅がつき、意をつくせないが、久保栄の本庄観(とそれに関する拙論の見解)についても誤解がある。例えば△本庄陸男の『石狩川』は、久保栄の「のぼり窯」のように△血縁的な感情Vを真正面から見据えて書いた作品であったのだろうかV(ニニページ)など(「のぼり窯」は血縁的感情とほとんど無縁の次元に昇華している。また久保の本庄観を私は誤りと批判している)。「転向論の研究」も、全体として論史の解説にとどまり、氏の△論Vがない。「転向作家の像・本庄陸男」も、その中での大衆の問題や、突如として本庄にマザー・コンプレックスがあったとされることや、島木健作観や、いずれも詳論を重ねてほしいと望む。転向作家本庄におけるフアシズムへ

の抵抗という筋道が、文学論・人間論として論理的に辿られていないため、布野氏自身の表白ないしオマージュに傾くのも、もたりのりなかつた。

率直に語ろうとして批判がましいことに筆が向かい、美点を列挙する余裕がなくなつた。親しかつた後輩のわがままとしてお許し願いたい。本書の白眉は、その資料翻刻にあると私は思っている。布野氏のほか、「研究文献目録」に八篇ほど採られている坂田資広氏の仕事もあるが、こういう一等資料が容易に読めることになつた喜びは大きいのである。鵜目貫一郎の「從駕日録」は、それ自体の重い感動がある。明らかになつた史実、そして、それを領略し、想裡の潜熱とアマルガメートさせて『石狩川』を顕現した本庄陸男。この二つの関係を、布野栄一氏は、作品の舞台としての北海道石狩郡当別町に居住しつつ、その歴史と現在、その作品と虚実の両者をも胸中に住ませながら、ひたむきに鑲骨の文字を刻んで来た。思いなしに、私には、本書に収められた『石狩川』執筆当時の本庄の写

真が、現在の布野氏の相貌に酷似して見えるのである。(昭和四十七年四月一日、桜

楓社刊、A5版・三九八ページ、三四〇〇  
円)

## 藤岡武雄著 『評伝斉藤茂吉』

### ——茂吉における父なるもの——

米 田 利 昭

本書についての普通の書評は、『国語と国文学』に書いたので、ここでは、本書の提出する茂吉のイメージと、それに触発されるわたし自身の茂吉のイメージとを比べ、そこから本書の特徴を見てみたい。そのさい、茂吉の父が、父との関係がどのように描かれているか、に注目した。

茂吉には二人の父がいる。一人は、実父守谷伝右衛門(熊次郎)である。いま一人は、養父斎藤紀一である。

熊次郎は、こう書かれている。

伝吉は、同村金沢家からひでを迎えたが子供がないため、妻の弟、熊次郎を

養嗣子として迎え、末妹(異父妹)いくを妻合わせた。……家系上はこうしたいきさつで茂吉の両親は結ばれたが、経済的にも恵まれた平和な家庭を営んでいたのである。

「財力もあって平和な家庭」と著者はくりかえす。十二貫そこそこの小男の熊次郎は、器用で唄や踊りをよくし、農兵になって砲術を習ったり、隣家の隘心和尚に草稿を書いてもらって政談演説をしたり、剣術、念仏に凝り、「穀断、塩断などもこころみたのである」と著者は断定しているが、実はこのへんは茂吉自身の『念珠集』

に書かれてある。

熊次郎の日記は簡潔で家事の要点を克明に記して、几帳面さをみせており、茂吉が手帳や日記を書きつづけたものもこの父ゆずりであったといえよう。またこの日記帳には○印表記法が用いられているのをみると、茂吉書簡の独特な○印表記法も父ゆずりの一面をもっているかとも思われる。

几帳面さ、○印、勇猛、凝り性などを父ゆずりと藤岡氏がいうのは、人に臆する性癖や気圧の変化に敏感な体質を母ゆずりというのと同じ手口で、著者はこういう性格ばかりか——「父方の祖父金沢治右衛門(栄吉)が地方の歌よみであったし、母方の祖父守谷伝右衛門(伝吉)が、俳諧連歌をよくしていた人であった」と、文学的にも無媒介に茂吉を父祖と結びつけようとしているが、(そして「兄弟愛は細やかであった」「兄弟愛がみちあふれている」と、愛情の面でも血族に結びつけようとしているが)、これらは、あるものを媒介としてこそ自覚的に茂吉のものとなるのであって、それ自身では別にどうということはないと思う。

むしろ大事なのは次のことだろう。

明治三十四年六月、熊次郎の手で家の大改築が行われた。その目的は養蚕に本格的にとりくみ、蚕種製造に手をのばすためで、この改築は廊下を中心に南北に部屋をおき、蚕を飼うに便利ないように設計した二階建の蚕室兼住宅であった。長男広吉も宮城農学校に学び、本格的に蚕種製造業にとりくんでいる。……守谷家の蚕種は『小石丸』と名付けて売出していた。

父は、蚕種製造業をはじめた。長男をそのための学校にやった。わたしが思うに、彼は、生糸が輸出の花形産業になるといふ時代の趨勢をいち早く察知してそれに順応できる人であった。目先きがきくというか、利に敏い人であった。この点は、茂吉にはなかった。淳朴というみちのく農民のイメージからはみ出ず、しかしその中に含まれている近代志向、開発志向を、自己中の一面としてそなえている人であった。

ここから、彼の三男である茂吉が、同郷の出身で東京で成功している斎藤紀一の許

へとひきとられてゆくコースが、必然的に開かれる。いわば茂吉の生涯を決めた自主的な契機は、熊次郎の内にあったのだ、と思われる。

この父は、『赤光』には歌われていない。たとえば「死にたまふ母」は、母の死を故郷のさまざまな風物の間にとらえたが、弟は二度出てきても、父はいない。

「朝さむみ桑の木の葉に霜ふれど」「桑の香の青くただよふ朝明に」といって、故郷のイメージと八桑∨とは結びついている。

母が目をしまし離れ来て目守りたりあな悲しもよ蚕のねむり

「ひとり来て蚕のへやに立ちたれば」ともいって、蚕種製造業で、大々的に養蚕をしていた家の雰囲気は出ているが、そこに居る筈の父はいない。これは、わが母を愛しむためには、母を犯す父は邪魔であったのであろうが、あるいは紀一にも通ずる父の功利的側面が、歌の世界には夾雑物であったのかもしれない。その父が現われるのは、大正四年に書いた『赤光』再版の跋文である。

歌つくりを現世の道とおもふな。そしてなほ歌をつくつてゐる。西国観世音の札所を巡つて来た故里の老いたる父は「茂吉は歌などつくるさうだな」と云つた。それから田植が忙しいからと云つて帰国した。いまは故里に梅の実黄に落ち、蚕は繭になり、その繭は絹糸になつて、蔵王山の雪はだらに、それが消え、通草の笑いよいよふくれて、大自然といへども刻々に変化してやむ時がない。

「現世出世の道とおもふな」とは、現世出世を思う気持が自分の中にあることであり、それがありながら同時にそれと逆の歌つくりの道もまた自分の中に存在することである。彼のいわゆる悲しきWonneである。この歌の世界に、故郷の父が登場し、故郷のさまざまな写象が見えてくる（中に蚕、繭のそれもある）、ということ、現世出世の道と逆のところに父の姿が見えて来たことである。父のそういう側面が大きく見えて来たことである。これが『念珠集』につながる。『念珠集』における父のイメージは、統一されたそれであ

る。溺死した八十吉のさまを僕が話すと、「一ことも云はずにいきなり僕をにらめつけるやうな顔をし」た父、痰持で、イッへ、イッへ、イッへ、イッへ、イッへ、イッシ、イッシ、イッシ、イッシと咳をする父、そのために生薑の砂糖漬を買ってしまつておき、また好きな納豆を断つた父、早坂新道を茂吉をおぶつて威張つて歩き、後から来た人力車に道をゆずらずに車夫と組みうちをした父、奇蹟を信じ妖怪変化の出現を信じて、七色の光を出すスペクトラを炉の火に投げた父、いたずらして出来た漆瘡を苦もなく治療した父、湯殿山に初詣の時、お山が荒れた、氷の上を渡る時、「茂吉匍へ。べたつと匍へ」といった父、その帰りにぬた餅をごちそうしてくれたが、買ってほしいとせがむ日本歴史の本は、どうしても買ってくれなかつた父、母と僕をつれて青根温泉へ湯治にいき、素人芝居があつた時、ひよつとこになつた父、……そういう父は、小柄だが、精悍な、東北農民の生気をみなぎらせた存在である。そういう父を、大正十二年ミュンヘンの客舎で、四十一歳の茂吉が、医学の勉強が思うように捗ら

ず、教授から、あなたは初心者ではないのですから、この程度では駄目です、といわれるような苦業の中で、その死を知らされ、思い出している。茂吉をミュンヘンに追っているものがいま一人の父紀一だつたとすれば、茂吉に熊次郎の姿をこのように想像させている媒介物は、ほかならぬ紀一であつた、ということになる。

この斎藤紀一という男が、一代のペテン師、山師とまでは言えずとも、自己宣伝の天才というべきはつたり屋で、何度か警察や裁判所のお世話になるといふ法すれすれのいかかわしい機転の連続から、ついには青山脳病院という大病院を創造して院長となり、代議士に打つて出るといふ、立身出世をきわめた痛快無比な男だ——ちようど日本の近代化のみみちさ、あわただしさと同じ速度で、小さな自分をフル回転していった男だ——ということには北杜夫の『楡家の人びと』を一読しても明かである。

紀一の脳病院の経営の実現は同時に養子として期待されていた茂吉の運命にもつながり、精神科医としての道が決まらされたのであつた。

紀一の関係からきた山形勢とひさ(勝子)の関係から来た秩父勢とが入り混り……雑居していたのである。このような大世帯の元締をやつていたひさは、自然に自分の郷里の出である秩父勢に目をかけることが多かつたようである。茂吉はそういう中で精神的苦悩を味わうことが多く……

こうして西洋の出生と共に法律的には、紀一の家督相続人となりえず、西洋が精神病医として独立出来るまでの中つぎ的存在として、その道を歩まなければならなかつた。

こうして茂吉・てる子のバランスを欠いた結婚が紀一の命令によつてのちに執行されていつたのであつた。紀一は自己の名誉心をみたす為にはさつさと実行する反面、だらしなない点も多かつた。

茂吉は養父紀一の生き方と対立してついに紀一に同化し得なかつたのである。

藤岡氏はこういふが、一方でこうもいふ、茂吉は午後正則中学校に通つて勉強

し、夜を日について一高入<sup>ア</sup>学に失敗の雪辱を期した。……そしてこの年精神医学研究のため、ドイツに留学中の養父紀一も、この茂吉の精進を喜び来年こそ一高入学を期待する旨、はるかに書信をよせて彼を激励した。

だから翌年合格した茂吉はいう、「独逸の父上にも報道いたし候……少しは去年の失敗に対して面目が立つと申すものに御座候」。本書では、紀一と茂吉の間に、せいぜい「生活態度」という趣味上の異和感があるだけで、矛盾がない。だが、これらの資料を並べてしぜん想像されるのは、紀一、ひさ、それに女子学習院出のてる子の齋藤勢に対し、まったくの負け犬であった茂吉の姿である。

だからこそ茂吉が露伴に傾倒して、「露伴の世界から、処生訓を学び、実世間的な生き方を見出していった」というのも、別にえらいことではなくて、負け犬が自分が負け犬であることを認め、勝つための心構えを自分に課したことであり、それでもしよせん勝つことはできぬから、どうにも納得しかねるものが残って、それが歌口を開

いていったと思われる。

だから、実生活では紀一の指図通りに茂吉は生きている。巢鴨病院に勤めたのも、長崎に行ったのも、洋行して学位を取ろうとしたのも、みな紀一のプランであって、それがなければ茂吉は途方にくれたろう。それほど自主性が無い。また、だから歌の世界では、逆に紀一やひさの姿はない。『赤光』の中に彼らが見えないのは、ふしぎでない。すると、ずっと後の昭和三年の十一月に紀一が死んだ時、「籠喪」十首を作ったのは、どういうことなのか。いま庄重な詞書を略する。

わが父を永久<sup>とほ</sup>におくりてみだれたる心しづめむ宵<sup>よ</sup>のひととき

かぞふれば明治二十九年われ十五歳父三十六歳父斯く若し

休みなき一代<sup>ひとよ</sup>のさまを誰<sup>たれ</sup>れに労働蟻といひしおもほゆ

身みづからこの学のため西方の国に渡り二たび渡りき

今ゆのち子らも孫<sup>ひ孫</sup>も元祖<sup>もとつひ</sup> Begründer と称へ行かなむ

どれも一通りの作品にすぎぬ(省略したも

のはもつとひどい)と思うが、こうした庄重ぶった作を作ったことじたいが問題だろう。このころ、

つらなめて目のまへを行く群集の心おごりをわれ<sup>ほろ</sup>旁看<sup>わがみ</sup>す

新興の労働運動を敵視する歌を作ったり、アララギはかすかなりとも言あげて新大君につかへまつらく

アララギを統率する立場で、新しい天皇を賛美する、御大典奉祝歌を作り続けている、この姿勢と無縁でないと思う。

つまり、洋行までが紀一のプランであったばかりでなく、その後の、青山脳病院長となり、帝国の名士となつてゆく道も、紀一の指した方向であり、それに従い——死んだから従い易い——紀一と一体化すること、負け犬であることをやめていった。同時に、俗物性は限りなく歌の世界を侵蝕しはじめたのだ、と思われる。

本書に教わつたのだが、茂吉が中学時代の親友渡辺幸造の孫の命名に、しきりに紀一とつけたがったというのは、皇紀二千六百一年でもあったが、これだ、と思われる。彼が真に自分自身でありえたのは、

『赤光』『あらたま』の歌の世界くらいのもので、晩年の大石田の生活といえども、帝国の崩壊による一時逃亡ではなかったか。

大江健三郎氏が、ある講演の中で、いつている。ニューヨークの美術館で、シーガルの彫刻を見た時、父親のイメージに占領された、そしてその父親的なるものについての小説を書きたいと考えている、という——「さて、小説のノートの段階でその『ぼく』が美術館にいて、シーガルの石膏人間を見ているところを、作家のぼくがいろいろなかたちで書きます。それはうしろから見ていると、頭が大きくて、また鉢全体もなんとなくでっかい男がバスの運転台に坐って運転しようとしている、それを見て現実のぼくが、あれは自分の父親だという感じを強く深く受けたのはなぜだったろうか？　そして、それからずっと、父親的なるものについてひとつの小説を書きたいとねがいはじめたのはなぜだろうか？　そこで小説の『ぼく』とその父親のいちばん最初のイメージは、ある暗い薄くらがりがあって、そこにひとりの男がむこうを向いて坐っている。そして、こちらからよび

かけるけれども、なにも答えない。なぜそこに坐っているかもわからない。それを『ぼく』がずっと子供のころに、父親が倉庫にはいりこんで坐っているのをうしろから見ていたという記憶をもっているとして、それでつないでゆく。……」とあったが、この「ある暗い薄くらがりがあって、ひとりの男がむこうを向いて坐っている。……」にも答えない。なぜ……いるかもわからない」というところに、父親的なるものVの原像が暗示されているかと思う。いわば、自分に存在を与えた、そのことで自分の生を根底のところ規定している無言の男であり、そのことで彼もまたあるいは苦しんでいるかもしれぬ男である。そしてわたしの問題は、茂吉にとって父なるものは誰、むしろ何であったか、である。紀一か熊次郎かあるいは隆成、左千夫、子規、鷗外か。あるいは自分が父親として子供に向った時にもっともしばしば考えたことかとも思うが、茂吉ほどの男が、父なるものを考えなかった筈はない。四十六歳で山蚕の写象を抱き、院長として「かてももの」を書きとめているというだけでなしに、生涯を

通じての東北志向を思う時、茂吉における父なるものは、熊次郎を通して彼方に見られる東北農民の原像の如きものであったのではないか。それが彼の文学の根だと思ふ。

本書における人間関係は因習的なモラルにすぎない。作品評価の規準は、アララギの写生美学を借りていて、独自のものが無い。だから、生活からも文学からも人間茂吉の矛盾がとり出されず、常になしくずしに美化されるので、それはのっぺりしてしまふ。けっきょく本書は茂吉について豊富な資料を提供してくれる事典風の書物として、研究者の座右に置かれるべきものである。 (昭和四十七年九月十五日、桜楓社刊、A5判・五七三頁、四八〇〇円)

## 三好行雄著 『日本文学の近代と反近代』

相馬庸郎

三好氏はさきに『作品論の試み』(昭42・

6)で、近代日本の代表作十篇を明確な方法意識のもとに論じてみせ、緻密な作品分析というものの一つの代表的成果を示された。その正負についてわたしはわたしなりに意見をのべる機会を持ったことがあるが、『文学・語学』昭43・3)、その時からわたしは、氏の文学史論集がまとめられるのを待望していたといつてよい。△研究、わたしのイメージでは、文学史を究極の体系とする研究▽とは同書の中のことばであるが、氏にとっての作品論と文学史論とは、文学研究を支えるいわば二つの主要な柱ともいふべきものであり、したがって、今、氏の『文学史論集』『日本文学の近代と反近代』を手にしたわたしたちは、氏の文学研究の性格をはじめ総体的に問題にすることが可

能になったといえるだろう。

作品論と文学史論が有機的に結びつく面を今わざと捨象し、便宜上それらを分けていえば、この文学史論集の中には、あざやかな作品論が凝縮され光っているといえる部分をいくつも数えることができる。たとえば主人公太田豊太郎の△自我内部の、無意識との境界にひそむ脆弱な部分▽に焦点をあてて分析してみせた「舞姫」論、敗戦という△危機的状況に遭遇した自我の緊張▽がもたらした△高度な芸術作品▽志賀直哉「灰色の月」と横光利一「夜の靴」についての分析など、その好例といえよう。さらにはまた、漱石の「自己本位」ということの、留学時と「私の個人主義」を書く時点での微妙な屈折を指摘するところから『こころ』論への新しい視点を提示する部

分や、光太郎の「出さずにしまった手紙の一束」に他ならぬ△出さずにしまったという巧妙な仮説▽を見ぬき、それを『道程』論につなげてゆくところなど、氏一流のすべるといふ才気を感じさせられる部分も多い。

わたしはさきに『作品論の試み』を書評した際、氏のめざす△作品世界の全体像の正確な認知▽がともすれば自閉的になつて、批評性を失つてゆくくらいのあることに不満をのべた。しかし本書では、たとえば茂吉の『赤光』を論じて、△短歌史は「赤光」と「あらたま」を越える、どういう歌集をも生まなかつた▽と結論するにいたる過程などに典型的にみられるように、各所に批評の高なりともいえるものも感じとることができる。そのように部分々々には多大の興味と示唆を与えられるものの、一方でわたしには、本書を読みすすむにしたがつて、次第にある種の伎癢といったものが深まってゆくのもどうしても否定できなかった。それは、論の進行がダイナミックに高まってゆかぬことへのいらだちとでもいおうか。冒頭に据えられた「近代文学の諸相」が各章ごとに独立したタブロウの

つまかざねめいて、論の深まってゆかぬのは、谷崎全集月報連載という発表形式に制約されたものとしてある程度納得できるにしても、「日本の近代化と文学」以下の本格的な史論においても、わたしは、大なり小なりこの感じからまぬかれることができなかつた。今、このあるいはわたし個人の主観的すぎるかも知れぬ感じにあえてこだわりながら、少しく三好氏の文学史論につき考えてみたい。

氏の史論のかなめは、一口でいえば「反近代」というベクトルを表面にかかげて、日本の近代文学の展開をあらためて体系づけようとする試みにあるといつてよからう。「反近代」ということを重視して日本の近代文化もしくは思想の特質を総体的に再考しようとする試みとしては、たとえば福田恒存の編集解説になる『反近代の思想』(昭40・2、筑摩書房)などをすぐに思い浮べることができる。近代化推進の一方、その贖物性をもするべく批判せざるを得なかつた明治以降の知識人の宿命のともいえる二重性、それを分析してみようとすると

チーフにおいて、三好氏の論は、この福田氏の観点と重なっている面がかなり多い。しかし、三好氏の本書所収の論文のうちもつとも早い時期のものの一つである「反近代の系譜」の初出が、昭和三十五年一月の日付を持つことだけによつても、氏の発想はすでに十年余にわたる、氏独自に持続されて来たものであることがわかる。

▲日本における反近代は、反近代Vと反近代主義Vとの二義性を宿命的に内包するとともに、両者を統一する別な視点からの反近代、いわば反近代の欧的近代Vを他の軸としてもつ可能性を否定できない。▼

これが三好氏の「反近代」概念の集約的規定といえようが、そういう「反近代」が他ならぬ▲日本の近代化の過程に内包した矛盾▼として、はじめから存在せざるをえなかつたところにすべての問題が胚胎するわけだ。それを近代文学の成立にからめていけば、▲近代化されてゆく社会構造への反逆ないし違和から文学の近代化がはじまつたという逆説に、日本の近代文学がその成立期において負わねばならなかつた十

字架があつた▼という文学史的規定を必然的に呼ぶことになる。近代作品というものの条件が▲創造主体の全重量をせおう▼べきものとしてある以上、日本の近代作家にとつてこの十字架は必然的であつたのであり、そこにこそ二葉亭の「浮雲」と鷗外の「舞姫」の画期的意味があつたわけであり、漱石その他の文学の典型的意義があるとする、これが三好氏の論の核といえるだろう。

これはきわめて明晰で、けざやかでさえある史論の布陣といわなければならぬ。しかし問題は、実はその先にある。すなわち、このように一見堅固に布陣された論が出发点のところで静的に張りつけられたまま、あまり動いてゆく感じがしないのである。氏はこの史論の主題を、日本と西洋との距離が▲時間の問題▼と意識されるか▲空間の差▼と認識されるかの問題と言いかえたり、▲西洋の光彩に上昇しようとする自我と、日本の宿命に下降を強いられる自我▼との二律背反、あるいは▲観念と肉体との亀裂▼などと、とらえなおしたりする。またそのような日本の近代は結局▲仮

装の近代♫でしかなかつたのだと断じたりする。いずれも鋭く魅力的なことばになっていることはたしかである。しかしあえていえば、これら次々に出てくる魅力的な規定も、論旨の出発点で布陣された観点の同義反復の域を結局は出ないのではないかといった感じを、わたしはどうしても否定しきれないわけなのである。さきにわたしが依頼といったのは、まずこの点に関してい

いささか唐突めくかも知れぬが、そのように感じさせる原由について、当面の見通しから先にいえば次のように整理できそうだ。

氏が分析・規定したような特徴的な日本の近代を、論者としての氏が主体的にどう評価し、どうかかわろうとしているのか、そこどころのよくわからぬ点がまず問題となろう。本書中しばしばとりあげられている漱石「現代日本の開化」では、いわゆる△外発的♫な近代化の中で明治人を必然的に追いこんでゆく神経衰弱的状况について、その事態を明晰に認識する漱石とともに、その宿命的状況に歯ざしりしながらい

らだっている、ロンドン留学時以来の漱石の姿もはつきり出ている。しかし、やや比喩めくかも知れぬがあえていえば、本書中には、前者の漱石像に重なる三好氏はいるが、後者に重なる——あるいは対応する三好氏はほとんど見出しがたいのだ（正確には、それを意識的に正面に出さないようにしている、といった方がよいかも知れぬ）。そのような氏の姿勢もしくは論理は、たとえば次のような箇所<sup>1</sup>に端的にみる事ができる。

△光太郎と茂吉はもつとも壮大な挫折であつた。だからといって、かれらの戦争責任を問責しようとは思わぬ。かれらはかれらの実感をこめて、祖国の危機に対処したのだ。手を汚さぬものより、汚したもののほうがもつと美しいことがある。しかし、かれらの戦争讃歌が、すくなくとも自己の定立しえた世界の全否定として出現したこと、この事実だけは、日本の詩的近代の形成を追尋する側面の主題として抹殺すべきでない。そのかぎり、かれらの近代もついに仮装でしかなかつた。♫

(傍点引用者)

光太郎と茂吉の戦中詠について、氏は、△壮大な挫折♫といい、△手を汚したもののほうがもつと美しいことがある♫と評して、両者の「生」の姿に直接参入しようとする姿勢を深める。ところが、△しかし……すくなくとも……この事実だけは……そのかぎり……♫と当面の論点を△仮装の近代♫という指摘の方向だけに限定してゆく(それは、この詩人論の冒頭から予測されていた論理の帰結点でもあつたわけである)ことにより、せつかく光太郎と茂吉の「生」のいきいきした歴史的な性格にさらにダイナミックに深くかわつて行こうとする方向を、論者みずからが無残にたちきってゆくことになる。同じようなことは、次の例でもいえる。

△緑雨や柳北の系を△反近代♫と見よう、と、猪野謙二の露伴論のように△もうひとつの近代♫と見ようと、問題は、その△反近代♫なり△もうひとつの近代♫なりが、日本の△近代♫と単純な併立の関係におかれるのではなくて、両者が一体不可分な形に癒着して、

つまり、△近代Ⅴが△反近代ⅤⅡ日  
本を内包して成立しているところにあ  
る。▽(傍点引用者)

△両者が一体不可分な形に癒着Ⅴしてい  
る指摘はたしかにきわめて重要な認識であ  
る。しかし正統的な近代と結抗関係にある  
ものを、△反近代Ⅴとみるか△もうひとつ  
の近代Ⅴとみるかは、歴史をうけとめる論  
者の主体的姿勢を決定づけるフアクターに  
なるものである以上、あえてここで、「ど  
ちらの立場をとるにしろ」という論理を出  
すについては、重い留保条件を背後にひか  
えているはずといわねばならない。それを  
氏は、△問題は云々▽というふうにたいし  
てよどもを感じさせずに筆をすすめてし  
まうわけで、そこにわたしは、一種の判断  
停止のようなものを介在させていると、ど  
うしても思わずにいられぬのである。

本書所収論文のうち、「詩的近代の成立」  
と「私小説の動向」をわたしはもともと好  
む。この二編は、意識的にか無意識的にか、  
右のような限定をおのずから越える部  
分を多くもつからである。私小説史論とし  
てすぐれた先駆的見取図になっている後者

は、従来の私小説批判の正当性を知的にみ  
とめながら、なお魅力を否定できぬ私小説  
の実在する矛盾に迫ってゆく迫力をあらわ  
にみせ、それが史論を立体的にしている原  
動力になっていると、わたしには思われる  
のである。

二葉亭、鷗外、漱石、荷風、潤一郎、光  
太郎、茂吉、白樺派、芥川等と、本書で主  
としてあつかわれている近代作家を列挙し  
てみただけでも、三好氏の史論が、どちら  
かと言えば西欧知識人型の文学者たちを分  
析することが中心になって展開しているこ  
とを知りえよう。それは氏が、近代文学を  
△市民文学▽としばしばいいかえているこ  
ととうまく対応しているし、また大正文学  
の性格が大きなウエイトを持ってクローズ  
アップされてゆく必然性とも見あつてい  
る。日本の市民文学のゆきついた最後の地  
点として、志賀の沈黙と芥川の死を並べて  
見せる見取図の見事さなどを好例として、  
大正文学の占める史的意味を改めて見直さ  
せてくれた点は、わたしにとっては氏に感  
謝すべき大きな示唆となった。ところで、

日本の近代文学史が、本書で重点的にのべ  
られている系譜のみでなりたつていないこ  
とは言うまでもないだろう。三好氏が本書  
でとりあげていない系譜の中で、氏のよう  
な史的問題意識を持つ以上、どうしても問  
題になるはずではないかと私考される面  
につき、終りにふれておきたい。

三好氏は△反近代▽の内実を、△気質的  
な反近代▽という特徴的なことばでおさえ  
ている。それはさらにくわしくは△人間の  
精神構造の最深处に潜在して、かれの思想  
や行動を無意識に統御するもの▽と説明さ  
れている。ところでこのような内実が、ひ  
とりの作家の中のみならず、近代文学史の  
全体像規定の問題に必然的にかかわつてゆ  
く性格をもつ存在として、わたしは、自然  
派、写生派などいわゆる日本の写実主義の  
系譜を思い浮べる。また、猪野謙二氏のい  
い方をかりていえば、日本の近代文学の  
△低音部▽的な系譜の存在を重要なものと  
考える。あるいは、鏡花、露伴、緑雨など  
非西欧型作家の重さにあらためて立ちどま  
らざるを得なくなる。もちろんこれらが三  
好氏の視野に入っていないなどと言えない

ことは、「近代文学の諸相」のあちこちでいろいろふれられていることでもたやすくわかる。しかし氏は、藤村論をはじめ、鏡花論、自然主義成立論等、いままでにこれらの系譜についてもかなりの量のモノグラフを発表されているのに、本書ではすべてはぶかれた。それは、本書の史論の主題からはずれていると考えられたためだろうが、そうだとすれば、この史論の主題からみた場合、これらの系譜は、氏によってあらためてどう評価されてくるのだろうか。「反近代の系譜」の末尾に氏は、この論文の初出の時期から十年たった現在、ややちがった考えを持つようになった点のあることを注

## 前田 愛著 「幕末・維新期の文学」

記した上で、最近書かれた短文を追加掲載している。この附記は、氏が気質的な反近代の各作家における意味を、それまでどちらかといえば負の方向からみようとしていたのに対し、正の方向からみようとすする立場に転化させた旨を示しているようであるが、このような視点の転化があることを知ってみれば、なお一層、本書では力を入れてとりあげようとされていない系譜について、氏の見方が提示されるのを、しきりに期待したくなるのである。(昭和四十七年九月三十日、東大出版会刊、B6判・二六七ページ、五八〇円)

## 小池 正胤

狂愚誠可愛 狂愚 誠に愛すべし  
才良誠可虞 才良 誠に虞るべし  
狂常鋭進取 狂は常に進取に鋭く

愚常疎避趨 愚は常に避趨に疎し  
才多機変士 才は機変の士多く  
良多郷原徒 良は郷原の徒多し

目人古今殊 人を目すること 古今殊なり  
才良非才良 才良も才良に非ず  
狂愚豈狂愚 狂愚 豈に狂愚ならんや  
「松陰における『狂愚』」より。評者恣注 郷原の徒は君子らしき偽善者、郷原徳之賊也。

著者は本書で幕末・維新の十一人を論じている。いずれも狂愚の徒、しからざれば才良の士、もしくは、己れの中に狂愚・才良両つながらに有する苦悩の人である。ゆえに右に挙げた松陰の一篇はそのまま本書の主題を象徴するであらう。

所収の論考はこの七年間に公にされた十四編で、「論旨の修正による書き直し」をせずに、各論の内容の年代にほぼあわせて組んだものである。「あとがき」によれば、全体の構想があつて各篇が書き進まれたというが、実際には「柳橋新誌」を比較文学的に試みたあとに「寺門静軒」が書かれ、二か月おいて「中村敬字」に及び、本書の巻頭の「近世から近代」はそれより三

年程してまとめられるなど、その多才な關心は前後・縦横に飛んでいたのである。しかも他に本書の表題に当然つながるべき論考を残している。にも拘らず、一卷にまとめられたこれは、相補って、主題へそれぞれに共鳴している。名実ともに論客前田愛氏の自信のほどを示す第一詞華集というべきであろう。

維新前後の文学に及ばれた諸家は少くない。大先達柳田泉氏はさておき、越智治雄氏・興津要氏が、戯作・講談類から両期をかけられ、とくに近世文学の側から浜田啓介氏・渡辺守邦氏が、また騒壇を中心として、水田紀久氏・今田哲夫氏など、それに杉浦民平氏の啓蒙的な一連の評論も忘れることが出来ないものではある。これ等の労作は、近世末期文学の「頹廢と煩末」と一様に図式化される混迷の空間を徐々に明らかにしてくれた。しかし今日にいたってもなお前田氏のいわれるごとく近世の文学史は「戯作小説の末路を辿ること終り、近代文学史は啓蒙主義文学の名のもとに思想的な不整合」のままであることを認めざるを得なかった。そして、末路は末路と認

めながらも、なおその中に近代への志向を求めていたし、それなりの頭証もあった（浜田啓介氏・渡辺守邦氏）。末期戯作を「無責任きわまりない自己喪失の創作態度」（興津要氏）と断定しきることは、よしそれが大半は事実であったとしても、そのまま研究主体の自己喪失ともなりかねない危惧をいだいて、目前の膨大な戯作の迷宮の出口を求めていたのである。出口はわからぬものの、「三条の教憲」に対する戯作者の「書き上げ」は見えたし、その向うには「小説神髓」が大らかに戯作を並べ「八大伝」をいろいろに振廻している。それが、末路戯作を近代へつなげようとする思いに一層の当惑を与えることになったのである。

氏は、この当惑を見事に切って捨てた。巻頭の「近世から近代へ——愛山・透谷の文学史をめぐる」は以下のように結ばれる。

「幕末から明治にかけて演じられた政治と文学の苛烈な劇を切りすてしまったことのような文学史には、もはや何程の可能性も残されていない。」

爽快な結論である。それはそのままこの一連の論考をつつむ大前提の設定ともなっている。愛山の文学史観には「実」の世界を対応させたものを見、透谷のそれには「実」と「想」との二元論的把握から、「実用・有用の文学」と「無用の文学」を対比判然とさせ、この透谷論のもとに愛山の文学史の限界を明らかにし、「有用の人」佐藤一斎や中村敬宇、「無用の人」寺門静軒や成島柳北らの人と作品の位置——心的葛藤と政治的状况とのかかわりを明らかにしたのである。

氏の幕末・維新の文学を貫く美学とその方法は、人と作品に何種かの偏光プリズムを当てて解析し、それを「政治と文学」「有用と無用」、そして冒頭の詩篇の「狂愚」と「才良」にそれぞれ当てはめ、さらにどのように組み合わせていくか、ということにあるのではないかと考える。つまりここで示した「政治と文学」とは、文学を政治に対比させ、たえずその相対的な関係から同時に「有用無用」を秤量していくかのごとき、いささか単純な前提として考えているのではないと想像するのである。松陰の

詩に示されるそれは、ことに起連と対応する尾連二句に意味があり、それはまた、本書の論考にも援用されるはずである。

実は、近世文学にとつて、末期のところにその政治性をいうことは厄介なことである。そもそも近世における政治とは何か、たとえばこんな意見もある。「理を極めて法に合するやふにして、治と云ことに一向心着かぬ故、悪人の絶ゆることなし」をひいて一般にはきわめて非政治的空間であつたともいう（松本三之介氏）。だからこそ、それに気付くプロセスは迂遠でもあり、また一旦気付いた人間が獲得したのは高度の政治性であり、その政治的空間に住む人達と非政治的空間との乖離は絶望的なまでに遠いし、それ故にまた非政治的空間に放り出された政治の人間の陰微ないらだちは何層にも重ね合わされた髪の中に押し入っていかねば知られぬのである。

氏の視点はかかる意味において明らかであり斬新である。氏はそれを重量感のある文脈で引いてゆく。振り落されまいとして乗っていくのはいささか疲れる。しかし爽快な疲労はより人を甘美な酔に誘うもので

ある。

論題の紹介を忘れてあらずもがなのごとくを口走つたが、本書はⅠとⅡに分けられる。Ⅰは前記論考をはじめ、「山陽・中斎・佐藤一斎・馬琴・雲如・松陰」が独特の視覚から捉えられ、Ⅱに「柳北・枕山・春濤・敬宇」と並べ最後に「文明開化・明治ナシヨナリズムの原像」でまとめる。それに副題が付くが今は省く。

先に「八犬伝」を振廻わしてみせた逍遙」と無責任なことを云つたが、いずれにしても幕末に近いところに横たわるこの伝奇の巨塊はその作者とともにまことに無気味な存在であることは確かであろう。ただ、近代の側からこれを把える例は決して多くなく、それも断片的に作家の少年時の好みの詮索に留まっていたようである。たとえば山田美妙の初期小説、鷗外の馬琴と好み、馬琴と漱石、龍之介の「戯作三昧」などについての指摘である。

近世の側での馬琴は、当然のことながら徐々に確実にかも新らしく復権している。それは例の勳徴についてもその「正し

き理想郷は芸術上の問題である。それは彼の芸術上の理想美」（浜田啓介氏）と説くように一つの美意識として認識されるようになった。

『八犬伝』の世界——「夜」のアレゴリー——はこれとはやや別の角度から、その世界の主要な昂揚の場が「夜」に求められる意味を探る。そこでは人間と異類との交歓や、呪術的な自然観があり、自然はそれが契示する妙契の理法によって支配される。そしてそれを綴る「ことばはコトバと対象の——の対応を前提とする近代リズムの言語空間とはまったく対蹠的な言語空間」を構成し、それをあやつるのが「詩人」馬琴だったという。「陰鬼」と「陽神」が複雑にからみあうその背景にリアリティをもつた安定感のある自然描写が少いと指摘するのも当然であろう。

近代以前の「夜」は「昼」とは非連続の空間であった。秋成の「目ひとつの神」がその例である。そもそも「昼」の動物であるヒトは「夜」の動物（怪異変化も含めて）に雌伏していなければならなかった。ヒトはたしかに「妖」を見もし、事実いた

であろうし、昼のヒトのヘンシンも見たのではなかったか。夜の妖怪は昼のヒトにヘンシンする。近代は「夜」を物理的に追放した。だが全く追放しえたであろうか。近代小説における論理的整合とは異次元の小説の美学がそこに見事にうちたてられている。

しかもそれだけではない。「八大伝」の寓意はその中に最もトピカルな政治的事件を巧妙に吸収し、そこに「儒教道徳の忠実な鼓吹者と信じられている馬琴は、——危険な作家に変貌している」と奇怪な馬琴の姿勢をもみせるのだ。

馬琴の対外的関心になみなみならぬものがあり（清田啓子氏）、伝を求めて、官避の書への收拾に努めたことは知られている。華山もその情報源の一人であった。だが華山がいわゆる蚕社の変によって捕えられるや、馬琴は慎重巧妙にその交遊の証となるものを消してゆく。その冷えた、シタタカな保身は対外的関心という彼の内発や、「八大伝」の美学といかなる均衡を保っているものであろうか。氏はこれについて以下のように閉じる。「八大伝」の中に描いた

『理想国』は時代と直角的に交叉しようとしたとき、それは——時代錯誤以外の何物でもなかった」と。そして「私たちが復権を求めなければならぬのは、夜の世界における馬琴なのか、昼の世界における馬琴なのか、その答は自明であろう」とも。たしかに氏にとつて自明かもしれないが、いまだに無明の境をさまよう私にとつて遺憾ながらあまり自明でない。

華山の難に処した馬琴の保身の伶俐さを我々が性急に責めることはかえって危険である。「佐藤一斉の位置——『言志録』の構造」に前田氏はそれを求められた。

ここで前田氏は華山描く数枚とその没後、弟子椿山筆の一斉の肖像の変化と言志録の本文校訂をまず試みられた。その相貌は一斉の年輪に従つて人格の変化を想像させるように「目まぐるしく変る」という。すなわち、壮年の「アクが強く精氣にみちた」それはついに「狡さともわかりのよさ」に落着く。そこには、華山と一斉の対応をも見る思いがする。

「言志録」についてはその稿本五種の異

同が報告され、最終の板本は「林家の塾頭という居心地のよい身分に障るような章句は慎重に切りとつて」漸く公にされた。しかしその中には「君主の倫理的責任をきびしく問いつめた章句が」あり、「道徳的幻想に束縛されぬ合理的思考の持主」が考えられるのである。彼もまた馬琴と同じく華山に同情しようとしなかった。同門の安積良斉も同様であった。そして「安心して『戒懼持敬之工夫』を力説」していたという。これもまた冷え冷えとしたオプティミストの肖像ではないか。一体その「狡さともわかりのよさ」の皮膚の下に壮年の精氣はまだかくされていたのか、それとも全く失せてしまっていたのか。

一斉の弟子は多い。思いつくだけでも聖謨・小楠・象山・訥庵・敬宇と維新のオビニオンリーダーが居並ぶ。それは一斉が林派を講ずるアカデミアの官僚の中核にあつて私に陽明を好むというこれを慕うものにもまことに快い響きをもつていたのであろうか。一斉から離反した象山にしてもその「夷の術を以て夷を防ぐより外無之」「東洋道徳西洋芸術」は師の「配合の理」より

出ると氏はいう。はじめに「かえって危険」といったのはこういうことでもある。

一斉は幕末の官僚組織の一翼に終始位置し続けた頭官すなわち「有用の人」であった。

「寺門静軒——「無用之人」の軌跡——」  
 「雲如山人伝——幕末詞壇への一視覚——」  
 は一斉側からすればもちろん極北——「無用之人」にあたる。そして『伊都満底草』の交歓——柳北と洋学者たち——、『板橋雑記』と『柳橋新誌』、『パリの柳北——「航西日乗」をめぐって——』の成島柳北や大沼枕山は「有用」から「無用」へ意識的に転げこんでいった例ではなからうか。

ところでさらに静軒の場合の無用は江戸中期の文人達の高踏的なそれ、「離俗」「当代に合致せぬ自己を運命とあきらめて、生来のままに純粹に生きる、いわゆる文人逃避の境」(中村幸彦氏)に身をおくのではなく、離俗かえって塵中に没し、不遇むしろしきりに黄白の利を求めるといった「デスペレートな自虐を潜める」「余計者意識」で貫ぬかれていた。これもまたシタタカサ

においては「斎・馬琴にならぶものであった。「現実社会への関心が熾烈」なあまりには「社会と個人の間に横たわる裂目を媒介する論理を知らぬ」がゆえの身を焼くくらいだちは、前田氏の措辞を重ねるに従って我々の前に迫ってくる。

さて「江戸繁昌記」である。天保六年第一回摘発の際の大学頭林述斉がこれが「当世市中之風俗俚言を漢文三綴り敗俗之書」で絶すべきである、はげしい怒気を示している。(幕府文書を逐いながら要路の人の感情の起伏を追う氏の手法は手なれて確かである) 静軒は平然と出版を続けて天保十二年たまたま天保の改革の際人情本とも大弾圧を受ける。大学頭は述斉の息糧字である。氏はここではその「意見書」をポンと出して「字義明瞭故説明を省」いた。ソツ気ないが心利いた手である。

ところがこの糧字の文は父に做ってはじめこそ「風俗俚談を漢文に書き綴り鄙淫猥雑」「言語に絶し」などと手きびしいが、やがて「江戸の繁花を能く尽し候とて賞候者」とか「江戸之風俗は如斯之事ニ候哉」などと語調がくだけ、肝心の静軒自身につ

いては「其身文筆に誇り候より之心術にて憎程之儀ニハ無之候得共」とむしろ好意的な口調さえみられるのである。末尾の「急度御糺」もこうなると迫力に欠ける。その結果は馬琴が想像した「未だ御裁許落着無之候へども犯罪、人情本より重かるべし」は実際のところ為永春水の手鎖よりも軽い「武家奉公構」であった。すでに心定めた今迄通りの「無用の人」として風に吹かれるのであれば、静軒にとってこれがどれ程の痛痒を覚えさせるものであったろう。

「憎程之儀ニハ無之」の字句をこう解し、実は糧字は「繁昌記」を面白く読んだと解するのはいかげであるうか。そこには林家中興の人として「快烈を以て自ら擬した」述斉の陰で荏苒と日を送り、その死後やっと呼吸をはじめたような糧字の二代目的人の好きまで偲ばれるというものだ。ついでに記せば、この二年前「夢物語」の著者高野長英は入獄、「黙舌或問」「慎機論」の華山は田原蟄居後、自害した。

「繁昌記」をここに引く余裕はないが、その筆は本質的にはかなり急であり振幅も大きくその筆力は春水の情痴に遙かにまさ

る。

ここで述斎・樗宇の「意見書」の気にな  
ることばをあげたい。「漢文ニ綴リ」であ  
る。前田氏は「仮名書本（人情本）」が出廻  
っておりこれは致し方ないが、漢文では困  
る」と「意見書」を要約する。何故いけな  
いのか。そこで思い出すのは中斎から「洗  
心洞察記」の批評を求められた一斎が「余  
答以俗簡而不及漢字」と考えたことであ  
る。漢文は知識人にとつて真意を吐く唯一  
の手段だった。述斎・樗宇ともにこれが目  
についたのも当然である。だが、それはそ  
れとして、樗宇に「憎程之儀ニハ無之」と  
映つたのは何故か。

「繁昌記」は「柳橋新誌」とともに正格  
の漢文ではない漢文脈の狂文である。静軒  
・柳北ともに自らの爵を人事・風俗・地象  
に仮託してのべるときことさらに「狂文」  
にその便を求めた。そして二書ともに当時  
破格の売れ行きだった。

『板橋雑記』と『柳橋新誌』で氏は柳  
北が示唆を得たと思われる明末の艶史との  
交渉の如何を語句・章句・構成に亘って試  
し、「柳橋新誌」と柳北の明治初年におけ

る位置を明らかにした。（前田氏にはまた  
「明治初期文人の中国小説趣味（言語と文藝  
史」という好論がある。）そして柳北の意図  
を「抒情的詩的表現と、鋭い現状把握に  
裏打ちされた諷刺的散文的表現とは見事  
な均衡を保っている」と評価した。

この氏の言葉はいろいろな意味をもつて  
いる。まず柳北自身に対する位置づけであ  
る。と同時に、静軒や柳北が利用した狂文  
体の性格をも言い得ている。つまり狂文体  
は、漢文脈によるところの簡潔性・論理  
性、それに伴う風韻をまず持つ。次にそれ  
をやや破格にしたことで自由さ・気楽さが感  
じられる。さらに白話文の中国俗語を適宜  
に挿入し、これに当世の戯訓を振ることに  
よつて、市井・花巷の穴をうがつことさえ  
できる。それ故まず意図するところが漢文  
脈によつてかなり強烈であつても、風韻と  
戯詠に融化されて直截に響かず、むしろ  
感覚的には滑稽の方が先に立つのではない  
か。述斎は「浚面」を作つたが、大方は「憎  
程之儀ニハ無之」とそのうがちを楽しん  
だと見る方が容易である。実はこれが、か  
くれ褻<sup>ハ</sup>であつた。狂文体のもつ多元的な

特色は静軒や柳北が逃げこむのにまことに  
都合がよかつた。また兩人がともに持つ才  
気・体質・そして不遇はそもそも狂文の特  
色である。しかも、狂文、そのものは断じ  
て、有用<sup>ハ</sup>ではない。

明治期に入つて狂文狂詩の盛行がむしろ  
前代を凌いだことは、すでに知られるとこ  
ろであるが、正格の漢詩の流行もまた「明  
治詩話」の作者がいう「一時に絢爛たる最  
後の花を咲かせたのであつた。」

「雲如山人」「枕山と春濤」はともに高名  
な漢詩人を追つたものである。「雲如は鷗  
外觀潮樓の旧主高木佐平の実兄である」と  
いう冒頭の一文は、幕末と近代の暗示的な  
接点を示すものである。十七歳で既に諸家  
の詠物詩を編んで二巻とした才気の詩人雲  
如が、放浪の挙句に京都に客死するまでを  
氏は克明に追い、慨世の詩人として志士を  
集めた梁川星巖との対応に力点をおく。雲  
如の詩業には驕然たる周囲が殆んど投影し  
ない。彼が慕つて上洛した師星巖は好意半  
分迷惑半分で手元に近づけない。まさしく  
雲如は星巖にとつても「無用の人」であつ

た。前田氏もここで僅かにペリー来攻を挿むのみで、星巖・雲如をとりまくものを記さない。雲如に狂蕩のものを見、星巖の姿勢を知るだけに「有用」と「無用」は激しい沈黙の響きを聞かせてくれる。

雲如と星巖の対応は、越えて明治初年の大沼枕山と森春濤にひきつがれる。ともに前代に名を成し、枕山の「下谷吟社」に対して春濤は「茉莉吟社」をおこした。氏の筆は「雲如——星巖」の配置を逆転させて、主として「有用の人」春濤に注がれる。春濤は吟社を通じてまさに現実政治的に高位頭官を漢詩によって斡旋する。氏は彼等の官職を調べられたがそれは有朋・博文にまで至っている。驚くべきことである。これに対して枕山は「薩長土肥の出身者」をその詩集に一切載せず、出自を記すのにも「江戸」を固執していたという。すなわち、枕山は静軒・雲如・柳北などともに「無用」の域に入っていたのである。股野達軒なども旧主に従って幡州竜野にかくれ、再び出なかつた高名の儒家騷客であった。

「明治詩話」を引いたが、すでに明治も

二十年代に入ってから「しがらみ草紙」(六身明治三年) などには以下のような記述が見える。「詩人に至ては依然として漢詩を善くする者を指すが如き」「今世の所謂詩人は多く漢詩家を指す」。そして篇中に漢詩の多いのはもちろんだが、西欧の詩の翻譯にまで漢詩型を利用する、この理由はどこに求められるだろうか。

春濤は息槐南を詩筵の縁で修史館へ送った。末尾の一文は春濤が兩期をかける詩人の最右翼に位置するだけにグルーミーな響きをもつ。「明治政府の官僚機構の階段を一步一步、着実にのぼりつめる槐南の行く手には、春歌公伊藤博文の側近へと通ずる一すじの途が開けていた。」春濤は果たして真に「有用の人」であり得たのだろうか。

繁簡はなほよろしきを得ぬままに恣意を加え、とくに貴重な論考二、三に及ばぬ非礼を敢てしてしまった。また如上近世にかたより、果して書評たりうるか、内心忸怩たるものがある。お許しを願いたい。

前田愛氏は早くより独自の文体を獲得していた。しかし、四〇年頃からさらに第二

の文体ともいえるものを手がけ、それもすでに完成されたようである。そして第一の文体に属するものは本書にはほとんどらない。曰、「江戸紫——人情本における素人作者の役割」「音読から黙読へ」「近世出版機構の解体」その他人情本などに関する二、三である。「やむなく割愛した」という。それをその儘信じたい。が、ことに「音読から黙読へ」は、本誌十五集で玉井敬之氏もふれるが、まさしく複眼的視点の設定には不可欠の卓論ではなかつたか。私はむしろ読者のために惜しむものである。

貴重な論考とは「山陽と中斎」「松陰における『狂愚』」である。ことに後者は氏もつとも意を尽したものの一つと思う。私も味読した。そして山陽・中斎をもふくめてすべて冒頭の詩に収斂するのを感じた。掲げた由縁でもある。(昭和四十七年十月三十日、法政大学出版局刊、B6判・三八八ページ、一五〇〇円)

## ▽紹 介 △

## 森安理文編 『無頼文学研究』

本書は総論・各論にわかれたれ、次の一篇の論考が収められている。

総論——「無頼文学の系譜」長谷川泉、

「ヨーロッパの文学での無頼」吉田健一、  
「中国における無頼—金岡照光、「わが国における無頼思想1（上代の文学）」鈴木国郭、「わが国における無頼思想2（中世の文学）」笠原伸夫、「わが国における無頼思想3（近世の文学）」——特に演劇における無頼性の形成—菊地久治郎、「無頼派文学の意義」伴悦、「戦争・天皇・無頼」森磐根、「無頼の倫理」竹内清己、「日本文学における無頼の本義」森安理文

各論——「谷崎潤一郎のデカダンス」高田瑞穂、「坂口安吾」倉橋由美子、「永井荷風」大森盛和、「石川淳——『闇を切り開く散文の方程式』」戸栗博、「成島柳北——言挙げ『天地間無用の人』考」有山大五、

「辻潤」馬渡憲三郎、「折口信夫」村岡空、「石原純の無頼文学」児山敬一、「岩野泡鳴」三田英彬

以上のうち、笠原・倉橋両氏のもは再録である。

本書は、「無頼文学を所謂無頼派の文学ということにだけ限定せずに、もっと広義の意味から無頼と文学との関係を明らかにしてみたい」ということにあり、「無頼」を「外国のアウトサイダーから、異端者、余計者、無用者、脱落者、疎外者、放浪者、浪人、漂泊者という概念」に近よせ、更にまた、「文学史に登場する、荒ぶる神、まればと、乞食、巡遊僧人、世捨人、隠者、更に能狂言に出てくる放下僧、居士から、すね者、鳥滯というようなものまで」を含めて考えることにより、「文学を含めて伝統的な芸能の世界に、重石のように、静か

に沈んでいる」「無頼」の位置を確認し、

「無頼と文学との血縁関係」を究明しようと試みたものである（編者の「序」による）。

だが、あらためて考えるまでもなく、文学の創造性そのものの中に、すでに無頼の要素（既成のものへの反逆」と「既成のものからの脱出」）が潜在している。つまり「文学即無頼文学」ということになりかねない。そこで巻頭の長谷川氏の論では、「無頼文学の担い手が、反逆と脱出を企てる既成のもの」を「人間と人間的つながり」におけるもの（自己、社会、文壇）と「文学の機構そのもの」に関するもの（素材、主題、思想・理念、形象化と表現様式、文体）とから（ ）内に記した八つの契機をあげ、無頼文学を考察する一つの基準を定立しようとして試みている。一つ一つの論考にふれる余裕はないが、本書は、編者の意図した通り、無頼文学の研究に新たな展望を開く一礎石を据えたものといえるであろう。なお、巻末に二段組み、二二ページにわたる「参考文献」（竹内清己編）がある。（昭和四十七年十月一日、三弥井書店発行、A5判・四二六ページ、二〇〇〇円）

## 小嶋孝三郎著 『現代文学とオノマトペ』

本書は、現代日本文学のオノマトペを通して、詩人や作家の表現様式を考察しようとしたものである。

まず、本書の内容を目次によって紹介すると、第一篇 オノマトペ研究序説 第一章 オノマトペ研究序説、第二章 オノマトペの象徴的用法、第三章 オノマトペの様式(一)——三好達治「横笛」余滴——、第四章 オノマトペの様式(二)——宮沢賢治のオノマトペ試論——、第二篇 現代詩歌とオノマトペ 第一章 現代詩におけるオノマトペ——象徴化、第二章 現代詩歌におけるオノマトペ(一)——現代短歌におけるオノマトペ——、第三章 現代詩歌におけるオノマトペ(二)——現代詩とオノマトペ——、第三篇 現代小説とオノマトペ 第一章 三島由紀夫「金閣寺」、第二章 深沢七郎「楢山節考」「東北の神武たち」、第三章 太宰治「トカトントン」と、全三篇にわか

たれ、一〇篇の論考が収録されている。

著者は、まず、従来のオノマトペ研究を概観、批判したのち、オノマトペに「作者の内面的なものに関連する表現の必然性」を認め、「オノマトペの象徴的用法、つまり、記号以前の段階や記号の段階に比して、より高次の、記号以後の段階として、主体的な表現の必然性を把握」することの必要を説き、そこから更に一步進めて、オノマトペの考察によって、「創作者の個性的様式」を帰納することができる、と考えるのである。ここにいうオノマトペの象徴的用法とは、前記したところから明らかのように、言語記号以後の段階における用法であり、著者はこれについて、「対象↓オノマトペ↑内面的情調」という図式を設定する。そして更に、オノマトペの場合には「対象をどう聴くか」「又どう表わすか」という問題が常に関わっているので、「一般の記号

による表現の場合と違って、表現主体の恣意性が強く働く。その「恣意性」とは、「表現主体がどうしてもこれでなければならぬという極限的な一語を主張する自由性」ということであり、表現主体の「極限性を求めて表現の可能性を無限に追求することである」ので、ここから前記の、オノマトペの考察により、「創作者の個性的様式」を帰納できるという結論に至るのである。

著者の論理の正当さは、第一篇第三章以下の各論の説得性によって証明されている、といつてよいであろう。特に、第一篇第四章の宮沢賢治、第三篇第一章の三島由紀夫を対象とした論考は充実している。また第二篇の諸論は、著者の方法が、単に個性的様式にとどまらず、歴史的様式の考察にも有効であることを十分に示している。

なお、本書は、国崎望久太郎氏の巻末小記によると、著者の自ら撰び編集したものであるが、著者はその刊行を見ずに、四十七年十月、交通事故により逝去された。深く哀悼の意を表すとともに、この書の広く親しまれんことを期する次第である。

(昭和四十七年十月二十五日、桜楓社発)

行、A5判・三四五ページ、二八〇〇円)

## 瀬沼茂樹編 『有島武郎研究』 本多秋五

本書は一、有島武郎の世界 二、作家論  
作家研究 三、作品論、作品研究 四、特  
殊研究 五、有島武郎の想い出 の五つに  
分けて構成されている。一は有島の概観、  
三の作品論は「かんく虫」から戯曲・童  
話まで主要作品がまんべんなく取扱われて  
いるし、また四の特殊研究は有島の修士論  
文、有島とキリスト教との関係、ホイット  
マンとの関係などが取り上げられていて、  
有島武郎とその文学が総合的に把握できる  
ようになっていいる。

執筆者は編者両氏、笹淵友一、長谷川  
泉、坂本浩、安川定男の諸氏などの知名大  
家の人たちははじめ中堅、新進の諸氏まで  
三十余人の方々がそれぞれの項目を分担し  
て筆を執っておられる。それだけに方法な  
どに統一だった印象はないが、反面、各執  
筆者の個性が発揮されていて、多方面から

いろいろな方法で有島が考えられており、  
立体的に有島を浮びあがらせていると言え  
よう。

この他、山田昭夫、福田準之輔両氏の編  
になる「全集未収録・逸文集」、瀬沼茂樹氏

## 荒 正人編著 『谷崎潤一郎研究』

とにかく大変な大冊である。最近、編纂  
物の研究書が次第に大型化されてゆく傾向  
が見られ、このシリーズ「近代文学研究双

書」の既刊『増訂版・川端康成研究』も相  
当の大冊であったが、この書はそれをはる  
かに上回っている。編者の「総論」以下全  
三九編、ほかに「作品梗概」「年譜」など  
が加えられており、限られた紙数では到底

編の「未発表書簡集」、山田昭夫氏の「文献  
目録」「年譜」がそえられており、研究者  
に便宜を与えている。本書の編者の一人、  
本多秋五氏は「はしがき」の中で「この書物  
の編纂を思い立ったとき、少くとも有島武  
郎の研究者にとつては、この本を読まずに  
はものがいえない、そういう本をつくりた  
い」と希望されたと述べておられるが、そ  
のような意気込みがうかがえる本である。

(昭和四十七年十一月十日、右文書院発行、  
A5判・六七四ページ、二八〇〇円)

詳しく紹介できないから、まず目次を掲げ  
ておこう。

I 総論 荒 正人

II 作品研究

谷崎潤一郎・初期の作品 小原 元

「刺青」を中心に 広末 保

異端者の悲しみ 吉田 精一

初期の作品を読解する 林 四郎

小さな王国	土屋 哲
痴人の愛	奥野 健男
蓼喰ふ虫	橋本 稔
盲目物語	長谷川 泉
春琴抄	杉森 久英
「陰翳礼讃」論	益田 勝実
「文章読本」と日本語観・文章観	芳賀 綏
『源氏物語』と谷崎潤一郎	
— // 谷崎源氏 // の形成 —	
谷崎と「細雪」	小田切秀雄
細 雪	中村真一郎
少将滋幹の母	駒尺 喜美
「鍵」私注	高田 瑞穂
母なるもの—「夢の浮橋」論—	谷沢 永一
III 特別研究	日野 啓三
谷崎文学と古典	
— 特に戯曲「誕生」について —	
谷崎潤一郎の戯曲	長野 晋一
谷崎とミステリ	金丸十三男
谷崎とポオ	中島河太郎
	大橋健三郎

## IV 谷崎潤一郎論

谷崎・芥川論争の時代背景	平野 謙
谷崎潤一郎と泉鏡花	村松 定孝
荷風と潤一郎	赤瀬 雅子
直哉と潤一郎	藤堂 正彰
西洋における谷崎潤一郎	福田陸太郎
谷崎潤一郎論	伊藤 整
谷崎潤一郎論	生島 遼一
谷崎潤一郎論	武田 泰淳
「刺青」の文章	野間 宏
母性からの逃走	
— あるいは献身による征服 —	
谷崎潤一郎について	南 博
谷崎潤一郎の擬古典性についてなど	中田 耕治
Tanizaki and the Tradition	三浦 徳弘
Tanizaki and the Fatal Woman	
H・ヒベツト	
私を見た谷崎 V・H・ヴィリエルモ	
谷崎の作品に寄せて	

グラスト・ヴィンケル  
ヘーフェロヴァー

谷崎文学の風土 大谷 晃一

谷崎潤一郎作品梗概

2 谷崎潤一郎年譜 荒 正人

以上の中には、谷崎論といえはきままつて引合いに出される伊藤整の「谷崎潤一郎」をはじめ、既発表の代表的な谷崎論が幾つか含まれているほか、編者自身「あとがき」で「この論文集では、実証、批評、感想などが発表されていることを断っておかなくてはならない」と言うように、論者それぞれの視点からする思い思いの論文が集められていて、中には「談話筆記」なども見受けられる。それはやはり「あとがき」に、「谷崎潤一郎の現代的評価と国際的評価はまだ決定していない。現代は激しい変化と流動の時代であるから、若く新しい人たちの間で、この文学者の全業績をどう評価したらよいか戸惑うのはむしろ当然かもしれぬ」とあるように、谷崎潤一郎という作家に対する評価は、今日まだ定まっているとはいえないから、いわゆる谷崎研究者だ

けでなく、さまざまな立場からの意見を聞こうとする編者の姿勢を示すものだろう。も一度「あとがき」を引用すると、編者は「これだけが完全なものであり、最終の研究の成果であるなどとは決して思っていない。広い意味での中間報告にすぎぬ。これが刺激になって、谷崎潤一郎の文学にたいして、新しい見方が現われることを心か

ら望んでいる」という意味のことを繰返して述べているが、この誠実な態度に敬意を表したい。文学研究は確かに、いつの場合も「中間報告」であるはずで、この書は今日における谷崎研究の里程碑といつてよい。今後の谷崎研究は、これをどう乗り越えるかということだろう。

なお蛇足を加えるなら、執筆者三九名の

うち法政大学関係者が九名にのぼり、作家・批評家・外国人研究者を除けば三分の一以上を占めている——ということはどういうことだろう。これもまた一つの試みではあろうが。(昭和四十七年十一月二十日、八木書店発行、A5判・七四五ページ、五〇〇〇円)

事務局報告

■大会・例会における題目および講師

昭和四十七年度(その二)

十月 秋季大会

大岡昇平『野火』の研究―創作過程を中

心として―

池田 純益

大正五年前後の文壇―発禁的風潮を中心

とする―

塚谷 周次

島村抱月//律格論//の推移

日沼 混治

永井荷風の日記について

吉田 精一

芥川龍之介と『諸国物語』―ストーリー

―テラーとしての限界と関連して―

後藤玖美子

高山樗牛―その文学活動の原点について―

小野寺 凡

漱石研究の問題点

小坂 晋

△シンポジウム▽日本自然主義の検討

和田謹吾・大久保典夫・

山田晃・川副国基(司会)

十一月「新生」論素描

三好 行雄

十二月 新資料による「家」の事実と虚

構 伊東 一夫

一月

島崎藤村の「新生」 山室 静

正宗白鳥論―明治四十年代を中心に― 佐々木雅発

大正初期の田山花袋とその文学

―「觀念」を中心として― 田中 栄一

二月

岩野泡鳴―短篇について― 伴 悦

『土』の論 山根 巴

三月

魚住折蘆の評論―肯定と否定― 山本 昌一

近松秋江「黒髪」(大正十一年) 小久保 伍

成立まで

\* 編集後記 \*

▽第十六集以来「転換期の文学」を特集して来たが、今回はその第三集として「明治三十年前後」をとりあげ、近代国家への途を志向した日本が、日清戦争という大戦争を遂行した後に、文学の面でどのような変質が生じたかを究明することにした。これまではその時期に問題を持っていた作家をあげ、その作家を通して転換期というものを考えていったが、今回は結社、文学流派、思潮などによってそのことを考えていただくことにした。それだけに項目も六項目と重点をしぼり六氏に執筆していただいた。

昭和四十八年四月

編集委員

長谷川 泉

内田 道雄

河村 政敏

島田 昭男

鳥居 邦朗

畑 高隆 夫

飛 高隆 夫

(表紙2の日本近代文学会会則の続き)

附 則

- 一、会員の会費は年額二、〇〇〇円とする。  
(入会金五〇〇円)
- 二、維持会員の会費は年額一口三、〇〇〇円とする。ただしその権限は一般会員と同等とする。
- 別 則
- 一、会則第二条にもとづき、五名以上の会員を有するところでは支部を設けることができる。
- 二、支部を設けるには支部会則を定め、理事会の承認を得なければならぬ。
- 三、支部には支部長一名をおく。支部長は支部の推薦にもとづき、会則第八条に従って代表理事がこれを委嘱し、その在任中この会の評議員となる。支部は支部長のもとに必要な役員をおくことができる。
- 四、支部は会則第四条の事業をおこなうに必要な援助を本部に求めることができる。
- 五、支部の経費は支部所属会員の納める会費のうち八割をこえない額およびその他をもつてあてる。
- 六、支部は少なくとも年一回事業報告書および財務報告書を理事会に提出しその承認を得なければならぬ。
- 七、この別則の変更は総会の議決を経なければならぬ。

SSD三省堂

あらゆる場面で役立つ 好評の画期的辞典!

# 新明解 国語辞典

金田一京助他編——一、〇〇〇円・革装一、六〇〇円  
現代の日本人が読み・書き・話すことばのすべてを収めた最新の国語辞典。収録語数7万余、見出し語を現代がなに統一。歴史かなづかい・当用漢字・教育漢字の明示、正書法、発音の表示など独自の創意・特長を備えた。語釈は単なることばの言い換えを避け、的確・論理的な表現で、生きた日本語の姿を浮き彫りした。

# コンサイス 外来語辞典

三省堂編修所編——一、〇〇〇円  
マスコミの活発化、国際化のいつそのうの進展の中で外来語は日本語の一部として根をおろし、日常生活に欠かせないものとなっている。本書は、スポーツ・ファッション・料理・音楽・科学・経済用語から、人名・地名・作品名まであらゆる分野の外来語を網羅し、正確な解説を施し、語源から原綴りまでを示した話題豊かな辞書。

日本文学研究者必読の講座

# 講座日本文学

## 全13巻・別巻1

文学史的な展望のもとに、各時代の文学研究における成果と問題点をあますところなくとりあげ、今後の研究に新たな指針を提示している。上代から近代までを通観してはいるが、単に通史的に概説するのでなく、問題別・テーマ別に掘り下げ、その集成が文学史としてまとまるように編集した。広い視野から文学としての本質・内容を追求することをめざした本格的な講座である。

### 《別巻の内容》

日本文学研究書目解題

上代から現代までの日本文学についての研究書約千四百冊を採り上げ、解説を施したものを併記したものを含めると約二千二百冊となり、主要な研究書はすべて収録されている。

全国大学国語国文学会監修

A5判・二二四〜二八八ページ  
別巻のみA5判・四四八ページ  
一、八〇〇円

### ◇内容構成◇

- 1 巻 / 上代編 I
- 2 巻 / 上代編 II
- 3 巻 / 中古編 I
- 4 巻 / 中古編 II
- 5 巻 / 中世編 I
- 6 巻 / 中世編 II
- 7 巻 / 近世編 I
- 8 巻 / 近世編 II
- 9 巻 / 近代編 I
- 10 巻 / 近代編 II
- 11 巻 / 近代編 III
- 12 巻 / 日本文学研究の諸問題
- 13 巻 / 日本文学研究の周辺
- 別巻 / 日本文学研究書目解題

SSD三省堂

東京・神田神保町1-1 / 郵便番号101

日本近代文学 (年2回刊)

第18集 840118

定価 400円 (送料80円)

昭和48年5月15日 印刷  
昭和48年5月20日 発行

◎ 編集者 / 日本近代文学会 代表理事 川 副 国 基  
編集所 / 「日本近代文学」編集委員会  
東京都千代田区神田神保町1-23-3 三省堂第一ビル気付  
発行所 / 株式会社三省堂 代表者 亀 井 要  
東京都千代田区神田神保町1-1  
印刷所 / 清和印刷株式会社 代表者 清水昭一郎

日本近代文学 第18集

400円